

吹田市

中ノ坪遺跡

(仮称) GLP 吹田 物流施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017 年 3 月

公益財団法人 大阪府文化財センター

吹田市

中ノ坪遺跡

(仮称) GLP 吹田 物流施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1. 全景垂直モザイク写真

序 文

本書に記す中ノ坪遺跡は、昭和57(1982)年に調査地の東方に学舎を構える大阪学院大学の校舎建設工事に際して、市民の方が古墳時代から古代の須恵器や土師器、鎌倉時代の瓦器等の遺物を発見されたことが契機となって遺物散布地として周知されるようになりました。その後、長らく調査が行われず遺跡の具体的な姿は明らかとなっていませんでしたが、近年、調査地周辺で発掘調査や確認調査が重ねられて、少しずつではありますが遺跡の様相が明らかとなり、当初知られていたよりも幅広い時期の遺跡であることが詳らかとなって参りました。

調査地は、JR京都線岸辺駅や阪急電鉄京都本線正雀駅から徒歩圏内で、名神高速道路・近畿自動車道・中国自動車道の吹田ICからほど近く、府道14号(十三・高槻線)や国道171号等の主要幹線道路に近接するため、物流拠点としての優位性に恵まれることから大型物流施設の建設が計画されることとなりました。今回の調査はこの物流施設建設に伴うもので、調査面積が約8000㎡にも及ぶ広い調査区からは弥生時代から古墳時代にかけての多数の掘立柱建物や櫛列、土坑、弥生時代や古代の流路が見つかり、それらに関連する多岐にわたる遺物がまとまって出土しました。そして新たな知見として、中ノ坪遺跡に弥生時代の集落が営まれていたことを明らかにしました。このような調査を重ね、当時の様相の一端が少しずつでも解明されて行くことは非常に重要な成果と言えます。

出土した遺物の中には他地域からもたらされた土器がまとまって存在していました。これは、当地が古くから物流の拠点として重要な位置を占めていたことを表すものでしょう。「歴史は繰り返す」と申しますが、その地に近代的な大型物流施設が建設されるのは、いつの時代においても吹田市が有する交通の要衝としての優位性を物語るものと言えます。

また、古代の流路からは「大寶」と書かれた墨書土器が出ています。当時の人々にとっての大きな・大いなる宝は何であったのか知る術もありませんが、今回の調査成果だけでなく、吹田市が有する数多くの文化財が私たちに与えた「大寶」となり、吹田市のみならず多くの地域で活用され、文化財に対する意識を高めてくれるものと期待してやみません。

最後になりましたが、発掘調査及び遺物整理事業の実施にあたり、多大なご協力とご尽力を賜りました。大阪府教育庁、吹田市教育委員会、GLP(グローバル・ロジスティクス・プロパティーズ)株式会社、吹田ロジスティック特定目的会社、株式会社竹中土木、株式会社島田組、株式会社竹中工務店をはじめ、関係各位には深く謝意を表しますとともに、今後とも当センターの事業により一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年3月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 田邊 征夫

例 言

1. 本書は吹田市岸部南3丁目に所在する中ノ坪遺跡の発掘調査報告書である。調査名は「中ノ坪遺跡15-1」である。
2. 調査は、吹田ロジスティック特定目的会社の委託を受け、吹田市教育委員会の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 受託契約名、受託期間、調査及び整理体制については以下の通りである。
受託契約名：(仮称)GLP吹田 物流施設建設工事に伴う中ノ坪遺跡発掘調査
受託期間：平成27年12月1日～平成29年3月31日
現地調査：平成27年12月1日～平成28年3月29日
整理期間：平成28年3月30日～平成29年3月31日
調査体制：[平成27年度]
吹田市教育委員会 地域教育部 生涯学習推進室 文化財保護課(文化財保護担当)
課長 増田真木、主幹 西本安秀、主査 田中充徳、主査 賀納章雄、中岡宏美、堀口健二(非常勤職員)
公益財団法人 大阪府文化財センター
事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、調査課長補佐 金光正裕(平成28年1月まで)、主査 中村淳磯(平成28年1月～)、主査 佐伯博光(平成28年2月～)、副主査 島崎久恵(平成28年3月～)、技師 新海正博(平成27年12月～)、専門員 小野久隆・森屋美佐子(平成27年12月)
[平成28年度]
吹田市教育委員会 地域教育部 文化財保護課(文化財保護担当)
課長 増田真木、主幹 西本安秀、主査 田中充徳、主査 賀納章雄、安藤大介、堀口健二(非常勤職員)
公益財団法人 大阪府文化財センター
事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、調査課長補佐 三好孝一、技師 新海正博、専門員 片山彰一(写真室)、山口誠一(保存室)
4. 本書で用いた写真の内、現場写真は調査担当者が、遺物写真は中部調査事務所写真室が撮影を行った。また、出土木製品及び種子、昆虫等の同定は同保存室が行った。
5. 出土墨書土器については、公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪歴史博物館 館長 榮原永遠男氏にご教示を得た。
6. 出土管玉については、公益財団法人 鳥取県教育文化財団 河合章行氏にご教示を得た。
7. 出土石器及び石製品については、公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪市立自然史博物館 川端清司氏・公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所 小倉徹也氏に石材同定を行って頂いた。
なお、同定作業は以下の方法で行われた。
石器・石製品の観察は石材表面の内眼及びルーペ、実体顕微鏡により行った。また、観察に際しては、

粒子の大きさや形状、鉱物の種類や組成・色調など岩石学的・鉱物学的な特徴に留意して実施された。

- 発掘調査と整理作業においては、以下の諸氏並びに関係機関にご指導、ご教示を賜った。記して謝意を表する。(順不同・所属機関毎・敬称略)市川 創・岡田 賢・岡本敏行・木村啓章・山本 彰(大阪府教育庁)
- 調査にあたっては、以下の委託分析を実施した。その結果は第4章に掲載した。
放射性炭素年代測定(株式会社 パレオ・ラボ)
- 本書の編集・執筆は新海が行った。但し、第4章 自然科学分析のみ執筆分担当を本文中に表記した。
- 本調査に関わる写真・実測図等の記録類及び出土遺物は、吹田市教育委員会において保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

- 標高は東京湾平均海面(T.P.)を使用する。使用単位はmを基準とし、値が正数の場合は+表記を省略する。
- 遺構平面図の使用測地系は、平面直角座標系の世界測地系(測地成果2011)第VI座標系を使用する。単位は全てmであり、図中の表記は省略する。
- 本書の遺構図に付与された方位は、全て平面直角座標系に基づく座標北とする。
- 発掘調査及び遺物整理は『財団法人大阪府文化財センター 遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠して実施した。
- 本書の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』2006 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所(現 一般財団法人日本色彩研究所)色表監修に基づいて表記する。
- 発掘調査において遺構名は、調査区毎に検出順にアラビア数字による通し番号を付与し、番号の後ろに遺構の種類を加え、1土坑・2井戸のように表記した。また、複数の柱穴で構成される掘立柱建物や柵列に関しては、新たに1からの通し番号を建物1・柵列2のように遺構種別の後に付与した。調査区毎に通しの遺構番号や建物番号を付与したことによって同番号の遺構が最大4基存在することとなり、混乱が生じる可能性や1区2井戸・2区64土坑等の表記に煩雑さが生じることから、整理作業段階において各遺構番号の前に調査区名を付与する形で1002井戸・2064土坑・3223ピットのように4桁の表記に変更した。同様に建物・柵列についても建物1001・柵列2002のように変更した。
- 遺構図の縮尺は40分の1・80分の1を基本とするが、紙面の大きさに合わせて適宜変更を行ったので、図示したスケールバーを参照されたい。
- 断面図の切断位置は平面図上に鉤矢印で示す。矢の指す方向が断面を見通した先に当たる。
- 遺物実測図の縮尺は土器に関しては4分の1を、石器・石製品・金属製品は3分の2を、木製品は3分の1を基本とするが、必要に応じて適宜変更を行ったので、図示したスケールバーを参照されたい。
- 遺物実測図のうち、断面が黒塗りであるものは須恵器、白抜きであるものがそれ以外を示す。
- 石器・石製品における後世の欠損部分は、その風化の程度により識別し、調査時やそれに近い時期に欠損したのものに関しては黒塗りに、それ以前の欠損部に関してはアミフセ表示とした。

目 次

巻 頭 図 版
序 文
例 言
凡 例
目 次

第1章	調査に至る経緯と経過及び調査・整理の方法	
第1節	調査に至る経緯と経過	1
第2節	調査・整理の方法	3
第2章	遺跡の位置と歴史的環境	
第1節	遺跡の地理的・歴史的環境	6
第2節	中ノ坪遺跡の既往の調査	8
第3章	調査成果	
第1節	基本層序と遺構面	10
	1. 概要 2. 基本層序	
第2節	中世以降の遺構と遺物	24
第3節	中世以前の遺構と遺物	39
	1. 1区 2. 2区 3. 3区 4. 4区 5. 包含層出土の遺物	
第4章	自然科学分析	
第1節	分析の目的と概要	162
第2節	放射性炭素年代測定	162
第5章	総括	
第1節	遺構	166
第2節	遺物	168
	報告書抄録	

挿 図 目 次

図1 調査位置と道跡分布図	2	図61 屈立柱建物3008、標列3006 平・断面図	86
図2 地区別図	5	図62 屈立柱建物3007 平・断面図	87
図3 中ノ坪遺跡の調査区と既往の調査位置及び 吹田市域菜里区調査元図	9	図63 屈立柱建物3005、3089・3090土坑 平・断面図	88
図4 1区 北壁・南壁断面図	11	図64 屈立柱建物3004 平・断面図	89
図5 1区 西壁断面図	14	図65 屈立柱建物3011 平・断面図	90
図6 1・2区 東壁断面図	15	図66 屈立柱建物3003 平・断面図	91
図7 3区 東壁断面図	17	図67 屈立柱建物3005・3003、標列3003他 出土遺物	92
図8 4-1区 東壁断面図	18	図68 屈立柱建物3003-2、3224ビット 平・断面図	93
図9 4-1区 北壁断面図①	20	図69 屈立柱建物3012 平・断面図	94
図10 4-1区 北壁断面図②	21	図70 屈立柱建物3002 平・断面図	95
図11 4-2区 西壁断面図	22	図71 屈立柱建物3001、3270~3273ビット 平・断面図	97
図12 東壁 柱状図	23	図72 標列3003 平・断面図	98
図13 北壁 柱状図	24	図73 標列3001・3002・3008 平・断面図	100
図14 1・2区 中世以降 遺構平面図	25	図74 標列3007 平・断面図	101
図15 3・4区 中世以降 遺構平面図	26	図75 3061・3060ビット 平・断面図	102
図16 1区 井戸 断面図 出土遺物	28	図76 3区 土坑 平・断面図	103
図17 1011井戸 平・断面図	29	図77 3区 土坑 出土遺物	104
図18 1・3・4区 井戸 断面図 出土遺物	30	図78 3052土坑 平・断面図	105
図19 4区 井戸・埋輪 断面図 出土遺物	31	図79 3052土坑 出土遺物①	106
図20 1区 土坑・土坑群 断面図 出土遺物	32	図80 3052土坑 出土遺物②	107
図21 3015土坑 平・断面図 出土遺物	33	図81 3052土坑 出土遺物③	108
図22 4011土坑 平・断面図 4010・4011土坑 出土遺物	34	図82 3区土坑 平・断面図 出土遺物	110
図23 4022土坑 平・断面図 出土遺物	36	図83 3041土坑 平・断面図	112
図24 1・2区 溝 断面図 4001溜池 出土遺物	37	図84 3041土坑 出土遺物①	113
図25 1区 古代以前 遺構平面図	40	図85 3041土坑 出土遺物②	114
図26 屈立柱建物1001・1002 平・断面図 1035土坑 断面図	41	図86 3091・3053土坑 平・断面図 出土遺物	116
図27 屈立柱建物1005 平・断面図	42	図87 3032土坑 平・断面図 出土遺物	117
図28 屈立柱建物1003・1004 平・断面図	43	図88 3006落込み他 断面図	118
図29 1区 ビット・井戸・溝 平・断面図 出土遺物	45	図89 3006落込み他 断面図	119
図30 1003落込み 断面図	46	図90 3006落込み 出土遺物①	122
図31 1005流路 遺物出土状況図・断面図	47	図91 3006落込み 出土遺物②	123
図32 1005流路、1006落込み 断面図	48	図92 3006落込み 出土遺物③	124
図33 1005流路 出土遺物①	49	図93 3006落込み 出土遺物④	125
図34 1005流路 出土遺物②	50	図94 3006落込み 出土遺物⑤	126
図35 弥生流路 出土遺物①	54	図95 3007・3009・3010土坑 平・断面図	128
図36 弥生流路 出土遺物②	55	図96 3007土坑 出土遺物	129
図37 弥生流路 出土遺物③	56	図97 3008土坑 出土遺物①	130
図38 弥生流路 出土遺物④	57	図98 3008土坑 出土遺物②	131
図39 1009溝 出土遺物	59	図99 3094落込み、3009土坑 出土遺物	133
図40 1012・1015土坑状変形 断面図	60	図100 3009土坑 出土遺物②	134
図41 2区 古代以前 遺構平面図	61	図101 3010土坑 出土遺物①	136
図42 屈立柱建物2010・2011 平・断面図	62	図102 3010土坑 出土遺物②	137
図43 屈立柱建物2005・2009 平・断面図	64	図103 3011・3012土坑 出土遺物	138
図44 屈立柱建物2003 平・断面図	65	図104 3024土坑 平・断面図 出土遺物 3013土坑状変形 出土遺物	139
図45 屈立柱建物2004 平・断面図	66	図105 4区 古代以前 遺構平面図	141
図46 屈立柱建物2001 平・断面図	67	図106 屈立柱建物4002 平・断面図	143
図47 屈立柱建物2007、2043ビット 平・断面図	68	図107 屈立柱建物4001、4033土坑 平・断面図	146
図48 屈立柱建物2006、2227溝 平・断面図	70	図108 屈立柱建物4003 平・断面図	147
図49 屈立柱建物2003・2006、2227・2282・3002溝出土遺物	72	図109 4023ビット、4006・4003土坑 平・断面図	148
図50 屈立柱建物2002 平・断面図	73	図110 4区 ビット・土坑 出土遺物	149
図51 屈立柱建物2008、2259溝 平・断面図	74	図111 4015流路 4024・4027土坑 平・断面図	151
図52 2071・2043・2062ビット、2070・2072土坑 平・断面図	75	図112 4024土坑 出土遺物	152
図53 2073・2038土坑 断面図		図113 4025・4026土坑 平・断面図 4025土坑 出土遺物	153
2043・2226ビット、2065・2070・2072土坑 出土遺物	76	図114 4027土坑 出土遺物	155
図54 2054土坑 平・断面図 出土遺物	77	図115 4028・4031土坑 平・断面図 4028土坑 出土遺物	156
図55 2064土坑 平・断面図	78	図116 4015流路 出土遺物	157
図56 2064土坑 出土遺物①	79	図117 4015流路、4029落込み 出土遺物	158
図57 2064土坑 出土遺物②	80	図118 包含層 出土遺物①	159
図58 2298土坑 平・断面図 出土遺物	81	図119 包含層 出土遺物②	160
図59 3区 古代以前 遺構平面図	83	図120 測定結果の暦年校正結果	165
図60 屈立柱建物3009・3010、標列3004・3005 平・断面図	85	図121 中世以前の時期別全体平面図	173 ~ 174
		図122 調査区と既往調査全体図	175 ~ 176

表 目 次

表1 測定試料及び処理..... 163 表2 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果..... 164

原 色 図 版 目 次

1. 全景垂直モザイク写真

写 真 図 版 目 次

図版 1	1. 1区 地山面 全景 (北東から)	3. 建物2002-2189ビット 断面 (南東から)
	2. 1区 地山面 南東部遺構群 (南西から)	4. 建物2002-2190ビット 断面 (南東から)
図版 2	1. 1区 地山面 南西部遺構群 (北東から)	5. 建物2003-2084ビット 断面 (西から)
	2. 1区 地山面 西側突出部 (北東から)	6. 建物2004-2151ビット 断面 (北西から)
	3. 1011井戸 断面 (南西から)	7. 建物2006-2275ビット 断面 (西から)
図版 3	1. 1019井戸 断面 (北から)	8. 建物2006-2275ビット 柱材検出状況 (西から)
	2. 1020井戸 断面 (南から)	図版 12
	3. 1008井戸 断面 (東から)	1. 建物2006-2276ビット 断面 (西から)
	4. 1024溝アゼ2 断面 (南から)	2. 建物2006-2276ビット 柱材検出状況 (西から)
	5. 1026土坑群 (東から)	3. 建物2007-2052ビット 断面 (西から)
	6. 1026土坑群 断面 (北から)	4. 建物2007-2052ビット 柱材検出状況 (南西から)
	7. 1098土坑 断面 (西から)	5. 建物2007-2075ビット 断面 (北東から)
	8. 1015土坑状変形 断面 (東から)	6. 建物2007-2076ビット 断面 (北東から)
図版 4	1. 1005道路・弥生流路 全景 (西から)	7. 2071ビット 断面 (南西から)
	2. 1005道路 断面 (北東から)	8. 2043ビット 遺物出土状況 (南東から)
	3. 1005道路 断面 (西から)	図版 13
	4. 弥生流路 (1010落込み) 断面 (東から)	1. 2064土坑 断面 (南西から)
	5. 1005道路 須恵器出土状況 (南から)	2. 2064土坑 遺物出土状況 (上部) (南西から)
	6. 1005道路 墨書土器「大寅」出土状況 (北から)	3. 2064土坑 遺物出土状況 (下部) (南西から)
	7. 弥生流路 (1010落込み)石棒出土状況 (南から)	図版 14
	8. 1009溝 碧玉製管玉出土状況 (北東から)	1. 2038土坑 断面 (北東から)
図版 5	1. 孤立柱建物1001 検出状況 (北から)	2. 2054土坑 断面 (南から)
	2. 建物1001-1081ビット 断面 (北西から)	3. 2070土坑 断面 (南西から)
	3. 建物1001-1084ビット 断面 (東から)	4. 2072土坑 断面 (南東から)
	4. 孤立柱建物1002 検出状況 (北東から)	5. 2298土坑 断面及び遺物出土状況 (北東から)
	5. 建物1002-1087ビット 断面 (東から)	6. 2227溝 断面及び遺物出土状況 (南から)
	6. 建物1002-1088ビット 断面 (北東から)	7. 2010溝 断面 (南東から)
	7. 孤立柱建物1003 検出状況 (北から)	8. 2029溝 断面 (南西から)
	8. 建物1003-1069ビット 断面 (南西から)	図版 15
図版 6	1. 孤立柱建物1004 完掘状況 (西から)	1. 3区 地山面 全景 (北から)
	2. 建物1004-1057ビット 断面 (北西から)	2. 3区 地山面 北端部遺構群 (北東から)
	3. 1050ビット 断面 (南東から)	3. 3区 地山面 中央部遺構群 (北から)
	4. 1050ビット 遺物出土状況 (南東から)	図版 16
	5. 1035土坑 断面 (北から)	1. 3区 地山面 南端部遺構群 (北から)
	6. 1076ビット 断面 (北東から)	2. 3015土坑 断面 (北西から)
	7. 1029溝 アゼ1断面 (西から)	3. 3014井戸 断面 (南西から)
	8. 1003落込み 断面 (南西から)	4. 3018井戸 断面 (南西から)
図版 7	1. 2区 地山面 北半部 全景 (南東から)	5. 3035土坑 断面 (南東から)
	2. 2区 地山面 南半部 全景 (北東から)	図版 17
	3. 2区 地山面 北端部遺構群 (東から)	1. 孤立柱建物3001 検出状況 (北西から)
図版 8	1. 2区 地山面 南端部遺構群 (西から)	2. 孤立柱建物3002 検出状況 (北西から)
	2. 2区 地山面 西端部遺構群 (南東から)	3. 孤立柱建物3003 検出状況 (南西から)
	3. 孤立柱建物2001 完掘状況 (北西から)	図版 18
図版 9	1. 孤立柱建物2002 完掘状況 (南から)	1. 建物3001-3103ビット 断面 (北西から)
	2. 孤立柱建物2003 完掘状況 (南東から)	2. 建物3001-3100ビット 断面 (北西から)
	3. 孤立柱建物2004 完掘状況 (南東から)	3. 建物3002-3112ビット 断面 (南から)
図版 10	1. 孤立柱建物2005 完掘状況 (南東から)	4. 建物3002-3232ビット 断面 (西から)
	2. 孤立柱建物2006 完掘状況 (北から)	5. 建物3002-3114ビット 断面 (西から)
	3. 孤立柱建物2007 完掘状況 (南東から)	6. 建物3003-3124ビット 断面 (南から)
図版 11	1. 建物2001-2021ビット 断面 (南西から)	7. 建物3003-3123ビット 断面 (南から)
	2. 建物2001-2024ビット 断面 (北東から)	8. 建物3003-3225ビット 断面 (南西から)
		図版 19
		1. 孤立柱建物3004 完掘状況 (南東から)
		2. 孤立柱建物3005 検出状況 (南西から)
		3. 孤立柱建物3007 完掘状況 (東から)
		図版 20
		1. 孤立柱建物3008 完掘状況 (北西から)
		2. 孤立柱建物3011 完掘状況 (西から)
		3. 孤立柱建物3012 検出状況 (南西から)
		図版 21
		1. 建物3005-3140ビット 断面 (南東から)

2. 建物3008・3117ビット 断面 (南から)
 3. 建物3010・3189ビット 断面 (南西から)
 4. 建物3010・3190ビット 断面 (西から)
 5. 建物3011・3211ビット 断面 (東から)
 6. 建物3012・3228ビット 断面 (南から)
 7. 建物3012・3241ビット 断面 (北東から)
 8. 建物3012・3254ビット 断面 (東から)
- 図版 22 1. 3007・3008土坑 検出状況 (北西から)
 2. 3009・3010土坑 検出状況 (北東から)
 3. 3007土坑 断面 (北から)
 4. 3007土坑 遺物出土状況 (北から)
 5. 3009(右)・3010(左)土坑 断面 (北東から)
 6. 3032土坑 遺物出土状況 (南東から)
 7. 3052土坑 断面 (北から)
 8. 3052土坑 遺物出土状況 (北から)
- 図版 23 1. 3041土坑 断面 (南東から)
 2. 3041土坑 遺物出土状況 (北西から)
 3. 3053土坑 断面 (北西から)
 4. 3053土坑 遺物出土状況 (西から)
 5. 3091土坑 断面 (北西から)
 6. 3091土坑 遺物出土状況 (南西から)
 7. 3036土坑 断面 (北西から)
 8. 3060ビット 礎板検出状況 (南西から)
- 図版 24 1. 4-1区 地山面 全景 (南西から)
 2. 4-1区 地山面 中央部遺構群 (北から)
- 図版 25 1. 4-1区 地山面 西端部遺構群 (南西から)
 2. 4-1区 地山面 北端部遺構群 (南から)
 3. 4-2区 地山面 全景 (西から)
- 図版 26 1. 4001溜池 断面 (北西から)
 2. 4004井戸 断面 (北東から)
 3. 4009井戸 断面 (北西から)
 4. 4022土坑 断面 (南東から)
 5. 4011土坑 断面 (南から)
- 図版 27 1. 掘立柱建物4001 完掘状況 (南西から)
 2. 掘立柱建物4002 完掘状況 (北西から)
 3. 掘立柱建物4003 完掘状況 (南から)
- 図版 28 1. 建物4001・4053ビット 断面 (北西から)
 2. 建物4001・4053ビット 柱材検出状況 (北西から)
 3. 建物4001・4058ビット 断面 (東から)
 4. 建物4001・4058ビット 柱材検出状況 (東から)
 5. 建物4002・4047ビット 断面 (西から)
 6. 建物4002・4047ビット 柱材検出状況 (西から)
7. 建物4003・4041ビット 柱材検出状況 (東から)
 8. 4034溝 断面 (西から)
- 図版 29 1. 4024土坑 断面 (東から)
 2. 4024土坑 遺物出土状況 (南西から)
 3. 4027土坑 断面 (北西から)
 4. 4033土坑 断面 (北東から)
 5. 4003土坑 断面 (東から)
 6. 4003土坑 遺物出土状況 (西から)
 7. 4006土坑 断面 (南東から)
 8. 4006土坑 遺物出土状況 (南から)
- 図版 30 1. 1区 西側南壁 (北から)
 2. 1区 西側南壁 (北から)
 3. 1区 西壁 噴砂 (東から)
- 図版 31 1. 1区 北壁中央 (南東から)
 2. 1区 東壁北端 (南西から)
 3. 2区 東壁 (西から)
- 図版 32 1. 3区 東壁北側 (南西から)
 2. 3区 東壁中央 (西から)
 3. 4-1区 東壁中央 (西から)
- 図版 33 1. 4-1区 北壁東側 (南東から)
 2. 4-1区 北壁西側 (南東から)
 3. 4-2区 西壁 (南東から)
- 図版 34 1区 1005道路出土遺物
 図版 35 1区 1009溝・2区 2064土坑出土遺物
 図版 36 1・2区出土遺物・3区 3007土坑出土遺物
 図版 37 3区 3006落込み・3009土坑出土遺物
 図版 38 3区 3010・3011土坑出土遺物
 図版 39 3区 3024・3032・3052土坑出土遺物
 図版 40 3区 3041・3053土坑出土遺物
 図版 41 4-1区 4024土坑・4-2区 4003・4006土坑出土遺物
 図版 42 4-1区 4027土坑出土遺物
 図版 43 4-1区 4015道路出土遺物
 図版 44 石製品・軽石
 図版 45 石器 (1)
 図版 46 石器 (2)
 図版 47 石器 (3)
 図版 48 石器 (4)
 図版 49 石器 (5)・石棒・管玉
 図版 50 石器 (6)
 図版 51 木製品 (1)
 図版 52 木製品 (2)
 図版 53 柱材・炭化米・残炭

第1章 調査に至る経緯と経過及び調査・整理の方法

第1節 調査に至る経緯と経過

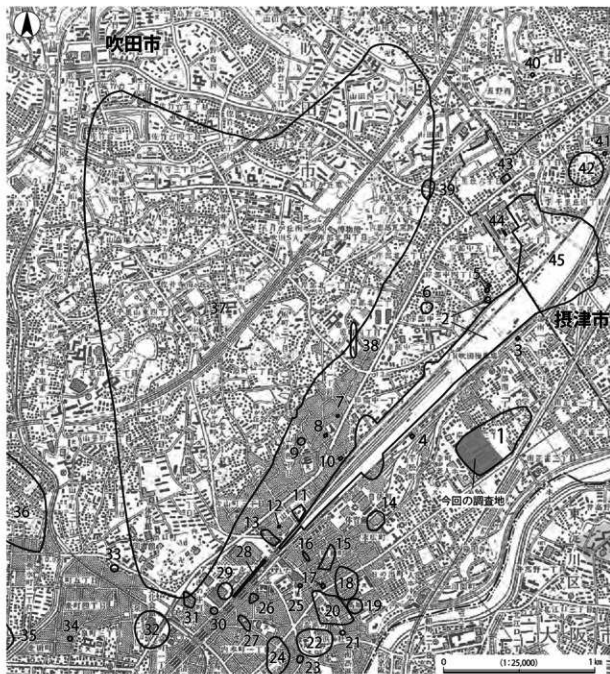
中ノ坪遺跡は、千里丘陵の南側に広がる沖積地、安威川低地と称される平野部に位置し、JR京都線岸辺駅の南西一帯の住宅街、吹田市岸部南2～3丁目にかけて広がる遺跡である。

本遺跡は、昭和57(1982)年に大阪学院大学の校舎建設工事に際して須恵器や瓦器等の遺物が採取され、遺物散布地として周知されるようになった。しかしながら、長らく発掘調査が実施されてこなかったこともあり、遺跡の実態は詳らかではなかった。近年、吹田市教育委員会により共同住宅の建設工事に伴う調査や個人住宅建替えに伴う確認調査が実施され、本遺跡の様相が明らかになりつつある。ところが、広範な遺跡の範囲に対して実施された発掘調査面積が僅少であることから未だ遺跡の具体像は把握されていない。

調査地は吹田市岸部南3丁目34-1に所在するDIC(旧大日本インキ化学工業)株式会社工場跡地にあたる。この跡地は名神高速道路・近畿自動車道・中国自動車道の吹田ICから南西約6.3kmの場所に位置し、府道14号(十三・高槻線)や国道171号等の主要幹線道路に近接する為、物流拠点としての優位性に恵まれることに着目したGLP(グローバル・ロジスティクス・プロパティーズ)株式会社により大型物流施設の建設が計画されることとなった。今回の調査はこの物流施設建設に伴うものである。

調査地は中ノ坪遺跡の西側に隣接することから、DIC工場建物の解体・撤去に伴い吹田市教育委員会による立会調査が平成26(2014)年7月～平成27(2015)年4月に計15回・30地点で実施された。その結果、詳細な時期は不明ながら中世以前の遺物包含層や溝・落込み等の遺構、土師器片等の遺物が9地点で確認された。この立会結果を受けて、吹田市教育委員会では平成27(2015)年5月に中ノ坪遺跡の遺跡範囲を西側へ拡大するとともに、物流施設建設に伴う遺跡の損壊が避けられないことが明らかであるとし、建設予定地内における記録保存のための発掘調査が必要との判断がなされた。

しかしながら、調査面積が8,000㎡を数える大規模調査になることから、吹田市教育委員会単独による発掘調査の実施は困難であるとして、大阪府教育委員会(現大阪府教育庁)へ調査協力の要請を行った。これを受けた大阪府教育委員会(現大阪府教育庁)から公益財団法人大阪府文化財センター(以下、当センターと称す)へ指示が下り、吹田市教育委員会・吹田ロジスティック特定目的会社と当センターが発掘調査及び遺物整理に関わる協定書を平成27(2015)年11月10日に締結した。これにより、吹田市教育委員会と当センターとの共同で発掘調査を実施する運びとなった。現地調査は吹田市教育委員会・大阪府教育委員会(現大阪府教育庁)の指導の下、平成27(2015)年12月1日～平成28(2016)年3月31日の期間で実施した。最終調査面積は合計7,992㎡である。発掘調査に引き続き平成28(2016)年12月28日まで遺物整理作業及び報告書作成作業を行い、平成29年3月31日本書の刊行をもって事業を完了した。



平成 12 年国土地理院発行 1/50,000「大阪東北部」をベースに、大阪府地図情報提供システムの埋蔵文化財に基づき作成

- | | | | |
|-----------------|----------------|----------------|------------------|
| 1. 中ノ坪遺跡 | 12. 片山前遺跡 | 23. 宮之前遺跡 | 34. 金田遺跡 |
| 2. 吹田操車場遺跡 | 13. 片山遺跡 | 24. 都呂須遺跡 | 35. 垂水南遺跡 |
| 3. 吹田操車場遺跡 C 地点 | 14. 日依遺跡 | 25. 朝日町遺跡 | 36. 垂水遺跡 |
| 4. 吹田操車場遺跡 B 地点 | 15. 高須遺跡 | 26. 元町遺跡 | 37. 吹田須志原跡群 |
| 5. 岸部東遺跡 | 16. 岸和町遺跡 B 地点 | 27. 浜の堂遺跡 | 38. 原東遺跡 |
| 6. 岸部中遺跡 | 17. 岸和町遺跡 | 28. 西の庄東遺跡 | 39. 七尾東遺跡 |
| 7. 片山芝田遺跡 B 地点 | 18. 高城遺跡 | 29. 吹田城跡 | 40. 似禪寺山遺跡 |
| 8. 片山芝田遺跡 | 19. 吹田城跡推定地 | 30. 西の庄遺跡 B 地点 | 41. 千里丘 3 丁目所在遺跡 |
| 9. 内塚古墳 | 20. 高城 B 遺跡 | 31. 西の庄遺跡 | 42. 鋒前寺跡 |
| 10. 天道遺跡 | 21. 神境町遺跡 | 32. 豊船町栄里遺跡 | 43. 千里丘 6 丁目所在遺跡 |
| 11. 片山院池遺跡 | 22. 高須遺跡 | 33. 北泉遺跡 | 44. 千里丘 7 丁目所在遺跡 |
| | | | 45. 明和池遺跡 |

図 1 調査位置と遺跡分布図

第2節 調査・整理の方法

大型物流施設建設予定地は東西約220m×南北約390m、総面積約75,000㎡を数える広大な敷地である。しかし、敷地の大半では包含層や遺構・遺物が確認されず、また旧DIC株式会社工場の基礎等により傷んでいることが吹田市教育委員会の立会調査により明らかとなった為、遺構・遺物や包含層が遺存している建設予定地東側部分を中心に約8,000㎡が発掘調査対象となった。なお、本調査に関わる工事並びに航空測量は、GLP株式会社と別途契約を締結した株式会社竹中土木と株式会社島田組が実施することになった。

発掘調査及び整理作業は、当センター『遺跡調査基本マニュアル』2010に則り実施している。調査名は遺跡毎に事業受託年度と調査回数の組み合わせにより表すこととしており、本件では「中ノ坪遺跡15-1」となる。

調査区割 遺物の取り上げや遺構の位置確認に関しては、当センターマニュアルに基づき平面直角座標系第Ⅵ系を基準とした区画を使用した。これに則り、第Ⅰ～第Ⅳまでの大小4段階の区画を設定した。第Ⅰ区画は、大阪府の南西端 $X = -192,000\text{m}$ ・ $Y = -88,000\text{m}$ を基準とし、南北方向に6km・東西方向に8kmで区画する。表示は、南西端を基点に北へA～O、東へ0～8とする。第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を南北方向に1.5km、東西方向に2.0kmでそれぞれ4分割し、計16区画を設定する。表示は南西端を1とし、東へ4まで、あとは西端を5、9、13、北西端を16と平行式で表す。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100m単位で、南北15、東西20に区画する。表示は北東端を基点に、南へA～O、西へ1～20とする。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画を10m単位で南北方向、東西方向ともに10に区画する。表示は北東端を基点に南へa～j、西へ1～10とする。これにより調査地は、第Ⅰ・Ⅱ区画が「J 5-7」、第Ⅲ区画が「2M・O・3M～N・4M」で示される(図2)。

なお、方位は座標北を使用し、標高・水準はすべて東京湾平均海面(T.P.)からのプラス値を用いた。

調査区の呼称 発掘調査は、調査対象部分を約2,000㎡前後の調査面積を有する4つの調査区に分けて実施した。調査区は北から順に1～4区として調査区名を付与した。なお、4区に関しては西側のやや離れた位置に小さな調査範囲が存在した為、1区から連続する部分を4-1区・離れた位置にある調査区を4-2区と称した(図2)。整理作業においては、新たに調査区の名称を振り直すことなく調査時のものを踏襲した。本書では1区から順に記述を進めている。

遺構名 発掘調査においては複数の調査区を同時に調査していた経緯もあり、調査区毎に遺構の検出順に1からの通し番号を1土坑・2井戸のように遺構種別の前に付与した。また、複数の柱穴で構成される掘立柱建物や柵列に関しては、新たに1からの通し番号を建物1・柵列2のように遺構種別の後に付与した。

調査区毎に1から通しの遺構番号や建物番号を付与したことにより、同番号の遺構が最大4基存在することとなり、混雑が生じる可能性や1区2井戸・2区64土坑等の表記に煩雑さが生じることから、整理作業段階において各遺構番号の前に調査区名を付与する形で1002井戸・2064土坑・3223ピットのように4桁の表記に変更した。同様に建物・柵列番号についても建物1001・柵列2002のように変更した。

掘削方法 発掘調査に着手する前段階の準備工として、株式会社竹中土木により現地表面から一律0.5mの深さ(遺構面及び遺物包含層が損壊しない範囲)で調査範囲内の現代の盛土・整地層が慎重に掘削され、同時に掘削土砂の運搬・搬出作業実施された。なお、この掘削作業に関しては吹田市教育委員会に

よる監理監督がなされている。

発掘調査においては、吹田市教育委員会による立会調査の結果を踏まえて、遺構検出面(基盤層上面)近くまで重機による慎重な掘削を進め、機械掘削完了後、スコップ・ジョレン・手ガリ等を用いて、遺物の収集を行いながら慎重に包含層を人力により除去し、基盤層上面での遺構の検出や掘削及び遺物の取り上げに努めた。

また、各調査区の最終遺構面の空中写真測量前後に吹田市教育委員会による現地立会を受け、調査内容を報告すると共に適宜調査に関する指導を仰いだ。

なお、発掘調査は事前に実施されていた盛土・整地層の掘削・搬出作業の進捗状況に合わせ、調査地北側に位置する1区→2区→4区→3区の順で実施した。

遺構面と層 機械掘削で除去した整地層や盛土を第1層とし、旧耕作土層を第2層として、上から順に第1層・第2層・・・とした。検出した遺構面は基盤層上面の最終遺構面1面のみである。

遺構図 遺構面に関しては、効率的な測量を行う為、ラフタークレーンを用いた空中写真測量を4回実施し、50分の1及び100分の1の平面図を作成した。また、個別遺構の平面図・断面図・立面図等については必要に応じて10分の1・20分の1で適宜作成した。土層観察用の断面に関しては20分の1の断面図を作成した。

写真撮影 現場での写真撮影は、6×7カメラ、35mmカメラを使用し、それぞれ黒白フィルム、リバーサルフィルムを用いて行った。また、写真台帳作成用にデジタルカメラを使用して撮影を行った。なお、遺構面の全景写真撮影に関しては空中写真測量時に合わせて高所作業車を使用して実施した。

整理作業 現場作業の合間に、出土した遺物の洗浄と注記、実施した各種図面や撮影した写真の整理、遺物登録台帳や写真台帳等の台帳作成等の基礎整理作業を随時実施した。なお、遺物への注記は「ナカノツボ15-1-遺物登録番号」とした。

主要遺構については現地で作成した実測図を編集し、遺構挿図を作成した。挿図の浄書は版下をスキャナーで取り込んだ後、adobe社製IllustratorCS5を用いてデジタルトレースを行った。出土遺物は、洗浄・注記・接合等の基礎整理作業を行った後、遺跡や遺構の時期や性格等の判断材料になる特徴的な遺物を抽出し、実測作業を実施した。また、一部の遺物に関しては石膏による復元作業や拓本を採った。実測図は遺構図と同様、原図を個別にスキャナーで取り込んだ後、デジタルトレースを行った。その後、遺構または出土層位毎に編集し、遺物挿図を作成した。

現地で撮影した遺構面及び個別遺構の写真に関しては、報告書に掲載するものを選別し、現像・焼付け作業を行い遺構写真図版として編集した。また、出土遺物については、報告書に掲載するものを選別し実測作業と併行して写真撮影を行い、現像・焼付け作業を行い、遺物写真図版として編集した。これら一連の写真に関わる作業は中部調査事務所の写真室において実施した。以上の作業と併行して報告文を作成し、各種挿図と写真図版を併せて編集作業を実施した。また、編集作業と併行して出土遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類し、収納作業を行った。

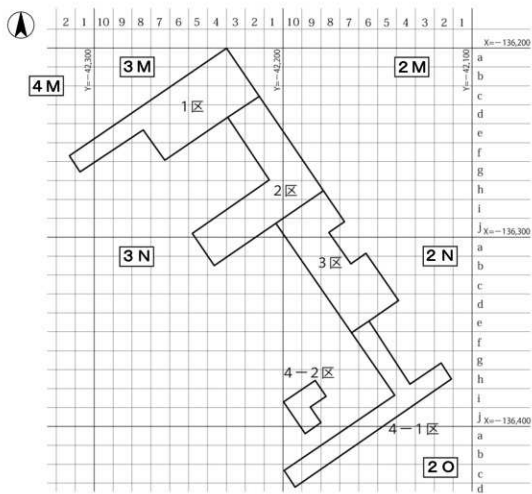
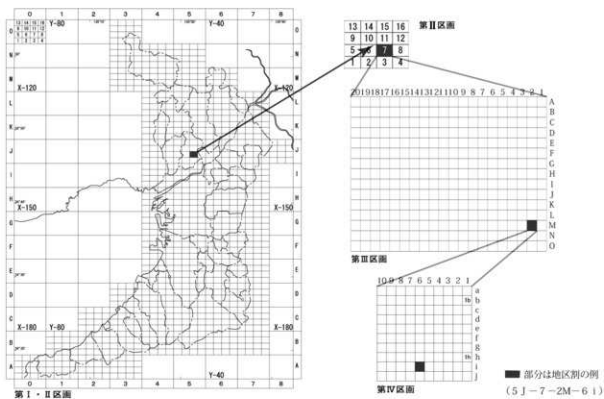


図2 地区割図

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の地理的・歴史的環境

中ノ坪遺跡は大阪府北部、淀川北岸の吹田市に所在する遺跡である。本遺跡は千里丘陵と安威川・淀川に挟まれた安威川低地と称される平野部に占地している。千里丘陵は第三紀末鮮新世～第四紀更新世中期に形成された「大阪層群」と称される地層の模式地となった丘陵として著名である。歴史的には後述するように、古墳時代後期に千里古窯址群が営まれたことで有名である

吹田市域の大半は、上述した大阪層群の隆起によって形成されたとされる千里丘陵で占められており、吹田市南部は淀川や安威川によって運ばれた土砂の堆積による沖積地が広がる。この沖積地は千里丘陵南端付近を境にして東側を安威川低地、西側を神崎川低地として区分され、JR吹田駅付近から南側一帯には吹田砂堆が広がる。丘陵の周辺地域には、大阪層群を不整合に覆って、高位・中位・低位段丘堆積層が分布している箇所がみられる。

吹田市域は天竺川・高川・山田川等の千里丘陵に源を發し、安威川や神崎川に注ぐ河川が存在するが、いずれも短流で水量が豊富でなかったこともあり、古くから水を確保するための溜池が地形に即して築かれている。今次の調査や吹田操車場遺跡の調査でも溜池状遺構を確認しており、これを首肯させる。

吹田市の立地する地理的環境は、水運が利用し易く交通が利便であること等から、いずれの時代をみても重要な遺跡が形成されている。以下に、周辺の主要遺跡を時代順に概観しておく。

(1) 旧石器時代

千里丘陵南端で低位段丘上に位置する吉志部遺跡や吉志部瓦窯下層遺跡で石器製作址や礫群が確認された。出土遺物にはサヌカイト製のナイフ形石器・搔器・削器・彫器、チャート製ナイフ形石器等がある。また、沖積地に位置する吹田操車場遺跡・目依遺跡・高城遺跡でもナイフ形石器や角錐状石器が出土している。

(2) 縄文時代

草創期所産の資料として本遺跡でチャート製有舌尖頭器が、吉志部遺跡・吹田操車場遺跡ではサヌカイト製有舌尖頭器の出土例が知られる。早期～前期にかけての資料としては吹田操車場遺跡で早期末～前期初頭の表裏条痕文土器が1点、流路の中から出土している。前期以降の資料は高浜遺跡で中期前半の船元式土器が、七尾瓦窯下層遺跡で晩期後半の船橋式土器が、目依遺跡では晩期後半の長原式土器が、吹田操車場遺跡で晩期後半の突帯文土器や石鏃等が確認されている。

(3) 弥生時代

弥生時代に入ると大幅に遺構・遺物の検出例は増加する。五反島遺跡では前期の土器が、北泉遺跡では前期後半の土器が出土している。丘陵上に位置する垂水遺跡では中期～後期の集落跡が確認されている。特に後期に栄えたようで、竪穴建物や掘立柱建物が検出された。出土遺物には、近江や東海、四国、山陰といった外来の土器も多くみられ、他地域との交流が盛んであったことが窺える。また、垂水遺跡直下の低地に位置する垂水南遺跡でも弥生時代の土器が多量に出土している。七尾東遺跡では中期の竪穴建物や掘立柱建物が検出されている。竪穴建物内からは土器や石器が出土している。これら以外にも近年、吹田操車場遺跡西端付近で中期の土器が出土する土坑群や同遺跡東端付近で流路や谷状地形から

前期～後期の土器や石籬等が、目録遺跡では後期～古墳時代前期の掘立柱建物群や前期～後期の土器・石器が、榎坂遺跡でも後期を中心とした資料が出土している。なお、吹田操車場遺跡東端付近の市営住宅建て替えに伴う調査では中期後半～後期の東海系土器がまとまって出土しており他地域との交流と言った観点で注目される。また、吹田砂堆上に位置する都呂須遺跡や高浜遺跡、西の庄東遺跡でも弥生時代の遺物が確認されており、次第に様相が明らかになるものと思われる。

(4) 古墳時代

古墳時代には吹田操車場遺跡で古墳時代前期の山陰系の土師器が流路の中からまとまって出土している。周辺では集落が見つからないが、近傍に当該期の集落が存在するものとして注目される。垂水南遺跡の微高地上では竪穴建物や掘立柱建物が検出され、その集落周辺では水田や灌漑水路が確認されている。出土遺物も多岐にわたり、多量の須恵器や土師器のほかには韓式系土器や製塩土器、木製農具、木籬、勾玉や管玉などがみられる。出土土器の中には、瀬戸内西部から南関東地域のものがあり、広範な地域との交流を窺わせている。さらに、鍛冶関連遺物や遺構も確認され、鉄器生産を行っていたことが判明している。中でも、畿内出土例に乏しい高環転用羽口の存在は鍛冶技術の導入先を検討する上で興味深い資料である。初期須恵器や韓式系土器は垂水遺跡や五反島遺跡でも出土しており、渡来系の人々の存在が注目される。また垂水遺跡では、溶解途中の仿製鏡(方格規矩鏡)が出土しており、鑄造関連の施設があったと想定される。この資料は古墳時代の鑄造技術復元に重要な示唆を与えてくれるものである。

吹田市域で知られる古墳は10基ほどで、周辺地域と比べると少ない。これは、各地で古墳が多数築造される時期に、市内にある千里丘陵が大規模な須恵器生産地として利用されていたため、古墳を築造し難い環境にあったことが一因とみられる。また、高度成長期における千里丘陵一帯の大規模開発による破壊も見逃せない要因であろう。

新芦屋古墳は宅地造成中に発見されたため古墳の外形は既に失っていたが、組合式石棺を納めた木室墳であることが明らかになっている。本古墳は石棺を納めた木室墳としては全国唯一の存在である。また、片山公園遺跡では大量の埴輪片が見つかり、操車場を造成する際に削られた丘陵の尾根上に古墳群が形成されていた可能性がある。片山荒池遺跡でも古墳時代中期中葉の円筒埴輪が出土しており、吹田操車場遺跡直近にも古墳が築造されていたと推定される。

千里丘陵一帯では、須恵器窯跡が数多く発見されている。その中で最古のものは5世紀前半の吹田32号窯跡(ST32)である。その後、須恵器窯は6世紀中頃に最盛期を迎え、8世紀前半には完全に生産を停止している。なお、片山荒池遺跡では6～7世紀代に掘削された群集土坑が、吹田操車場遺跡ではJR岸辺駅北側で古墳時代後期以降の900基を超える群集土坑みつまっている。これらは粘土採掘用の土坑と推定されることから吹田古窯址群との関係が示唆されている。

(5) 古代・中世

最盛期は過ぎたものの前代に引き続き千里丘陵一帯で窯業が行われていた。8世紀初頭には七尾瓦窯跡が操業され、後期難波宮で葺かれた瓦が焼かれている。また、8世紀末操業の吉志部瓦窯では平安京へ供給する瓦の生産が行われたが、短期間のうちに操業を終える。

飛鳥～奈良時代には吹田操車場遺跡で掘立柱建物や井戸、土坑等が検出されており、集落が広範に展開していることが明らかとなっている。

文献によると平安時代には、春日領や東寺領の荘園が営まれるようになり、鎌倉時代にかけて一層進

展する。垂水南遺跡では、東寺領垂水庄との関係が指摘される「垂庄」や「中庄」と書かれた墨書土器が出土している。また、蔵人遺跡は垂水庄蔵人村との関連が指摘されており、掘立柱建物や鍛冶工房、水田や畑などがみつまっている。吹田操車場遺跡でも掘立柱建物や井戸、木棺墓や土坑墓、土坑等の多様な遺構が検出され、集落が広範に展開していることが明らかとなっている。

吹田砂堆上に位置する高城B遺跡や高城遺跡、高畑遺跡等では短期間に営まれた平安時代の集落が、西の庄東遺跡では奈良～平安時代の遺構(柱穴・井戸等)が確認されている。さらに高城B遺跡や西の庄東遺跡では14世紀前半代に掘削されたとみられる群集土坑がみつまっている。また、高城町辺りや西の庄町のアサヒビール吹田工場付近は14～16世紀に営まれた吹田城址推定地とされているが、現在のところ城跡と断定出来る資料は確認されていない。しかしながら、先述した西の庄東遺跡で検出された大溝は幅6m・深さ1.2mを測り、堀と見做すことが出来る規模を有しており、その存在は注目に値する。

(6) 近世以降

近世以降の報告例は少ないが、垂水遺跡で明石焼陶製土鍋、明石焼はいは堀焼揉鉢、土人形等の出土が、片山荒地遺跡や吹田操車場遺跡、西の庄東遺跡では溜池や井戸等が検出され、肥前系染付をはじめとする近世陶磁器の出土が報告されている。

明治に入ると明治7(1874)年大阪・神戸間に鉄道が敷設され、明治22(1889)年までに大阪・敦賀間が官営鉄道として順次開通した。その後、関西圏の鉄道網が整備され、貨物輸送も発展していく。その中で、貨物輸送の向上と円滑化を図るため、「東洋一の操車場」と謳われた吹田操車場の造りが大正12(1923)年から開始された。また、吹田市では明治23(1890)年に建築が開始された煉瓦造りの大阪麦酒吹田村醸造所(現アサヒビール吹田工場)の存在が近代化への大きな転換となっている。吹田操車場遺跡や西の庄東遺跡ではこうした近代化を示す汽車土瓶・磁器製弁当箱やガラス瓶、レンガ類(刻印・耐火等)、ダニエル電池素焼き容器等の資料が採取されており、現在各地で脚光を浴びる近代遺産に関する資料として貴重な情報を提供している。

第2節 中ノ坪遺跡の既往の調査(図3)

本遺跡は、昭和57(1982)年に大阪学院大学の校舎建設工事に際して古墳時代～古代の須恵器・土師器や鎌倉時代の瓦器等の遺物が採取され、古墳～鎌倉時代に亘る遺物散布地として周知されるようになった。しかしながら、長らく発掘調査が実施されてこなかったこともあり、遺跡の実態は把握されていなかった。近年、吹田市教育委員会により3次に亘る発掘調査や確認調査が実施され、次第に遺跡の様相が明らかになりつつある。

平成9(1997)年、今回の調査区南東端から東へ約100mの地点で共同住宅の建設が計画され、第1次の発掘調査が実施された。調査では2面の遺構面が確認された。下面は古墳時代前期以前の自然営営による小穴が多数確認されたが、人為の遺構や遺物は検出されなかった。上面はTP.3.6m前後で古墳時代の掘立柱建物6棟や柵列3条、土坑、溝、柱穴、落込み、鎌倉時代の池状遺構、時期不詳の井戸等の遺構が検出されている。建物2棟と柵列1条が古墳時代前期の所産とされ、南側の湿地状地形に接する微高地上に古墳時代前期を中心にして古墳時代全般を通じて集落が営まれたと推定されている。出土遺物には古墳時代前期や古墳時代終末期の遺物を中心に、縄文時代晩期後半の突帯文(船橋式)土器や弥生時代後期土器、縄文時代草創期の所産とみられるチャート製有舌尖頭器等がある。

第2次調査は平成10(1998)年、第1次調査地のすぐ南側で22箇所の小規模な調査区を設定して実施されている。正式な報告書が刊行されていない為、詳細な内容は不明であるが2時期に亘る遺構面が確認されている。上位面では中世以前の土坑・ピット等11基を検出し、弥生土器、古墳時代の土師器、瓦器等が出土している。下位面では人為的な遺構が確認出来ず、南側に展開する池か湿地状の地形が広がっているとされる。なお、下位面からは遺物の出土がみられず、時期は不明であるらしい。

第3次調査は平成11(1999)年、今回の調査地北東端から東へ約50mの地点で住宅の建設が計画され実施された。T.P.4.3m前後の基盤層上面で弥生時代・古墳時代後期・平安時代以降の3時期に亘る遺構が検出されている。弥生時代の遺構としては平面「コ」・「L」字形を呈する溝がある。両溝は近接して掘削されており、共に弥生中期後半(IV様式)の土器が出土している。平面形や溝の位置関係から両溝によって画される区画が方形周溝墓である可能性が指摘されている。古墳時代後期の遺構は溝が1条、平安時代以降の遺構には2条のピット列がある。後者の遺構は主軸方位が嶋下郡南部条里の東西地割方位と一致することから条里地割に関連するものと捉えられている。第3次調査では弥生土器や古墳時代の須恵器・土師器、縄文時代・弥生時代の石鎌、石包丁、近世瓦等がみられる。

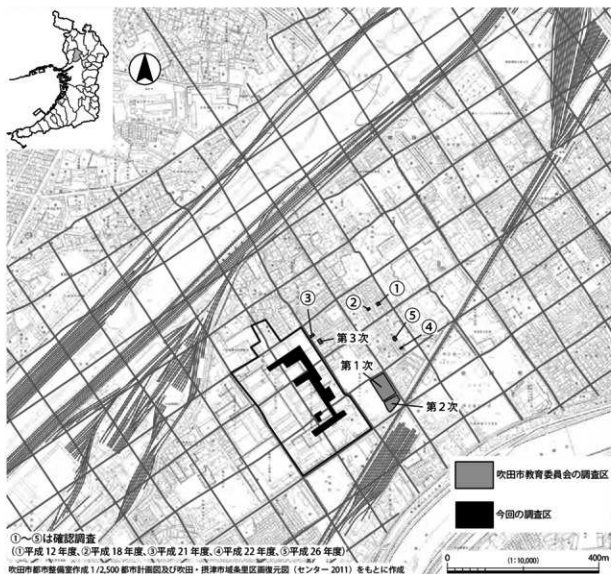


図3 中ノ坪遺跡の調査区と既往の調査位置及び吹田市城条里区画復元図

第3章 調査成果

第1節 基本層序と遺構面

1. 概要

今回の調査は大型の物流施設建設に伴うもので、調査面積が約8,000㎡を数えることから、全てを同時に調査することが困難であった為、作業効率を考慮し調査範囲を2,000㎡前後の4つの調査区に分割して調査を実施した。調査区は北側から順に1～4区と称する(図2)。

調査地はDIC株式会社工場撤去後、更地となっていた。現況地盤の標高は北側がT.P.4.8m、南側でT.P.4.5mを測り、北から南へと緩やかに傾斜するように造成されていた。なお、先にも述べたように、調査着手前に現代盛土・整地層が現況地盤から概ね0.5mの深さで掘削・除去されていることから調査区内の地盤は現況地盤よりも下がった状況にあった。

調査においては基盤層付近まで重機によって掘削し、その後人力で掘削を進め、基盤層上面で遺構の検出を行った。調査区全体をみると、基盤層の標高は北側がT.P.4.1m前後、南側がT.P.3.1mで、北から南へと緩やかに傾斜する地形となっている。一方、東西方向に関しては調査区北端側(1区)では東側の基盤層の標高がT.P.4.1m前後、西側がT.P.3.75m(最西端の流路部分を除く)で東から西へ、南端付近(4-1区)では西側がT.P.3.3m、東側がT.P.3.1mで西から東へと緩やかに傾斜している。検出した遺構の大半は1区南辺付近から3区南辺付近までの南北約135mの範囲に集中して営まれていた。これらの遺構はT.P.4.1～T.P.3.4mの緩斜面上に位置しており、弥生時代の掘立柱建物や柵列、土坑、ピット群、古墳時代前期の土坑を中心とした居住域が展開していた。なお、本来であれば上位遺構面に帰属するはずの古代の流路、中世～近世期の土坑や井戸、溜池等も同時に検出することとなった。

2. 基本層序(図4～13・図版30～33)

基盤層の高い1区南辺部分や2区北辺付近は近現代の土地改変の影響が著しく、旧作土や中～近世作土等が削平を被り、場所によっては現代盛土直下が基盤層になる部分が存在した。一方、基盤層が低い位置で確認された1区北辺付近や西側突出部分、3・4区では比較的良好に旧作土以下の堆積層が遺存していた。しかしながら、弥生時代～古代の包含層以外は基本的に作土と考えられ、遺物の含有が極めて少なく、明確な時期を捉え難い状況であった。

第1層 現代の盛土・整地層や工場基礎の撤去に伴う攪乱土。盛土・整地層は場所によって様々な土砂が用いられているため、淡黄～明緑灰色細～粗砂・黄～緑灰色砂礫・にぶい黄橙色砂礫・浅黄橙～黄橙色シルト混細～中砂等で構成される。これらの中には建物基礎の解体撤去の際に排出されたと想定されるコンクリート段やレンガ、礫等が含まれる。当層は全調査区で認められ、層厚は0.05～0.5mを測る(但し、事前の盛土掘削の厚み約0.5m分は含めていない)。

第2層 DIC株式会社工場建設以前の旧作土。灰色細砂混シルト・オリブ黒色シルト～砂質シルト・青灰色シルト混細～中砂等で構成される。2区以外で当層が確実にみられるが、2区では事前の盛土掘削の段階で既に除去されていた。層厚は0.05～0.15mを測る。

第3層 灰黄～灰オリブ色細～中砂混砂質シルト・にぶい黄橙色細～中砂混シルト・灰白色砂質シル



図 4-1 北壁・南壁断面図

【北壁断面】

- 1 1区東側の1に同じ 西側にはコンクリート設 φ3～20cm 大の礎 鉄筋・レンガ等を多く含む
- 2 5Y5/1 灰 礫～中砂混砂質シルト (第2層)
- 3 10Y7/3 に近い黄緑 礫～中砂混シルト Fe 粒顕著 炭化物を含む (第3層)
- 4 7.5Y8/1 灰 シルト Fe 粒顕著 僅かに礫～中砂含み粘性高い (第4層)
- 5 2.5Y5/1 黄灰 シルト 僅かに礫～中砂を含む 礫面 (Fe) 顕著 (第5層)
- 6 10YR/1 褐灰 礫～中砂混シルト 7 に比してシルト分強い
- 7 10YR3/2 黒褐 礫～中砂混シルト A8
- 7.5YR3/1 黒褐 礫～中砂混シルト 発生土礫断片・炭化物を僅かに含む
- [6～7: 第6～7層]
- 17 10YR 2/1 黒 シルト CaCO₃ 結核を含む
- 18 7.5YR 2/1 黒 シルト
7.5YR6/2 灰褐 シルトブロック
- 2.5YR2/～8/1 灰白 砂質シルト (地山由来) ブロックを含む
両側は礫～中砂混シルト
- 20 2.5Y2/1 黒 細砂混シルト Fe 粒・炭化物 植物遺体を含む
18 に比してやや砂っぽい
- 21 7.5YR5/1～6/1 褐灰 シルト混礫～中砂 炭化物・
7.5YR7/1 明褐色細砂 風 (地山由来) を含む 根痕顕著
- 23 10YR/1 褐灰 細砂混シルト
φ1cm 程度の2.5Y8/2 灰白 砂質シルト (地山由来) ブロックを含む
- 24 10YR2/1 黒 シルト
極少の2.5Y8/1～8/2 灰白 シルトブロックを含む
- 25 7.5YR6/1 褐灰 シルト
極少の炭化物・極少の10YR8/2 灰白 シルトブロックを含む 根痕顕著
- 26 7.5YR3/1 黒褐 (砂質) シルト
極少の炭化物・極少の10YR8/2 灰白 シルトブロック (地山由来)
黒少の10YR7/1 灰白 細砂ブロック (地山由来) を含む
いずれもφ0.3cm前後の大きさ 僅かに発生土断片を含む
部分的に10YR7/1～8/1 灰白 礫面～細砂の薄層がみられる
- 27 7.5YR2/1 黒 シルト 炭化物を含む
10YR8/2 灰白 礫面～細砂の薄層を含む
- 28 10YR5/3 に近い黄緑～10YR6/1 褐灰 礫面～粗砂
上方粗粒化 (発生流路) (100% 流込みの最古流路)
- 29 7.5YR/1 褐灰 礫面～粗砂 上方粗粒化
- 30 10YR5/1 褐灰 シルト混細砂
φ0.3～1cmの2.5Y8/1～8/2 灰白 砂質シルト (地山由来) ブロックを含む
- 31 7.5YR6/1 褐灰 礫～中砂混砂質シルト 根痕顕著 (アシヤコシ)
- 10YR17/1 黒 シルト
炭化物・φ0.1～3cmの10YR8/1～8/2 灰白
砂質シルト (地山由来) ブロックを多く含む
- 33 2.5Y2/1 黒 シルト
極少の10YR8/1 灰白 砂質シルトブロック
炭化物・土礫断片を含む
- 34 7.5YR3/1 黒褐 礫～中砂混シルト
10YR7/1 灰白 礫面細砂の薄層を含む
- 35 10YR2/1 黒 シルト
- 36 7.5YR3/1 黒褐 シルト
10YR8/1～8/2 灰白 礫面細砂の薄層を含む
- 37 10YR2/1 黒 シルト 炭化物・粗・発生土礫断片を含む 35に近い
- 38 10YR8/1 灰白 礫～粗砂
10YR/1 褐灰 シルトの薄層を含む
- 39 7.5YR2/1 黒 細砂混シルト
炭化物・2.5Y8/1 灰白 砂質シルト (地山由来) ブロック
2.5Y7/1 灰白 細砂ブロックを含む
- [33～39: 45: 1010 流込み・黒シルトとしたもの]
- 40 7.5YR2/1 黒 礫面～細砂混シルト
10YR8/1 灰白 細砂ブロックを含む
- 41 7.5YR 2/1 黒 細砂混シルト
炭化物・10YR8/1 灰白 細砂ブロック (地山由来) を含む

- 42 10YR2/1 黒 シルト
炭化物・φ0.3cm 前後の2.5Y8/2 灰白 シルトブロック
- 43 10YR8/1～8/2 灰白 礫～粗砂と
10YR5/1～4/1 褐灰 シルトの互層 植物遺体を含む 上方粗粒化
- 44 10YR7/2 に近い黄緑 シルト～細砂 上方粗粒化
- 45 7.5YR/1 褐灰 礫～中砂混砂質シルト
- 46 7.5YR3/1 黒褐 シルト
φ1cm 前後の10YR7/1 灰白 砂質シルト (地山由来) ブロックを含む
- 47 10YR2/1 黒 シルト
炭化物・植物遺体・φ0.5～2cmの
10YR7/2 に近い黄緑 シルトブロックを含む
- 48 5YR2/1 黒 シルト混礫面～細砂
炭化物・φ0.5～1cmの10YR8/2 灰白 シルトブロックを含む
植物遺体を多く含む
- 49 7.5YR/1 褐灰 シルト
φ2cm 前後の2.5Y8/2 灰白 シルト (地山由来) ブロック
炭化物・植物遺体を含む
- 50 7.5YR/1 褐灰 礫～中砂混シルト
炭化物・10YR7/1 灰白 シルト (地山由来) ブロックを含む
[17・18・20・21・23～50: 第8層]

- 地山 1 10YR8/1 灰白 シルト混礫～中砂 固くしまる
アシヤコシ等の根が地山面に多くみられる
- 地山 2 2.5Y8/1～8/2 灰白 シルト～シルト粘粘土
- 地山 3 5YR1～7/1 灰白 シルト混礫～粗砂 φ0.5～1cmの少礫を含む

【南壁断面】

- 1 1区3～20cm 大の礎やコンクリート段等を多く含む
黄～緑灰色系砂礫層 (第1層)
- 1^{*} 5Y2/1 黒 中砂混砂質シルト スレート等を含む (第1層)
- 1^{*} 5Y3/1 オリーブ 礫～中砂混砂質シルト
φ0.5cm 前後の少礫を含む Fe 粒 (根痕) 顕著 (第2層)
- 2 5Y4/1～5/1 灰 シルト混礫～中砂
7.5YR3/1 黒褐 シルト (古代～発生土礫層) ブロック及び
10YR8/1 灰白 礫面細砂ブロックを含む (第3層)
- 2^{*} 5Y5/2 灰オリーブ 礫～中砂混シルト (第3層)
- 3 5Y5/2 灰オリーブ 礫～中砂混シルト
下層 (3) の登き上げを含む (第5層)
- 4 10YR3/2 黒褐 砂質シルト 地山の登き上げを含む (第5層)
- 5 A 7.5YR/2 灰白 シルト～砂質シルト (地山由来) と
B 7.5YR2/1 黒 中砂混砂質シルト～シルト (発生急含礫由来) と
C 10YR5/1～6/1 褐灰 シルト (地山由来) のブロック土
A:B:C=1:4:5 ブロックは1区3～20cm 前後
- 6 A 7.5YR/2 灰白 シルト～砂質シルト (地山由来) と
B 7.5YR2/1 黒 中砂混砂質シルト～シルト (発生急含礫由来) と
C 10YR5/1～6/1 褐灰 シルト (地山由来) のブロック土
A:B:C=6:1:3
- 7 A 7.5YR/2 灰白 シルト～砂質シルト (地山由来) と
B 7.5YR2/1 黒 中砂混砂質シルト～シルト (発生急含礫由来) と
C 10YR5/1～6/1 褐灰 シルト (地山由来) のブロック土
A:B:C=5:3:2
- 8 A 7.5YR/2 灰白 シルト～砂質シルト (地山由来) と
B 7.5YR2/1 黒 中砂混砂質シルト～シルト (発生急含礫由来) と
C 10YR5/1～6/1 褐灰 シルト (地山由来) のブロック土
A:B:C=7:2:1 ブロックは1区3～10cm 程度
- [5～8: 1026 土壌厚土 粘土戻層付]
- 9 A 10YR/2 灰黄褐 砂質シルト (5層由来) と
B 10YR2/1 黒 シルト～礫～中砂混シルト (8層) と
C 7.5YR/1～8/2 灰白 シルト～中・粗砂 (地山由来) のブロック土
A:B:C=7:1:2 ブロックは1区3～15cm 程度
- 10 A 10YR/2 灰黄褐 砂質シルト (5層由来) と
B 7.5YR/1～8/2 灰白 シルト～中・粗砂 (地山由来) ブロック土と
A:B=9:1 炭化物を含む

- 11 A 10YR4/2 灰黄褐 砂質シルト (5層由來) と
 B 10YR2/1 黒 シルト～細・中砂混シルト (8層) と
 C 7.5YR/1～8/2 灰白 シルト～中・粗砂 (地山由來) のブロック土
 A : B : C = 6 : 1 : 3
- 12 A 10YR4/2 灰黄褐 砂質シルト (5層由來) と
 B 7.5YR/1～8/2 灰白 中・粗砂～シルト (地山由來) のブロック土
 A : B = 8 : 2
- 13 5GY8/1 灰白 シルト質粘土 (地山?)
 [9～13 : 1098 土坑埋土]
- 14 10YR3/1 黒期 細～中砂混シルト 炭化物・植物遺体・
 10YR8/1～8/2 灰白 細砂ブロックを含む
 4に比して砂質分がかなり多い
- 15 2.5YR/1～8/2 灰白 極細～粗砂・礫 上方粗粒化
 7.5YR4/1 褐灰 シルトの薄層を挟む
- 15' 10YR8/2 灰白 細～中砂
 10YR4/1 褐灰 シルトの薄層を挟む 植物遺体を含む
- 16 10YR3/1 黒期～5/1 褐灰 粘質シルト 上方の色調が明るい
 17 10YR5/1 褐灰 シルト 地山の巻き上げを含む
 [14～17 : 1005 流路?埋土か]
- 18 10YR3/1 黒期 細～中砂混シルト 炭化物・植物遺体を含む (第5層)
 19 10YR3/1 黒期 シルト 植物遺体を僅かに含む (第5層)
- 20 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂混シルト
 20' 10YR3/1 黒期 粘質シルト 炭化物・植物遺体・
 $\phi 2 \sim 3\text{cm}$ の 2.5Y7/2 灰黄 シルトブロックを含む
- 21 2.5Y6/2 灰黄 シルト 植物遺体を含む
 22 10YR3/2 黒期 シルト (西壁の9に対応)
 23 5Y4/1 灰 シルト
 炭化物・ $\phi 0.5 \sim 1\text{cm}$ の 5Y7/1 灰白 シルトブロックを含む
 (西壁の15に対応)
- 24 10YR5/1 褐灰 シルト
 [20～24 : 第6層]
- 25 10YR2/1 黒 シルト
 炭化物・植物遺体・2.5YR/1～8/2 灰白 シルト～
 極細砂ブロックを含む (西壁の18に対応)
- 26 7.5YR2/1 黒 粘質シルト 植物遺体を多く含む
 (上の植物遺体層)
- 27 7.5YR3/1 黒期 粘質シルト
 28 5YR1.7/1 黒 細～中砂混シルト 砂の含有多い 植物遺体を多く含む
 7.5YR8/1～8/2 灰白 シルトブロックを含む
 (下の植物遺体層)
- 29 7.5YR6/1 褐灰 細～中砂
 30 7.5YR8/1～8/2 灰白 シルト～砂質シルト
 (西壁の33に対応)
- 31 10YR6/1～5/1 褐灰 シルト混細～中砂 (観察か?)
 32 7.5YR6/1～5/1 褐灰 シルト混細～中砂
 7.5YR8/1 灰白 極細砂～シルトの薄層を挟む
 7.5YR8/2 灰白 細砂ブロックを含む
- 33 2.5YR/1～8/2 灰白 細～粗砂 (上方粗粒化)
 34 7.5YR3/1 黒期 シルト混中～粗砂 植物遺体を多く含む
 35 7.5YR1.7/1 黒 細～中砂混シルト 植物遺体を多く含む
 $\phi 1 \sim 2\text{cm}$ の 10YR8/1 灰白 砂質シルトブロックを含む
- 36 10YR4/1 褐灰 砂質シルト
 10YR8/1～8/2 灰白 極細～中砂の薄層を挟む
 炭化物・植物遺体を含む
- 37 10YR4/1 褐灰 シルト
 10YR8/2 灰白 極細砂の薄層を挟む 植物遺体を含む
 (西壁の21に対応)
- 38 5YR2/1 黒 シルト混細～中砂 炭化物を含み植物遺体を多く含む
 7.5YR/1 灰白 細砂ブロックを含む
 (植物盛り上げ期及び土壌洗浄時に下の植物遺体層としたもの)
 →直し25とは別物
- 39 2.5YR/1 灰白 中～粗砂
 40 10YR4/1 褐灰 シルトと 10YR8/1～8/2 灰白 細～粗砂の互層
 側方粗粒化 (東側) 炭化物・植物遺体を含む
 (弥生前期土器出土) (西壁の39に対応)
- [25～30・34～40 : 第8層]
- 地山I 2.5GY8/1 灰白 細～中砂混砂質シルト 砂質分強い
 地山II 5YR/1～8/2 灰白 細～粗砂・礫 上方粗粒化 (古・流路)
 地山III 淡木集中 細～中砂を多く含む

ト・灰色中～粗砂混砂質シルト等である。少量であるが肥前系染付をはじめとする近世陶磁器の出土がみられたことから近世期の作土である蓋然性が高い。2区以外で確認出来る。但し、2区においては事前の盛土掘削の段階で既に除去されていた。層厚は0.05～0.15 mを測る。

第4層 灰色シルト～細砂混砂質シルト・暗灰黄色細砂混シルト・灰オリーブ色シルト～細・中砂混シルト等である。出土遺物が殆どみられなかった為、時期を明確にし難いが中世～近世期の作土と推定される。当層は2区以外で確認出来た。層厚は0.1～0.2mである。

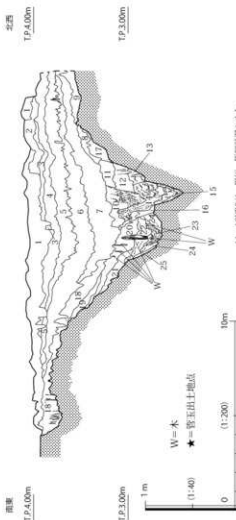
第5層 黄灰色シルトである。少量ではあるが瓦器や青磁碗等が出土していることから中世期の作土層と思われる。1区北側や4区で確認出来た層である。層厚は0.05～0.1mを測る。

第6層 褐灰色細～中砂混シルト・灰黄色細～中砂混砂質シルト・灰オリーブ色シルトである。弥生土器や須恵器・土師器・瓦器等を包含している。古代～中世期の作土と推定される。全調査区で確認出来た層である。層厚は0.05～0.2mを測る。

第7層 灰黄褐色細～粗砂混砂質シルト・黒褐色～褐灰色シルト～砂質シルトである。少量ではあるが土師器や須恵器、弥生土器等を包含している。注目すべき遺物として1区で和同開珎1点、2区で萬年通寶2点の出土がみられた。古代の包含層と考えられ、全調査区で認められる。層厚は0.05～0.1mを測る。

第8層 褐灰色～黒色シルト～砂質シルトである。1区北側や西側、3区南半で認められる弥生時代～古墳時代前期頃の包含層である。1区では弥生時代の流路内堆積物として確認出来るものである。弥生

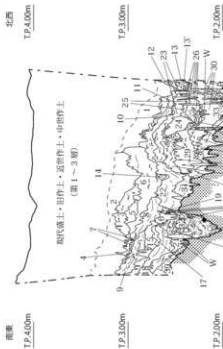
西壁断面①



【西壁断面①】

- 1 578/3 流溝 礫-粗砂 (第1層)
- 2 535/1 ~ 4/1 灰 砂質シルト
- 3 576/1 灰 礫-中砂質シルト (第2層)
- 4 2576/2 灰質 礫-中砂質シルト (第3層)
- 5 2576/2 灰質 礫-中砂質シルト (第4層)
- 3よりも粘性が高い。灰化物を含む。粗砂混濁層
- 6 7578/4/1 灰白 礫砂シルト
- 灰化物・10782/1 灰白 シルトブロックを含む (第5層)
- 7 7578/4/1 灰白 シルト
- 6に比して砂の含有率が粘り強い
- 8 10785/1 灰白 シルト
- 10785/1 灰白 シルト (地山由来) の巻き上げ
- 灰化物を含む (第6層)
- 9 1078/1 灰白 礫砂シルト (第8層)
- 灰化物を含む (砂7層分)
- 10 10785/2 灰白 礫-中砂質シルト
- 2578/2 灰白 砂質シルト (地山由来) の巻き上げを多く含む
- 10788/2 灰白 礫-中砂の滑層を含む
- 2577/1 灰白 シルト
- 10785/1 黒 礫-中砂質シルト
- 灰化物・10783/1 黒 礫-中砂質シルト (地山由来) の巻き上げを含む

西壁断面②



- 11 10785/1 灰白 礫砂質シルト
- 極少の灰化物を含む
- 12 10785/1 灰白 シルト
- 灰化物 礫物混体を多く含む
- 13 10785/1 灰白 シルト粗砂
- 灰化物・礫物混体を含む
- 5678/1 灰白 シルト (地山由来) の巻き上げ
- 14 2578/1 ~ 8/2 灰白 礫砂-粗砂
- 2575/1 灰白 シルトの互層
- 特に上部にシルトがみられる
- 15 10785/1 灰白 シルト粗砂-中砂
- φ4 ~ 10mmの砂質シルト (地山由来) ブロック
- 1078/1 灰白 礫砂シルト (地山由来) ブロック
- 礫物混体を含む
- 16 10785/1 灰白 シルト
- 2578/2 灰白 礫砂ブロック
- 10783/1 黒 礫-中砂質シルト (地山由来) の巻き上げ
- 礫物混体も含む
- 17 10782/1 黒 礫砂シルト
- 10 ~ 16 : 100% 流溝上
- 18 17に同じ
- 灰化物を多く含む
- 19 10782/1 黒 シルト 灰化物・赤土上層片を含む
- 17に比して砂の含有率低い
- 20 2573/1 黒 礫砂-礫砂質シルト
- 10788/2 灰白 礫砂ブロック
- 礫物混体を多く含む
- 21 2573/1 黒 礫-中砂
- 2578/1 灰白 砂質シルト (地山由来) ブロック
- 礫物混体を含む
- 22 2573/1 黒 礫砂シルト
- 2576/1 灰 礫砂ブロック・2578/1 灰白 礫砂ブロック
- 礫物混体を含む
- 23 2578/2 灰白 ~ 2578/3 流溝 礫-中砂
- 10786/1 灰白 シルトの滑層を含む
- 24 576/1 灰白 シルト粗砂-中砂
- 灰化物・礫物混体を含む
- 25 10788/1 灰白 シルト粗砂-中砂
- 礫物混体を含む
- (17 ~ 25 : 1014 灰白高圧土 : 8層)

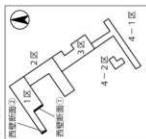


図5 1区 西壁断面図

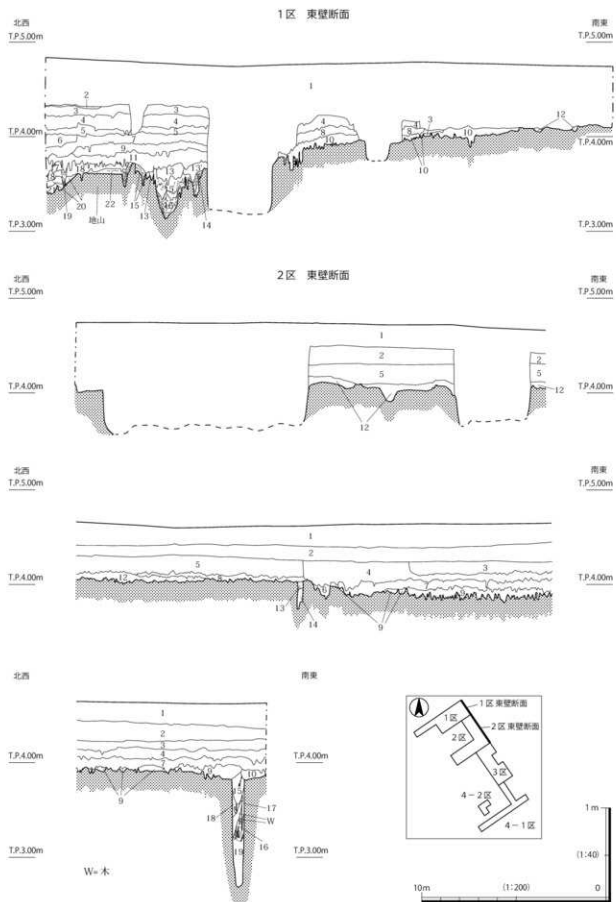


图6 1·2区 東壁断面图

[1区 東壁断面]

- 7.5YR/8 細 砂礫層 1辺05～15cmの角礫・準角礫を多く含む(第1層)
- 5Y5/1 灰 礫～中砂質シルト(第2層)
- 10YR/3 にふい黄緑 礫～中砂質シルト Fe粒顯著 炭化物を含む(第3層)
- 7.5Y6/1 灰 シルト Fe粒顯著 僅かに礫～中砂み粘性高い(第4層)
 - 2.5Y5/1 黄灰 シルト 僅かに礫～中砂を含む 粗粒(Fe顯著)(第5層)
- 10YR/1 褐灰 細砂質シルト 7に比してシルト分多い
- 10YR3/2 黒周 礫～中砂質シルト 与8
- 10YR3/1 黒周 礫～中砂質シルト Fe粒・炭化物を含む
 - 10よりも砂質分多い(砂多い) 与7
- 10YR4/2 灰黄緑 礫～中砂質砂質シルト Fe粒を含む 与10
- 7.5Y4/1 褐灰 礫～中砂質シルト
 - 2.5Y8/1 灰白 シルト～砂質シルト(地山由来)の巻き上げ Fe粒・炭化物を含む 与9
- 10YR4/2 灰黄緑 礫～粗砂質砂質シルト 9に比して砂粒の含有が多い
- 12.5YR5/1 褐灰 中～粗砂質シルト
 - [6・7・9・11・12;第6～7層]
- 10YR4/2 灰黄緑 シルト 礫～粗砂
 - 1辺1cm前後の小礫・炭化物・Fe粒を含む
 - 僅かに植物遺体が見られる
- 10YR5/1 褐灰 礫～中砂質シルト
 - Fe粒・2.5Y8/1 灰白 礫～中砂ブロックを含む
- 2.5Y6/1 黄灰 シルトと2.5Y8/1 灰白 礫層～細砂の互層
- 10YR5/1 褐灰 シルトと2.5Y8/1～8/2 灰白 礫～中砂の互層→互層というよりも混ざった感じに近い Fe粒・僅かに植物遺体を含む
- 2.5Y5/1 黄灰～10YR5/1 褐灰 シルトと
 - 10YR7/2 にふい黄緑～2.5Y7/2 灰黄・2.5Y8/2 灰白 礫層～細砂の互層 側方(南側) 細粒化

[13～16:1005遺跡]

- 10YR2/1 黒 シルト CaCO₃結核を含む
 - 7.5YR2/1 黒 シルト (南側は礫～中砂質シルト)
 - 7.5YR6/2 灰周 シルトブロック
 - 2.5Y8/2～8/1 灰白 砂質シルト(地山由来)ブロックを含む
 - 10YR3/1 黒周 シルト(上半部)・2.5Y5/1 黄灰 シルトと
 - 2.5Y8/2 灰白 礫層～細砂の互層(下半部は黄灰シルトとしたもの)
 - 2.5Y2/1 黒 細砂質シルト Fe粒・植物遺体を含む
 - 18に比してやや砂っぽい
 - 7.5YR5/1～6/1 褐灰 シルト層間～中砂
 - 炭化物・7.5YR7/1 明灰 細砂 BL(地山由来)を含む 粗粒顯著
 - 7.5YR4/1 褐灰～3/1 黒周シルトと
 - 10YR8/1～8/2 灰白 礫～中砂ブロックを含む
- [17～22:第8層 17・18・20は1006落込みやシルトとしたもの]
地山7.5YR/1～7.5Y 明灰 シルト～砂質シルト

[2区 東壁断面]

- 現代遺土及び混丸
- 5Y5/1 灰 礫～中砂質砂質シルト(第2層)
- 2.5Y7/1 灰白 砂質シルト Fe比高(第3層)
- 7.5YR6/1 灰 中～粗砂質砂質シルト
 - Mn黄・Fe粒が多くみられる(第3層)
- 5Y6/2 灰オリーブ 礫～中砂質シルト Fe粒(粗粒)顯著(第3層)
- 10YR6/1 褐灰～2.5Y6/2 灰黄 礫～中砂質シルト
 - 2.5Y7/2 灰黄 礫～中砂の薄層を挟む 炭化物を含む(2029遺理土 坪塚遺土と考えられる)
- 5Y5/2 灰オリーブ 細砂質シルト Fe粒(粗粒)顯著 炭化物を含む(5に似る:第3層)
- 10YR5/1～4/1 褐灰 細砂質シルト
 - Fe粒が多くみられる CaCO₃結核を含む(第6層)

- 7.5YR4/1 褐灰シルト
 - 10YR8/4 浅黄緑 シルト(地山由来)ブロックの巻き上げ
 - 7.5YR2/1 黒 シルト(養生包含層由来)ブロックを含む(第6層)
 - 10YR4/1 褐灰 砂質シルト 炭化物・Fe粒を含む(養生～古代か)
 - 7.5YR3/1 黒周 シルト
 - 10YR7/6 明灰周 砂質シルト(地山由来)ブロックを含む(第7層か)
 - 10YR6/2 灰黄緑 砂質シルト
 - 10YR4/1 褐灰 シルト φ0.1～1cmの
 - 10YR7/4 にふい黄緑 シルト(地山由来)ブロックを含む
- [13・14:遺構理土]
- 10YR2/1 黒 シルト
 - 炭化物・φ0.3cm前後の2.5Y8/3 浅黄 砂質シルト(地山由来)ブロック
 - 10YR/1 灰白 砂質シルト(地山由来)ブロック・養生土層片を含む
 - 2.5Y2/1 黒 粘質シルト
 - φ0.3cmの2.5Y8/3 浅黄 シルト(地山由来)ブロック・炭化物・炭化材・養生土層片を含む この層から炭化米が出土
 - 10YR3/1 黒周 シルト
 - φ0.3～0.5cmの10YR8/1 灰白 シルト(地山由来)ブロックを多く含む
 - 18に同じ 炭化材を含む
 - 10YR5/1 灰 φ3～4cmの硬質粗砂 粘性シルトを含む
 - 2.5Y3/1 黒周 粘土を含む

[3区 東壁断面①]

- 現代遺土及び混丸
- 5Y5/1 灰 礫～中砂質砂質シルト(第2層)
- 2.5Y7/1 灰白 砂質シルト Fe比高(第3層)
- 7.5YR6/1 灰 中～粗砂質砂質シルト
 - Mn黄・Fe粒が多くみられる(第3層)
- 5Y5/2 灰オリーブ 細砂質シルト Fe粒(粗粒)顯著 炭化物を含む(2区東壁の5に似る:第3層)
- 7.5YR4/1 褐灰シルト
 - 10YR8/4 浅黄緑 シルト(地山由来)ブロックの巻き上げ
 - 7.5YR2/1 黒 シルト(養生包含層由来)ブロックを含む(第6層)
 - 10YR4/1 褐灰 砂質シルト 炭化物・Fe粒を含む(養生～古代か)
- 7.5YR2/1 黒 砂質シルト Fe粒・炭化物
 - φ0.5～1cmの7.5YR7/1 明灰周 砂質シルト(地山由来)ブロックを含む(第8層か)

[3区 東壁断面②・③]

- 5GY7/1 明オリーブ灰 礫～中砂
 - 7.5YR5/4 にふい周 粘土ブロックを含む(第1層)
 - 5Y4/1 灰 礫細砂質砂質シルト(第2層)
 - 5Y5/1 灰 礫細砂質砂質シルト 炭化物・φ0.5cm程度の小礫を僅かに含む粗粒顯著にみられる(第3層)
 - 5Y6/2 灰オリーブ シルト層間～中砂
 - φ0.5～1cmの小礫・炭化物を含む(第3層か)
 - 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂質シルト 粗粒顯著にみられる(第4層)
 - 10YR5/1 褐灰 礫層～細砂質シルト 粗粒顯著にみられる(第6層)
 - 10YR4/1 褐灰シルト Fe粒・CaCO₃結核を含む(第7層)
 - 7.5YR4/1 褐灰 シルト(調査区南側)
 - 10YR3/1 黒周 シルト(調査区中沢付近)
 - 10YR2/1 黒 砂質シルト(調査区北側)
 - 北側は色濃くなり遺物を多く含む
 - いずれも地山の巻き上げブロックを含む(第8層)
 - 7.5YR2/1 黒 シルト(遺構理土)
 - 2.5Y5/2 暗灰黄 中砂質シルトと
 - 2.5Y6/2 灰オリーブ シルトのブロック土(遺構理土 踏込の集合か)
 - 10YR2/1 黒 砂質シルト(遺構理土)
- 地山 2.5Y8/2 灰白～8/3 浅黄 シルト～砂質シルト
地山は踏込や地山の露れの影響が大きく、マープル模様の見している

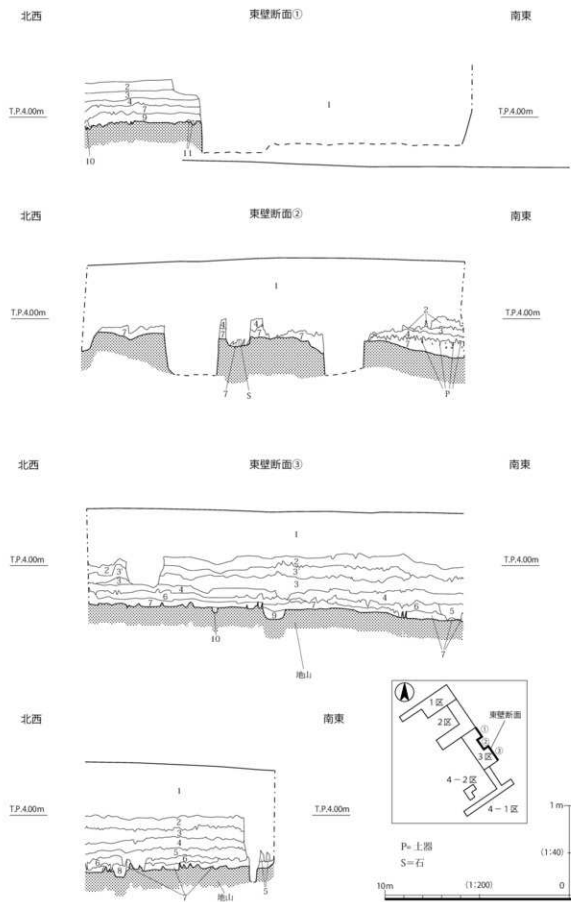


图7 3区 東壁断面图

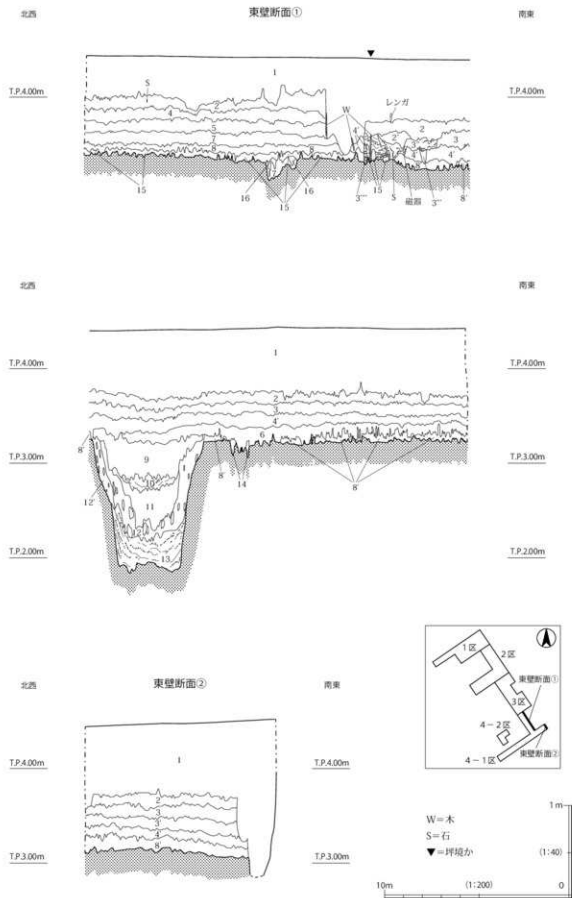


図8 4-1区 東壁断面図

[4-1区 東壁断面①]

- 1 10YR8/4 浅黄橙-8/6 黄緑 シルト混 細~粗砂と
2.5GY8/1 灰白 シルト混 細~中砂
φ3~10cmの10YR6/6 明黄緑 シルト (地山由来) ブロック
1辺3~5cmの礫を含む (第1層)
- 2 5Y4/1 灰 細砂混シルト
僅かに炭化物を含む Fe粒を含む (第2層)
- 2² 7.5Y4/1 灰 中~粗砂混砂質シルト
φ0.5cm前後の小礫・炭化物を含む (第2層)
- 3 5Y6/1 灰 砂質シルト 炭化物を含む (第3層)
- 3² 10YR6/2 灰黄緑 シルト混 極細~粗砂・礫
僅かに炭化物・植物遺体を含む 上方細粒化 (気害の痕か)
- 3³ 2.5Y6/2 灰黄 細砂混砂質シルト
2.5Y8/1 灰白 細~中砂ブロックを含む
- 3⁴ 2.5Y5/1 黄灰 シルトと7.5YR8/1 灰白 極細~礫の互層
上方細粒化 1辺5cm大の礫・近世染付等を含む
[3³~3⁴:埋地埋土上]
- 4 5Y6/1 灰 極細~細砂混砂質シルト
φ0.3~0.5cm前後の小礫・炭化物を含む
Fe粒 (粗粒) 顕著にみられる (第3層)
Fe粒 (粗粒) 顕著 僅かに炭化物を含む (第3層)
- 5 5Y5/2 灰オリーブ 細~中砂質シルト
炭化物を含む Fe粒 (粗粒) 顕著にみられる (第4層)
- 6 2.5Y7/2 灰黄 細~中砂混砂質シルト
CaCO₃ 結核を含む (第5層)
- 7 5Y5/2 灰オリーブ 極細~細砂混シルト
僅かにCaCO₃ 結核を含む (第5層)
- 8 2.5Y4/1 黄灰 砂質シルト 僅かにCaCO₃ 結核を多く含む
7の跡だと15の巻き上げを含む (第6層)
- 8² 7.5YR5/1 黄灰 砂質シルト
CaCO₃ 結核・地山の巻き上げブロック (7.5Y8/1 灰白 シルト) を含む
- 9 10YR5/2 灰黄緑 粘質シルト
1辺3~5cmの7.5YR8/1 明緑灰 シルト質粘土 (地山由来) ブロック
2.5Y7/2 灰黄 中砂ブロック CaCO₃ 結核・炭化物を含む
- 10 2.5Y5/1 黄灰 粘質シルト 2.5Y3/1 黄黒 シルトの薄層を含む
φ3cm前後の7.5Y8/2 灰白 シルト (地山由来) ブロック
2.5Y7/2 灰黄 細砂ブロックを含む
- 11 2.5Y4/1 黄灰 細~中砂混粘質シルト
1辺1~15cm大の5YR3/3 淡黄 シルト質粘土 (地山由来) ブロック
CaCO₃ 結核 7.5YR4/1 黄灰 砂質シルト (第6層由来) ブロックを含む
- 12 A 7.5Y7/2 灰白 シルト質粘土 (地山由来) と
B 10YR4/1 黄灰 砂質シルト (第6層由来) のブロック土
A : B = 4 : 4
12² A : B = 4 : 6 (A・Bは12と共通)
- 12 2.5Y6/1~5/1 黄灰 粘質シルト
10YR8/1 灰白 極細~中砂の薄層を含む
10YR8/1 明緑灰 シルト~砂質シルト (地山由来) ブロック
植物遺体を含む
[9~13 : 401土埋埋土]
- 14 7.5YR2/1 黒 シルト (第8層由来) と
10YR8/1 灰白 砂質シルト (地山由来) のブロック土 (遺構埋土)
- 15 7.5YR4/1 黄灰 シルト
地山の巻き上げブロック (2.5YR2/2 灰白~8/3 淡黄 シルト~砂質シルト) を含む (第7~8層)
北面に向かうにつれて色調や濃くなり、7.5YR3/1 黒濁っぽくなる
- 16 A 7.5Y4/1 灰白 砂質シルト (15由来) と
B 7.5Y8/1 灰白 砂質シルト (地山由来) のブロック土
A : B = 7 : 3
17 ブロック土 A : B = 1 : 9 (A・Bは16と共通)
[16・17 : 遺構埋土]

[4-1区 東壁断面②]

- 1 10YR8/4 浅黄橙-8/6 黄緑 シルト混 細~粗砂と
2.5GY8/1 灰白 シルト混 細~中砂
φ3~10cmの10YR6/6 明黄緑 シルト (地山由来) ブロック
1辺3~5cmの礫を含む (第1層)
- 2 5Y4/1 灰 細砂混シルト
僅かに炭化物を含む Fe粒を含む (第2層)
- 3 5Y6/1 灰 砂質シルト 炭化物を含む (第3層)
- 3² 5B5/1 青灰 シルト
僅かに炭化物・CaCO₃ 結核を含む Fe粒 (粗粒) 顕著にみられる (第3層)
- 4 5Y6/1 灰 極細~細砂混砂質シルト
Fe粒 (粗粒) 顕著にみられる 僅かに炭化物を含む (第3層)
- 8 7.5YR5/1 黄灰 砂質シルト CaCO₃ 結核
地山の巻き上げブロック (7.5Y8/1 灰白 シルト) を含む

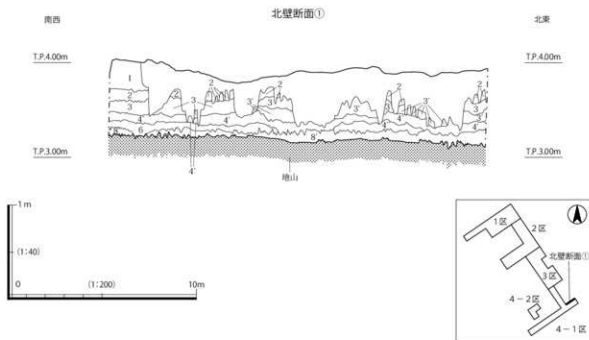
[4-1区 北壁断面②]

- 1 10YR6/4 に近い黄緑 砂質シルト
1辺0.5~1.5cmの角礫・コンクリート散・レンガ等を含む (第1層及び風見)
- 2 7.5YR8/1 明緑灰 砂質シルト~シルトブロックを含む (第1層)
- 2² 3.2.4のブロック土
- 2³ 2.5GY7/1 明オリーブ灰 細~中砂
5Y5/1 灰 シルトブロック・5G7/1 明緑灰 粘土ブロックを含む (第1層)
- 3 N4/1 黄緑 粘質シルト (第2層)
- 3 5B6/1 青灰 シルト
炭化物・5B7/1 明青灰 砂質シルトブロックを含む (第2層)
- 3² 5Y4/1 灰 砂質シルト
Fe粒が顕著にみられる (第2層)
- 3³ 7.5Y4/1 灰 砂質シルト
粗粒が顕著にみられる (第2層)
- 3⁴ 5Y5/1 灰 極細~細砂混シルト (第2層)
- 3⁵ 5B4/1 暗青灰 極細砂混砂質シルト
僅かに炭化物を含む (第2層)
- 3⁶ 5B6/1 青灰 中~粗砂混砂質シルト
炭化物・φ0.5cmの小礫 Fe粒を含む (第2層)
- 4 10B6/5/1 青灰 シルト~砂質シルト
Fe粒 (粗粒) 顕著にみられる (第3層)
- 5 2.5Y6/2 灰黄 中~粗砂混シルト
炭化物・2.5Y8/2 灰白 細砂ブロックを含む
- 6 10B6/6/1 青灰 粘質シルト
2.5Y7/2 灰黄 細~中砂の薄層を含む
- 7 2.5Y5/1 黄灰 粘質シルト
- 8 2.5Y8/2 灰白 細砂
- 2.5Y6/1 黄灰 シルトの薄層を挟む
- 9 2.5Y6/2 灰黄 中~粗砂混砂質シルト
φ0.5cm前後の小礫・炭化物を含む
Fe粒 (粗粒) 顕著にみられる
- 10 5B6/1 青灰 シルト
- 5Y8/1 灰白 細~中砂の薄層を多く含む
- 11 5Y6/1 灰 粘質シルト
7.5YR8/1 明緑灰 シルト及び炭化物の薄層を含む
CaCO₃ 結核・植物遺体を含む
- 12 7.5Y6/1~5/1 灰 シルト 炭化物を含む
- 13 2.5Y8/2 灰白~2.5Y6/2 灰黄 細~中砂 (上方細粒化)
10Y7/1 灰白 シルトの薄層を含む
1辺1cm前後の礫を含む (5~13 : 4021部埋埋土)
- 14 5Y5/2 灰オリーブ シルト
僅かに炭化物を含む
Fe粒 (粗粒) 顕著にみられる (第4層)

[4-1区北壁断面②]

- 15 2.5Y6/2 灰黄 細～中砂質シルト
Fe 粒(粗粒)顕著にみられる (第4層)
- 16 2.5Y7/1 灰白～7/2 灰黄 細～中砂質シルト(地山層) (第4層)
- 17 5Y6/2 灰オリーブ 細～中砂質シルト
14に比して 砂質分が増し、CaCO₃結核を多く含む(第5層)
- 18 10YR2/1 黒 シルト
7.5YR7/1 明褐色 シルト(地山由来)ブロックを含む(遺構埋土)
- 19 7.5YR5/1 暗灰 砂質シルト
炭化物・7.5YR7/1 明褐色 砂質シルト(地山の登き上げ)を含む(第6層)
- 20 7.5YR2/1 黒 砂質シルト
CaCO₃結核・10YR8/1 灰白 砂質シルト(地山由来)ブロック・土層片を含む(4014土坑 埋土)
- 21 7.5YR3/1 黒褐 細～中砂質砂質シルト
炭化物・土層片を含む(第7or8層)
- 22 7.5YR4/1 暗灰 細～中砂質砂質シルト
CaCO₃結核・炭化物・土層片を含む(第7or8層)
- 23 10YR2/1 黒 極細～細砂質砂質シルト
10YR7/1 灰白 砂質シルト(地山由来)ブロックを含む
- 24 A 7.5YR2/1 黒 シルトと
B 2.5Y7/1 灰白 シルト(地山由来)のブロック土
A:B=6:4
- 25 2.5Y7/2 灰黄 中～粗砂
5G/8/1 灰白 砂質シルト(地山由来)ブロックを含む
- 26 5Y6/1 灰 シルト
- 27 A 10YR2/1 黒 シルトと B 2.5Y7/1 灰白 シルト(地山由来)と
C 5G/8/1 灰白 砂質シルト(地山由来)のブロック土
A:B:C=7:2:1

- 28 ブロック土 A:B:C=1:1:8 (A・B・Cは27と共通)
- 29 10YR2/1 黒 砂質シルト
10YR7/1 灰白 砂質シルト(地山由来)ブロックを含む
土層片を多く含む
- 30 7.5YR2/1 黒 砂質シルト 炭化物・植物遺体を含む
- 31 ブロック土 A:B:C=4:4:2 (A・B・Cは27と共通)
[23～31:4024土坑埋土]
- 32 10YR2/1 黒 細～中砂質シルト 土層片を多く含む
- 33 2.5Y7/1 灰白 極細～中砂
10YR2/1 黒 シルトの薄層を挟む 土層片を含む
- 34 A 10YR2/1 黒 シルトと
B 7.5YR/2 灰白 シルト(地山由来)のブロック土
A:B=1:1
- 35 10YR2/1 黒 細～中砂質シルト
- 36 10YR7/1 灰白 細～中砂 10YR2/1 黒シルトの薄層を挟む
- 37 10YR2/1 黒 シルト
僅かに10YR7/1 灰白 砂質シルト(地山由来)ブロックを含む
[32～37:4015遺跡埋土]
- 38 A 10YR2/1 黒 シルトと B 2.5Y7/1 灰白 シルト(地山由来)と
C 5G/8/1 灰白 砂質シルト(地山由来)のブロック土
A:B:C=1:1:1
- 39 ブロック土 A:B:C=1:8:1 (A・B・Cは38と共通)
- 40 ブロック土 A:B:C=1:4:5 (A・B・Cは38と共通)
- 41 10YR2/1 黒 細～中砂質砂質シルト
炭化物 10YR7/1 灰白 砂質シルト(地山由来)ブロック
土層片を含む(38～41:土坑埋土か)
地山 7.5YR8/1 灰白～7/1 明褐色 砂質シルト～シルト



[4-1区北壁断面①]

- 1 10YR8/4 浅黄橙～8/6 黄褐 シルト質細～粗砂と
2.5GY 8/1 灰白 シルト質細～中砂
φ3～10cmの10YR6/6 明黄褐 シルト(地山由来)ブロック・1辺3～5cmの礫を含む(第1層)
- 2 5Y4/1 灰 細砂質シルト 僅かに炭化物を含む Fe粒を含む(第2層)
- 3 5Y6/1 灰 砂質シルト 炭化物を含む(第3層)
- 3' 5B5/1 青灰 シルト 僅かに炭化物・CaCO₃結核を含む
Fe粒(粗粒)顕著(第3層)

- 4' 5Y6/1 灰 極細～細砂質砂質シルト
Fe粒(粗粒)顕著 僅かに炭化物を含む(第3層)
- 4' 5B7/1 明青灰 シルト
2.5Y7/2 灰黄 極細ブロック・CaCO₃結核・土層片を含む(第3層か)
- 6 2.5Y7/2 灰黄 細～中砂質砂質シルト CaCO₃結核を含む(第5層)
- 8' 7.5YR5/1 暗灰 砂質シルト CaCO₃結核・地山の登き上げブロック(7.5YR/1 灰白 シルト)を含む
地山 7.5YR/1 灰白 シルト

図9 4-1区北壁断面図①

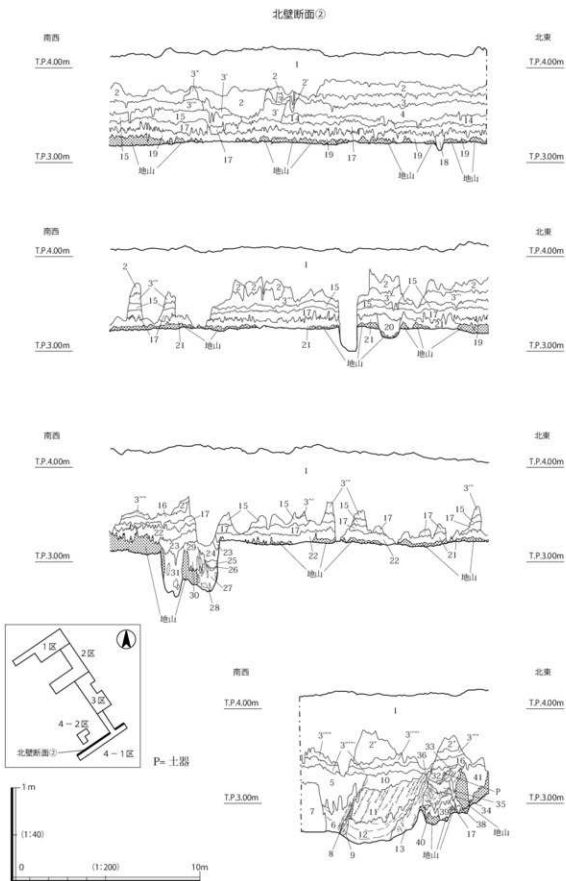


图10 4-1区 北壁断面图②

土器や石器等、多量の遺物を包含している。1区での層厚は0.6m以上、3区での層厚は0.1m前後である。
基盤層(地山) 基盤層は各調査区で共通する様相もみられるが、異なっている部分も存在する為、調査区毎に記述を進める。

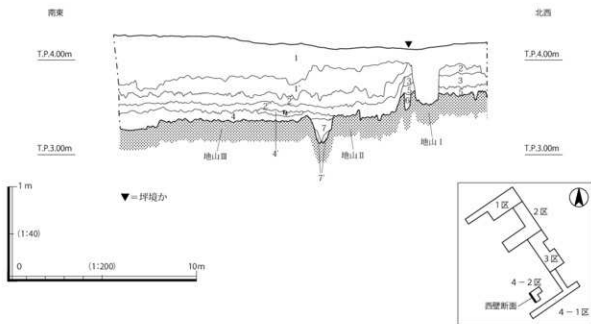
1区は灰白～明緑灰色シルト～砂質シルトを基本とするが、1区西側突出部の弥生時代流路の下部は灰白色シルト～中・粗砂となっており、弥生時代以前の流路が存在するものと推定される。

2区は灰白～淡黄色シルトを基本とする。X=-136,230付近を中心部分的に明黄褐色中～粗砂混砂質シルトがみられることから、最終遺構面形成以前の古い流路が存在している蓋然性が高い。また、X=-136,285・Y=-42,215～230付近では下位に位置する礫層が盛り上がり存在しているため、基盤層の上部を構成するシルトや砂質シルトは既に削平を受けたものと考えられる。

3区は灰白～淡黄色シルト～砂質シルトを基本とする。X=-136,290・Y=-42,180付近から南西にかけて幅約10m程度のかかなり砂質が強い部分が確認出来た。北東から南西にはしる最終遺構面形成以前の古い流路が存在している蓋然性が高い。

4区は灰白～明緑灰色シルト～砂質シルト・浅黄色砂質シルトを基本とする。4-2区では調査区西側(Y=-42,188以西)が明緑灰色シルト混中～粗砂や明緑灰色シルト混粗砂・礫からなる基盤層となっており、最終遺構面形成以前の古い流路が存在している蓋然性が高い。

いずれの調査区においてもシルト～砂質シルト系の基盤層上面は地震動による変形と後世の踏込によ



- 1 2.5Y7/4 浅黄 砂礫層 (第1層)
- 1' 10G7/1 明緑灰 シルト混礫～中砂 (第1層)
- 2 10B6/1 青灰 シルト混礫～中砂
極小の炭化物・Fe粒を含む (第2層)
- 2' N5/0 灰 礫～中砂混粘質シルト (第2層)
- 2 5B6/1 青灰 礫～中砂混粘質シルト
φ0.5～2cm 大の小礫を含む (第2層)
- 3 5B6/1 青灰 シルト混中～粗砂
φ0.3cm 前後の小礫・Fe粒を含む (第3層)
- 4 2.5Y5/1 黄灰 中砂質シルト
2.5Y7/4 浅黄 砂質シルト (CaCO₃結核か?)及び
φ0.3cm 大の小礫を多く含む (第4層)

- 4' 5Y6/1 灰 シルト混中～粗砂 2.5Y8/1～8/2 灰白 細砂ブロック・
φ0.5cm 前後の小礫を多く含む (第4層)
- 5 7.5YR7/1 明褐色 礫～中砂質シルト 炭化物・Fe粒を含む (第6層)
- 6 7.5YR6/1 褐色 粘質シルト
10YR3/1 黒濁 シルトブロック・炭化物を含む (遺構埋土)
- 7 7.5YR5/4 に近い 濁 シルト 僅かに炭化物を含む (遺構埋土)
- 7' 10YR5/2 灰黄濁 細砂混粘質シルト 極小の炭化物を含む
地山I(北側) 5Y7/3 浅黄 砂質シルト Fe粒顕著にみられる
地山II(中央) 7.5YR7/2 明褐色 シルト混粗砂・礫 比較的固くしまる
地山南(南側) 10G7R/1 明緑灰 シルト混中～粗砂

図11 4-2区 西壁断面図

って大理石模様状に上位層と基盤層が混ざり合っており、遺構検出が極めて困難な状況にあった。

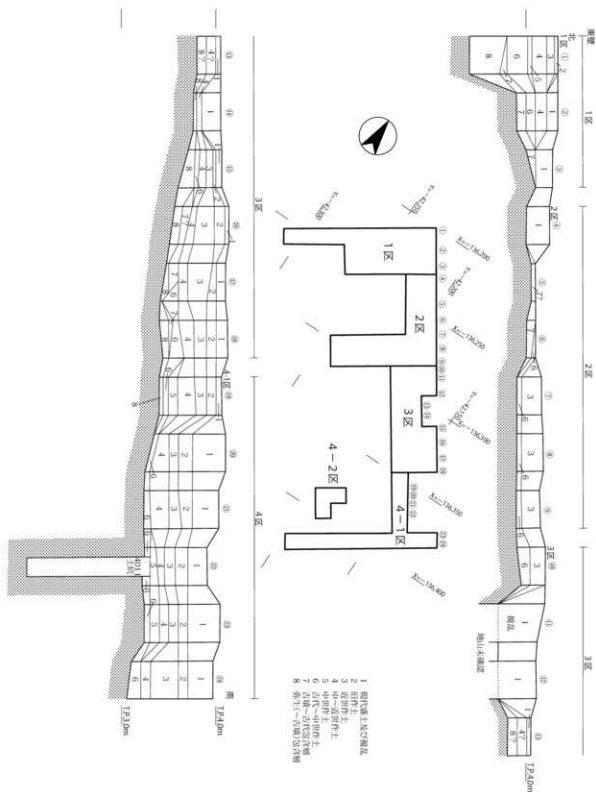


図 12 東壁 柱状図

第2節 中世以降の遺構と遺物 (図14~24・図版1~3・7~8・15~16・24~26)

前節までで述べたように、ほとんどの遺構は基盤層上面とした最終遺構面において同時に検出したものである。この中で、出土遺物や遺構埋土の検討から中世以降に帰属するものを抽出し、さらに1区中央部(X=-136,220・Y=-42,240付近)で第6層と推定される褐灰色砂質シルトの掘削途上で確認した複数の土坑群(1020~1023)を合成したものである。

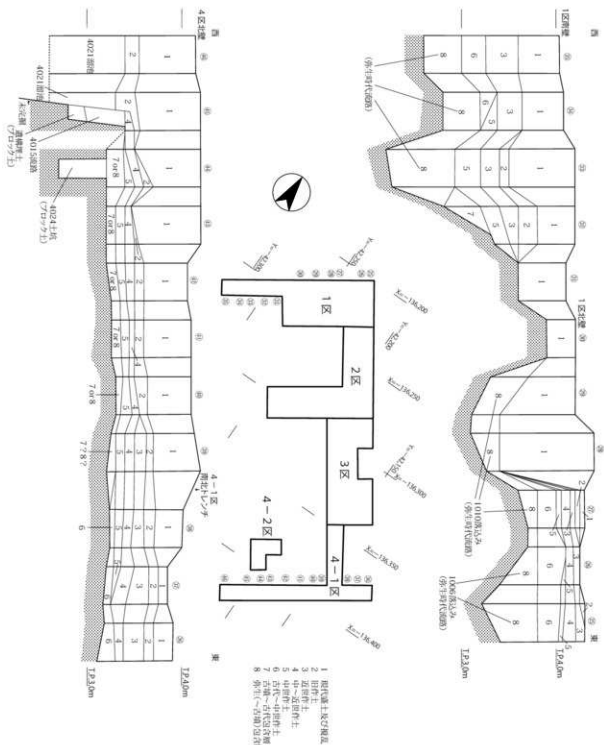


図13 北壁 柱状図

検出した多くの遺構が井戸や溝、溜池といった耕作に関わる灌漑施設であった。一部、1区西側(Y=-42.280以西)でブロック土を埋土とする1026土坑群を検出した。これらの性格は後述するが粘土採掘坑である可能性が考えられる。

井戸 (図16~19・図版2・3・16・26) 井戸と考えられる遺構は全調査区を通して約20基存在する。帰属時期を明確に出来るものは少ないが、多くのものが近世期に使用されていたものと考えられる。また、図14・15には明示していないが、2304溜池や4013井戸周辺には近現代陶磁器やガラス等が出土する井戸もみられることから、DIC株式会社工場建設直前頃まで機能していた井戸もあったと思われる。

1002井戸 (図16) X=-136,215・Y=-42,223付近に位置する。直径約1.4mで平面不整形円形を呈

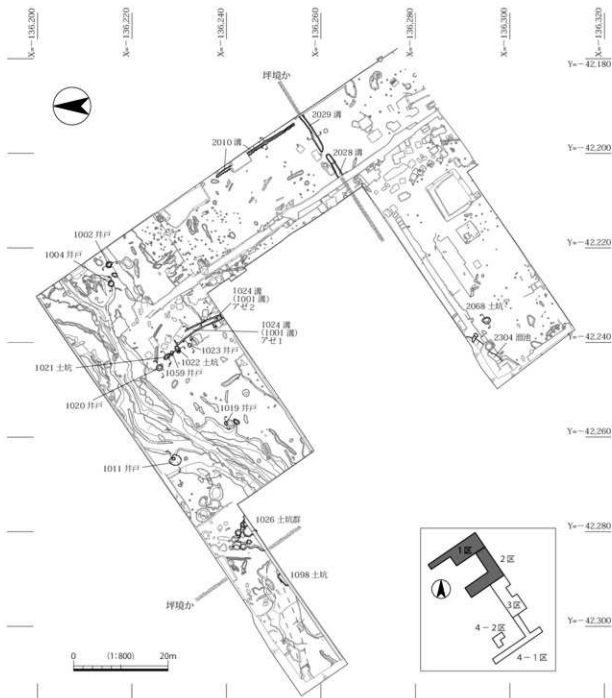


図14 1・2区 中世以降 遺構平面図

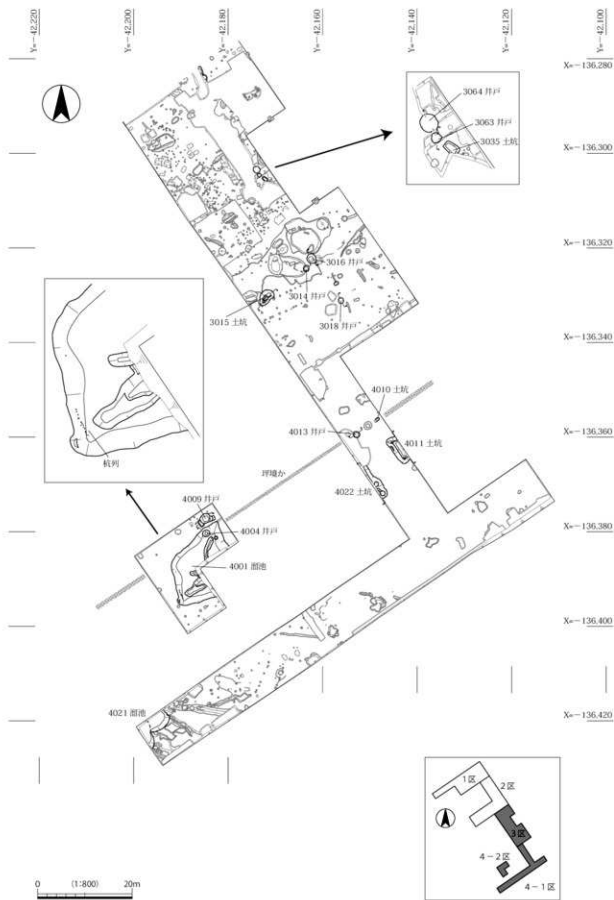


図15 3・4区 中世以降 遺構平面図

し、断面形は漏斗状を呈する。検出面から深さ約1mまでは掘削したが、崩落の危険があった為、底までは確認していない。ブロック土で埋め戻されている。井戸枠の痕跡が認められなかった為、素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物は極めて少なく、僅かに肥前陶器皿(1)・肥前系染付丸碗(2)がみられた。1は体部外面下半から高台内にかけては露胎で、それ以外には藁灰軸がかかる。高台は三日月高台気味である。17世紀前半の所産。2は肥前系(波佐見)染付丸碗。底部が厚く作られ、高台が高く畳付の幅は狭い。体部外面には一重網目文がみられる。17世紀後半～18世紀前半頃の所産であろう。掘削年代は不明であるが、遺物の年代観から18世紀後半頃には完全に埋め戻されたものと推定される。

1004 井戸 (図16) 1002井戸の西側4mに位置する。直径約1.1mで平面円形を呈する。検出面から深さ約0.9mまでは掘削したが、それ以下に関しては崩落の危険があった為、底までは確認していない。ブロック土で埋め戻される。井戸枠の痕跡が認められなかった為、素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物がみられず所属時期は明確ではないが、埋土の状況から近世期の所産と推定される。

1020 井戸 (図16・図版3) $X=-136.226 \cdot Y=-42.245$ 付近に位置する。直径約1.2mで平面円形を呈し、断面形は漏斗状を呈する。検出面から深さ約0.9mまでは掘削した。それ以下に関しては調査完了後、重機により掘削し底を確認した。なお、T.P.2.0m前後で湧水がみられた。埋土はブロック土ではなく、灰色系シルト～粘質シルトが堆積していた。井戸枠の痕跡が認められなかった為、素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物には瓦器片、平安時代頃の所産と考えられる須恵器残片がみられる。埋土の状況や出土遺物から勘案すれば中世期の井戸の蓋然性が高い。

1059 井戸 (図16) 1020井戸の南東約3.0mに位置する。直径約0.6mで平面円形を呈する。検出面から深さ約0.65m下までは掘削した。それ以下に関しては調査完了後、重機により掘削し底を確認した。なお、T.P.2.0m前後で湧水がみられた。ブロック土で埋め戻されている。井戸枠の痕跡が認められなかった為、素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物がみられず所属時期は明確ではないが、埋土の状況から近世期の所産と推定される。

1023 井戸 (図18) 1059井戸の南東約7mに位置する。直径約0.75mで平面不整形円形を呈する。検出面から深さ約0.65mまでは掘削した。それ以下に関しては調査完了後、重機により掘削し底を確認した。T.P.2.0m前後で湧水がみられた。下部はブロック土で、最上部は灰黄色細～中砂混シルトで埋め戻されていた。井戸枠の痕跡が認められなかった為、素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物は土師器の細片があるのみで所属時期は明確ではないが、埋土の状況から近世期の所産と推定される。

1011 井戸 (図17・図版2) $X=-136.229 \cdot Y=-42.265$ 付近に位置する。第6層と推定される褐色砂質シルトの掘削途上で検出した。長軸約2.4m、短軸約1.9mを測る平面不整形円形の掘方を有し、掘方の東壁に接するように井戸側が設置されている。井戸側は直径約0.7mで、幅約0.15m・長さ1m前後の板材を円形に組んだものである。板材は上下2箇所で開催されていた。検出面から深さ1mまで掘削し、2段の井戸側の存在を確認したが、それ以下に関しては崩落の危険があった為、底までは確認していない。なお、井戸側内から多くの井戸瓦が出土している為、井戸の上部は瓦組であった可能性が高い。井戸側内は青灰～灰色シルト～粘質シルトで埋め戻されている。裏込めはブロック土である。出土遺物は少なく18世紀後半以降の所産とみられる産地不明陶器鉢がある。

1019 井戸 (図18・図版3) $X=-136.240 \cdot Y=-42.258$ 付近に位置する。直径約0.7mで平面不整形円形を呈する。南西部分は近代頃の帰属とみられる井戸に切られる。検出面から深さ約0.75mまでは掘削したが、それ以下に関しては崩落の危険があった為、底までは確認していない。ブロック土で埋め

戻されている。井戸枠の痕跡が認められなかった為、素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物がみられず所属時期は明確ではないが、埋土の状況から近世期の所産と推定される。

3063 井戸 (図 18) X=-136,305・Y=-42,173付近に位置する。直径約0.7mで平面不整形形を呈する。深さは約0.9mである。ブロック土で埋め戻されているが黒色系の遺物包含層(第8層)ブロックは含有していなかった。井戸としたが、底面付近での湧水がみられず、浅いことから水溜り施設の可能性もある。出土遺物は少なく僅かに土師器片や瀬戸・美濃折縁皿(3)がみられた。3は体部内面にソギが認められ、口縁端部は内側に折り返されて玉縁状になる。大窯4期後半頃(16世紀末～17世紀初頭)の所産。遺物の年代観から17世紀以降の遺構と考えられる。

3064 井戸 (図 18) 3063井戸の北西部分に接するように掘削されている。直径約1.3mで平面円形を呈する。検出面から深さ約0.85mまでは掘削したが、崩落の危険があった為、底までは確認していない。ブロック土で埋め戻される。井戸枠の痕跡が認められなかった為、素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物がみられず所属時期は明確ではないが、埋土の状況から近世期の所産と推定される。

3014 井戸 (図 18・図版 16) X=-136,324・Y=-42,163付近に位置する。直径約1.15mで平面円形を呈する。井戸上部は攪乱により削平を被っていた。検出面から深さ約0.8mまでは掘削したが、それ以下に関しては崩落の危険があった為、底までは確認していない。埋土は細～粗砂の薄層を挟み水成堆積とみられる灰色シルトが主体となっている。井戸枠の痕跡が認められなかった為、素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物には弥生土器の細片がみられたが所属時期は明確ではない。1020井戸に類似する埋土の状況から中世期の所産と推定される。

3016 井戸 (図 18) 3014井戸の北東約1mに位置する。直径約2.1mで平面円形を呈する。井戸東側

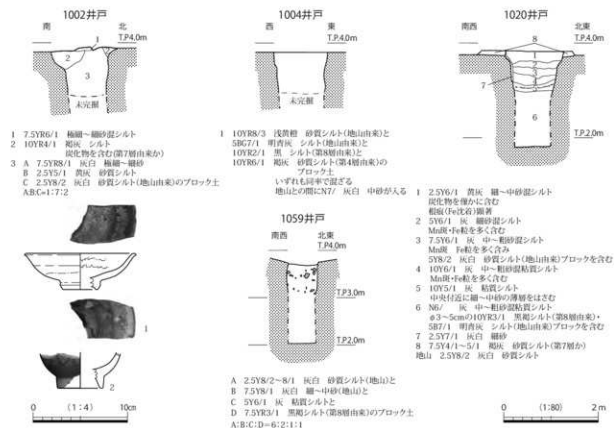


図 16 1区 井戸 断面図 出土遺物

は攪乱により切られている。検出面から深さ約1mまでは掘削したが、それ以下に関しては崩落の危険があった為、底までは確認していない。ブロック土で埋め戻される。井戸枠の痕跡が認められなかった為、素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物には土師器の細片がみられたが所属時期は明確ではない。埋土の状況から近世期の所産と推定される。

3018 井戸 (図18・図版16) 3016井戸の南東約9mに位置する。直径約1.15mで平面円形を呈する。検出面から深さ約0.8mまでは掘削したが、それ以下に関しては崩落の危険があった為、底までは確認していない。ブロック土で埋め戻される。井戸枠の痕跡が認められなかった為、素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物がみられず所属時期は明確ではないが、埋土の状況から近世期の所産であろう。

4013 井戸 (図18) $X=-136,360 \cdot Y=-42,152$ 付近に位置する。直径約1.15mで平面円形を呈する。井戸西側は攪乱により切られている。検出面から深さ約0.6mまでは掘削したが、それ以下に関しては崩落の危険があった為、底までは確認していない。埋土は水成堆積とみられる灰色シルトが主体となっている。井戸枠の痕跡が認められなかった為、素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物がみられず所属時期は明確ではない。3014井戸に類似する埋土の状況から中世期の所産と推定される。なお、北東側約1.5mには最上部からガラスや近代陶磁器が出土し、井戸側を有する井戸が存在する。

4004 井戸 (図19・図版26) $X=-136,380 \cdot Y=-42,185$ 付近に位置し、4001溜池内の北東隅に掘削されている。切り合い関係から井戸は溜池がある程度埋没した後に掘削されたものである。なお、井戸廃棄後も溜池の上部(埋没しなかった部分)はそのまま溜池として利用されていたものとみられる。井戸の直径は約1.5mで平面円形を呈する。検出面から深さ約0.9mまでは掘削したが、それ以下に関しては崩落の危険があった為、底までは確認していない。灰～黄灰色系シルト～粘質シルトで埋め戻されている。井戸枠の痕跡が認められなかった為、素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物には肥前系染付丸碗や肥前系陶器鉢、土師質土器皿(4)、横櫛(5)等がある。4は口縁部に油煙がみられること

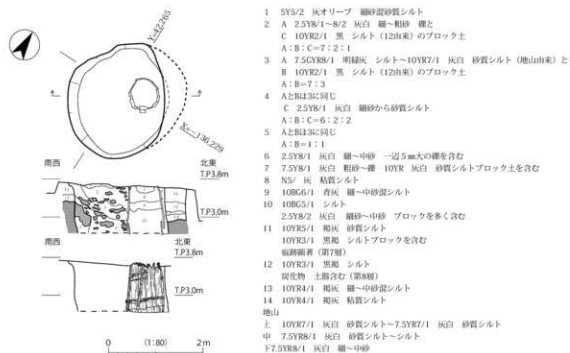


図17 1011井戸 平・断面図

から灯明皿として使用されたもの。ロクロ成形で、底部外面は回転系切り。18世紀代の所産であろう。5はツゲ材製。挽歯技法による梳櫛である。全長は9.5cm。肥前系陶磁器は17世紀後半～18世紀の所産である。

4009 井戸 (図19・図版26) 4004井戸の北側約1.5mに位置する。長軸約2.1m、短軸約2mの平面楕円形を呈する。井戸が埋没した後、井戸上部には2基の埋桶(4019埋桶ほか)が築かれていた。検出面から深さ約0.8mまでは掘削したが、それ以下に関しては崩落の危険があった為、底までは確認し

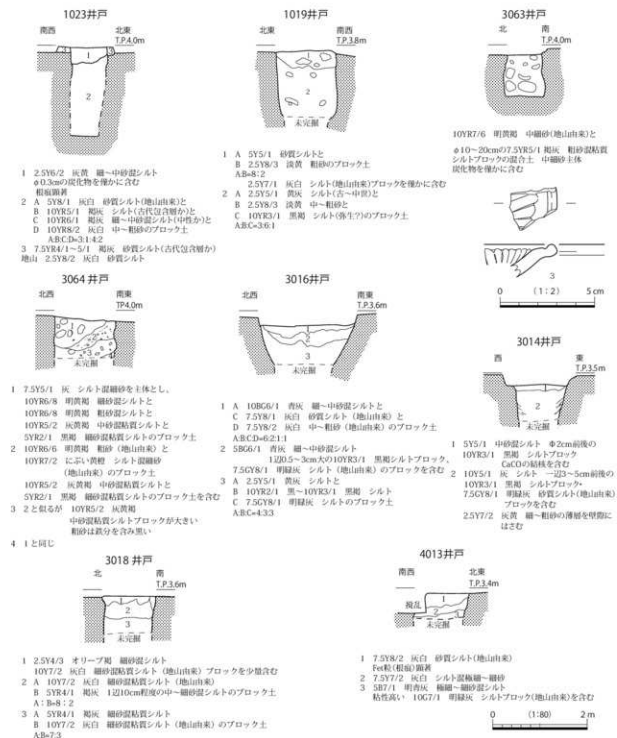


図18 1・3・4区 井戸 断面図 出土遺物

ていない。灰～灰黄色系シルト～粘質シルトで埋め戻されている。井戸枠の痕跡が認められなかった為、素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物はみられなかったが、4004井戸と埋土が類似することから近世期の井戸と推察される。

土坑 (図 20～23・図版 3・16・26) 土坑と考えられる遺構は全調査区を通して約10基存在する。幅属時期を明確に出来るものは少ないが、多くのものが近世期に使用されていたものと考えられる。性格を特定するのが困難であるが、一部のものは埋土の堆積状況から水溜り施設 (3015・4011・4022 土坑) や粘土採掘坑 (1026 土坑群) の可能性が窺える。

1021 土坑 (図 20) 1020井戸の南東約1mに位置する。長軸約1.5m、短軸約0.8mの平面長楕円形を、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は第4層に類する暗灰黄色細～中砂混シルトである。主軸方位はN-37°-Wを指向する。出土遺物はなかったが、埋土の状況から中～近世期の所産であろう。

1022 土坑 (図 20) 1021土坑の南東約1.5mに位置する。長軸約1.6m、短軸約0.9mの平面長楕円形を、

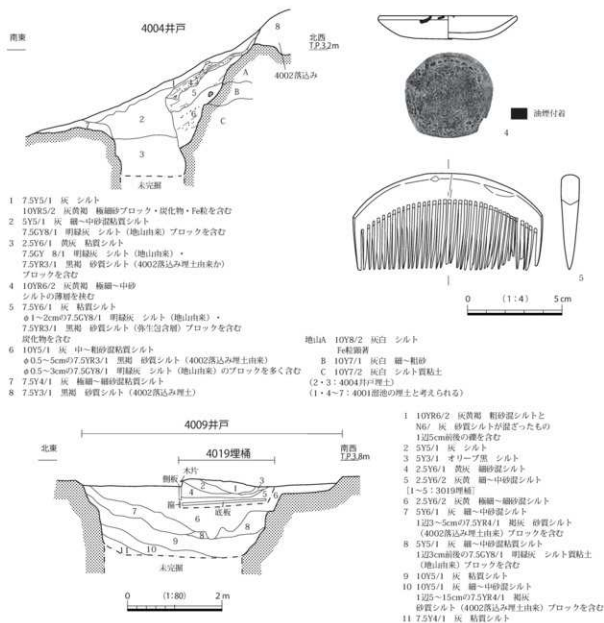


図 19 4区 井戸・埋桶 断面図 出土遺物

断面形は浅い皿状を呈する。埋土は第4層に類する暗灰黄色細～中砂混シルトである。主軸方位はN-63°-Eを指向する。出土遺物には土師器の細片があったが時期の特定には至らなかった。埋土の状況から中～近世期の所産と推定される。

1021・1022土坑の性格は不明であるが、土坑の主軸方位は嶋下郡南部条里の地割方位にほぼ合致することから耕作に関わる遺構と推定される。

1026土坑群 (図4・20・図版3) 1区西側突出部のX=-136,240・Y=-42,280付近に位置する。検出長は南北約5m、東西約6m、残存する深さは0.35mである。遺構南側は調査区外へと広がる。平面検出段階では土坑同士の明瞭な切り合いを捉えることが出来なかった為、平面不整形形状を呈する。しかし、断面観察や掘削後の底面の凹凸が顕著であった様子から、平面方形を基調とする複数の土坑が重複して掘削された結果形成されたものであることが明らかとなった。

土坑群は地山由来の灰白色砂質シルトや第6～8層由来と想定される黒褐色～淡黄色系シルト等のブロック土が充填されていた。出土遺物には細片となった弥生土器・土師器(古代以降)等がある。こうした遺物は先述した第6～8層由来のブロック土に含まれていた。出土遺物の年代観や埋土に古代～中世期の作土とみられる第6層のブロックを含むことから古代以降の所産と考えられる。

限定された場所で複数の土坑が重複して掘削されていたのは、重要な目的があつたことと推察される。ブロック土で埋め戻されることや重複して土坑が掘削されるといった状況は、遺構の営まれた年代が異なるものの、本遺跡の近傍に位置する吹田操車場遺跡や西の庄東遺跡、高城B遺跡で検出され、粘土採掘坑と性格付けられた群集土坑に類似する。本土坑群も粘土採掘坑である蓋然性が高い。

1098土坑 (図4・20・図版3) 1区西側突出部のX=-136,240・Y=-42,280付近に位置する。検出長は南北約3m、東西約0.7m、深さは約1.1mである。検出した平面形は長方形形状を呈するが、遺構の大半が調査区外に広がっており詳細は不明。断面観察から土坑底面は凹凸に掘削されていることが明らかとなったが、1026土坑群のように複数の土坑が重複して掘削されたか否かは判断し難い。

土坑は地山由来の灰白色シルト・シルト質粘土～中・粗砂や第5層由来と想定される灰黄褐色砂質シルト・第8層由来の黒色シルト～細・中砂混シルト等のブロック土が充填されていた。出土遺物には細片となった弥生土器・内黒黒色土器・須恵器捏ね鉢(6)等がある。こうした遺物は先述した第5・8層



図20 1区 土坑・土坑群 断面図 出土遺物

由来のブロック土に含まれていた。6は内湾しながら緩やかに立ち上がり、口縁端部を緩やかに外反させる。口縁部端面は凹線状に窪む。8世紀後半頃の所産とみられる。出土遺物の年代観や埋土に中世期の作土とみられる第5層のブロックを含むことから中世以降の所産と考えられる。なお、1026土坑群は基盤層の粘土を掘って掘削したものと推察したが、1098土坑の下位には第8層の黒色系シルト(弥生時代流路)や灰白色細砂～礫の基盤層(古い流路跡と推定される)が広がっている為、1026土坑群と同様な性格とは考え難い。

2068 土坑 (図 20) $X=-136,295 \cdot Y=-42,235$ 付近に位置する。長軸約1.5m、短軸約1.3mの平面不整丸台形を呈する。深さは約0.3mで、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は第3～4層に類似する灰色細砂混シルトで、細かなブロックを含む。主軸方位は $N-30^{\circ}-W$ を指向する。出土遺物には土師器あるいは弥生土器の細片があったが時期の特定には至らなかった。埋土の状況から中～近世期の所産と推定される。土坑の性格は不明であるが、土坑の主軸方位は鳩下郡南部条里の地割方位にほぼ合致することから耕作に関わる遺構と推定される。

3035 土坑 (図版 16) 3063井戸の南東約0.5mに位置する。土坑南西隅は攪乱に切られるが、長軸約1.2m、短軸約0.8mの平面隅丸長方形を呈する。深さは約0.35mで、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は第6層由来の褐灰色細砂混シルトと地山由来の黄褐色細砂混シルトのブロック土である。土坑の主軸方位は $N-51^{\circ}-W$ を指向する。出土遺物には細片となった弥生土器片があったが時期の特定には至らなかった。埋土の状況から中～近世の所産と推定される。土坑の性格は不明である。

3015 土坑 (図 21・図版 16) $X=-136,330 \cdot Y=-42,170$ 付近に位置する。長軸約3.8m、短軸約2.2mの平面不整楕円形を呈する。土坑は2段に掘り込まれており、土坑底面北東隅に長軸約1m、短軸約0.8mの平面楕円形の土坑がみられる。最深部は検出面から約2mの深さである。

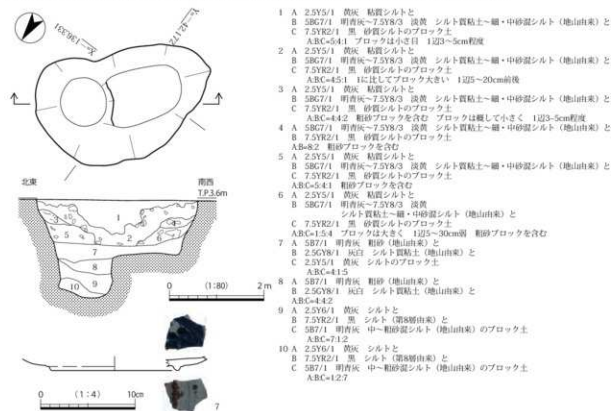


図 21 3015 土坑 平・断面図 出土遺物

土坑は地山由来の灰白色・明青灰色～淡黄色シルト質粘土～細～粗砂混シルトや第8層由来の黒色砂質シルト・第4～6層由来とみられる黄灰色シルト等のブロック土が充填されていた。土坑最下部付近で明瞭な湧水は確認出来なかったが、埋土が常に湿潤な状態にあったことから井戸もしくは水溜り施設であったものと推察される。出土遺物は僅少であるが第8層由来の黒色シルトブロックから弥生土器小片が、出土層位は不明であるが輸入磁器(7)が1点出土している。7は中国製青花。漳州窯系の盤である。壘付や高台内面に粗い砂が付着する。胎土は磁器質。16世紀末～17世紀前半の所産である。7の年代観から17世紀以降の遺構と考えられる。

4010 土坑 (図 22) X=-136.356・Y=-42.149付近に位置する。土坑西側を切られるが、本来は平面楕円形を呈する土坑とみられる。残存長軸は約0.7m、短軸約0.6mである。深さは0.11mで、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰色極細～細砂混シルトで極小の炭化物を含んでいる。主軸方位はN-54°-Eを指向する。出土遺物は極めて少なく、土師器へそ皿(8)、鉄釘(9)のみであった。8は口縁端部に油煙の付着がみられることから灯明皿に使用したものであろう。白色系の精良な胎土。16世紀後半頃の所産か。9の先端は欠損。身は断面長方形を呈する。頭部は打撃により潰れている。土坑の

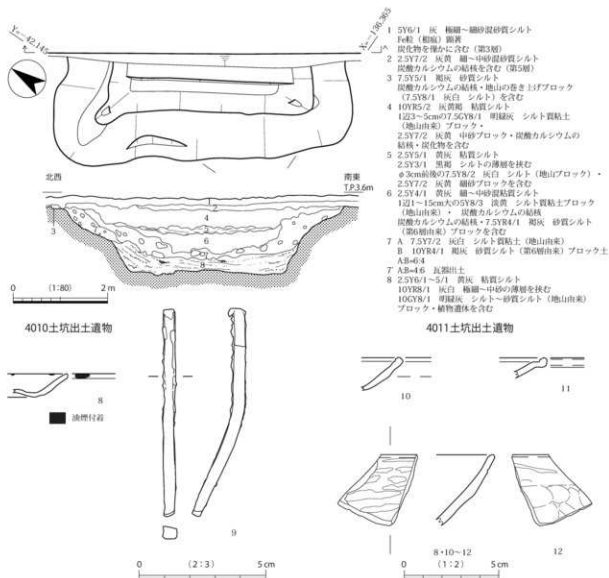


図 22 4011 土坑 平・断面図 4010・4011 土坑 出土遺物

性格は不明であるが、土坑の主軸方位は嶋下郡南部条里の地割方位にほぼ合致することから耕作に関わる遺構と推定される。

4011 土坑 (図 22・図版 26) 4010土坑の南東約4.5m、 $X=-136.356 \cdot Y=-42.149$ 付近に位置する。検出長は約6.4m、検出幅は約2.2mを測る。現況で平面隅丸長方形を呈する。遺構の大半が調査区外へと広がっており詳細は不明である。長軸の断面形は漏斗状を呈し、検出面からの深さは1.45mである。埋土は大きく3枚に分かれる。下層は水成堆積の黄灰色粘質シルトで灰色極細～中砂の薄層を挟む。中層は地山由来の灰白色シルト質粘土と第6層由来の褐灰色砂質シルトのブロック土で、人為的に埋められたと思われる。上層は水成堆積の灰黄褐～黄灰色粘質シルト～細・中砂粘質シルトである。断面観察から、中層のブロック土で埋め戻した後、再掘削された可能性が高い。また、断面観察の結果、土坑は基盤層ではなく、第6層から切り込まれていることが明らかとなった。土坑の主軸方位は $N-33^{\circ}-W$ を指向する。

出土遺物は中層のブロック土から細片となった土師器皿(10・11)、土師器甕、須恵器、瓦器椀(12)がみられた。10は口縁部内面に浅い段を有する。白色系の精良な胎土。9世紀後半～末頃の所産か。11は所謂「て」の字状口縁皿である。橙色系の精良な胎土である。11世紀後半頃の所産であろう。12は桶型瓦器椀である。体部外面下半には指頭圧痕が残る。内面には粗いミガキが施される。13世紀～14世紀の所産。出土遺物の年代観や古代～中世期の作土と考えられる第6層から切り込まれていること、土坑上部を中世～近世の作土(第3・5層)が覆うこと等から、中世後半の所産と推察される。土坑の主軸方位は嶋下郡南部条里の地割方位に合致することから耕作に関わる遺構と思われる、埋土の状況から大型の水溜状態施設あるいは溜池状態施設と推定される。

4022 土坑 (図 23・図版 26) 4011土坑の南西約6.5mに位置する。検出長は約8m、検出幅は約0.9～1.6mを測る。土坑北側は攪乱に切れ、遺構の大半が調査区外へと広がっており詳細は不明である。長軸の断面形は折線状を呈し、掘り込み面からの深さは約1mである。埋土は大きく4枚に分かれる。最下層は水成堆積の灰色粘質シルトと灰白色細～中砂の互層。下層は灰色粘質シルトと地山由来の明緑灰色シルトのブロック土。中層は水成堆積の灰色中～粗砂粘質シルト・炭化物や植物遺体を多く含む灰色粘質シルトである。上層は埋め戻しあるいは整地土の可能性が高い青灰色中～粗砂粘質シルトである。遺構を検出したのは基盤層上面であるが、断面観察の結果、第4層から切り込まれていることが明らかとなった。土坑の主軸方位は $N-35^{\circ}-W$ を指向する。なお、平面検出時には切り合いに気付かなかったが、土坑底面で直径約1mの井戸2基が土坑主軸に並ぶように掘削されていた。土坑掘削中も注意を払っていなかった為、土坑と井戸の先後関係は不明である。土坑からは焼締陶器播鉢(13)が出土した。13は堀播鉢である。口縁内面に断面三角形の突帯を巡らせ、突帯から下がった位置に段がみられる。播目は10条のクシ描である。18世紀後半～19世紀頃の所産であろう。

出土遺物の年代観や中～近世期の作土と考えられる第4層から切り込まれていること、土坑上部を近世の作土(第3層)が覆うこと等から、近世期の所産と推察される。土坑の主軸方位は嶋下郡南部条里の地割方位にほぼ合致することから耕作に関わる遺構と思われる、埋土の状況から大型の水溜状態施設あるいは溜池状態施設と推定される。

溝 (図 24・図版 3・14) 本来的に深さがそれ程無い遺構である為、当該期の溝の検出数は多くなく、僅か3条であった。そのいずれもが主軸方位は嶋下郡南部条里の地割方位にほぼ合致することから耕作に関わる溝であると推定される。

1024 溝 (図 24・図版 3) 1022土坑のすぐ南東側に位置する。溝北東隅は攪乱に切られ、南側は調査区外へと延びる。検出長は約 11 m、幅は北側が広く約 1.4m、南側が約 1 m である。深さは北側が約 0.25m、南側が約 0.15m で断面形は浅い皿状を呈する。埋土は地山由来の灰白色シルトと黄灰色細～中砂混シルトまたは灰色極細～細砂混シルトのブロック土である。主軸方位は N-26°-W を指向する。出土遺物には細片となった肥前系染付碗、肥前系陶器皿、須恵器、土師器、弥生土器、緑色チャート製火打石片、瓦等がみられ、肥前系陶磁器の年代観から 17 世紀後半以降の所産と思われる。

2010・2028・2029 溝 (図 24・図版 14) 2010 溝は 2 区東壁際の X=-136.238~254 間に位置する。溝は一部攪乱によって切られるが、検出長約 20m、幅約 0.5m、深さは約 0.15m である。底面は滑らかでなく、著しく凹凸がみられたことから溝というよりも踏み込みの集合体である可能性が高い。通路状の施設であったのか。埋土は灰色シルトと地山由来の灰白色砂質シルトが混ざったものである。主軸方位は N-36°-W を指向する。

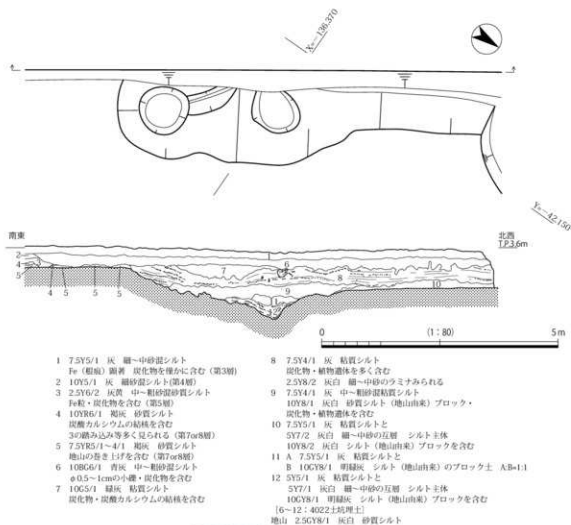


図 23 4022 土坑 平・断面図 出土遺物

2028・2029溝は2010溝の南側約1.7mに位置する。途切れた箇所がみられるが、両溝は同一の溝と考えられる。東側は調査区外に延び、西側は攪乱に切られて判然としなない。検出長は2029溝が約9m、2028溝が約5.5m、幅は0.8～1.2mである。深さは約0.15mで、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黄灰色シルトと地山由来の灰白色砂質シルトが混ざったものである。2029溝の東側北辺に直径0.1m程度の杭状痕跡が約1m間隔で4本みられた。主軸方位はN-56°-Eを指向し、2010溝と直交する。

3条の溝からは細片となった土師器、須恵器や弥生土器があったが時期の特定には至らなかった。埋土の状況から近世期の所産と推定される。

溜池 (図24・図版25・26) 溜池と類推させるような大型の土坑を3基検出した。いずれも調査区の縁辺部に検出したものであり、詳細を詳らかに出来なかった。

2304 溜池 2区の北西隅、X=-136.295・Y=-42.240付近に位置する。南辺部分の一部を検出したのみであり、遺構西側は攪乱によって切れ、北側は調査区外へと広がる為、平面形状等の詳細は不明である。検出長は約13m、検出幅は約1mである。検出面から約0.8m掘削したが、それ以下に関しては崩落の危険があった為、底までは確認していない。確認出来た範囲では下部に水成堆積の灰色系粘質シルトがみられ、上部には近現代陶磁器やガラス瓶、革靴等の日用品が廃棄された黒色系砂質土が厚く堆積していた。最終埋没はDIC株式会社工場建設直前頃と推定されるが、他の例から近世期の所産と考えておきたい。

4001 溜池 (図24・図版25・26) 4-2区のほぼ大半を占めるように掘削されている。溜池南東部分は調査区外へと広がる。平面形は不整形形状になるのであろうか。4-2区南東部壁面沿いの検出長(北東-南西)は約13.6m、検出幅(北西-南東)は約12.2mを測り、最深部の深さは検出面から1.75mである。溜池西側が比較的緩やかに、東側は急角度に掘削されている。池底には3条の溝がある。これ

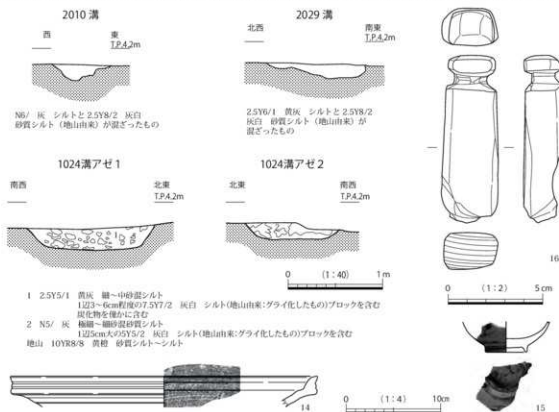


図24 1・2区 溝 断面図 4001 溜池 出土遺物

らは池底各隅から中央に向かって延びるように配されている。また、池西側法面の中程には南西隅付近を中心に直径5cm前後の杭が北に向かって0.1～0.2m間隔で16本、北西隅付近に1本打設されていた。未検出であった部分にも本来は打設されていたものと推定される。池西側法面や北側法面西半部の基盤層が明緑灰色シルト混中～粗砂や明褐色灰色シルト混粗砂・礫で構成されており、崩れやすい性質であるが故の護岸用の杭列であろう。

池土上は大きく4枚に分かれる。最下層は溝状部分に堆積した黄灰色粘質シルトである。基盤層が崩落して形成された明緑灰シルト～砂質シルトの小ブロックを含む。下層は植物遺体を多く含む黄灰色粘質シルト、中層は細～中砂の薄層を挟む青灰色シルト、上層は黄灰色極細～細砂混シルトである。中層以下は水成堆積で、上層は整地層であろう。

出土遺物には肥前系染付丸碗・広東碗、肥前系陶器京焼風碗、焼締陶器播鉢(備前・堺・丹波)、関西系陶器、弥生土器、須恵器、木製品、漆器(椀：内外面共に赤漆・折敷か；内面は赤漆・外面は黒漆)等がある。このうち丹波焼播鉢(14)、肥前系(波佐見)染付丸碗(15)、木製品(16)を図化した。14は口縁部を上方向に拡張するが、口縁下端は拡張しない。口縁部外面に2条の沈線が巡る。播目は6条のクシ描き。17世紀後半頃の所産か。15は高台内に渦福が崩れたような銘款がみられる。体部外面は雪輪草花文か。内面見込みに不定方向の擦痕がみられる。17世紀末～18世紀後半頃の所産であろう。16は平面隅丸方形を呈する扁平な頭部を作り出した棒材。断面形は隅丸長方形を呈する。他端は欠損し、残存長は8.8cm、幅3cm、厚さ1.9cmを測る。織機の付属具や何らかの部材であろうか。スギ材製。出土遺物は17世紀前半代のもが存在せず、下限を示すものが肥前系染付広東碗(19世紀前半)であることから、17世紀後半～19世紀に機能していたと推定される。

4021 溜池 (図10・図版33) 4-1区の北西隅、 $X=-136.420$ ・ $Y=-42.193$ 付近に位置する。溜池南東部分を検出したのみで、溜池西側及び北側は調査区外に広がる為、平面形状等の詳細は不明である。検出した平面形は「3」の字状を呈する。検出長(北東-南西)は約6.5m、検出幅(北西-南東)は約5mである。検出面から約0.8m掘削したが、それ以下に関しては崩落の危険があった為、底までは確認していない。溜池は基盤層上面で検出したが、断面観察の結果、第4層から切り込まれていることが明らかとなった(図10)。

溜池の平面形が「3」の字状を呈するのは2基の溜池が切り合った結果である。東側に位置する溜池が埋没した後、新たに西側に掘り直したようである。西側溜池は下層に黄灰色シルトや灰白色細砂が、中層に灰色シルトや青灰色粘質シルトが、上層に灰黄色中～粗砂混シルトが堆積している。東側溜池は下層に灰白～灰黄色細～中砂が、中層に炭化物の薄層を挟む灰色粘質シルトや灰白色細～中砂の薄層を挟む青灰色シルトが、上層に灰黄色中～粗砂混砂質シルトが堆積している。両池とも中層以下は水成堆積であり、上層は埋め戻し土あるいは整地層である。

溜池は周辺に広がる弥生～古墳時代の遺構を切って構築されている為、出土遺物には細片となった弥生土器や土師器があったが時期の特定には至らなかった。埋土の状況や中～近世期の作土と考えられる第4層から切り込まれていることから近世の所産と推定される。

坪境 (図4・8・11・図版32-3・33-3) 平面では確認していないが、断面観察により3地点で旧作土である第2層や近世作土と考えられる第3層の段差を確認した。1地点目は1区西隅突出部南壁の $Y=-42.284$ ライン付近で、第2及び3層が東から西へ下がる0.2m程度の段差が確認できた。溝や畦畔等の施設の痕跡は確認出来なかったが、この位置は、条里区画復元によって坪境に推定される

調査地東側の道路(計測原点は調査地内の東側コンクリート壁)より約104mの位置にあることから、坪境である蓋然性が高い。2地点間は4-1区東壁のX=-136.355ライン付近で、第2及び3層が北から南へ下がる0.3m程度の段差や近世期の溝状遺構が確認出来た。3地点目は4-2区西壁X=-136.389ライン付近で第2層及び基盤層が北から南へ下がる段差が確認出来た。第2層で0.35m程度の、基盤層で0.2m程度の比高差がみられる。溝や畦畔等の施設の痕跡は確認出来なかった。2・3地点間を結ぶラインはN-55°-Eを指向し、嶋下郡南部条里の条里施工方位に則ったものである。この位置は、条里区画復元によって坪境に推定され調査地南側をはしる府道14号(十三・高槻線:計測原点は調査地の南外側に敷設されたアスファルト歩道の北縁)より106.6~107.3mの位置にあることから、坪境である蓋然性が高い。

小結 中世期のものは後世の土地改変により判然としなかったが、近世期を主体とする耕作に関わる遺構(井戸・水溜状遺構・溜池)を少数ではあるが確認することが出来た。遺構の掘削年代や使用期間等判然としない部分が大いものの、周辺で調査が展開している吹田操車場遺跡と同様に大規模な耕地が調査地においても展開していたことが明らかとなった。また、断面観察ではあるが、2条の坪境ラインを復元することが出来た。坪内の耕地区画等の復元までは至らなかったが、あまり調査が進展していなかった嶋下郡南部条里の南側において坪境が確認出来たことは、今後の条里復元研究に寄与するものである。調査地の条里施工時期に関しての手掛かりは得ることが出来なかったため、今後に期待しておきたい。

第3節 中世以前の遺構と遺物 (図25~119・図版1~25・27~29・34~53)

基盤層上面とした最終遺構面において同時に検出した複数の時期に亘る遺構のうち、出土遺物や遺構埋土の検討から中世以前に帰属するものを抽出したものである。

検出した遺構にはピット(多くが柱穴と考えられる)や土坑、溝等がある。2・3区を中心に掘立柱建物が複数確認出来たことから、多くの遺構が居住に関連するものと推察される。これら以外に、1区の北端で北東から南西にはる流路や調査区全域で地震動による変形構造と考えられる落込み(土坑状変形)がみられた。以下に1区から順に記述していく。

1. 1区 (図25~40・図版1~6・30・31・34~36・44~51) 調査区南辺沿いの基盤層が高く、T.P. 4.0~4.1mを測り、そこから西或いは南西に向かって緩やかに下降する地形となる。また、Y=-42.270ライン以西の調査区北辺沿いにも基盤層の高い部分が存在しており、前者と後者の基盤層が高い部分に挟まれた低位部分が弥生時代以降に流路として機能していたものと考えられる。流路は調査区を北東から南西に貫くよう緩やかに蛇行しながら流れる。基盤層が高い部分には、土坑や溝、ピットが複数みられた。ピットは直径0.2m前後のものが主体的で、多くが柱穴であろう。しかしながら明確な並びを捉えることが困難であった。なお、調査開始当初にX=-136.220・Y=-42.220の交点付近で和同開珎(図119-492)が1点出土したことから、古代の遺構が存在するのではないかと考えたが、当該期の遺物を出土する遺構は極めて少なかった。

掘立柱建物 (図26~28・図版5・6) 調査区南東部分及び調査区南辺中央付近で5棟の建物を検出した。後述する2~4区で検出した掘立柱建物に比べると、小規模なものばかりである。平面形状に歪が

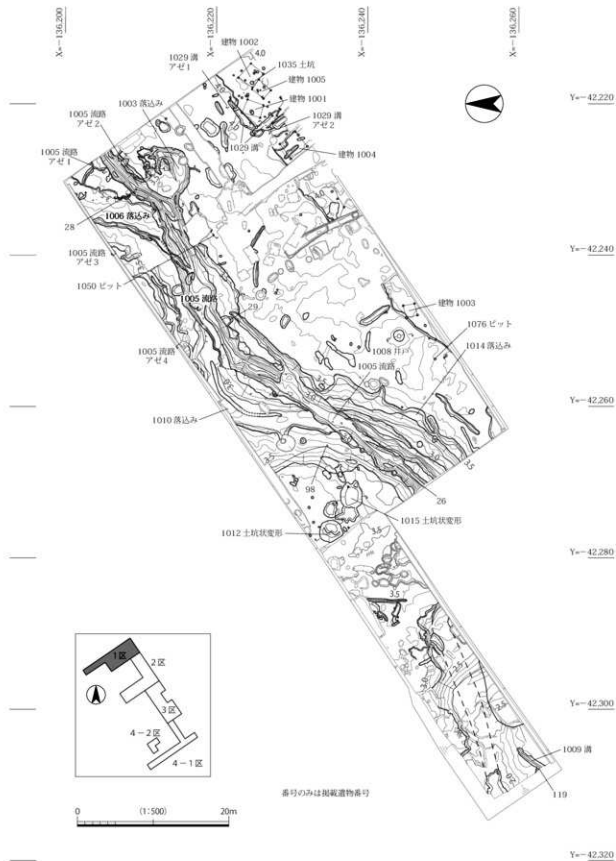


図 25 1区 古代以前 遺構平面図

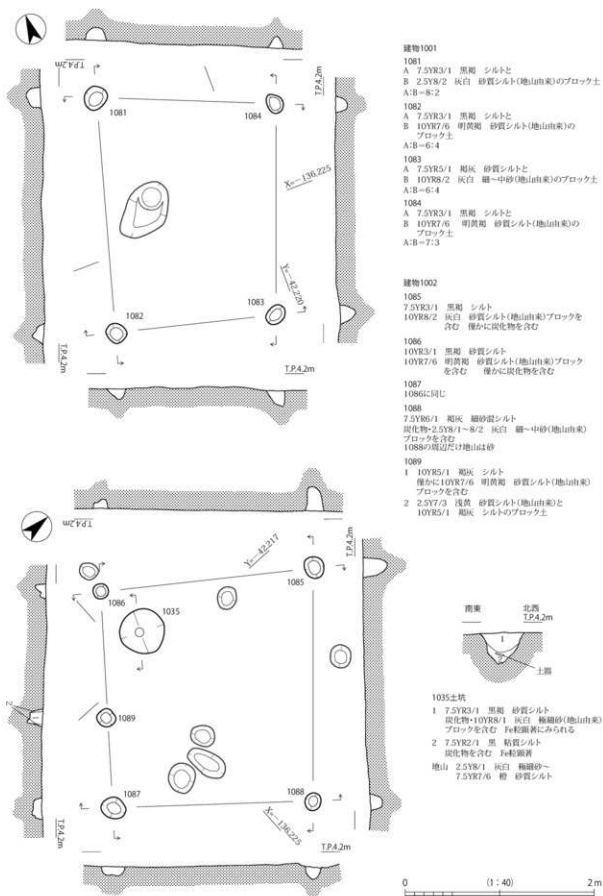


図 26 掘立柱建物 1001・1002 平・断面図 1035 土坑 断面図

みられること、柱掘方が浅いこと等から建物でない可能性も否定出来ない。

掘立柱建物 1001 (図 26・図版 5) 調査区南東隅の $X=-136.225 \cdot Y=-42.220$ 付近に位置する。梁行 1 間(1.7~1.9m)×桁行 1 間(2.2~2.5m)である。桁行は $N-17^\circ-E$ を指向する。柱掘方の平面形は不整円形や長楕円形を呈し、直径または長軸が約 0.2m、深さは約 0.1~0.15m である。いずれの柱穴にも柱痕跡は認められなかった。北側の 1081 ピットと 1029 溝が切り合い関係にあるが、平面検出時には気付くことが出来ず、1029 溝掘削後に検出した為、先後関係は不明である。遺物は 1083 ピットから細片となった弥生土器の出土をみたが時期の特定には至らなかった。

掘立柱建物 1002 (図 26・図版 5) 調査区南東隅の $X=-136.225 \cdot Y=-42.215$ 付近に位置する。梁行 1 間(2.1~2.3m)×桁行 1 間(2.3~2.5m)である。桁行は $N-31^\circ-W$ を指向する。柱掘方の平面形は不整円形を呈し、直径が約 0.2m、深さは約 0.1~0.25m である。いずれの柱穴にも柱痕跡は認められなかった。遺物は 1087 ピットから弥生土器細片の出土をみたが時期の特定には至らなかった。

掘立柱建物 1005 (図 27) 建物 1002 のすぐ南西側に位置する。梁行 1 間(1.5m)×桁行 1 間(2~2.1m)である。桁行は $N-41^\circ-E$ を指向する。柱掘方の平面形は不整円形を呈し、直径が約 0.2m、深さは約 0.15~0.2m である。いずれの柱穴にも柱痕跡は認められず、出土遺物はみられなかった。

掘立柱建物 1004 (図 28・図版 6) 調査区南東隅の $X=-136.230 \cdot Y=-42.225$ 付近に位置する。建物 1004 と 1005 の間に後述する掘立柱建物 2011 がある。建物 1004 は梁行 1 間(2.5m)×桁行 1 間(2.7m)である。桁行は $N-38^\circ-W$ を指向する。柱掘方の平面形は不整円形を呈し、直径が約 0.2m、深さは約 0.1~0.4m である。いずれの柱穴にも柱痕跡は認められず、遺物の出土はみられなかった。

掘立柱建物 1003 (図 28・図版 6) 調査区南辺中央やや西寄り、 $X=-136.245 \cdot Y=-42.247$ 付近に位置する。梁行 1 間(1.5m)×桁行 1 間(1.6m)である。桁行は $N-15^\circ-W$ を指向する。柱掘方の平面形は不整円形や楕円形を呈し、直径または長軸が約 0.2~0.25m、深さは約 0.15~0.25m である。いずれの柱穴にも柱痕跡は認められなかった。北西側の 1070 ピットは段を掘削後に検出した。なお、段は調査区南東隅付近にもみられ、その軸は $N-52^\circ-E$ を指向している。これは嶋下南部条里の

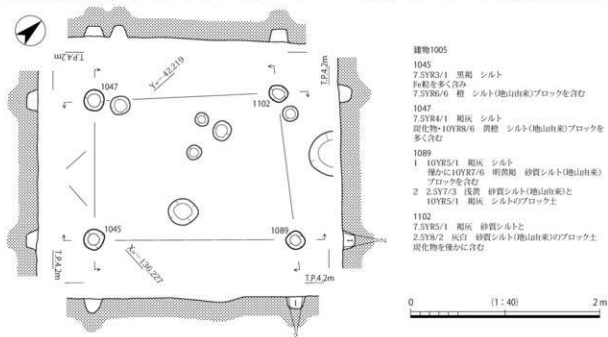


図 27 掘立柱建物 1005 平・断面図

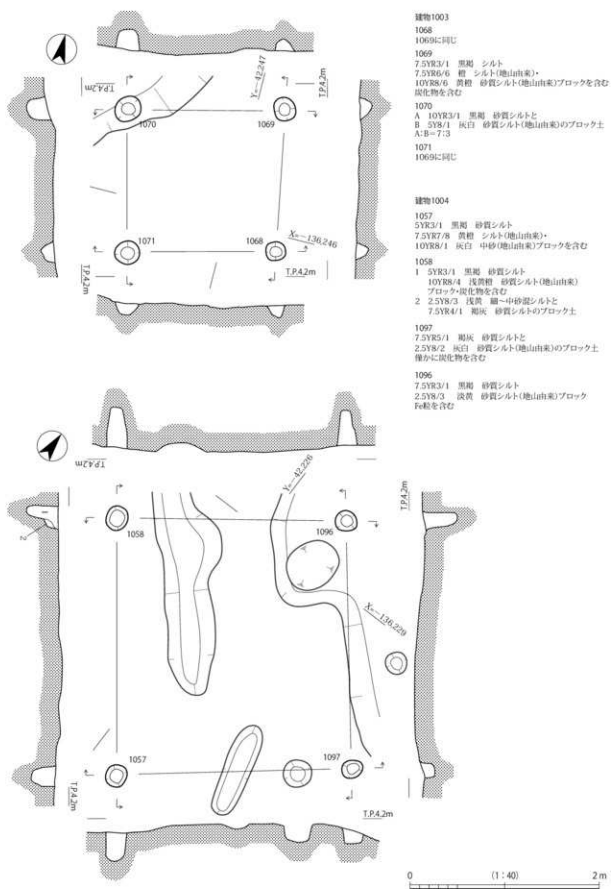


図28 掘立柱建物 1003・1004 平・断面図

条里施工方位に近い、後世の土地改変によるものと考えられる。建物1003に関する遺物は1069ピットから細片となった弥生土器の出土をみたが時期の特定には至らなかった。

1050ピット (図29・図版6) 調査区東寄り、 $X=-136,220 \cdot Y=-42,237$ 付近に位置する。北側約3mには後述する古代(1005)や弥生(1006・1010・1014)の流路がある。ピットは平面不整形円形を呈し、長軸約0.28m、短軸約0.2mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは約0.03mである。埋土は第8層の黒色シルトである。ピット底に張り付くように弥生土器甕・高杯(17・18)がみられたが、遺構上部が削平を受けたようで、土器は平裁状態での出土であった。17は甕。体部中程に最大径を持つ。体部外面下半には煤が付着する。18は高杯。脚部に直径0.4cm程度の円孔を穿つ。5方向にあったのか。いずれの土器も中期末～後期初頭の所産であろう。

1076ピット (図版6) 調査区南辺中央やや西寄り、 $X=-136,249 \cdot Y=-42,254$ 付近に位置する。平面不整形円形を呈し、直径約0.2mを測り、検出面からの深さは約0.25mである。埋土は地山由来の淡黄色砂質シルトと第8層由来の黒褐色シルトのブロック土である。出土遺物には細片となった弥生土器があるが時期の特定には至らなかった。

1035土坑 (図26・図版6) 調査区南東隅の $X=-136,225 \cdot Y=-42,217$ 付近に位置する。平面円形を呈し、直径約0.45mを測る。断面形はやや先尖となった「U」の字状を呈する。検出面からの深さは約0.35mである。埋土は2枚に分かれ、上層が地山由来の灰白色極細砂ブロックや炭化物を含んだ第8層の黒褐色砂質シルト、下層が炭化物を含んだ第8層の黒色シルトである。出土遺物には細片となった弥生土器があるが時期の特定には至らなかった。埋土の状況から弥生時代の遺構と推察される。

1008井戸 (図29・図版3) 掘立柱建物1003の北西約2mに位置する。平面円形を呈し、直径約1.3mを測る。断面形は縦長の逆台形状で、検出面からの深さは約1.2mである。埋土は6枚に分かれ、褐灰色～黒色粘質シルト～砂質シルトの水成堆積を基本とする。中層部分(図29-2～4)には植物遺体を多く含んでいる。最上部はブロック土で埋め戻されている。ブロック土で埋め戻された後、井戸上部は直径約2mの範囲が浅い皿状に窪んでいたようで、第6または7層と考えられる灰黄色系砂質シルトの堆積がみられた。なお、井戸底近くのT.P.2.6m前後で湧水がみられた。井戸枠の痕跡が認められなかった為、素掘りの井戸であったと考えられる。

出土遺物には弥生土器片や縄文晩期後半の突帯文土器片、サヌカイト製横長剥片、モモ核2点以上等がみられたが時期の特定には至らなかった。埋土の状況から弥生時代～古代の所産と推定される。

1029溝 (図29・図版6) 調査区南東隅の $X=-136,225 \cdot Y=-42,223$ 付近に位置する。検出時には平面「L」字状を呈するかにみえたが、掘削を進めるとコーナー付近が非常に浅くなっており、2条の溝であったのかも知れない。溝の北東～南西部の検出長は約5m、幅は0.5～1.2mを測る。この部分の東端から約1.7m付近までは土坑状に一段深く掘り窪めており、断面逆台形状を呈する。検出面からの深さは約0.2mである。それ以外は浅い皿状の断面形を呈し、深さは0.1m前後である。溝の北西～南東部分の検出長は約5m、幅は1～2mを測る。溝南側は攪乱に切られており不明であるが、隣接する2区で検出出来なかったことから、攪乱内で収まるものと考えられる。この部分の南側は二股に分岐する。また、コーナーに当たる北端は約2mの範囲で、先述の東端同様、土坑状に一段深く掘り窪めていた。

溝の埋土は第8層の黒色～褐色シルト～砂質シルトで地山由来の灰白色～淡黄色砂質シルトブロックや炭化物を含んでいる。埋土上部から細片となった弥生土器や太行蛤刃石斧片、サヌカイト製チップ等が出土している。このうち図化出来たものに弥生土器甕・広口壺(19・20)がある。19は甕。20は広口

壺。口縁部は下方に肥厚する。中期後半～後期の所産である。

1003 落込み (図30・図版6) 調査区東端、 $X=-136.213 \cdot Y=-42.225$ 付近に位置する。落込み西側はDIC株式会社工場基礎で大きく攪乱を受けている。平面形は不定形で溝状の遺構が複数まとまった状況である。検出した南北幅は約2.6m、東西長は約6.5mである。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は大きく3枚に分かれる。下層は褐色シルトの薄層を挟む灰白色極細～粗砂、中層は灰白色シルトの

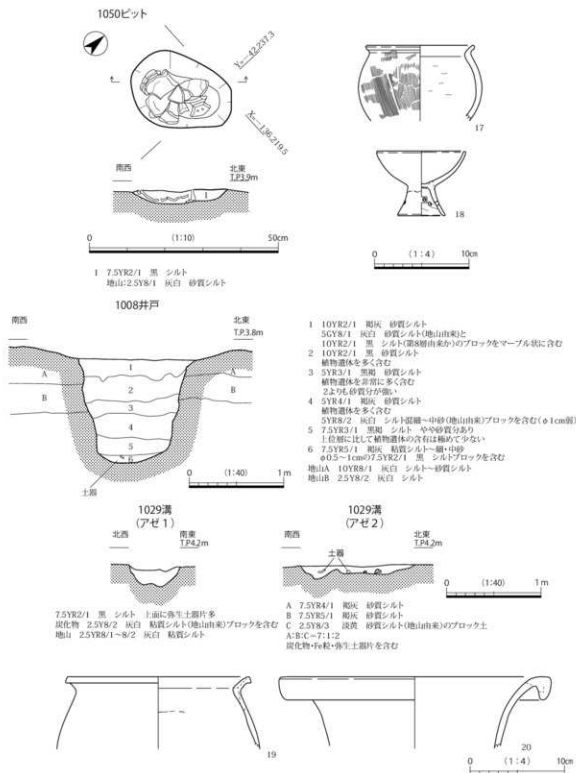


図29 1区 ピット・井戸・溝 平・断面図 出土遺物

薄層を挟む黄灰色シルト、上層は地山由来の灰白色砂質シルト・第8層由来の黒褐色シルトブロックを含む褐灰色シルトである。出土遺物には細片となった弥生土器・土師器・須恵器がみられたが、時期の特定には至らなかった。

1003落込みの西側には後述する1005流路が存在する。攪乱によって不明瞭ではあるが、両者の接点は1005流路の蛇行部における攻撃面に当たる。著しい水流によって接点が破壊した結果、1003落込みが生じた蓋然性が高いと考えられる。

1005 流路 (図31~34・図版4・34・45・47・49・51) 調査区北東隅、 $X=-136,205 \cdot Y=-42,227$ 付近から調査区南西側の $X=-136,247 \cdot Y=-42,271$ 付近に向けて、調査区を北東から南西に向けて貫流するように緩やかに蛇行しながらはする。流路東側は調査区外に延びる。流路西側に関しては、1区西側突出部においては平面で確認出来なかったが、南及び西壁で当流路の埋土に類する堆積層(図4-14~17・図5-10~13:西壁②)を確認したことから、未調査部分を通り1区西側突出部を経て北西隅の $X=-136,257 \cdot Y=-42,312$ 付近へ抜けて行くものと推定される(図25において点線で復元)。検出長は約62m(西側突出部を含めると約87m)で、検出幅は北東端で約1.6m、中央付近で約2.9m、南西端で約3.6mである。流路底は北東でT.P.3.1m、中央付近でT.P.2.8m、南西でT.P.2.4mである。流路の $Y=-42,233$ 以東は基盤層を開削するが、それ以西は下位にある弥生時代流路(1006・1010・1014 落込み)を削って流れる。

埋土は大きく3枚に分かれる。下層に黄灰色シルトの薄層を挟む灰白色極細~粗砂が顕著にみられる為、比較的水の流れが強かったものと考えられる。中層は下層の砂や黄灰色シルト、地山由来の灰白色シルト質粘土等が混濁したような状況を示しており、下層堆積後に再度流水があったものと推察される。上層は黄灰色砂混じり粘質シルトで自然堆積と思われる。但し、南西端は様相が異なり、中層に植物遺体や炭化物を含む褐灰色シルト~シルト混中砂が、上層に灰白色シルト~中砂の薄層を含む灰黄褐色シルト混細~中砂がみられ、中層は水成堆積、上層は自然堆積と推察される。

出土遺物には、先にも述べたように弥生時代流路を削って流れる為、弥生土器や石器が多くみられるが、それら以外に流路南西部付近の上層から須恵器環(図33-22・23)・甕や土師器環(図33-26)が、流路北東側の下層から土師器甕(図33-28)等が出土している。また、田下駄(図34-35)や部材(図34-36・37)、杭状品、板材、棒材といった木製品もみられた。遺物に関しては後述するが、須恵器環(22・23)や土師器環(26)、土師器甕(28)の出土状況について簡単に触れておきたい。須恵器環と土師器環は流路南西側の上層から出土した。上層は流路が埋積する過程の最終埋土で、流路痕跡とも言うべき窪

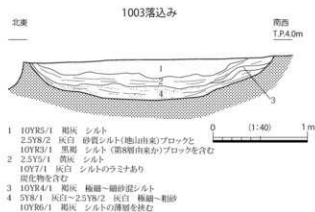


図30 1003 落込み 断面図

地を埋めるように溜まった自然堆積層である。両者は流路の北斜面に沿って出土した。両者の出土地点は約10m程度離れている。須恵器環は2個体が横位で合わせ口から少しズレた状態で出土した。土師器環は逆位で置かれ、底部外面に書かれた墨書がみえる状態であった。いずれも埋納坑のような掘方が土器の周囲で確認出来ず、土器に流されたような摩耗痕跡が認められないことから、その場所或いはその近傍に意図して置かれたものである可能性が高

い。何らかの祭祀が行われたのであろうか。土師器甕は流路北東側の流路底より少し浮いた状態で下層中から1個体が破片となって出土した(図31)。甕には部分的に剥落や摩滅がみられることから、近傍から流されたものと考えられる。

21~24は須恵器。21は杯蓋である。胎土は精良で、黒色粒を含む。7世紀後半~末頃の所産であろう。22・23は環A。焼け歪み大きい。体部外面上半~口縁部外面は黒ずんでおり、重ね焼きの痕跡と思われる。胎土には黒色粒を含む。8世紀後半頃の所産か。24は壺底部か。外面は剥落が著しい。胎土は極めて精良である。25~28は土師器である。25は環Cか。口縁部内面に凹線状の浅い段を有する。体部内面には放射状の暗文を施す。胎土は極めて精良。7世紀後半~末頃の所産か。26は土師器杯である。底部から口縁部に向けて緩やかに内湾するように立ち上がり、口縁部は丸く収める。底部から体部外面には細かなハケメが施され、体部外面中程はハケメをナゲ消す。口縁部外面には黒斑がみられる。胎土は混和材(長石・石英・チャート)が少なく精良である。底部外面に「大寶」と墨書されている。「大寶」の意味は明確に出来ていないが、吉祥句として書かれたものであろう。8世紀前~中葉頃の所産

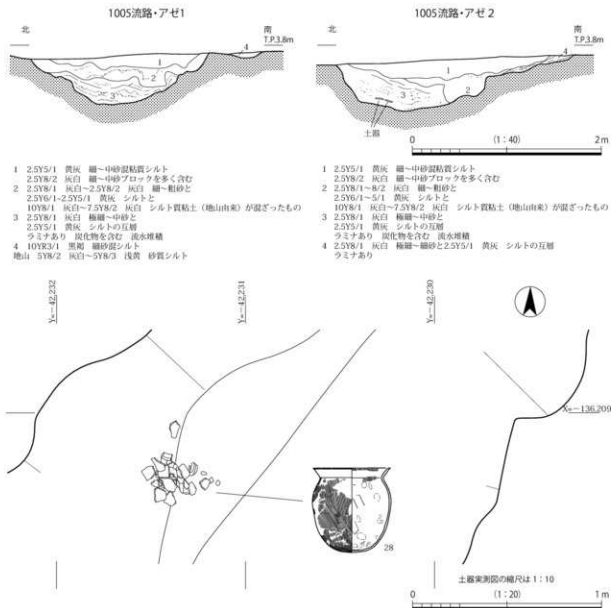


図31 1005流路 断面図・遺物出土状況図

を呈し、比較的太い頸部が直線的に立ち上がる。胴部最大径の少し上方に竹管文で三日月状の文様を描く。流路の南肩から出土。中期後半～後期の所産か。30は無頸壺または台付鉢。口縁部は外側を肥厚させ、端面を凹線状に浅く窪ませる。口縁部直下の体部外面には摩滅して不明瞭ながら、クシ描きの波状文や直線文を施す。中期中頃～後半の所産。31は高坏の坏部である。口縁部は坏部からほぼ垂直に立ち上がり、端面を横方向に扯張する。胎土は混和材が少なく精良で、色調は灰白色を呈する。備前や備中地域からの搬入土器である。後期初頭の所産。32は黑色チャート製の有茎式石鎌。先端部を欠損する。両側縁には細かな鋸形の二次加工がみられる。残存長は5.65cm、最大幅は1.65cm、厚さは0.5cm、重量は6.06gである。33はサヌカイト製の楔形石器。表・裏の両面中央部に自然面を残す。両端をそれぞれ表・裏面から打撃を加えて折り取っている。両側縁には顕著な潰れが認められる。長さは8.35cm、最大幅は4.25cm、厚さは2.25cm、重量は110.09gである。34は結晶片岩製の石棒片か。頭部付近の残片であろうか。残存長は9.1cm、残存幅は2.6cm、残存厚は1.8cmである。35はコウヤマキ製の板状品。

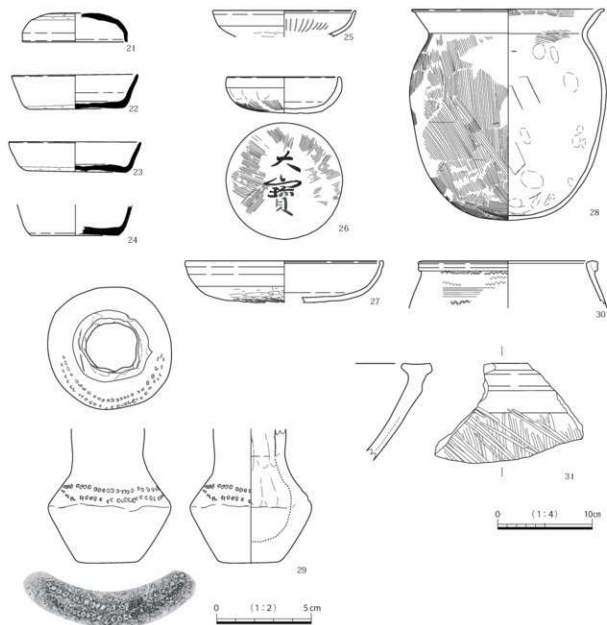


図33 1005 流路 出土遺物①

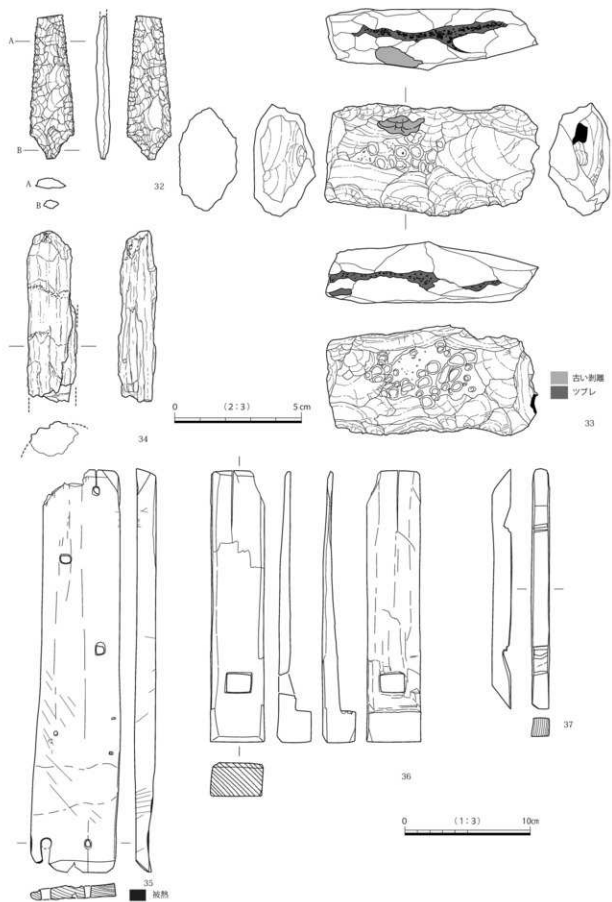


図 34 1005 流路 出土遺物②

長さ31.9cm、幅7.1cm、厚さ1.7cmを測る。平面隅丸長方形を呈する。短辺は面取りが施される。一部に欠損がみられるが、長軸や一辺が0.5～0.8cmの平面楕円や方形を呈する穿孔が5箇所のみられる。また、直径や一辺が0.3cm前後の貫通しない円孔や方形孔が表面に3孔、裏面に円孔が1孔みられる。右先端部や左側辺の一部に被熱痕跡がみられる。緒孔数が合わないが、田下駄と推定しておきたい。36はヒノキ製品。平面横長長方形を呈し、各辺は面取りを施す。図下側の小口側に方形孔が穿たれる。また同側裏面には小口に接して方形の脚状突起が作り出されている。長さ21.5cm、幅4.3cm、厚さ2.7(脚部分)・0.8(板部分)cmを測る。何らかの部材であろう。37はヒノキ製品。断面縦長長方形を呈する棒材の小口側の両端を斜めに切り落とし、側面形が逆台形を呈する。上面部分には2箇所断面「レ」の字状の割り込みを入れる。長さ19cm、幅1.4cm、厚さ1.5cmを測る。用途不明であるが、何らかの部材と思われる。

弥生流路 (1006・1010・1014 落込み・西側谷部) (図35～38・図版4・36・44・47・49・51) 調査区北東隅、X=-136.200・Y=-42.230付近から調査区南西側のX=-136.247・Y=-42.271付近に向けて、調査区を北東から南西に向けて貫流するように緩やかに蛇行しながらはしる。流路東側は調査区外に延びる。流路西側に関しては、未調査部分を通り1区西側突出部を経て、調査区西外側のX=-136.260・Y=-42.310付近へ抜けて行くものと推定される。調査時は1005流路に分断されていた為、一連の流路と認識出来ず、第8層が堆積した3基の落込み(1006・1010・1014)として掘削したが、これら連続する落込みの平面形状が1005流路の蛇行する形状に類することから、1005流路に先行する流路であるとの認識に至った。なお、西側谷部との呼称に関しては、1区西側突出部で調査当初に重機によって攪乱を除去していた際、かなり分厚い黒色シルト層(第8層)や植物遺体層の存在を確認したことにより、谷が存在するかも知れないとの認識にあった故である。検出長は約62m(西側突出部を含めると約87m)で、検出幅は約10mである。流路底は北東でT.P.3.1m、中央付近でT.P.2.8m、南西でT.P.2.65mである。なお、1区西側突出部における最深部はT.P.1.6mとなる。

落込みと称した部分の埋土は大きく2枚に分かれる。下層は灰白色細～粗砂で、場所により褐灰色シルトの薄層を含む。これは1006・1010落込み底でみられた幅0.5～1m程度の浅い皿状の断面形を呈する最初期に流れた溝の痕跡である。上層は炭化物や細～中砂ブロックを含む褐灰～黒色シルト～砂質シルトである。当層では流路中央から東側の1006・1010落込みを中心に植物根が非常に発達していたことから、湿地状になっていたと推察される。一部の試料の樹種鑑定を行ったところ、ヤナギ属であった。なお、流路西側の1014落込み付近では流木状の自然木や枝状の植物遺体が多く含まれる。一部の自然木の樹種鑑定を行ったところハンノキであった。また、上層からは少量の縄文時代晩期後半の突帯文土器、多量の弥生土器片や石器が出土した。なお、出土土器には流路中央～西側の1010・1014落込み付近で突帯文土器や弥生時代前期新段階～中期前半の土器がみられるが、東側には少ないと言った傾向が窺われる。この他、特徴的な遺物として1010落込みの流路北側肩口付近で、結晶片岩製石棒(図38-98)が1点出土した。

西側谷と称した部分も落込み部と同様、下層に灰白色細～粗砂が、上層に黒褐色～黒色シルト～粘質シルト・細～中砂混シルトがみられる。なお、1014落込み付近から多くみられるようになった植物遺体が、その量を増しており、流木等を多量に包含する堆積層が2枚存在していた。土器もこの2枚の堆積層に多く含まれる傾向にあった。この堆積物の一部を水洗選別したところ、上部の堆積層(図4-26:南壁)からサカキ、モモ核1点、トチノキ種子片1点、エゴノキ種子52点、エゴノキ種皮1点、オニグルミ核1点がみられた。下部の堆積層(図4-28・38:南壁)からはケヤキ、桃核1点、エゴノキ

種子65点以上、エゴノキ種皮片8点、サンショウ種子1点、タデ属種子11点、クルミ属核片1点、ヒョウタンの仲間3点、ノブドウ属種子2点、マクワウリの仲間1点、オニグルミ果皮片1点を検出した。

また、1区西側突出部の北・西壁の断面観察の結果、弥生時代流路の埋土を突き破る噴砂の痕跡を複数確認した(図版30-3)。この噴砂と後述する土坑状変形や地震動によりマーブル模様状になった地山面の変形構造との関係は明らかに出来なかったが、今後の検討課題として注目すべき資料である。

出土遺物には先述したように多量の弥生土器片や石器がある。このうち晩期後半の突帯文土器及び弥生土器51点、石器9点を図化した。なお、図化出来なかった特徴的な遺物として西側谷部から軽石が2点出土している(図版44-99・100)。図35-38~61・図37-90・91・93・図38-95・96は1006落込み、図35-62~64・図38-94・97・98は1010落込み、図36-65~78・図37-92は1014落込み、図36-79~89・図版44-99・100は西側谷部出土の突帯文土器や弥生土器、石器・石製品である。38~43は壺。38は細頸壺である。口縁部外面の端部より少し下がった位置に1条の沈線を巡らせる。中期中頃の所産。39・40は広口壺か。39の胎土は長石・石英・チャートと言った混和材を多く含みやや粗く、40は混和材が少なく密である。後期初頭の所産か。41は長頸壺もしくは広口短頸壺の肩部。頸部部の境に突帯を巡らせる。後期の所産であろう。42・43は広口壺である。42は口縁部端部に凹線を巡らせ、刻みを施す。42は中期前半、43は後期前半の所産。44は水差の把手。把手は体部に穿った円孔に差し込んでいる。同一個体と考えられる破片に円孔を有するものがあることから、双方向に把手があったものと推察される。後期の所産であろう。播磨地域からの搬入品か。45~51は甕。45は頸部に6条のへら描き沈線を巡らせ、口縁部端部に刻みを入れる。45・46ともに前期末~中期初頭の所産。47の口縁は下方に拡張させ、口縁部内面は幅広の凹線状の段を有する。体部外面下半に煤が付着。後期前半の所産であろう。48は口縁部内面の一部に煤付着。後期の所産か。49は底部。内外面にモミ痕と考えられる長さ0.5cm、幅0.3~0.4cmの楕円形を呈する圧痕が複数みられる。後期の所産。50は有孔の底部。穿孔は両側から行っている。内外面及び破面に被熱痕跡がみられる。また、外面は被熱による剥落が認められる。中期の所産であろう。52は把手付鉢。把手の基部には貫通しない直径0.4cmの円孔がみられる。生駒西麓産の胎土である。中期の所産であろう。53~56は高坏。53は脚筒部。外面には7条の沈線が螺旋状に巡る。また、外面穿孔の円形透かしが4方向にある。このうち2孔は高さを揃えるが、他は穿孔の高さを揃えていない。中期後半の所産か。54は破面に赤化や煤の付着がみられることから割れた後に二次焼成を受けたものと考えられる。中期後半頃の所産であろうか。55・56は脚部。ともに中期後半の所産であろう。57は器台。受部内面が剥落。中期後半~後期の所産か。58は台形土器の脚部。中期後半の所産。59・60はミニチュア土器。59は甕もしくは広口壺か。口縁部に外面穿孔の直径0.3cmの円孔が1孔みられる。口縁部の一部に煤が付着。中期後半の所産。60は鉢か。口縁部を欠損する。61は土製品。外面に幅広の凹線が2条巡る。把手片かとも考えたが、断面形がシンメトリーでなかったことから、内径8.4cmを測る腕輪状の形態に復元した。

62は突帯文土器深鉢。口縁端部は丸く収める。口縁端部から下がった位置に断面上向き三角形の突帯を巡らせる。突帯上には横長のO字状を呈する刻みを入れる。胎土は生駒西麓産。晩期後半の長原式である。63は鉢。口縁端部は平坦に仕上げる。中期の所産であろうか。64は高坏。筒部外面はハケメの後強いナデを施し、面取り状を呈する。中期の所産。

65・66は突帯文土器深鉢。65の口縁端部は平坦に仕上げ、66は突帯を貼り付けた後にヨコナデを施し、やや尖り気味になる。ともに口縁端部に接して断面三角形の突帯を巡らせる。65の突帯上には大振

りなD字の、66には大振りなO字の刻みを入れる。どちらも生駒西麓産の胎土。晩期後半の長原式である。67～69は壺。67は頸部にヘラ描き沈線を2条巡らせる。全体的に摩滅が進み剥落が顕著。68は体部片。ヘラ描き沈線を2条巡らせ、その上方に同沈線により平行斜線文を描く。67・68は前期中段階の所産であろう。69は底部片。前期の所産であろう。70～73は甕。70は頸部に2条のヘラ描き沈線を巡らせる。口縁部は水平に外へ折り曲げ、端部に小さな刻みを入れる。前期中段階の所産。71は外面に煤が付着する。前期末～中期初頭頃の所産か。72・73は底部。72の胎土は混和材が多く粗い。前期～中期の所産。73は上げ底になっており、底部に2孔1対の底部外面から穿孔した紐孔がみられる。孔は長軸0.5～0.6cm、短軸0.3～0.4cmの平面長楕円形を呈する。底部に紐孔を有することに違和感が残る為、裏蓋の摘み部の可能性も視野に入れておきたい。前～中期の所産。74・75は鉢。74は口縁部端面を平坦に仕上げ、端部外面に刻みを入れる。口縁部端面の直下には7条のヘラ描き沈線を巡らせる。75は把手付鉢。口縁部は如意形。口縁部から下がった位置に断面三角形の把手を貼り付ける。破片の為、把手の数は不明である。ともに前期末～中期初頭の所産。76は甕蓋である。前～中期の所産。77・78は高坏の脚部。78は裾部に外面穿孔の円形透かしを5方向に穿ち、その上方に5条のヘラ描き沈線を巡らせる。いずれも中期後半の所産であろう。

79は突帯文土器深鉢。口縁部は平坦に仕上げ、端部に接するように断面台形状の突帯を巡らせる。突帯上には大振りなD字の刻みを入れる。胎土は生駒西麓産。晩期後半の長原式である。80～82は広口壺である。80は口縁部端面に1条の、頸部に3条以上のヘラ描き沈線を巡らせる。81は口縁部端面に1条の、頸部に2条のヘラ描き沈線を巡らせる。共に前期末～中期初頭の所産。82は中期前葉の所産であろう。83は壺体部片。頸胴部の境に削り出し突帯が巡る。胎土は混和材が少なく、精良である。前期中段階の所産。84～87は甕。84の口縁は如意形で、端面に刻みを施す。頸部に4条のヘラ描き沈線を巡らせる。85の口縁は水平に折り返し、端面に刻みを施す。頸部には3条のヘラ描き沈線を巡らせる。84・85ともに前期中～新段階。86の胎土は混和材が少なく精良である。中期中頃の所産。87は底部。外面に煤が付着。前期の所産か。88は鉢。口縁部外面に黒斑がみられる。前期の所産であろう。89は壺蓋。頂部に直径0.5cmの円孔を穿つ。前期の所産。

90～98は石器・石製品、99・100は軽石である。90はサヌカイト製削器。刃部は両面調整である。長さは8.9cm、幅は4.85cm、厚さ1.0cm、重量は49.55gである。91はサヌカイト製二次加工ある剥片。自然面打面で剥がされた縦長剥片を使用。腹面から背面への二次加工を施す。長さは6.95cm、幅は4.2cm、厚さは1.0cm、重量は34.27gである。92はサヌカイト製横長剥片。折損しているが、山形をなす多剥離面打面が確認出来る。背面側は自然面とネガティブな剥離面で構成される。風化が著しく進行していることから旧石器の可能性が高い。残存長は3.0cm、幅は1.5cm、厚さは0.4cm、重量は1.87gである。93・94は太行蛤刃石斧の折損品。93は細粒砂岩製。基部側である。体部は研磨が施されるが、頭部には成形時の敲打痕が残る。残存長は5.9cm、幅は6.8cm、厚さは4.7cmである。94は細粒砂岩製。体部片である。残存長は3.3cm、幅は5.1cm、厚さは4.0cmである。95は方柱状片刃石斧の折損品である。泥質片岩製。刃部側の側辺が剥落したものの、焼成を被ったのか表面に黒色のタール状物質が付着する。残存長は5.5cm、残存幅は3.0cmである。96は砂質片岩製の扁平片刃石斧の折損品。表面の右斜め上方向からの打撃により縦割れを起こし、両側辺付近を失っている。残存長は6.8cm、残存幅は3.6cm、厚さは1.1cm、重量は26.64gである。97は細粒砂岩製の台石・敲石。表面中央部及び周縁部に断面「V」字状の線状痕がみられ、両極技法に用いられた可能性が高い。表面中央部を台石もしくは敲石として利用し

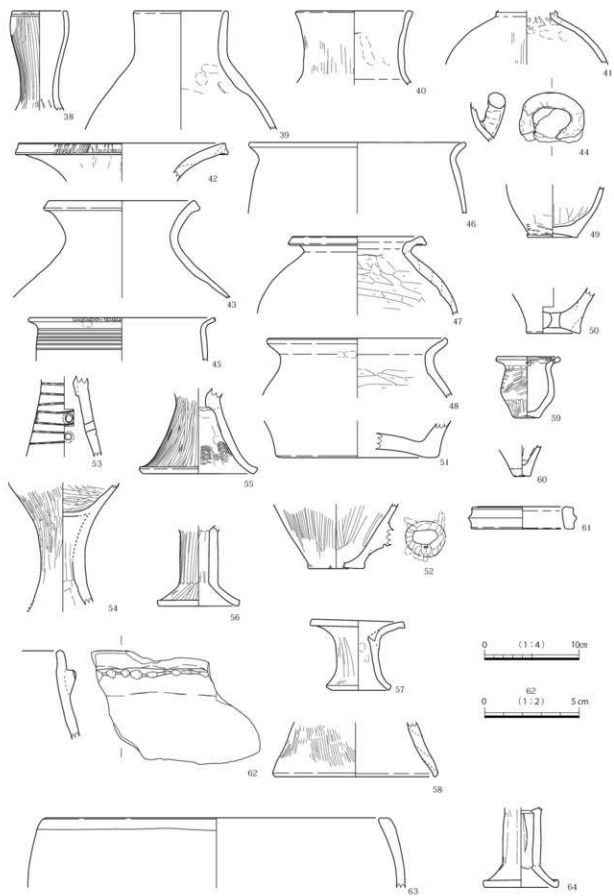


图 35 弥生流路 出土遺物①

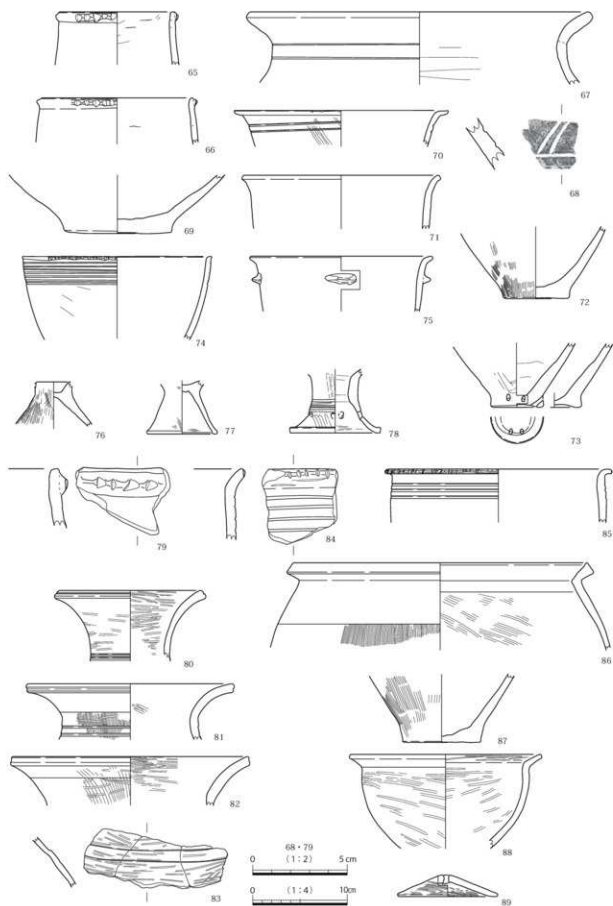


图 36 弥生流路 出土遺物②

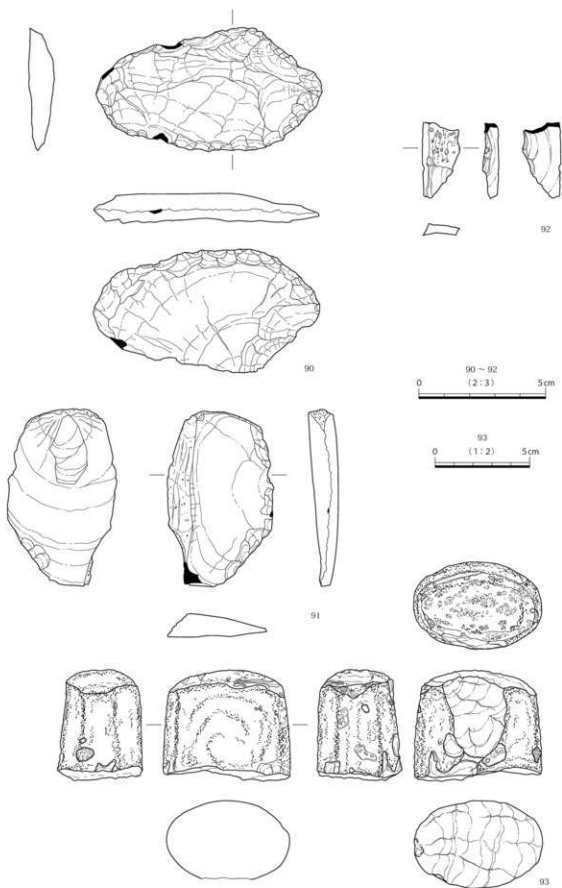


图 37 弥生流路 出土遺物③

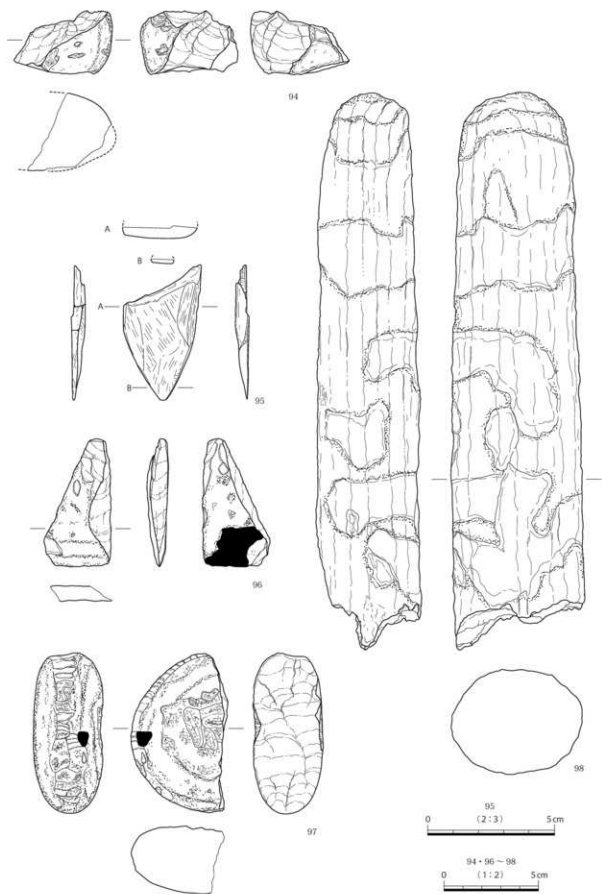


图 38 弥生流路 出土遺物④

た後周縁部を使用し、その際の打撃によって縦割れを起こしている。長さは8.4cm、残存幅は5.2cm、厚さは3.5cm、重量は206.52g。98は結晶片岩製の石棒。頭部は残るものの、他端は欠失する。頭部は丸く収め、身部には横位の溝状の窪みが複数みられる。製作時の作業痕跡か。断面形は楕円形を呈する。残存長は29.4cm、幅は7cm、厚さは5.5cmで、重量は1,797gである。徳島産であろう。図版44-99・100は軽石。99は明褐色で大振りな気孔が目立つ。長さは7.9cm、幅が7.5cm、厚さは5.1cm、重量は40.3gである。100は灰白色で大振りな気孔が目立つ。長さは10.5cm、幅は8.4cm、厚さは6.4cm、重量は151.42gである。

1009 溝 (図5・39・図版4・35・49) 1区西側突出部の南西側、 $X=-136,260 \cdot Y=-42,306$ 付近に位置する。 $N-36^{\circ}-E$ に軸を持ち、北東から南西にはしる溝である。溝西側は調査区外へ延びる。溝東側は重機による攪乱撤去により傷んでおり判断としないが、現況で検出長は約4m、検出幅は約0.8mである。断面形は碗状を呈し、深さは約0.35mを測る。埋土は褐色シルトと灰白色中砂～礫の互層で、上方細粒化傾向がみられる。堆積物は溝の南側へ溢れているようである。遺物は多くないものの、弥生前期中段階の壺がまとまって出土した(図39)。また、溝北側底で碧玉製の管玉(119)が1点出土している。出土遺物の年代観から、先述した弥生流路に先行する溝である蓋然性が高い。

101・102は突帯文土器である。101は壺。口縁端部は先尖に作られ、端部に接するように断面下向き三角形の突帯を巡らせる。突帯上には涙滴状の刻みを入れる。102は深鉢。口縁端部はやや尖り気味に仕上げる。口縁端部に接して断面三角形の突帯を巡らせる。突帯上には菱形の刻みを施す。101・102ともに生駒西麓産の胎土。103～112は壺である。103・104は頸部に2条のヘラ描き沈線を巡らせる。ともに前期中段階の所産。105は頸部に段を有し、頸胴部の境に削り出し突帯を巡らせる。突帯上には円形の刺突文を施す。前期中段階の所産である。106～108は体部片。106は重弧文かと思われる弧状の細いヘラ描き沈線が描かれる。107は口頸部及び頸胴部の境に不明瞭ながら段を有する。108は頸胴部の境に段を有する。外面は二次焼成を受けたのか剥落がみられる。いずれも前期中段階の所産。109は広口壺の口縁部。端面には細いヘラ描き沈線を巡らせた後長楕円形の刻みを入れる。口縁部内面には2条の刺突文を施す。前期末～中期初頭の所産であろう。110・111は広口壺。110は口縁端部を上下に僅かに拡張する。端面には6条1単位のクシ描き波状文を巡らせる。中期前葉の所産。111は口縁部端面に2条のヘラ描き沈線を巡らせる。前期末～中期初頭の所産であろう。112は大型壺の底部。前期の所産。113～116は甕。113・114は如意形口縁で、端面に刻みを施す。頸部には1条のヘラ描き沈線がみられる。115は体部片。3条のヘラ描き沈線を巡らせ、沈線間に列点文を入れる。外面には煤が付着。いずれも前期中段階頃の所産か。116は底部。底部外面に木の葉の圧痕を残す。117は鉢。口縁部外面直下に7条のヘラ描き沈線を巡らせる。胎土には混和材が多く、やや粗い。前期末～中期初頭の所産であろう。118はサヌカイト製平基式石鐮である。裏面下半に残る剥離面が主要剥離面と考えられ、剥片素材であろう。長さは3.35cm、幅は1.5cm、厚さは0.25cm、重量は1.3gである。119は碧玉製管玉。長さは1.55cm、幅は1.0cm、重量は2.6gである。上面の平面形は正円形ではなく、隅丸方形を呈している。そのため、側面は滑らかな稜を有する手触り感である。紐孔の平面形は楕円形で長軸0.4cm、短軸0.3cmである。両側から穿孔される。紐孔内部は長軸方向に半裁した場合の側面半分には穿孔時の擦痕が残るが、他方は平滑で擦痕が確認出来ない。使用時の紐擦れによって擦痕が消えたのであろうか。色調は青味がかった緑灰色である。

1012・1015 土坑状変形 (図40・図版3) 1区北西側、 $X=-136,233 \sim 39 \cdot Y=-42,270 \sim 78$ 付近

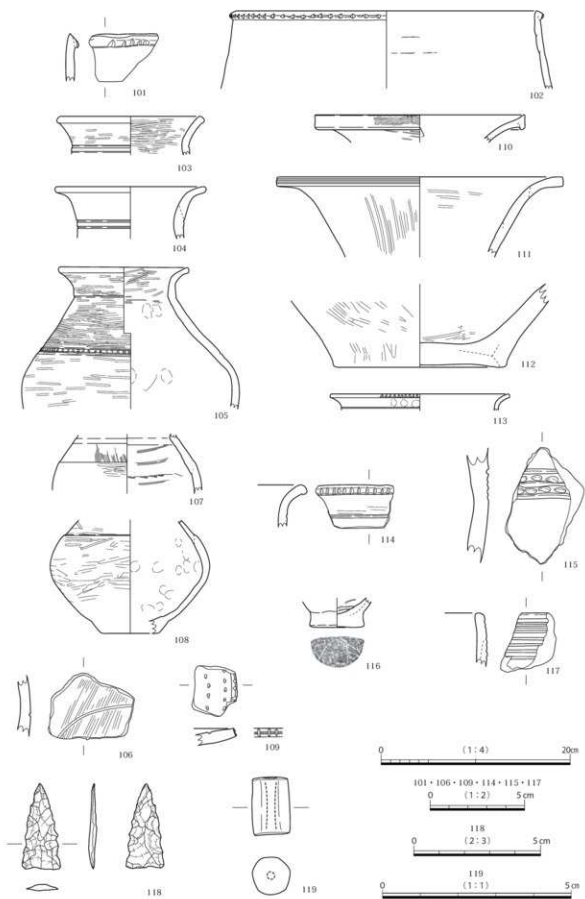


图 39 1009 溝 出土遺物

で4基の土坑状変形がみられた。そのうちの2基である。1012土坑状変形は平面不整形を呈し、直径は約3mである。検出時は一見すると黄灰色シルトを埋土とする平面馬蹄形を描く溝のようにみえた。1015土坑状変形は平面不整形馬蹄形を呈する。南北長は約2.7mである。1012同様、検出時は黒褐～黒色砂質シルトを埋土とする平面馬蹄形を描く溝のようにみえた。これらは近年、土坑状変形と称され、地震動に起因する変形構造と指摘されており、溝状部分に挟まれた土坑状変形中心部は地震動により動いた基盤層と考えられる。他の遺構に比して出土遺物は僅少で1012土坑状変形から細片となった弥生土器、須恵器がみられたのみで、時期の特定には至らなかった。1015土坑状変形からは遺物の出土がなかった。

2.2区(図41～58・図版7～14・31・35～36・44～46・48・49・52・53) 調査区北辺から中央(X=-136,260ライン)付近まではほぼ平坦な地形となっており、基盤層が高くT.P.4.0～4.1mを測る。X=-136,260ライン以南は緩やかに下降する地形となる。X=-136,240～260間は後世の土地改変の影響か遺構の存在が希薄である。一方、調査区北・南・西側で土坑・溝・ピット等の遺構を多数検出した。ピットは直径0.2～0.4m・深さ0.3～0.7mを測るものが主体で、柱根を残すものや柱痕跡がみられるものが存在することから、多くのものが柱穴であると思われる。こうした柱痕跡や柱根を有するもの

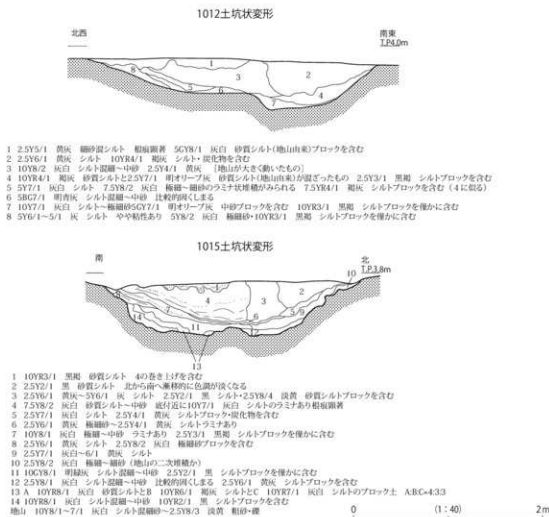


図40 1012・1015土坑状変形 断面図

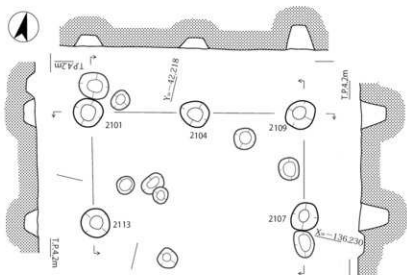
を中心に検討した結果、11棟の掘立柱建物を復元することが出来た。

掘立柱建物（図42～51・図版8～12） 調査区北側部分、 $X = -136.240$ ライン以北で6棟を集中して確認し、同ライン以南で散在的に5棟を検出した。北側で検出した建物群よりも南側に位置する建物の規模の方が大きい傾向がある。建物の面積は1間×1間(2.4×2.7m)を最小とし、1間×4間(3.6×7.3m)が最大となる。これら建物の多くは棟持柱を有さない構造を特色としている。なお、建物の主軸方位に規則性は認められない。

掘立柱建物 2011（図42） 調査区北端の $X = -136.320$ ・ $Y = -42.220$ 付近に位置し、1・2区に跨る建物である。梁行1間(2.8～2.9m)×桁行3間(4.4～4.5m)で、桁行の柱間は心々距離で1.3～1.8mである。桁行は $N-56^{\circ}-E$ を指向する。建物北辺の西から2つ目の柱穴は溝に切られて失したのか、

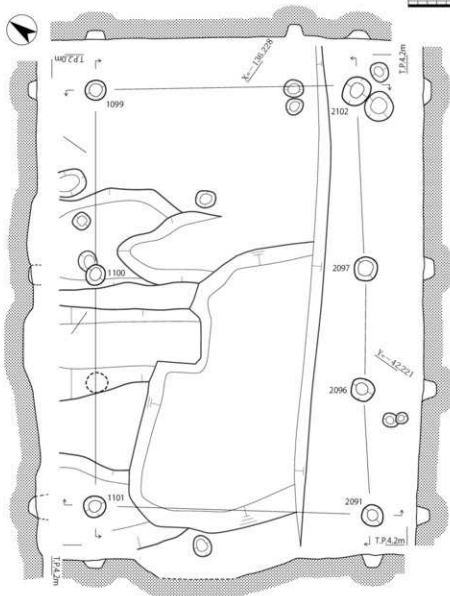


図41 2区 古代以前 遺構平面図



建物210
 2107・2109
 10YR3/3 暗褐 シルト
 2101・2104・2113
 10YR4/4 褐 シルト

0 (1:40) 2m



建物211
 2091・2096
 10YR3/3 暗褐 シルト
 2097・2102
 10YR4/4 褐 シルト
 1099・1100・1101
 7.5YR3/1 黒褐 シルト
 備かに10YR8/2 灰白 粘質シルト
 (他山形米)ブロックを含む

図42 掘立柱建物 210・211 平・断面図

確認出来なかった。柱掘方の平面形は不整形円形や長楕円形を呈し、直径または長軸が約0.2～0.3m、深さは約0.1～0.15mである。いずれの柱穴にも柱痕跡は認められなかった。北辺の1100ピットと1029溝が切り合い関係にあるが、平面検出時には気付くことが出来ず、1029溝掘削後に検出した為、先後関係は不明である。遺物の出土はみられなかった。

掘立柱建物 2010 (図 42) 建物2011の南東すぐ位置する。建物南側は削平を受けているのか、柱列が判然としなない。現状で2間(2.2m)×1間(1.2m)の規模で、北辺の柱間は心々距離で1.1mである。建物南北軸はN-12°-Wを指向する。柱掘方の平面形は不整形円形を呈し、直径が約0.3m、深さは約0.1～0.3mである。建物西辺の柱穴よりも東辺のものの方が深い。いずれの柱穴にも柱痕跡は認められなかった。建物2010に関する遺物は2107ピットから細片となった弥生土器の出土をみたが時期の特定には至らなかった。

掘立柱建物 2005 (図 43・図版 10) 建物2011の南西約1mに位置する。建物2005は梁行1間(2.5～2.6m)×桁行1間(2.4～2.8m)である。桁行はN-37°-Wを指向する。柱掘方の平面形は不整形円形を呈し、直径が約0.2～0.3m、深さは約0.1～0.3mである。南西辺の柱穴は他の柱穴に比して浅い。いずれの柱穴にも柱痕跡は認められず、遺物の出土はみられなかった。

掘立柱建物 2009 (図 43) 建物2005の南西約2mに位置する。建物2009は梁行1間(2.4～2.5m)×桁行1間(2.7～2.8m)である。桁行はN-42°-Wを指向する。柱掘方の平面形は不整形円形或いは長楕円形を呈し、直径または長軸が約0.25～0.3m、深さは約0.1～0.15mである。いずれの柱穴にも柱痕跡は認められず、遺物の出土はみられなかった。

建物2005と2009は主軸をほぼ揃え、同程度の規模で並列して建てられていることから、両者の関連性は高いものと推察される。

掘立柱建物 2003 (図 44・49・図版 9・11・44) 調査区北側、X=-136,238・Y=-42,220付近に位置し、建物北東部分が建物2009と重複する。但し、両者は切り合い関係を有さない為、先後関係は不明である。建物2003は梁行1間(3～3.1m)×桁行3間(4.3m)で、桁行の柱間は心々距離で1.3～1.5mである。桁行はN-22～24°-Wを指向する。柱掘方の平面形は不整形円形や隅丸方形状、隅丸三角形状を呈し、直径または長軸が約0.25～0.3m、深さは約0.35～0.55mである。建物を構成するピットのうち、2080・2084・2086ピットで直径0.1m前後の柱痕跡が確認出来た。建物2003に関する遺物は2083・2086・2120・2137ピットから細片となった弥生土器、2084ピットから砥石、2137ピットから楔形石器の出土をみたが時期の特定には至らなかった。図49-120はサヌカイト製楔形石器である。剪断面を有する。長さは3.5cm、幅は4.3cm、厚さは0.75cm、重量は13.77g。121は細粒砂岩製の砥石である。表・裏面の2面を使用。表面左下と表面上の側面は自然面で、左右両側面は割れ面である。肌理は細かい砥石。残存長は7.6cm、残存幅は5.1cm、厚さは1.4cm、重量は72.04gである。

掘立柱建物 2004 (図 45・図版 9・11) 建物2003の西側約7mのX=-136,235・Y=-42,212付近に位置する。建物東側は攪乱によって切られており判然としなない。現状で2間(2.8m)×1間(1.6m)の規模で、南西辺の柱間は心々距離で1.35～1.4mである。建物南西辺の軸はN-41°-Wを指向する。柱掘方の平面形は不整形円形或いは楕円形を呈し、直径または長軸が約0.25～0.3m、深さは約0.1～0.15mである。建物を構成するピットのうち、2150ピットで直径0.1m前後の柱痕跡が確認出来た。いずれのピットからも遺物の出土はみられなかった。

掘立柱建物 2001 (図 46・図版 8・11) 調査区中央部のX=-136,255・Y=-42,207付近に位置す

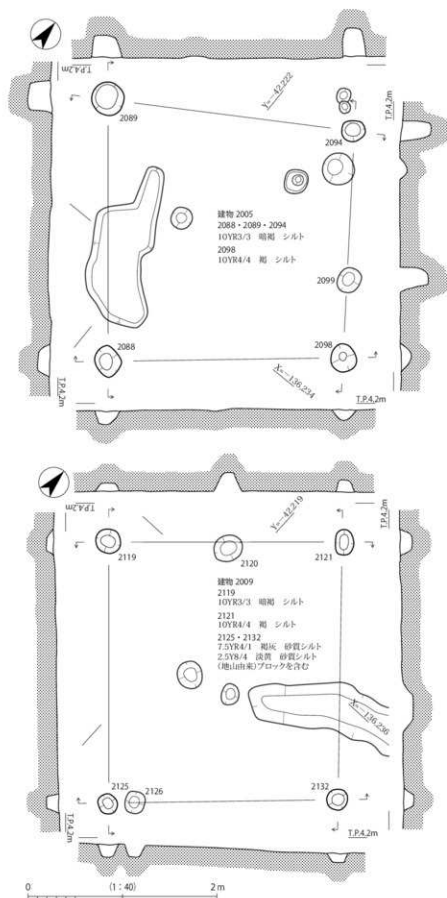
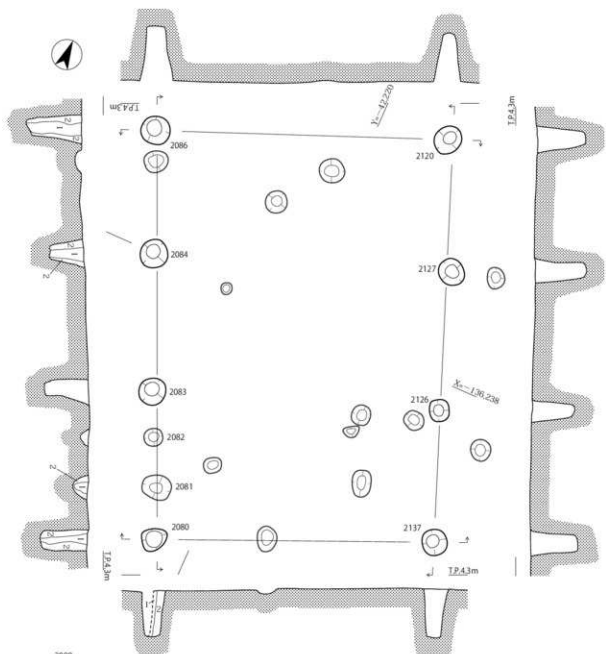


図43 掘立柱建物 2005・2009 平・断面図

建物 2001は梁行1間(2.6~2.8m)×桁行2間(3.5m)で、桁行の柱間は心々距離で1.7~1.8mである。桁行はN-32°-Wを指向する。柱掘方の平面形は不整形円形或いは不整形楕円形を呈し、直径または長軸が約0.25~0.4m、深さは約0.25~0.5mである。建物を構成するピットのうち、2019ピット以外で直径0.1m前後の柱痕跡を確認した。なお、2025ピットには腐食した柱根が遺存していた。建物 2001に関する遺物は2023ピットから細片となった弥生土器もしくは土師器の出土をみたが時期の特定には至らなかった。

掘立柱建物 2007 (図 47・ 図 版 10・12・53)

調査区南東部、X=-136.270・Y=-42.188付近に位置する。建物2007は梁行1間(4m)×桁行3間(5.5~5.7m)で、桁行の柱間は心々距離で南西辺が1.8~2.1m、北東辺が1.7~1.9mである。桁行はN-57°-Wを指向する。柱掘方の平面形は円形或いは不整形円形を呈し、直径が約0.2~0.3m、深さは約0.4~0.55mである。北東辺を構成する2075・2076ピットは2066土坑状変



2080

- 1 10YR3/1 黒黒 砂質シルト
炭化物・φ 1 cm前後の礫を含む(柱基礎)
- 2 A 10Y2/1 黒 シルトと
- B 10YR8/1 灰白 砂質シルト(地山由来)のブロック土
A:B=8:2

2081 (建物外のピット)

- 1 10YR3/1 黒黒 砂質 シルト(柱基礎)
- 2 10YR4/1 褐色 砂質シルトと
10YR8/2 灰白 砂質シルト(地山由来)のブロック土

2082 (建物外のピット)

- 10YR5/1 褐色 砂質シルトと
- 10YR7/4 に近い黄褐色 砂質シルト(地山由来)のブロック土

2083

- 10YR3/1 黒黒 砂質シルト
炭化物・10YR7/4 に近い黄褐色 砂質シルト(地山由来)ブロック土
土礫片を含む

2084

- 1 10YR3/1 黒黒 中砂混砂質シルト 炭化物・
塊かに5YR8/1 灰白 シルトブロック(地山由来)を含む(柱基礎)
- 2 10YR4/1 褐色 砂質シルトと
2.5YR/3 淡黄 砂質シルト(地山由来)のブロック土
ほぼ 1:1

2086

- 1 10YR3/1 黒黒 細～中砂混シルト(柱基礎)
- 2 10YR4/1 褐色 砂質シルトと
2.5YR/3 淡黄 砂質シルト(地山由来)のブロック土
ほぼ 1:1

2120

- 10YR3/1 黒黒 砂質シルト 炭化物・Fe酸・
- 10YR7/6 明黄褐色 砂質シルト(地山由来)及び
- 10YR8/1 灰白 砂質シルト(地山由来)ブロックを含む

2127

- 10YR4/1 褐色 中砂混砂質シルト 炭化物・土礫片・
- 10YR6/6 明黄褐色 砂質シルト(地山由来)及び
- 2.5YR/1 灰白 砂質シルト(地山由来)ブロックを含む

2126

- 7.5YR4/1 褐色 砂質シルト 炭化物・
- 2.5YR/4 淡黄 砂質シルト(地山由来)ブロックを含む

2137

- 10YR3/3 暗褐色 シルト

0 (1:40) 2m

図 44 掘立柱建物 2003 平・断面図

形と切り合い関係にあるが、平面検出時には気付くことが出来ず、2066土坑状変形掘削後に検出した為、先後関係は不明である。建物を構成する全てのピットで直径0.1m前後の柱痕跡を確認した。また、2052・2055ピットには腐食した柱根が、2075ピットには残存長0.25mの柱材が遺存していた。なお、比較的遺存状況が良好な2075ピット出土の柱材(図版53-122: AMS分析試料1)について放射性炭素同位体による年代測定を実施した。詳細は第4章に譲るが、紀元前2世紀前半～紀元前1世紀末の年代を示し、弥生中期後葉の柱材との結果を得た。この柱材の樹種はヤナギ属である。

建物2007に関する遺物は2044・2051～53・2212ピットで細片となった弥生土器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。

遺物からは建物の時期を推さえられなかったが、AMS分析の結果から中期後葉の建物と捉えたい。

掘立柱建物 2006 (図48・49・図版10～12・53) 調査区南辺中央の $X=-136,285 \cdot Y=-42,200$ 付近に位置し、2・3区に跨る建物である。南東隅の柱穴は攪乱により切られ失っている。また、2274・2279ピットはDIC株式会社工場基礎の撤去の際に傷んでおり、遺存した柱材が横倒しの状況であった。建物2006は棧行1間(3.6m)×桁行4間(7.2m)である。桁行の柱間は心々距離で西辺が1.4～2mを測り、南端の1間分が短くなっている。東辺の柱間は心々距離で1.9～2mである。桁行は $N-9^{\circ}-W$ を指向する。柱掘方の平面形は隅丸方形或いは不整形円形、不整形円形を呈し、直径または長軸が約0.3～0.45m、深さは約0.55～0.7mである。建物を構成する全てのピットで直径0.1～0.13m、残存長0.24～0.55mの柱材が遺存していた。このうち、比較的遺存状況が良好な2277ピット出土の柱材(図版53-123: AMS分析試料2)について放射性炭素同位体による年代測定を実施した。詳細は第

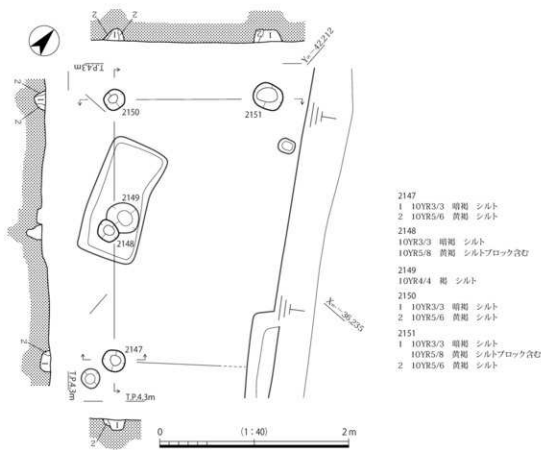


図45 掘立柱建物 2004 平・断面図

4章に譲るが、紀元前2世紀前半～紀元後1世紀前半の年代を示し、弥生中期後葉～後期初頭の柱材との結果を得た。この柱材の樹種はクスギである。

建物2006に関する遺物は2276～2280・3004・3005ピットで細片となった弥生土器が、2278ピット

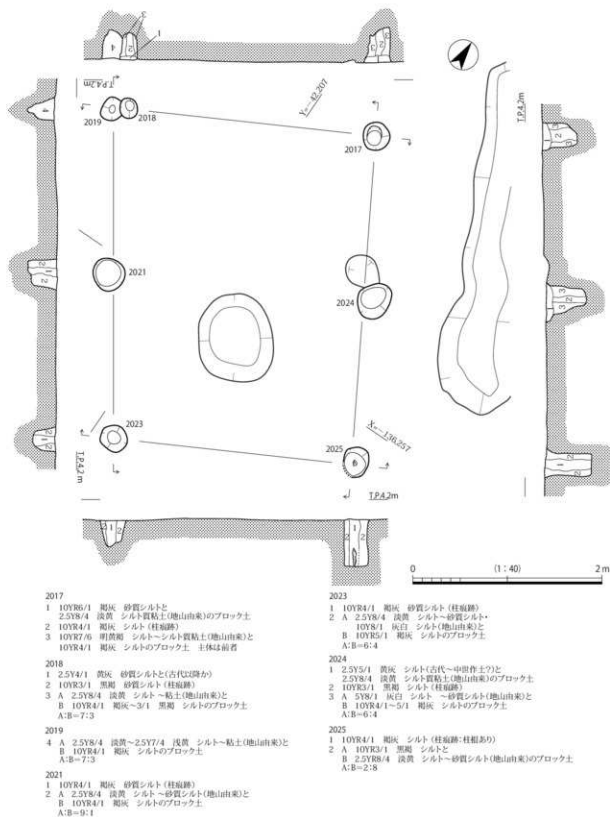


図46 掘立柱建物 2001 平・断面図

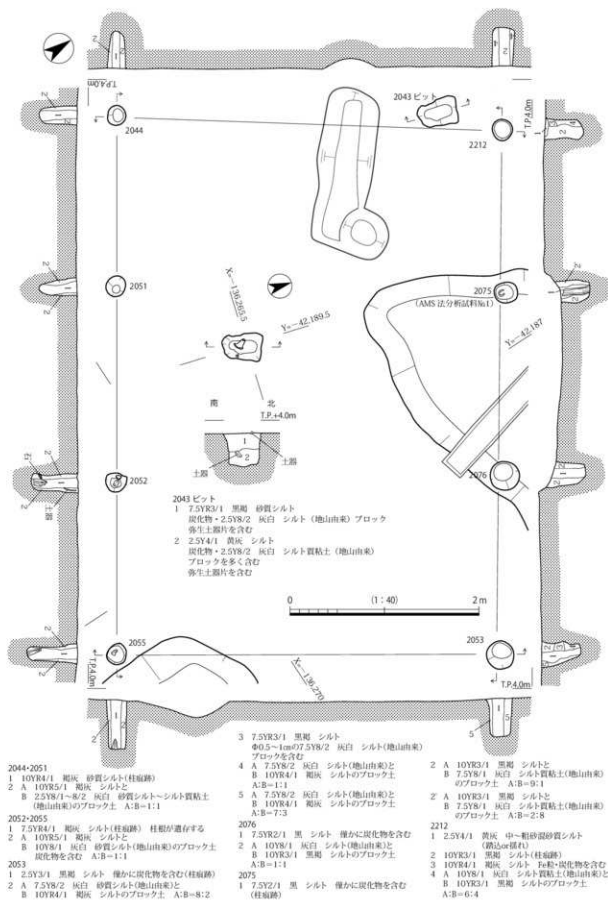


図47 掘立柱建物 2007、2043 ビット 平・断面図

トからは楔形石器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。図49-124はサヌカイト製楔形石器。剪断面を有する。長さは3.2cm、幅は3.5cm、厚さは0.95cm、重量は15.67gである。

遺物からは建物の時期の特定に至らなかったが、AMS分析の結果から中期後葉～後期初頭の建物と捉えておきたい。

2227・2282・3002 溝 (図 48・49・図版 14・36) 建物2006の東側に位置する溝である。一部攪乱に切られるが、連続するものと考えられる。検出長は約6.5m、検出幅は北側がやや広く約0.35m、中央から南側が約0.2mを測る。断面形は逆「凸」字状を呈し、深さは0.27mである。埋土は2枚に分かれ、上層が炭化物や弥生土器片を含む第8層系の黒褐色砂質シルト、下層が地山由来のブロックを含む褐色砂質シルトである。出土遺物には中期後半～後期の弥生土器片(図49-125～128)がある。溝の軸は建物2006に比べてやや南西に振るが、ほぼ同一のN-5°-Wを指向する。その位置関係や遺物の年代観から建物2006と溝は関連性が高いものと考えられる。

図49-125は2227 溝出土の壺底部片である。混和材が少なく、胎土は密である。126は2282溝、127は3002溝出土の裏である。126の口縁部は「く」の字に外反し、内傾する端面を有する。後期の所産であろう。127は有孔の底部。円孔は外面からの穿孔。中期前半頃の所産であろうか。128は把手付鉢。口縁部を欠損する。中期後半頃の所産であろう。この他、中期頃の高坏脚部～坏部の破片がある。

掘立柱建物 2002 (図 50・図版 9・11) 調査区南辺沿いのX=-136.292・Y=-42.215付近に位置する。建物の北西部分は上部を攪乱に削平されており、この部分にある3基のピット(2194・2195・2197)は基底部が辛うじて遺存していたに留まる。建物2002は梁行2間(3.5～3.6m)×桁行3間(3.7m)である。柱間は心々距離で梁行が1.7～1.8m、桁行が1.2～1.3mである。桁行はN-18°-Wを指向する。柱掘方の平面形は不整円形或いは不整楕円形を呈し、直径または長軸が約0.2～0.3m、深さは約0.2～0.4mである。いずれの柱穴にも柱痕跡は認められなかった。建物2002に関する遺物は2189～2192・2194・2198・2202ピットで細片となった弥生土器もしくは土師器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。

掘立柱建物 2008 (図 51) 調査区西側南端、X=-136.308・Y=-42.237付近に位置する。建物西側は調査区外へと延びるようで、現状で1間(3.1m)×1間(1.3m)を検出した。建物北東辺の軸はN-49°-Wを指向する。柱掘方の平面形は円形或いは不整円形を呈し、直径が約0.3～0.4m、深さは約0.2～0.6mである。2260ピットは2259溝と切り合い関係にあり、その先後関係から建物2008の廃絶後に2259溝が掘削される。建物を構成するピットのうち、2260ピットで直径0.1m前後の柱痕跡を、2250・2257ピットで直径0.15m前後、残存長0.28～0.54mの柱材が遺存しているのを確認した。建物2008に関する遺物は2250ピットから弥生土器片が出土したが、時期の特定には至らなかった。

2071 ピット (図 52・図版 12) 調査区北側、X=-136.241・Y=-42.220付近に位置し、建物2003の南西側約0.5mに掘削されている。ピット西側は攪乱により切られており、半裁状態で検出した。断面形は縦長の逆台形状を呈し、検出面からの深さは約0.55mを測る。埋土は3枚に分かれ、上層が炭化物や地山由来の淡黄色砂質シルトを含む第8層系の褐色砂質シルト、中～下層が第8層系の褐色～黒褐色シルトと地山由来の灰白～にぶい黄褐色砂質シルト～シルトのブロック土である。上層から弥生土器片やサヌカイト製の二次加工のある剥片が出土したが、時期の特定には至らなかった。

2043 ピット (図 52・53・図版 12) 調査区南東部、X=-136.265・Y=-42.190付近に位置し、建物2007の北西辺に接するように掘削されている。平面形は不整長方形を呈し、長軸が約0.4m、短軸

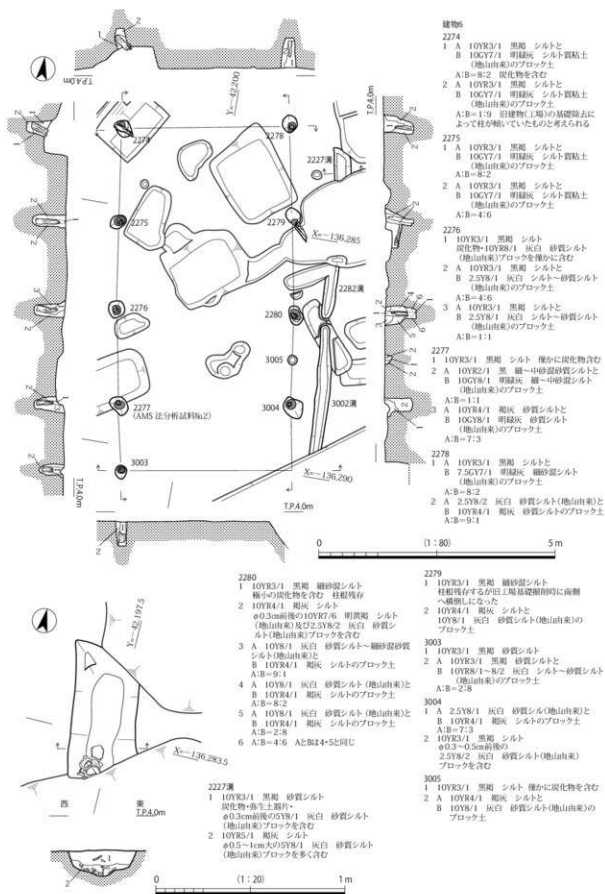


図48 掘立柱建物2006、2227溝 平・断面図

が約0.28mである。長軸方向の断面形は縦長の逆台形を呈し、深さは約0.35mである。埋土は2枚に分かれ、上層が第8層系の黒褐色砂質シルト、下層が黄灰色シルトである。ともに炭化物や地山由来の灰白色シルト～シルト質粘土ブロックを含んでいる。出土遺物には細片となった弥生土器がある。このうち図化出来たものに弥生土器高環脚(図53-129)がある。129は二次焼成を受けたようで、内面に煤が付着する。中期後半の所産であろう。出土土器や隣接する建物2007の年代から中期後半～後期の遺構と捉えたい。

2062 ビット (図52) 調査区南東部、 $X=-136.276 \cdot Y=-42.183$ 付近に位置し、建物2007の南南東約5.5mに掘削されている。平面形は不整形を呈し、直径は約0.3mである。検出面からの深さは約0.35mを測る。ビット埋没後、最上部に弥生後期頃の壺体部片がまとめて廃棄されていた。

2226 ビット (図53・図版45) 調査区南辺に沿い西側、 $X=-136.303 \cdot Y=-42.225$ 付近に位置する。平面形は長楕円形を呈し、長軸が約0.2m、短軸が約0.15mである。断面形は浅い皿状を呈し、深さは約0.1mである。埋土は第8層系の黒褐色砂質シルトで地山由来の灰白～淡黄色砂質シルトブロックを含んでいる。出土遺物にはサヌカイト製石鏝(図53-130)がみられたが、時期の特定には至らなかった。130は有茎式石鏝である。茎部末端で欠損か。裏面中央に残る剥離面が主要剥離面と考えられ、剥片素材であろう。長さは4.05cm、幅は1.65cm、厚さは0.75cm、重量は4.99gである。

2072 土坑 (図52・53・図版14) 調査区北東部、 $X=-136.226 \cdot Y=-42.214$ 付近に位置し、建物1002の南東約1mに掘削されている。土坑の南東部は攪乱により切られており、検出した平面形は直径約1.5mの半円状である。土坑西側は2段に、東側は3段に掘削され、土坑中央部が深く掘り窪められる。断面形は逆凸字状である。埋土は大きく3枚に分かれる。上層は第8層系の黒～黒褐色細～中砂混砂質シルト・細砂混シルトで、中層は褐灰色シルト混細～中砂や細～中砂混シルトである。下層は基盤層が崩れたような水成堆積褐灰色シルトの薄層を挟む浅黄～淡黄色細～粗砂である。なお、上・中層には炭化物を多く含んでいる。基盤層が細～粗砂であることから、土坑の性格は井戸または水溜の可能性が高い。

出土遺物は上・中層から細片となった弥生土器やサヌカイト製チップ、石包丁片と思しき粘板岩片が出土している。このうち、図化出来たのは中層からまとめて出土した壘2点(図53-131・132)である。131の口縁部は「く」の字に反させ、口縁端部は水平に折り返す。体部外面は縦位のヘラケズリを施す。内外面に煤が付着する。中期前半の紀伊型壘か。132は底部片。胎土は長石・石英等を多く含む粗い。前期末～中期前半頃の所産であろうか。出土遺物の年代観から中期前半頃の遺構であろう。

2070・2073 土坑 (図52・53・図版14) 調査区北西側、 $X=-136.235 \cdot Y=-42.225$ 付近に位置し、建物2005の西側に隣接するように掘削されている。攪乱によって両者は分断されているが、本来は一連の土坑であったものと推定される。復元される土坑の平面形は長軸約3mの楕円形で、土坑東側に長さ約1.2mのスロープ状の突出部が取り付けられている。埋土は大きく3枚に分かれ、上層は第8層系の褐灰～黒褐色砂混シルト、中層は水成堆積とみられる灰黄色中～粗砂や黒褐色粘質シルト、下層が水成堆積の黄灰・褐灰色シルトの薄層を挟む灰白色中～粗砂や黒褐色シルトの薄層を挟む黄灰色中砂混シルトである。なお、下層には板材や柱材とみられる丸太材をはじめ、植物遺体が多くみられた。また、断面で中層の上部に位置する褐灰色中砂混砂質シルト・褐灰色細～中砂混粘質シルト・褐灰色粘質シルトが上層の黒褐色中砂混砂質シルトに切られていることから、土坑は再掘削されたものと考えられる。基盤層は細～粗砂や中～粗砂混砂質シルトで構成され、かなり脆弱であることから、土坑側壁は下部を中心

に側方浸食が著しくみられる。土坑の性格は埋土や基盤層の状況から2072土坑同様、井戸または水溜の可能性が高い。

出土遺物には細片となった弥生土器がみられた。このうち図化出来たのは壺2点(図53-133・134)である。133は広口壺である。134は広口直口壺の口縁部か。ともに後期後半の所産であろう。

2065 土坑 (図53) 調査区北側東辺沿いのX=-136,235・Y=-42,206付近に位置する。土坑北西側は攪乱によって切られる。現状で平面形は半楕円形を呈し、検出長は約0.7m、幅は約0.5mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは約0.02mである。埋土は第7層系の褐灰色細～中砂混シルトである。出土遺物には細片となった弥生土器或いは土師器、須恵器がある。このうち、図化出来たのは須恵器環蓋(図53-135)である。135は環蓋である。摘み部の痕跡が僅かに残る。胎土は精良であるが、黒色粒が顕著にみられる。8世紀前半代の所産。

2038 土坑 (図53・図版14) 調査区中央部やや東寄り、X=-136,260・Y=-42,195付近に位置する。平面不整楕円形を呈し、長軸が約1m、短軸が約0.8mを測る。土坑はほぼ直に約0.55m掘削されたようであるが、側壁下部を中心に、側方浸食による崩れがみられる。断面観察によれば、土坑は地山由来のぶい黄橙色シルト質粘土と褐灰色シルトのブロック土や地山由来の淡黄色シルトブロックを多く含む第8層系の黒褐色砂質シルトで埋められた後再掘削されたようである。水溜として使用されたものと推察される。出土遺物は細片となった弥生土器がみられたが、時期の特定には至らなかった。

2054 土坑 (図54・図版14) 調査区南東隅、建物2007の南東約2mの位置に土坑状変形を切る形で掘削されている。平面不整楕円形を呈し、長軸は約1.95m、短軸は約1.5mを測る。断面形は逆凸字状を呈するが、側壁下部を中心に、側方浸食による崩れがみられる。検出面からの深さは約1.1mである。埋土は大きく4層に分かれ、最上層が第8層系の黒褐～黒色シルト～細砂混砂質シルト、上層が地山由来の灰白色シルトブロックを多く含んだ第8層系の黒褐色細砂混砂質シルト、中層が水成堆積とみられ

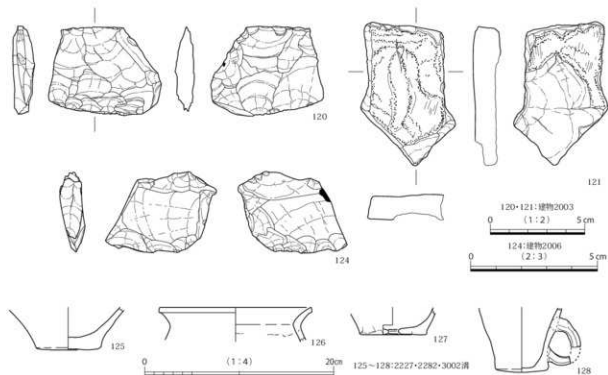
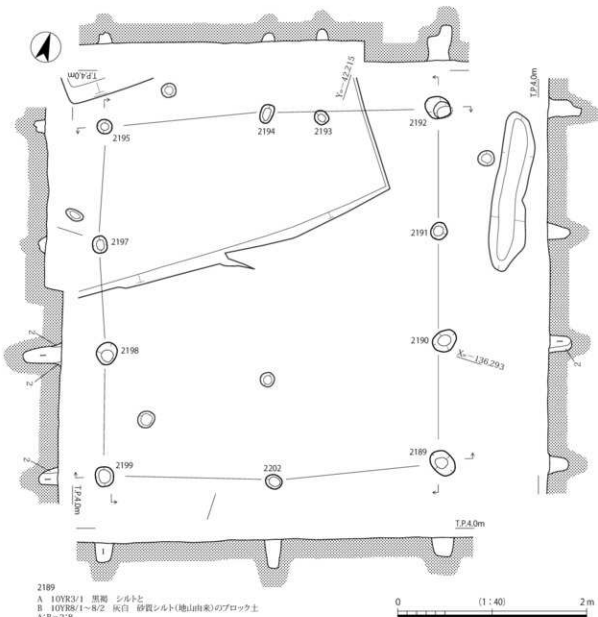


図49 掘立柱建物 2003・2006、2227・2282・3002溝 出土遺物



2189
 A 10YR3/1 黒期 シルトと
 B 10YR8/1~8/2 灰白 砂質シルト(地山由来)のブロック土
 A:B=2:8

2190
 1 10YR3/1 黒期 シルト
 10YR8/1~8/2 黄褐色 シルト(地山由来)・
 10YR8/1~8/2 灰白 シルト(地山由来)ブロック・
 炭化物を含む
 2 A 10YR8/1 灰白 シルト(地山由来)と
 B 10YR4/1 褐色 シルトのブロック土
 A:B=8:2

2191
 10YR3/1 黒期 シルト
 10YR8/1~8/2 灰白 シルト(地山由来)ブロック・
 炭化物を含む

2192
 10YR3/1 黒期 砂質シルト
 0.3cm前後の10YR8/6 黄褐色 砂質シルト(地山由来)ブロックを含む

2193
 A 10YR2/1 黒 砂質シルトと
 B 10YR/1 灰白 砂質シルト(地山由来)のブロック土
 A:B=6:4

2194
 2195に同じ

2195
 A 10YR2/1 黒 砂質シルトと
 B 10YR/1 灰白 砂質シルト(地山由来)のブロック土
 A:B=9:1

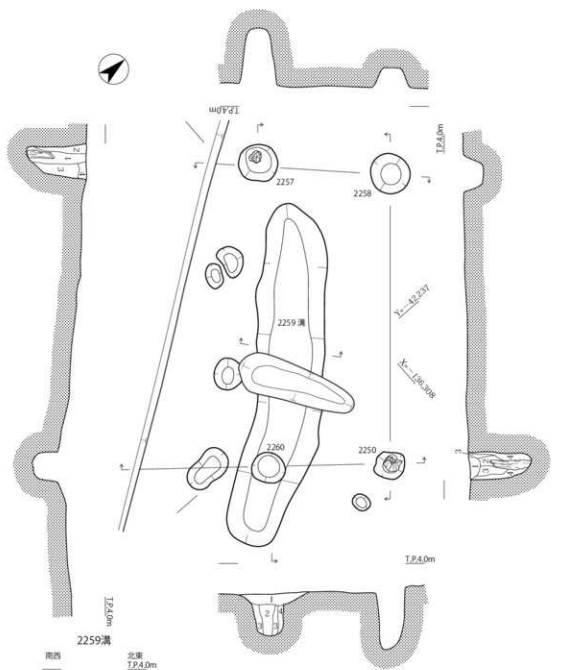
2197
 A 10YR2/1 黒 砂質シルトと
 B 10YR/1 灰白 砂質シルト(地山由来)のブロック土
 A:B=9:1

2198
 1 10YR3/1 黒期 砂質シルト
 0.3~1cmの10YR7/6 明黄褐色 シルト(地山由来)及び
 10YR8/1 灰白 砂質シルト(地山由来)ブロック・
 炭化物を含む
 2 A 10YR8/2 灰白 砂質シルト(地山由来)と
 B 10YR5/1 褐色 シルトのブロック土
 A:B=1:1 (地山が明れたものであろう)

2199
 1 10YR3/1 黒期 シルト
 10YR7/6 明黄褐色 シルト(地山由来)・
 10YR7/6 明黄褐色 シルト(地山由来)ブロックを含む
 10YR8/1 灰白 砂質シルト(地山由来)と
 2 A 10YR 7/6 明黄褐色 シルト(地山由来)と
 B 10YR4/1 褐色 シルトのブロック土
 A:B=1:1

2202
 10YR3/1 黒期 砂質シルト
 10YR8/1 灰白 砂質シルト(地山由来)及び
 2.5YR/3 黄褐色 砂質シルト(地山由来)ブロックを含む

図 50 掘立柱建物 2002 平・断面図



2259溝
南西 北東
T.P.4.0m



2259溝

10YR3/3 暗黒 シルト

2250

- 1 10YR3/3 暗黒 シルト
- 2 10YR2/2 黒黒 シルト(柱痕跡)
下部には柱材が遺存する
- 3 10YR6/2 灰黄黒 シルト
10YR2/2 黒黒 シルトブロックを多く含む
- 4 10YR3/3 暗黒 シルト

2257

- 1 10YR2/2 黒黒 シルト(柱痕跡) 下部には柱材が遺存する
- 2 10YR6/2 灰黄黒 シルト
- 3 10YR6/2 灰黄黒 シルト
10YR3/1 黒黒 シルトブロックを少量含む
- 4 10YR5/4 に近い黄黒 シルト

2260-2259溝

- 1 10YR3/3 暗黒 シルト(2259溝埋土)
- 2 10YR2/2 黒黒 シルト(柱痕跡)
- 3 10YR6/2 灰黄黒 シルト
- 4 10YR2/2 黒黒 シルトブロックを多く含む
- 4 10YR6/2 灰黄黒 シルト
[2-4:2260(ヒット埋土)]

図 51 掘立柱建物 2008、2259 溝 平・断面図

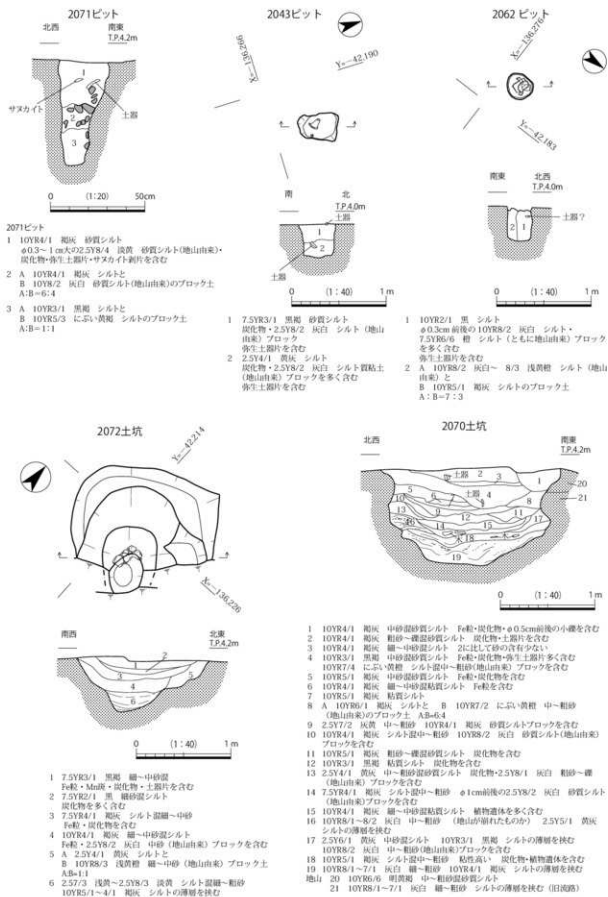
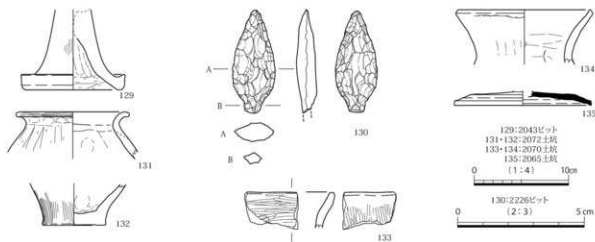


図 52 2071・2043・2062ピット・2070・2072土坑 平・断面図

る黒褐～灰褐色シルトで、下層が地山由来の灰白色シルト質粘土と褐灰色シルトのブロック土である。最上層には炭化物や弥生土器片、小礫等を含み、中層の最下部(灰褐色シルト)は植物遺体を多く含んでいる。断面観察によれば、土坑は下層のブロック土で約3分の1程度埋め戻した後、放置されていたように中層の堆積が進んだとみられる。その後、上層で埋め戻した後再掘削されたようである。土坑の最下部には水成堆積が認められなかったが、土坑底面付近で基盤層から水が滲むのを確認したことから、水溜として使用されたものと推察される。

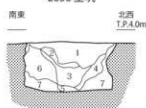
出土遺物には細片となった弥生土器や砥石がある。136～138は壺。136は広口壺。口縁端部を僅かに上下方向に拡張し、端面に1条の沈線を巡らせる。137・138は広口壺の頸部である。137は7条以上のクシ描き沈線を巡らせる。138は頸部と肩部の境に刻みを巡らせる。136・137は中期後半、138は後期後半～末頃の所産であろう。139は裏口縁部。口縁部端面はヨコナデにより、僅かに凹線状に窪む。中期中葉の所産。140は有孔鉢か。底部を欠損する。後期後半の所産。141・142は高環である。141は坏部。坏上半は大きく外反させ、坏屈曲部外面には刻みを巡らせる。後期後半の所産であろう。142は脚筒部。筒部と裾部の境にヘラ描き沈線を1条巡らせる。141・142は同一個体の可能性が高い。



- 1 7.5YR5/1 期灰 中～粗砂シルト 炭化物・MnO₂・Fe粒を含む(2181溝埋土)
- 2 7.5Y4/1 期灰 中～粗砂・礫混シルト 炭化物・Fe粒を含む
- 3 10YR6/1 期灰 細～中砂シルトや粘性あり Fe粒・MnO₂・炭化物を含む
- 4 10YR8/1～7/1 灰白 細～中砂 上方粗粒化
- 5 10YR5/1 期灰 細～中砂微砂質シルト
- 6 10YR8/1 灰白 中砂(地山由来)Fe粒を含む
- 7 2.5Y3/1 黄灰 シルト混中～粗砂 Fe粒・炭化物を含む
- 8 2.5Y7/4 浅黄 シルト混中～粗砂
- 9 2.5Y6/1 黄灰 シルトブロック・Fe粒を含む
- 10 2.5YR/1 灰白 中～粗砂 2.5YR/3 浅黄 シルト(地山由来)ブロック
- 10Y2/1 黒 シルトブロック・φ0.5cm前後の礫を含む
- 10 10YR7/2 に高い黄緑 細～粗砂 10YR4/1 期灰 シルトの薄層を挟む
- 11 10YR5/1 期灰 細～中砂シルト Fe粒・炭化物を含む
- 11 A 10YR7/1～8/1 灰白 中～粗砂(地山由来)と
- 11 B 10YR5/1～4/1 期灰 シルトのブロック土
- A・B=7:3

- 地山 12 10YR7/2 に高い黄緑→10YR6/6 明黄緑 シルト混中～粗砂
13 10YR8/1～8/2 灰白 細～粗砂・礫と
10YR4/1 期灰 シルトの互層 上方粗粒化傾向(旧道路)

2038 土坑

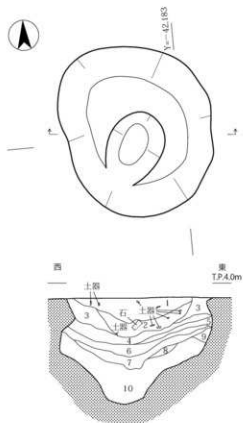


- 1 7.5YR4/1 期灰 砂質シルト
- 炭化物・φ0.3～1cmの2.5YR/2 灰白 シルト(地山由来)
- 2 2.5YR/3 浅黄 シルト質粘土(地山由来)
- 3 2.5Y3/1 黒緑 シルト Fe粒・炭化物を含む
- 僅かに2.5YR/3 浅黄 シルト(地山由来)ブロックを含む
- 4 10YR4/1 期灰 シルト
- φ0.2cm前後の5YR/2 灰白 シルト(地山由来)ブロックを多く含む
- 5 7.5YR4/1 期灰 粘質シルト 炭化物を多く含む
- 6 2.5YR/3 黒緑 砂質シルト
- 炭化物・φ0.2～3cm前後の2.5YR/3 浅黄 シルト(地山由来)ブロックを多く含む
- 7 A 10YR7/2 に高い黄緑 シルト質粘土(地山由来)と
- B 10YR4/1 期灰 シルトのブロック土
- A・B=7:3

- 地山 浅部は 7.5YR/1 灰白 礫混シルト
上部は 2.5YR/2 灰白→ 8/3 浅黄 シルト



図 53 2073・2038 土坑 断面図 2043・2226 ピット、2065・2070・2072 土坑 出土遺物



- 1 10YR3/1 黒期 細砂質シルト
炭化物・φ0.3cm 前後の 2.5Y8/2 灰白 シルト (地山由來) ブロック
赤土土器片を含む
- 2 10YR2/1 黒 シルト
φ0.5cm 前後の 10YR8/2 灰白 シルト (地山由來) ブロック・
赤土土器片を含む
- 3 10YR3/1 黒期 細砂質シルト
炭化物・φ0.3~0.5cmの 10YR8/2 灰白 シルト (地山由來) ブロックを含む
特に西側に炭化物が多くみられる
- 4 10YR3/1 黒期 シルト 粘性あり
炭化物・10YR7/2 に高い黄褐色 シルト (地山由來) ブロックを含む
- 5 10YR4/1 褐色 シルト
炭化物・10YR8/2 灰白 シルト (地山由來) ブロックを多く含む
- 6 2.5Y3/1 黒期 シルト
炭化物・φ0.5~1cmの 2.5Y8/2 灰白 シルト (地山由來) ブロックを多く含む
- 7 7.5YR4/2 褐色 シルト
腐植層 (腐植層を多く含む)
- 8 2.5Y3/1 黒期 シルト
僅かに 2.5Y8/2 灰白 シルト (地山由來) ブロックを含む
- 9 A 5Y8/2 灰白 シルト質粘土 (地山由來) と
B 10YR5/1 褐色 シルトのブロック土
A : B = 9 : 1
- 10 A 5Y8/2 灰白 シルト質粘土 (地山由來) と
B 10YR5/1 褐色 シルトのブロック土
A : B = 1 : 9

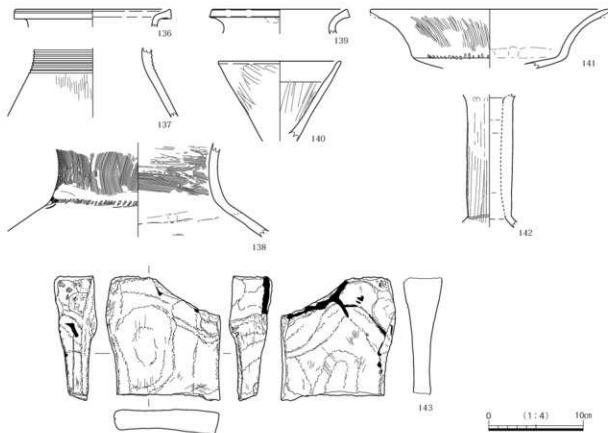
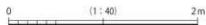


図 54 2054 土坑 平・断面図 出土遺物

143は細粒砂岩製の砥石。両端を欠損する。4面を使用。石材は緻密で肌理が細かい。残存長は13.1cm、幅は12.1cm、厚さは4.1cm、重量は638g。出土遺物の年代観から後期後半頃の遺構。

2064 土坑 (図55～57・図版13) 調査区南東隅、 $X=-136,272 \cdot Y=-42,180$ 付近に位置する。土坑西側部分のみが調査地内で検出された為、東側を拡張して全体を検出した。平面形は直径約0.7mの不整形円形を呈する。土坑はほぼ直に掘削されており、検出面からの深さは約1.2mである。埋土は大きく3枚に分かれ、上層が第8層系の黑色シルト、中層が黒～黒褐色シルト～粘質シルト(非常に水分に富む)、下層が灰色礫混粗砂である。上・中層には炭化物や地山由来の灰白～淡黄色砂質シルトブロックを含んでいる。また、遺物も上・中層に含まれるが、特に中層からの出土が顕著であった。なお、中層には被熱痕跡を有する弥生土器片、炭化した木材や炭化米が含まれており、火災にあったものが廃棄されたのであろう。明瞭な湧水は確認出来なかったが、土坑下部に行くほど水分が顕著になって行くことから、井戸として使用されたものと推定される。

出土遺物には弥生土器片、木製品(梯子・ホゾ孔を有する板材・加工痕を有する板材・棒材等)、炭化材(柱材か・板材)、サクラ樹皮、太形鉛刃石斧、被熱痕跡を有するチャート系礫、炭化米塊2点(図版

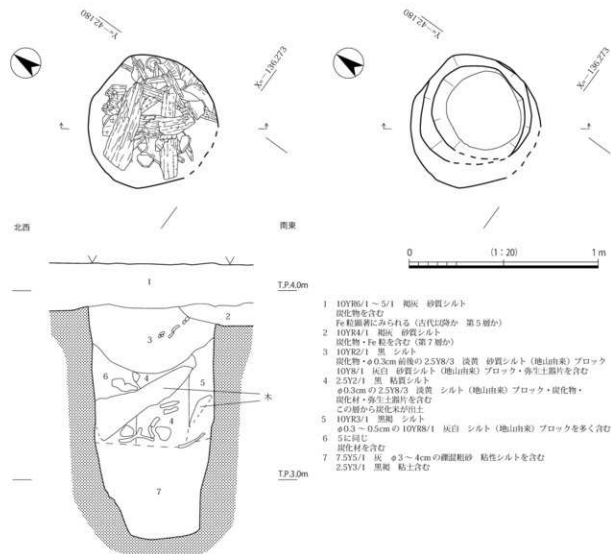


図55 2064土坑 平・断面図

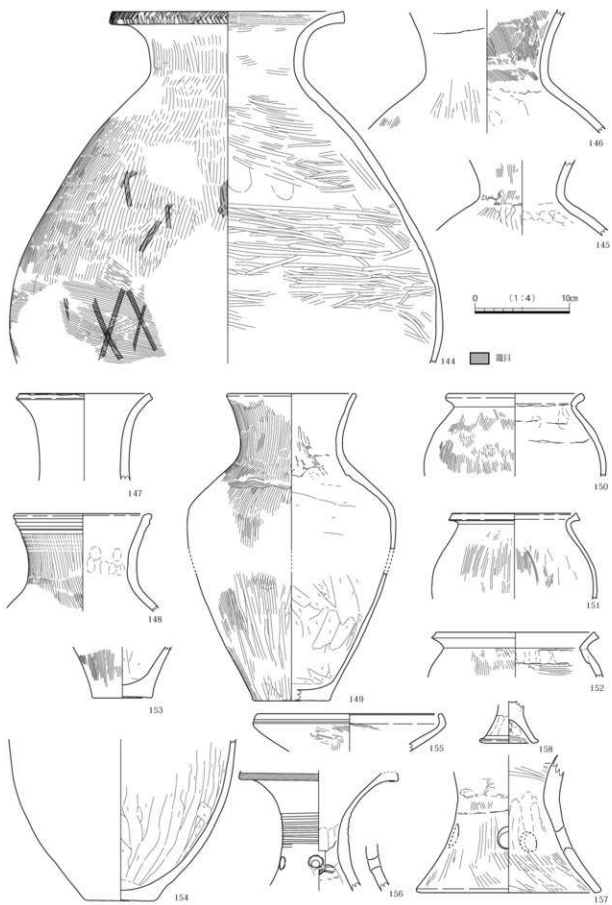


图 56 2064 土坑 出土遺物①

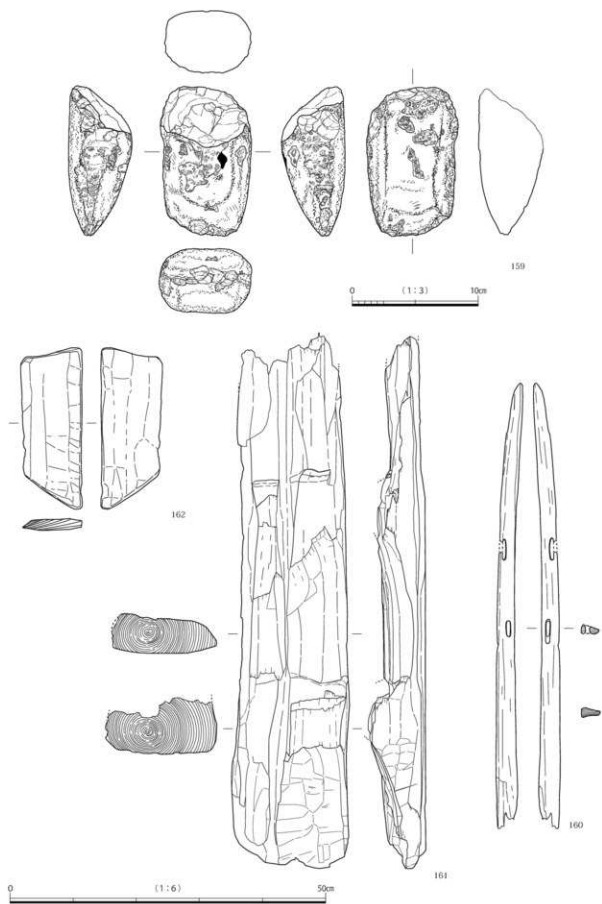


图 57 2064 土坑 出土遺物②

53-163・164)、ヒョウタンの仲間の種子6点等がみられる。このうち弥生土器15点、石器1点、木製品3点を図化した。

144~149は壺である。144~146は広口壺。144はナデ肩で、頸部は短く立ち上がり、口縁部は大きく開く。口縁部端面には綾杉状の刻みを施す。頸部~胸部上半外面は縦位の条痕を、口縁部~頸部内面には横位の条痕を施す。内外面に煤が付着する。また胸部外面には籠目の痕跡が残る。山城・近江地域からの搬入土器と思われる。145・146は口縁部を欠損する。147は長頸壺。口縁部端面はヨコナデにより凹線状に窪む。148・149は短頸壺である。148は口縁部外面に3条の凹線を巡らせる。149は肩部外面に4条のクシ描き波状文を巡らせる。体部外面下半~底部外面にかけて黒斑がみられる。150~154は甕である。150の外面には厚さ1mm程度のコゲが付着。151・152の口縁部端面はヨコナデにより凹線状に窪む。153は底部片。154の内面は底から3分の1付近までコゲが部分的に付着する。155は高杯の坏部。坏屈曲部外面にヘラ描き沈線が1条巡る。156・157は器台である。156は口縁上端部を欠失。口縁部端面に2条以上の凹線が巡り、筒部外面には8条の太い沈線状の凹線が巡る。また、凹線の下位には円形透かしが現状で2孔確認出来る。本来は6方向にあったと推定される。157は裾部中程に円形透かしが現状で4孔確認出来る。本来は5方向にあったと推定される。158はミニチュア土器の脚部。高杯或いは台付壺か。145~147・156は内外面及び破面に煤が付着し、赤化がみられ、157の裾部は著しく赤化しており、筒部外面上半は爆ぜて剥離したような痕跡が認められることから、割れた後に二次焼成を被ったと思われる。144・148・149・151・152・155~157は中期後葉~後期前半、147が後期前半の所産であろう。

159は細粒斑礫岩製太形蛤刃石斧である。基部側を折損。刃部には使用時の衝撃剥離痕がみられる。全面的に研磨が施されるが、基部の折損後、敲石に転用されたようで側面を主体に表裏面にも敲打痕が

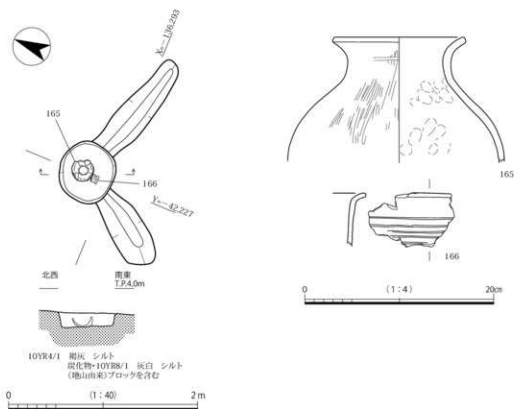


図58 2298土坑 平・断面図 出土遺物

みられる。残存長は11.9cm、幅は7.3cm、厚さは5.0cm、重量は629gである。160はホゾ孔を有する断面二等辺三角形形状の板材。残存長は70.6cm、残存幅は3.3cm、厚さは1.5cmを測り、平面形状は刀身状を呈する。一端は欠損し、他端は切っ先状になる。ホゾ孔は長軸約2.5～3.5cmの平面扁平な楕円を呈し、現状で2孔みられる。原形は不明であるが、何らかの部材と考えられる。スギ材を使用。161はスギ材の梯子。残存長は84.8cm、残存幅18.3cm、残存厚は9.1cmを測る。現状で2段分のステップが残る。ステップ間は約32cmである。162は両小口側を斜めに切り落とし、平面不整形形状を呈する板材。全長約25.6cm、幅9.8cm、厚さ1.8cmを測る。クスギ材を使用する。用途は不明。出土遺物の年代観から中期末～後期前半の土坑と推定される。

2298 土坑 (図 58・図版 14) 調査区西側の $X=-136.293 \cdot Y=-42.227$ 付近に位置する。直径約0.6mの平面円形を呈する土坑で、土坑東側に長さ約1.2m、幅約0.3mの、南側に長さ約0.9m、幅約0.4mの溝が取り付く。同形状を呈する土坑が西側約1.5mの位置にも存在している。土坑の断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは約0.15mである。埋土は炭化物や地山由来の灰白色シルトブロックを含む褐灰色シルトである。土坑底面中央で逆位に置かれた弥生土器壺と甕口縁部片がみられた。壺は胴部下半以下を失することから、土坑上部は相当削平されたものと推察される。165は壺。胎土は大粒の混和材を多く含み、やや粗い。前期末～中期初頭の所産。166は甕口縁部。頸部外面に5条以上のヘラ描き沈線を巡らせる。沈線が多条化することから前期末～中期初頭の所産とみられる。出土遺物が限定されることから前期末～中期初頭の土坑と捉えられる。

3.3区 (図 59～104・図版 15～23・32・36～40・44～53) 調査区北東隅、 $X=-136.280 \cdot Y=-42.180$ 付近の基盤層が高くT.P. 3.9mを測り、そこから南西及び南に向けて緩やかに下降する地形となる。調査区北東部はDIC株式会社工場基礎の撤去の際にかなり傷んでおり、大きな遺構の空白域がみられるが、総じて遺構の遺存状態が良く、尚且つ偏在することなく多数の土坑・溝・ピット等の遺構が存在した。しかし、 $Y=-42.170$ ライン以東の調査区南東部はT.P. 3.6m以下になり、傾斜変換点にあたることもあり次第に遺構が希薄になって行った。なお、この部分は調査区南側に位置する4-1区同様、基盤層上面(地山面)は踏込や地震動による変形により上位堆積層と基盤層が混じり合ってマール模様状になっており、遺構の検出作業は極めて困難な状況であった。ピットは直径0.2～0.4m・深さ0.3～0.7mを測るものが主体で、柱根を残すものや柱痕跡がみられるものが存在することから、多くのものが柱穴であると思われる。こうした柱痕跡や柱根を有するものを中心に検討した結果、12棟(建物3006は欠番)の掘立柱建物や8条の柵列を復元することが出来た。

掘立柱建物 (図 60～71・図版 17～21・53) 建物はほぼ全域で確認している。明確な集中域はなかったが、遺構が希薄となる調査区南東部のT.P. 3.5m以下の部分で比較的多くみられ、5棟が築かれていた。建物の面積は1間×1間(1.7×2m)を最小とし、1間×3間(4×4.8～4.9m)が最大となる。これら建物の多くは棟持柱を有さない構造を特色としている。なお、建物の主軸方位に規則性は認められない。また、調査区南東部で検出した建物には柱根を残すものが複数みられたが、調査区北側では極めて少ない。

掘立柱建物 3010 (図 60・図版 21) 調査区北西部の $X=-136.293 \cdot Y=-42.192$ 付近に位置し、2区の建物2006の南東約3.5mに位置する。建物3010は梁行1間(3.9m)×桁行2間(4～4.1m)で、桁行の柱間は心々距離で2～2.15mである。桁行は $N-59^{\circ}-W$ を指向する。柱掘方の平面形は円形或

いは長楕円形を呈し、直径または長軸が約0.2～0.4m、深さは約0.2～0.35mである。建物を構成するピットは柱が抜き取られており、3192ピットの底面で直径0.1m前後の柱当たりを、3188～3191・3193ピットの断面で直径0.1m前後の柱痕跡を確認出来た。

建物3010に関する遺物は3189・3191・3192ピットで細片となった弥生土器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。

掘立柱建物3009(図60) 建物3010の南側直ぐに位置する。建物3009は梁行1間(4m)×桁行3間(4.8～4.9m)で、桁行の柱間は心々距離で1.6～1.7mである。桁行はN-75°-Wを指向する。建物南辺は土坑状変形と重なっており、南辺を構成するはずの柱穴2基が確認出来なかった。柱掘方の平面形は円形或いは不整形円形を呈し、直径が約0.2～0.25m、深さは約0.2～0.35mである。建物を構成する全てのピットで直径0.1m前後の柱痕跡を確認した。建物3009に関する遺物は3196・3198ピットで細片となった弥生土器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。

掘立柱建物3008(図61・図版20・21) 調査区中央部やや北側、X=-136.305・Y=-42.185付近に位置する。建物3008は梁行1間(3.4m)×桁行3間(5m)で、桁行の柱間は心々距離で南辺が1.6～1.7m、北辺が1.6～1.75mである。桁行はN-68°-Wを指向する。柱掘方の平面形は不整形円形或いは不整形楕円形を呈し、直径または長軸が約0.2～0.4m、深さは約0.2～0.4mである。建物を構成するピットは柱が抜き取られており、3169・3172・3173ピットでは底面で直径0.1m強の柱当たりを確認した。なお、3166～3168・3170・3171ピットの断面では直径0.1m前後の柱痕跡を確認出来た。建物3008に関する遺物は3166・3170～3173ピットで細片となった弥生土器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。

掘立柱建物3007(図62・図版19) 建物3008の南側約1.5mに位置する。建物3007は梁行1間(1.9～2m)×桁行2間(2.7～2.9m)で、桁行の柱間は心々距離で南辺が1.3～1.4m、北辺が1.25～1.6mである。建物西側には掘乱が存在しており遺構が確認出来なかった為、建物3007は更に西側へ展開する可能性も残す。桁行はN-61°-Eを指向する。柱掘方の平面形は円形、不整形円形或いは不整形楕円形を呈し、直径または長軸が約0.25～0.4m、深さは約0.25～0.4mである。建物を構成するピットのうち、3161～3165ピットで直径0.1～0.15m前後の柱痕跡を、3164ピットで柱材が僅かに遺存しているのを確認した。いずれの柱穴からも遺物はみられなかった。

掘立柱建物3005(図63・67・図版19・21) 調査区中央部、X=-136.315・Y=-42.178付近に位置する。建物3005は掘乱の底で検出した為、周囲よりも0.1～0.2m程度は削平を被っている。建物3005は梁行1間(3.65～3.8m)×桁行3間(4.7～4.8m)で、桁行の柱間は心々距離で南東辺が1.35～1.7m、北西辺が1.3～1.7mである。桁行はN-46°-Eを指向する。柱掘方の平面形は円形、不整形円形、不整形方形或いは不整形楕円形を呈し、直径または長軸が約0.35～0.5m、深さは約0.05～0.25mである。他の建物より柱掘方の規模が若干大きい。建物を構成するピットは柱が抜き取られており、3136ピットは底面で直径0.1m前後の柱当たりを確認した。なお、3137・3138・3140・3200ピットでは断面で直径0.1m前後の柱痕跡を確認出来た。建物3005に関する遺物は3135～3140・3142ピットで細片となった弥生土器～土師器が出土している。3139ピットからは甕(外面タタキ調整)が、3142ピットからは甕(外面タタキ調整)や直口壺がみられた。このうち図化出来たのは3142ピット出土の直口壺(図67-167)である。167の頸部内面の屈曲は比較的シャープである。生駒西麓産の胎土。古墳時代前期(布留式併行期)の所産であろう。遺物や後述する建物周辺の土坑(3041・3091・3053土坑)の年代観

建物3010

- 3188
- 1 10YK3/1 黒期 細砂混シルト
炭化物を含む
 - 2 10YR6/2 灰黄期・10YR6/6 明黄期
細砂混シルト(地山由来)と10YR3/1
黒期 細砂混シルトブロックの混合土
 - 3 7.5Y2/2 黒期 細砂混シルト
炭化物を含む 10YR6/2 灰黄期
10YR6/6 明黄期 細砂混シルト
(地山由来) 小ブロックを確かに含む

3189

- 1 10YK3/2 黒期 細砂混シルト
10YR6/2 灰黄期・10YR6/6
明黄期 細砂混シルト(地山由来)を含む
- 2 7.5Y2/2 黒期 細砂混シルト
炭化物を含む 10YR6/2 灰黄期
(地山由来) 小ブロックを確かに含む
- 3 10YR6/2 灰黄期・10YR6/6 明黄期
細砂混シルト(地山由来)と10YR3/1
黒期 細砂混シルトブロックの混合土
- 4 10YR7/1 灰白 細砂混粘質シルト
地山跡のみみか

3190

- 1 7.5Y2/2 黒期 細砂混シルト
炭化物を含む
- 2 7.5YR3/2 黒期 細砂混シルト
10YR6/6 明黄期 細砂混シルト
(地山由来) 小ブロックを確かに含む
- 3 10YR6/6 明黄期 細砂混シルト
(地山由来) と 7.5YK3/2 黒期
細砂混シルトブロックを含む

3191

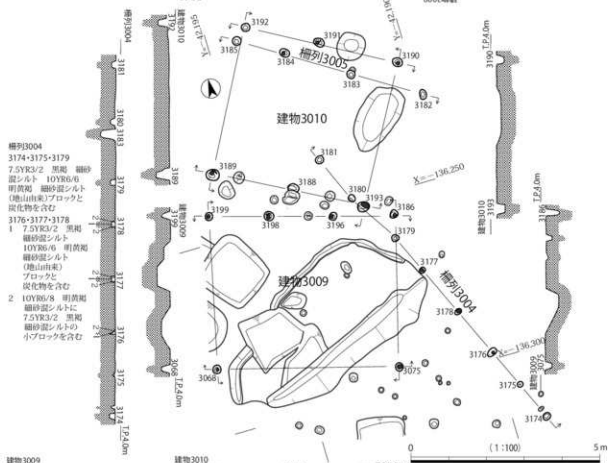
- 1 7.5Y2/2 黒期 細砂混シルト
炭化物を含む
- 2 7.5YR3/2 明黄期 細砂混シルト
10YR6/6 明黄期 細砂混シルト
(地山由来) 小ブロックを確かに含む

3192

- 1 7.5YR3/3 暗赤 細砂混シルト
炭化物を含む
- 2 7.5YR3/2 明黄期 細砂混シルト
10YR6/6 明黄期
細砂混シルト(地山由来) ブロックを
多く含む
- 3 7.5Y2/2 黒期 細砂混シルト
10YR6/6 明黄期 細砂混シルト
(地山由来) 小ブロックを確かに含む
- 4 10YR6/6 明黄期 細砂混シルト
(地山由来) に 7.5YR3/2 黒期
細砂混シルトブロックを含む

3193

- 1 7.5Y2/2 黒期 細砂混シルト
炭化物を含む
- 2 10YR6/6 明黄期 細砂混シルト
(地山由来) に 7.5YR3/2 黒期
細砂混シルトブロックを含む
- 3 10YR5/6 明黄期 細砂混シルト
(地山由来) に 10YR6/6 明黄期
細砂混シルトブロックを含む



建物3009

- 3066
- 1 5YR3/2 暗赤期 細砂混シルト
炭化物を含む
 - 2 7.5YR3/2 黒期 細砂混シルトと
10YR6/8 明黄期 細砂混シルト
(地山由来)がブロック状になる

3075

- 1 5YR3/2 暗赤期 細砂混シルト
炭化物を含む 10YR6/6 明黄期
細砂混シルト(地山由来)ブロックを
確かに含む
- 2 10YR6/8 明黄期 細砂混シルトに
茶色土を確かに含む

3186

- 1 7.5YR2/2 黒期 細砂混シルト
炭化物を含む 10YR6/2 灰黄期・
10YR6/6 明黄期 細砂混シルト
(地山由来) 小ブロックを確かに含む
- 2 10YR6/2 灰黄期・10YR6/6 明黄期
細砂混シルト(地山由来)と 10YR3/1
黒期 細砂混シルトブロックの混合土

建物3010

- 3189
- 1 7.5Y2/2 黒期 細砂混シルト
炭化物を含む
 - 2 10YR6/6 明黄期 細砂混シルト
(地山由来) ブロックに7.5YR3/2
黒期 細砂混シルトブロックの混合土

建物3009

- 3066
- 1 5YR3/2 暗赤期 細砂混シルト
炭化物を含む 10YR6/6 明黄期
細砂混シルト(地山由来)ブロックを
確かに含む
 - 2 10YR6/8 明黄期 細砂混シルトに
茶色土を確かに含む

3196-3198-3199

- 1 7.5YR2/2 黒期 細砂混シルト
炭化物を含む
- 2 10YR6/6 明黄期 細砂混シルト
(地山由来) ブロックに7.5YR3/2
黒期 細砂混シルトブロックの混合土

建物3005

- 3182-3183
- 1 7.5YR3/2 黒期 細砂混シルト
10YR6/6 明黄期 細砂混シルト
小ブロックと炭化物を含む

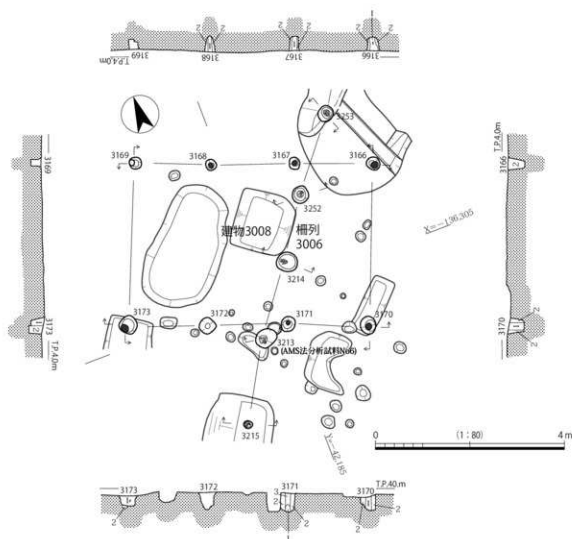
3184

- 1 7.5YR2/2 黒期 細砂混シルト
炭化物を含む 10YR6/2 灰黄期・
10YR6/6 明黄期 細砂混シルト
(地山由来) 小ブロックを確かに含む
- 2 10YR6/2 灰黄期・10YR6/6 明黄期
細砂混シルト(地山由来)と 10YR3/1
黒期 細砂混シルトブロックの混合土

3185

- 1 10YR6/2 灰黄期・10YR6/6 明黄期
細砂混シルト(地山由来)と 10YR3/1
黒期 細砂混シルトブロックの混合土

図60 掘立柱建物3009・3010、柵列3004・3005 平・断面図



建物3008

- 3166-3167-3168-3170
 1 5YR2/1 黒褐 細砂混シルト
 粗砂・細礫・遺物・炭化物を含む
 10YR3/2 黒褐 細砂混シルトブロックを
 僅かに含む(柱基礎)
 2 10YR4/1 褐灰 粗砂～細礫(地山由来)
 10YR3/2 黒褐 細砂混シルトブロックと
 炭化物を含む
 3169
 7.5YR3/1 黒褐 細砂混シルト
 10YR6/6 明黄褐 細砂混シルトブロックと
 遺物・炭化物を含む

- 3171
 1 5YR2/1 黒褐 細砂混シルト
 粗砂・細礫・遺物・炭化物を含む
 10YR3/2 黒褐 細砂混シルトブロックを
 僅かに含む
 2 10YR4/1 褐灰 粗砂～細礫(地山由来)
 10YR3/2 黒褐 細砂混シルトブロックと
 炭化物を含む
 3 10YR4/1 褐灰 粗砂～細礫(地山由来)
 炭化物を含む
 10YR3/2 黒褐 細砂混シルトブロックを多く含む

- 3172
 10YR3/1 黒褐 細砂混シルト
 10YR5/2 灰黄褐 粗砂～細礫(地山由来)
 ブロックと細礫・炭化物を含む
 3173
 1 7.5Y3/2 黒褐 細砂混シルト
 φ5cmの5YR8/4 淡黄 細砂混シルト
 (地山由来)ブロックと細礫・粗砂・遺物・
 炭化物を含む
 2 2.5Y2/1 黒 細砂混粘質シルト
 (柱基礎)

建物3006

- | | | | | | |
|---------------|---------------|-------------------|---------------------|-------------------|-------------------|
| 北西
TP.4.0m | 南東
TP.4.0m | 西
東
TP.4.0m | 北西
南東
TP.4.0m | 西
東
TP.4.0m | 南
北
TP.4.0m |
| | | | | | |
- 3213-3214
 1 10YR3/2 黒褐 粗砂～極粗砂混シルトと
 10YR2/1 黒 粗砂～極粗砂混シルトの
 ブロック土 細礫を含む
 2 10YR2/2 黒褐 粗砂～極粗砂混シルトと
 細礫を含む
 3215
 10YR2/1 黒 粗砂～極粗砂混シルトと細礫を含む
 3252-3253
 1 10YR3/2 黒褐 粗砂～極粗砂混シルトと
 10YR2/1 黒 粗砂～極粗砂混シルトの
 ブロック土 細礫を含む
 2 10YR2/1 黒 粗砂～極粗砂混シルトを含む

図 61 掘立柱建物 3008、柵列 3006 平・断面図

から古墳時代前期の建物と考えられる。

据立柱建物 3004 (図 64・図版 19) 建物3005の南側約4mに位置する。建物3004は梁行1間(1.7m)×桁行1間(2m)である。桁行はN-18°-Wを指向する。柱掘方の平面形は楕円形あるいは不整楕円形を呈し、長軸が約0.25~0.35m、深さは0.35m前後である。建物を構成する全てのピットで柱痕跡は認められなかった。建物3004に関する遺物は3126~3129ピットで細片となった弥生土器が、3128ピットでサヌカイト製の錐が出土しているが、時期の特定には至らなかった。

据立柱建物 3011 (図 65・図版 20・21) 調査区南側、X=-136.315・Y=-42.158付近に位置する。建物3011は梁行1間(3.1~3.25m)×桁行2間(2.8~3.2m)で、桁行の柱間は心々距離で南辺が1.45~1.75m、北辺が1.3~1.5mである。桁行はN-80~85°-Eを指向する。柱掘方の平面形は不整円形あるいは不整楕円形を呈し、直径または長軸が約0.2~0.3m、深さは約0.2~0.5mである。建物南

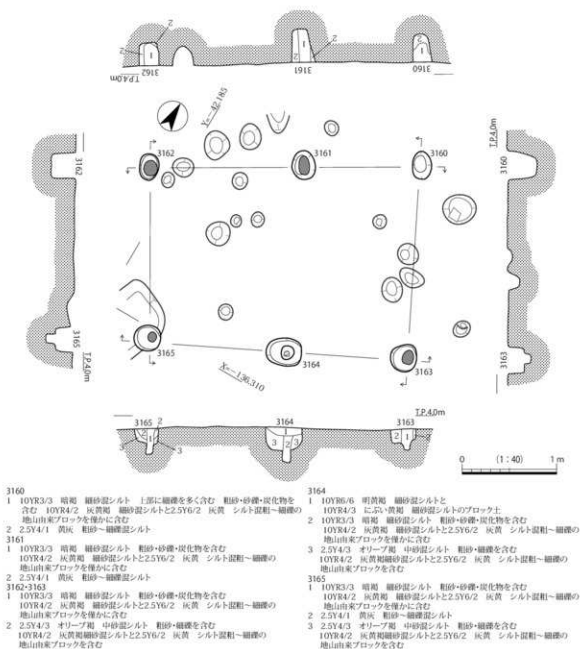


図 62 据立柱建物 3007 平・断面図

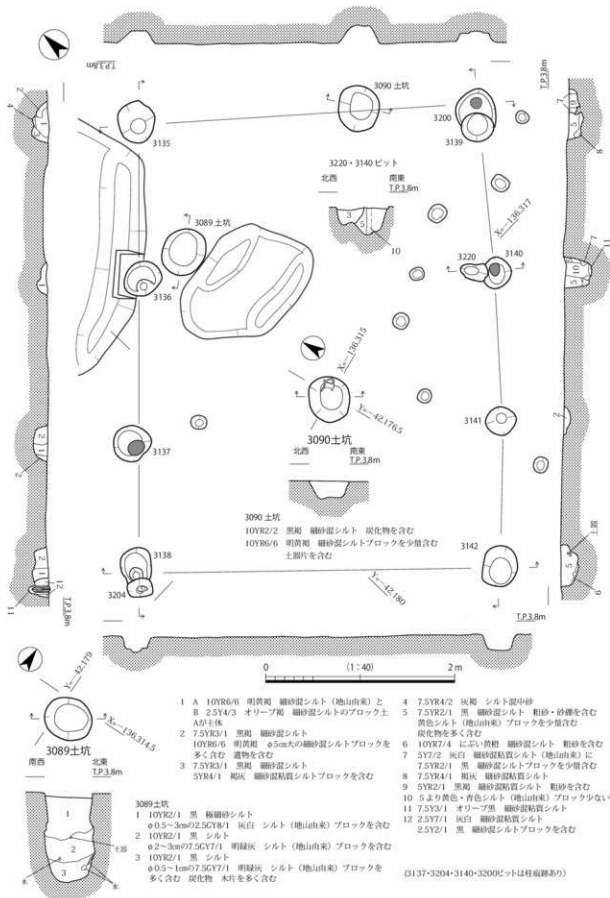


図 63 掘立柱建物 3005、3089・3090 土坑 平・断面図

西隣の3242ピットは3007土坑と切り合い関係にあるが、平面検出時には気付くことが出来ず、3007土坑掘削後に検出した為、先後関係は不明である。いずれの柱穴にも柱痕跡は認められなかった。建物3008に関する遺物は3108・3205・3207・3211ピットで細片となった弥生土器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。

掘立柱建物 3003 (図 66・67・図版 17・18・53) 調査区南西部、 $X=-136.330 \cdot Y=-42.165$ 付近に位置する。建物3003は当初、後述する建物3003-2も含めた横長の大きな建物かと考えたが、北辺の柱並びに僅かにズレが認められることから、2棟の建物が並列したものであるとの結論に達した。建物3003は梁行1間(3.4m)×桁行4間(4.8~4.9m)で、桁行の柱間は心々距離で南辺が0.6~1.7m、北辺が1~1.6mである。桁行は $N-66^{\circ}-E$ を指向する。柱掘方の平面形は不整形円形或いは不整楕円形を呈し、直径または長軸が約0.2~0.4m、深さは約0.3~0.55mである。北辺を構成する3119・3118・3218ピットに切り合い関係がみられるが、埋土の状況から柱を抜き取る為の掘削が想定される。また、南辺を構成する3121・3225・3124ピットも埋土の状況から、ピット上部は柱を抜き取る為に再掘削されたものと推察される。3121・3122・3225ピット以外で直径0.1m前後の柱痕跡を確認し、3119・3118・3123ピットには直径0.1~0.11m、残存長0.39~0.51mの柱材が遺存していた。このうち、比較的遺存状況が良好な3123ピット出土の柱材(図版 53-169; AMS 分析試料4)について放射性炭素同位体による年代測定を実施した。詳細は第4章に譲るが、紀元前2世紀前半~紀元後1世紀中頃の年

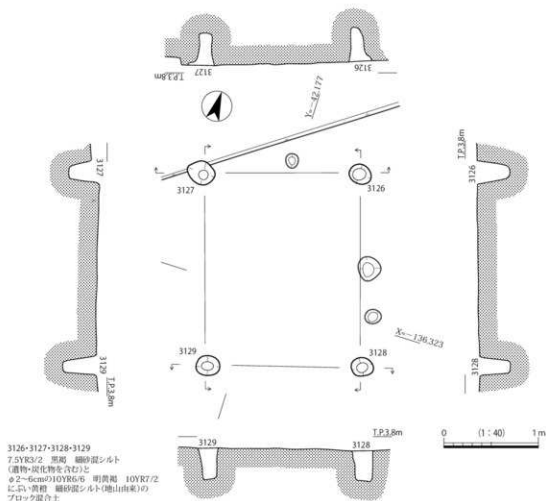


図 64 掘立柱建物 3004 平・断面図

代を示し、弥生中期後葉の柱材との結果を得た。この柱材の樹種はクスギである。

建物3003に関する遺物は3118・3119・3121・3123・3124・3225ピットで細片となった弥生土器が出土しており、このうち3121ピット(柱抜き取り部分から)出土の甕(図67-168)が図化出来た。168は口縁端部を上方に僅かに拡張し、端面に1条のヘラ描き沈線が巡る。中期後半頃の所産であろう。

遺物の年代観やAMS分析の結果から中期後葉の建物と捉えておきたい。

掘立柱建物 3003-2 (図68・図版53) 建物3003の西側約1.45mに位置する。建物3003-2は梁行1間(3.3~3.5m)×桁行2間(3.3~3.4m)で、桁行の柱間は心々距離で南辺が1.7mである。桁行はN-66°-Eを指向する。建物北辺は近世期の3015土坑に切られており、1基のピットを失っている。柱掘方の平面形は不整円形或いは不整楕円形を呈し、直径または長軸が約0.3~0.4m、深さは約0.25~0.65mである。建物を構成するピットのうち、3125ピット以外で直径0.08~0.12m、残存長0.31~0.6mの柱材が遺存していた。なお、3125ピットは埋土の状況から、柱を抜き取る為に再掘削された

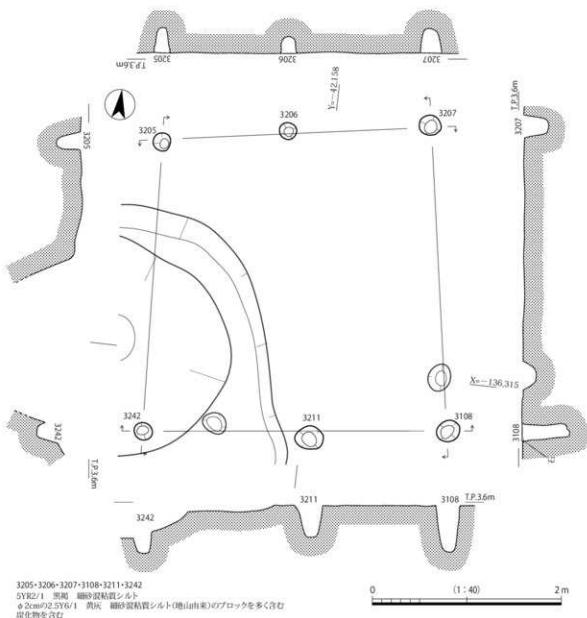


図65 掘立柱建物 3011 平・断面図

ものと推察される。残存した柱材のうち、比較的遺存状況が良好な3223ビット出土の柱材(図版53-170: AMS分析試料3)について放射性炭素同位体による年代測定を実施した。詳細は第4章に譲るが、紀元前2世紀前半~紀元後1世紀末の年代を示し、弥生中期後葉の柱材との結果を得た。この柱材の樹

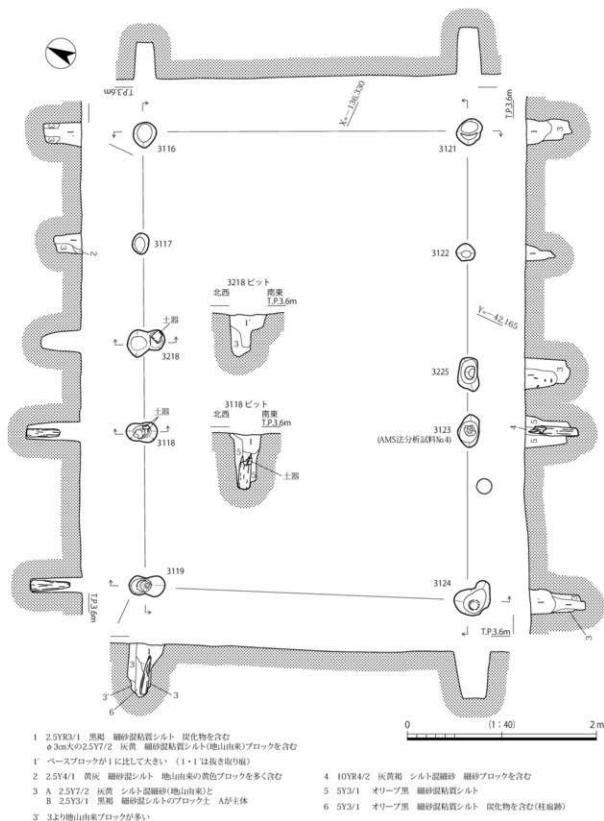


図66 掘立柱建物3003 平・断面図

種はクスギである。

建物3003-2に関する遺物は3120・3125・3223ピットで細片となった弥生土器が、3120ピットからサヌカイト製楔形石器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。遺物からは建物の時期を推さえられなかったが、AMS分析の結果から中期後葉の建物と捉えておきたい。

掘立柱建物 3012 (図 69・図版 20・21) 建物3003-2と重複する位置に建てられた建物であるが、前者とは切り合い関係を有しない。建物3012は梁行1間(3.3~3.4m)×桁行2間(4.5~4.6m)で、桁行の柱間は心々距離で東辺が2.2~2.4m、西辺が2.25mである。桁行はN-16°-Wを指向する。柱掘方の平面形は不整形円形或いは不整楕円形を呈し、直径または長軸が約0.25~0.5m、深さは約0.45~0.6mである。建物を構成するピットは柱が抜き取られており、底面の柱当たりで直径0.1m前後の柱の存在を確認した。なお、3228・3227ピットでは断面で直径0.1m前後の柱痕跡を確認出来た。建物3012に関する遺物は3230・3241ピットで細片となった弥生土器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。

掘立柱建物 3002 (図 70・図版 17・18・53) 調査区南東隅、X=-136.325・Y=-42.143付近に位置する。建物3002は梁行1間(3.3~3.4m)×桁行2間(5.5m)で、桁行の柱間は心々距離で2.65~2.85mである。桁行はN-44°-Wを指向する。柱掘方の平面形は不整形円形或いは不整楕円形を呈し、直径または長軸が約0.25~0.6m、深さは約0.4~0.6mである。建物を構成するピットのうち、3112ピットで柱材が遺存しており、3114・3113ピットの断面で直径0.1m前後の柱痕跡を確認した。他は埋土の状況から柱を抜き取る為に再掘削されたものと推察される。残存した3112ピット出土の柱材(図版53-171: AMS分析試料5)について放射性炭素同位体による年代測定を実施した。詳細は第4章に譲るが、紀元前2世紀前半~紀元後1世紀中頃の年代を示し、弥生中期後葉の柱材との結果を得た。この柱材の樹種はクスギである。

建物3002に関する遺物は3231・3232ピットで細片となった弥生土器が出土したが、時期の特定には至らなかった。

遺物からは建物の時期を推さえられなかったが、AMS分析の結果から中期後葉の建物と捉えておきたい。

掘立柱建物 3001 (図 71・図版 20・21) 調査区南東隅、建物3002の南側約5.5mに位置する。建物3001は梁行1間(3.8~3.9m)×桁行2間(3.8m)で、桁行の柱間は心々距離で南辺が1.8~2m、北辺が1.9mである。桁行はN-75°-Wを指向する。柱掘方の平面形は不整形円形或いは不整楕円形を呈し、直径または長軸が約0.2~0.25m、深さは約0.35~0.5mである。建物南東隅の3110ピットは上部を攪乱に削平されていた。建物を構成するピットは柱が抜き取られており、3103・3109・3110ピットの底面で直径0.1m強の柱当たりを確認した。建物3001に関する遺物は3101・3103・3109ピットで細

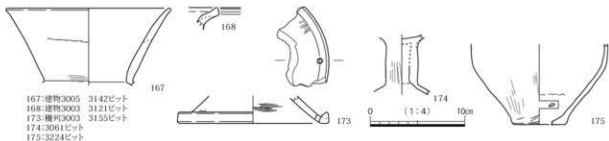
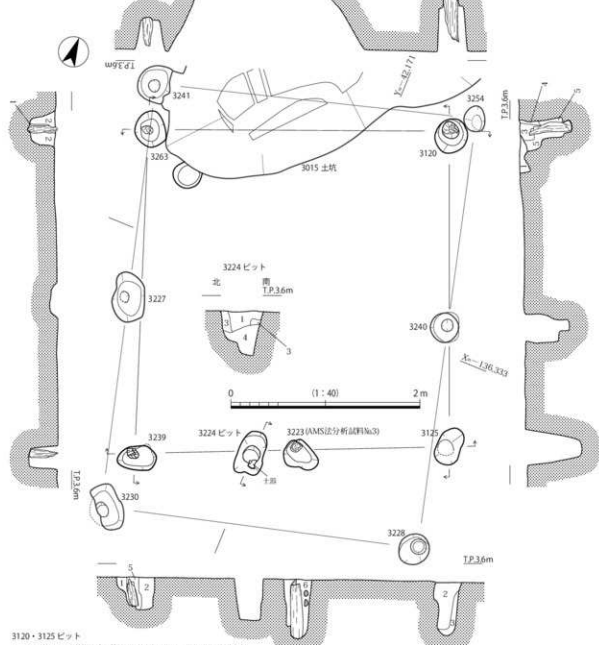


図 67 掘立柱建物 3005・3003、櫛列 3003 他 出土遺物

3263 ビット

- 1 10YR3/1 黒褐 細砂質シルト
 2 A 5Y7/1 灰白 粗砂質シルト(地山由来)と
 B 5Y3/1 オリーブ黒 細砂質シルトの
 ブロック土 Aが主体



3120・3125 ビット

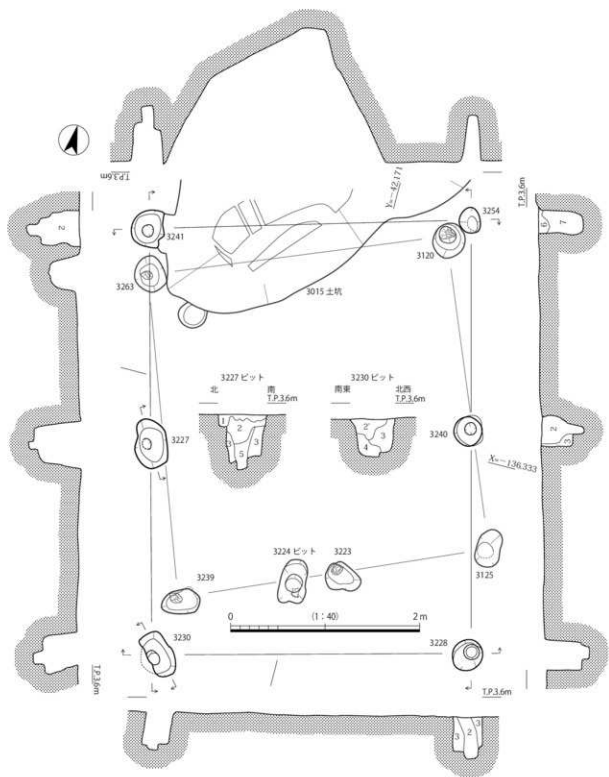
- 1 10YR4/2 灰黄褐 細砂質シルト(踏み込み 砂れによる見れ)
 2 2.5YR3/1 黒褐 細砂質シルト 炭化物を含む
 φ3cm大の2.5Y7/2 灰黄 細砂質シルト(地山由来)ブロックを含む
 3 A 2.5Y7/2 灰黄 シルト混細砂(地山由来)と
 B 2.5Y3/1 黒褐 細砂質シルトのブロック土 Aが主体
 4 A 2.5Y7/2 灰黄 シルト混細砂(地山由来)ブロックを含む
 B 5Y3/1 オリーブ黒 細砂質シルトのブロック土 Aが主体
 5 5Y3/1 オリーブ黒 細砂質シルト

- 2 A 2.5Y3/1 黒褐 細砂質シルトと
 B 5Y7/4 灰黄 細砂質シルト(地山由来)のブロック土
 炭化物を含む Bが主体
 3 A 5Y7/4 灰黄 細砂質シルト(地山由来)と
 B 5Y3/1 オリーブ黒 細砂質シルトのブロック土 粗砂を含む Aが主体
 4 A 5Y7/4 灰黄 細砂質シルト(地山由来)と
 B 2.5Y3/3 灰オリーブ 細砂質シルト(地山由来)のブロック土
 5 2.5Y3/2 黒褐 細砂質シルト
 6 5Y3/1 オリーブ黒 細砂質シルト 炭化物を含む
 φ10cm大の2.5Y7/2 灰黄 シルト混細砂(地山由来)ブロックを含む

3223・3224・3239 ビット

- 1 A 2.5Y3/1 黒褐 細砂質シルトと
 B 5Y7/4 灰黄 細砂質シルト(地山由来)のブロック土
 炭化物を含む Aが主体

図 68 掘立柱建物 3003-2、3224 ビット 平・断面図



- 1 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混シルト (踏み込み ゆれによる見れ)
 2 A 2.5Y3/1 栗褐色 細砂混粘質シルトと
 B 5Y7/4 浅黄 細砂混粘質シルト (地山由来) のブロック土
 炭化物を含む Aが主体
 2' A 2.5Y3/1 栗褐色 細砂混粘質シルト
 B 5Y7/4 浅黄 細砂混粘質シルト (地山由来) のブロック土
 炭化物を含む Aが主体
 3 A 5Y7/4 浅黄 細砂混粘質シルト (地山由来) と
 B 5Y3/1 オリーブ黒 細砂混粘質シルトのブロック土 粗砂を含む Aが主体

- 4 A 5Y7/4 浅黄 細砂混粘質シルト (地山由来) と
 B 2.5Y5/3 灰オリーブ 細砂混粘質シルト (地山由来) のブロック土
 5 A 2.5Y3/1 栗褐色 細砂混粘質シルトと
 B φ3cm大の5Y7/4 浅黄 シルト混細砂 (地山由来) のブロック土
 6 A 2.5Y4/1 栗褐色 細砂混シルトと
 B 2.5Y7/2 灰黄 シルト混細砂 (地山由来) のブロック土 Aが主体
 7 A 2.5Y7/2 灰黄 φ5~10cmのシルト混粗砂~細砂 (地山由来) ブロックと
 B 2.5Y3/1 栗褐色 細砂混シルトのブロック土

図 69 掘立柱建物 3012 平・断面図

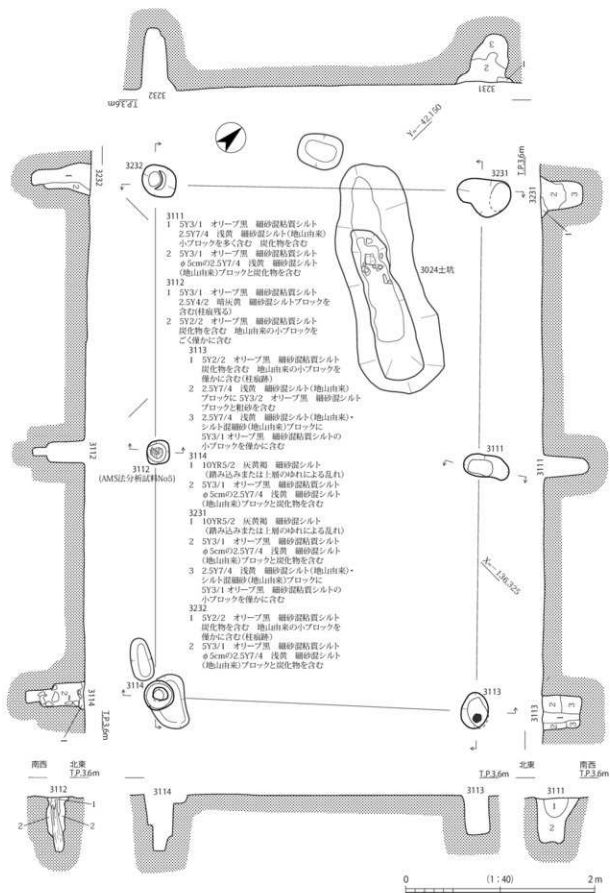


図70 掘立柱建物3002 平・断面図

片となった弥生土器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。

柵列 (図 60・61・72～74) 同規模のピットがほぼ等間隔に直線的に並ぶものの、掘立柱建物として復元出来なかったものを柵列として扱った。柵列はほぼ全域で確認している。明確な集中域はなかったが、建物が営まれた付近に存在するものが多い。なお、建物が比較的多く築かれた調査区南東部の T.P. 3.5m以下の部分では柵列は少なかった。なお、柵列の主軸方位に規則性は認められない。

柵列 3005 (図 60) 調査区北西部に位置する建物 3010 の北辺の南側約 0.5m にある。柵列 3005 は $N-61^{\circ}-W$ を軸にし、4 基のピット (3 間) で構成される。検出長は約 5.1m で、柱間は心々距離で 1.3～2m である。柱掘方の平面形は不整形円形或いは楕円形を呈し、直径または長軸が約 0.2～0.3m、深さは約 0.1～0.2m である。3184 ピットで直径約 0.1m の柱痕跡を確認した。柵列 3005 に関する遺物は 3184・3185 ピットで細片となった弥生土器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。

柵列 3004 (図 60) 調査区北西部に位置する建物 3009・3010 と重なるように位置する。柵列 3004 は $N-26^{\circ}-W$ を軸にし、8 基のピット (7 間) で構成される。検出長は約 9m で、柱間は心々距離で 1.1～1.5m である。柱掘方の平面形は円形、不整形円形或いは不整形楕円形を呈し、直径または長軸が約 0.15～0.3m、深さは約 0.05～0.15m である。3177・3178 ピットで直径約 0.1m 前後の柱痕跡を確認した。柵列 3004 に関する遺物は 3181 ピットで細片となった弥生土器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。

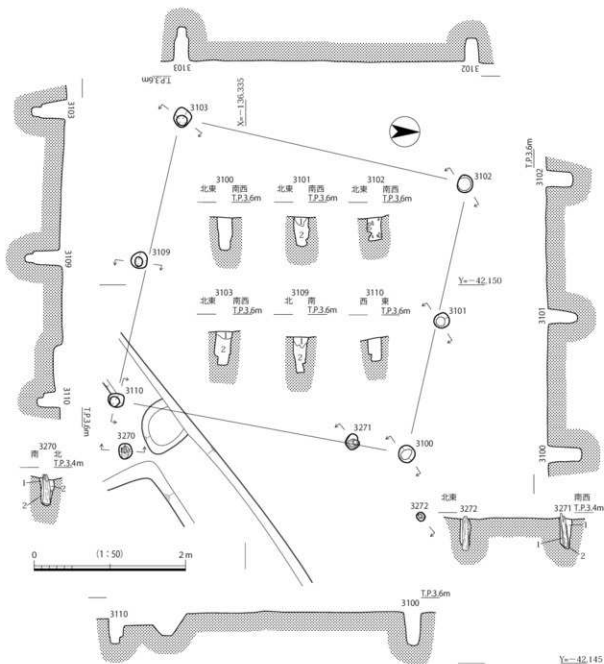
柵列 3006 (図 61・図版 53) 調査区中央部やや北側に位置する建物 3008 と重なるように位置する。

柵列 3006 は後述する柵列 3003 と並行するように築かれていたので、両者で掘立柱建物を構築していた可能性も検討したが、梁行が約 6.3m となりかなり幅広い。検出した他の建物にこの規模のものがみられなかった為、柵列 2 条として捉えることとした。

柵列 3006 は $N-34^{\circ}-E$ を軸にし、現状で 5 基のピット (4 間) で構成される。柵列北・南側には攪乱が存在している為、更に両側へ延びる可能性も否定出来ない。検出長は約 6.8m で、柱間は心々距離で 1.5～1.8m である。柱掘方の平面形は不整形円形或いは不整形楕円形を呈し、直径または長軸が約 0.3～0.4m、深さは約 0.4～0.5m である。柵列を構成する全てのピットで直径 0.08～0.15m、残存長が 0.23～0.35m の柱材が遺存していた。残存した柱材のうち、比較的遺存状況が良好な 3213 ピット出土の柱材 (図版 53-172: AMS 分析試料 6) について放射性炭素同位体による年代測定を実施した。詳細は第 4 章に譲るが、紀元前 1 世紀中頃～紀元後 1 世紀中頃の年代を示し、弥生時代中期後葉～後期前半の柱材との結果を得た。この柱材の樹種はクヌギである。

柵列 3006 に関する遺物は 3213・3241 ピットで細片となった弥生土器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。遺物からは建物の時期を押さえられなかったが、AMS 分析の結果から弥生時代中期後葉～後期前半の所産と捉えておきたい。

柵列 3003 (図 67・72) 調査区中央部、柵列 3006 の南東側約 6.3m に位置し、柵列 3006 と並行して築かれている。柵列 3003 は $N-34^{\circ}-E$ を軸にし、現状で 6 基のピット (5 間) で構成される。柵列北側には攪乱が存在している為、更に北側へ延びる可能性も否定出来ない。検出長は約 8.8m で、柱間は心々距離で 1.3～2.3m である。柱掘方の平面形は円形、不整形円形或いは不整形楕円形を呈し、直径または長軸が約 0.25～0.3m、深さは約 0.45～0.5m である。なお、南西端の 3159 ピットは攪乱の底で検出した為、上部が削平されており残存した深さは 0.17m であった。また、同ピットには直径約 0.1m、残存長 0.18m の柱材が遺存していた。柵列 3003 に関する遺物は 3154・3155・3157 ピットで細片となった弥生土



3100-3102

- 10YR2/1 黒 シルト
 φ0.5-2cmの10YR8/2 灰白 シルト (地山由來)ブロックと
 10YR8/1 灰白 シルト (地山由來)ブロックを含む

3101-3103

- 1 10YR2/1 黒 シルト
 φ0.5-2cmの10YR8/2 灰白 シルト (地山由來)ブロックと
 10YR8/1 灰白 シルト (地山由來)ブロックを含む

2 10YR2/1 黒 シルト

- φ0.5-1cmの10YR3/1 灰白 シルト (地山由來)ブロックを種かに含む
 3109
 1 10YR2/1 黒 シルト
 φ0.5-3cmの10YR7/1-7/3 灰白〜にぶい黄橙 シルト (地山由來)
 ブロックを多く含む
 2 10YR2/1 黒 シルト
 φ0.5-1cmの10YR3/1 灰白 シルト (地山由來)ブロックを種かに含む

3110

- 10YR2/1 黒 シルト
 φ0.5-3cmの10YR7/1-7/3 灰白〜にぶい黄橙 シルト (地山由來)
 ブロックを多く含む 下部はブロックが少ない

3270

- 1 5Y6/2 灰オリーブ 細砂混シルト(地山由來)に
 5Y3/1 オリーブ黒 細砂混粘質シルトブロックを含む
 炭化物を含む
 2 5Y3/1 オリーブ黒 細砂混粘質シルト
 炭化物を含む

3271

- 1 5Y7/2 灰白 細砂混粘質シルト(地山由來)と
 5Y3/1 オリーブ黒 細砂混粘質シルトのブロック混入土
 炭化物を含む
 2 10YR4/2 灰黄橙 細砂混粘質シルト
 粘性高い

3272

- 5Y3/1 オリーブ黒 細砂混粘質シルト
 炭化物を含む

3273

- 1 5Y3/1 オリーブ黒 細砂混粘質シルト
 炭化物を含む
 2 10YR4/2 灰黄橙 細砂混粘質シルト
 粘性高い

図 71 掘立柱建物 3001、3270～3273 ピット 平・断面図

器が出土している。このうち図化出来たのが3155ピット出土の高環(図67-173)である。173は高環脚裾部。裾端部は断面三角形の粘土紐を貼り付け、上方に拡張する。また、端部に接して内面穿孔の直径0.5cmの円孔がみられる。二次焼成を被ったのか、全体的にやや赤味を帯び、裾部内面には煤が付着する。中期後半の所産。

出土遺物の年代観や軸を同じくして並行するように築かれた柵列3006のAMS分析の結果から、柵列3003は弥生時代中期後葉～後期前半頃の所産と捉えておきたい。

柵列 3002 (図 73) 調査区中央部、 $X = -136.310 \cdot Y = -42.175$ 付近に位置する。柵列3002の南側約3.5mには建物3005がある。柵列3002は $N-67^\circ - W$ を軸にし、3基のピット(2間で)構成される。検出長は約3.6mで、柱間は心々距離で1.7~1.9mである。柱掘方の平面形は不整円形或いは不整楕円形を呈し、直径または長軸が約0.25m、深さは約0.05~0.3mである。3152ピットで直径0.1m強の柱痕跡を確認した。柵列3002に関しては、3151ピットで弥生土器片が出土しているが、時期の特定には至らなかった。

柵列 3001 (図 73) 柵列3002の北東側約1.2mに位置する。柵列3001は柵列3002と軸をほぼ同じくし、 $N-71^\circ - W$ を指向する。5基のピット(4間で)構成される。検出長は約6.5mで、柱間は心々距離で1.55~1.85mである。柱掘方の平面形は不整円形或いは不整楕円形を呈し、直径または長軸が約0.15~0.25m、深さは約0.15~0.2mである。柵列3001に関する遺物は3147ピットで細片となった弥生土器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。

柵列 3008 (図 73) 柵列3001の南西側に位置し、柵列3001と直交する $N-20^\circ - E$ を軸とする。4

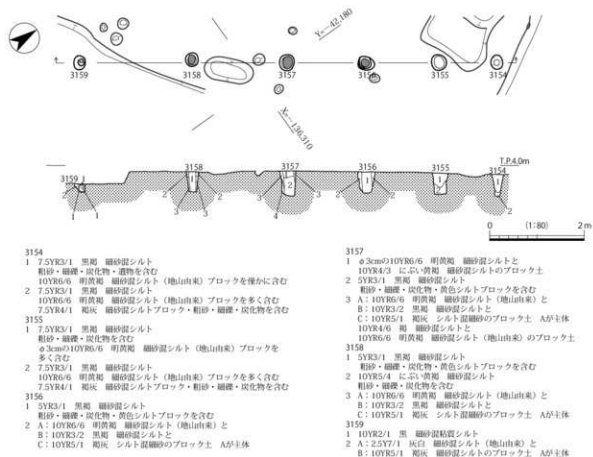


図 72 柵列 3003 平・断面図

基のビット(3間)で構成される。検出長は約4.7mで、柱間は心々距離で1.5~1.6mである。柱掘方の平面形は不整形円形或いは不整楕円形を呈し、直径または長軸が約0.25~0.3m、深さは約0.1~0.3mである。なお、北端に位置する3278ビットは攪乱の底で検出した為、上部が削平されており残存した深さは0.25mであった。柵列3008に関しては、3099ビットで弥生土器片が出土しているが、時期の特定には至らなかった。

柵列 3007 (図 74) 調査区南西側、 $X=-136.340 \cdot Y=-42.168$ 付近に位置し、北側約6mには建物3012がある。柵列3007は $N-11^{\circ}-W$ を軸とし、4基のビット(3間)で構成される。検出長は約4.8mで、柱間は心々距離で1.5~1.9mである。柱掘方の平面形は円形或いは不整楕円形を呈し、直径または長軸が約0.2m、深さは約0.35~0.4mである。柵列を構成する全てのビットに直径0.1m弱、残存長0.2~0.41mの柱材が遺存していた。柵列3007に関する遺物は3264・268ビットで細片となった弥生土器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。

ビット (図 67・68・71・75・図版 23) ビットは調査区のほぼ全域で検出されており、掘立柱建物や柵列に復元出来たもの以外にも多くのビットが存在している。ビットは直径0.2~0.4m・深さ0.3~0.7mを測るものが主体で、柱根を残すものや柱痕跡がみられるものが存在することから、多くのものが柱穴であると思われる。なお、柱根が遺存するものは調査区南側で確認される傾向にあった。以下に、柱材が遺存するものや遺物の出土がみられる等の特徴的なビット数基に関して記載を行う。

3061 ビット (図 67・75) 調査区北西部、建物3010の北西側約0.6mに位置する。3061ビットは長軸0.42m、短軸0.33mを測り、平面楕円形を呈する。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は炭化物や地山由来の黄色系シルトブロックを含んだ第8層系の黒褐色細砂混シルトである。土坑底面からやや浮いた状態で弥生土器壺体部片や高坏片が出土している。このうち図化出来たのが高坏脚筒部(図67-174)である。筒部は短く、筒部中程がやや膨らみエンタシス状になる。弥生時代中期頃の所産であろうか。

3060 ビット (図 75・図版 23) 調査区中央部東寄り、 $X=-136.307 \cdot Y=-42.173$ 付近に位置する。3060ビットは平面隅丸方形を呈し、長辺が0.6m、短辺が0.5mを測る。ビット南側は攪乱によって切られている。断面形は縦長の逆台形を呈し、深さは約0.5mである。埋土は3枚に分かれ、上層が黄褐色細砂混シルト(地山由来か)と黒褐色シルト(第8層由来)のブロック土、中層が黒色シルト、下層が灰白色細砂混シルト(地山由来)である。ビット底面中央やや北寄りに、一辺が15cm前後、厚さ4cm程度の2枚の板材が一部を重ねるように敷かれていた。礎板として利用されたと考えられる。このように礎板を有するビットは今回の調査では3060ビットのみであった。

出土遺物には非常に薄い器壁の壺体部片がある。器壁が薄いことを勘案すれば布留式壺の可能性が高い。古墳時代前期のビットと考えておきたい。

3224 ビット (図 67・68) 調査区南西部、建物3003-2の南辺を構成する3223ビットの西側約0.2mに位置する。3224ビットは横長の不整形を呈し、長軸は約0.45m、短軸は約0.3mを測る。ビット北側は2段に掘り込まれ、ビット底面中央に柱当たりがみられる。検出面からの深さは約0.5mである。遺物はビット上部から弥生土器片(図67-175)の出土があった。175は壺底部か。底部外面の下から2cmのところに長さ0.7cm、幅0.4cmの靱玉痕が1つみられる。中期後半頃の所産であろう。

3270・3271・3272・3273 ビット (図 71) 調査区南東部、建物3001の南東側で検出したビット群である。平面形は円形や不整楕円形を呈し、直径或いは長軸が約0.1~0.15m、深さが0.4~0.45mを測る。いずれのビットにも直径0.1m前後、残存長0.43~0.5mの柱材が遺存していた。

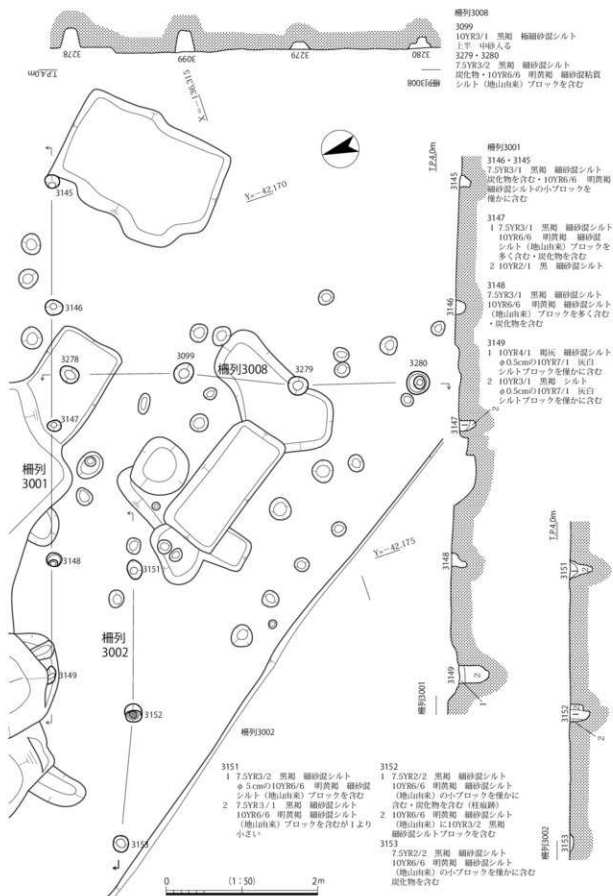


図73 柵列3001・3002・3008 平・断面図

土坑 (図 76 ~ 104・図版 22・23) 土坑は調査区のほぼ全域で検出されている。性格は判然としないものが多いが、調査区中央部に位置するものに木製品の出土が顕著であった。また、調査区南側の Y = -42.170 ライン以東の傾斜変換点にあたる T.P. 3.6 ~ 3.5m 間には大型の土坑が連続して掘削されていた。土坑掘削当初の性格は判然としないが、大型土坑群(3008 ~ 3012 土坑)の埋土上層からは多量の弥生土器片や石器等が出土していることから、最終的に廃棄土坑として使用された蓋然性が高い。

3045 土坑 (図 76・77) 調査区北西部、建物 3010 の北辺と重なる部分に位置する。平面形は不整形円形を呈し、直径は約 0.7m を測る。断面形は縦長の逆台形を呈し、検出面からの深さは約 0.9m である。埋土は 2 枚に分かれ、上層が炭化物や土器片を多く含み、比較的締まりの良い第 8 層系の黒褐色細砂混シルト、下層が土器細片や地山由来の灰白色細砂ブロックを含む黒色細砂混粘質シルトである。明瞭な湧水は確認出来なかったが、土坑下部に行くほど粘性が高まり、水分が顕著になって行くことから、井戸または水溜として使用されたものと推定される。

出土遺物は弥生土器がある。特に高環が顕著にみられた。このうち図化できたものは壺、高環(図 77-176 ~ 178)である。176 は広口坪。口縁端部を下方に拡張させ、端面に 2 条の凹線が巡る。177・178 は高環。177 は坏部。178 は脚部。176・177 は中期後葉の所産。

3046 土坑 (図 76・77) 3045 土坑の東側約 0.8m に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸が約 0.6m、短軸が約 0.5m を測る。断面形は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは約 0.2m である。埋土は炭化物や地山由来の黄橙色細砂混シルトブロックを含む第 8 層系の黒褐色細砂混シルトである。出土遺物には弥生土器片や土師器片がみられた。このうち図化出来たのは小型丸底土器(図 77-179)である。179 は体

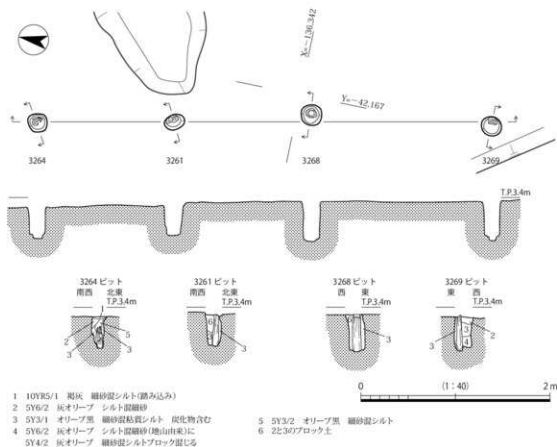


図 74 櫛列 3007 平・断面図

部下半以下を欠失する。扁球形の体部で、口縁部は短い。古墳時代初頭（庄内期併行）の所産。

3048 土坑 (図 76・77・図版 45) 3045 土坑の南側約 1 m に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸が約 1.9 m、短軸が約 1 m を測る。断面形は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは約 0.1 m である。埋土は炭化物や地山由来の黄褐色細砂混シルトブロックを含む第 8 層系の黒褐色細砂混シルトである。土坑中央部で底面から少し浮いた状態で甕が潰れたような状態で出土している。この他細片となった弥生土器やサヌカイト製の石器(石鎌・使用痕のある剥片・剥片)が出土している。このうち図化出来たのが甕(図 77-180)と石鎌(図 77-181)である。180 は口縁部端面に刻みを施す。前期末～中期初頭の所産。181 は凹基式石鎌である。加工の進行により主要剥離面は不明。左脚端部を欠損する。長さは 2.95 cm、幅は 1.6 cm、厚さは 0.3 cm、重量は 1.05 g である。出土遺物が限定されることから弥生時代前期末～中期初頭の遺構と捉えられる。

3226 土坑 (図 76) 調査区北側の南東隅、 $X = -136.293 \cdot Y = -42.171$ 付近に位置する。土坑北側は攪乱によって切られている。現状で平面形は不整形台形を呈し、長辺は約 0.8 m、短辺が約 0.5 m を測る。断面形は逆凸字状を呈し、検出面からの深さは 0.65 m である。断面観察によれば、土坑は第 8 層から切り込まれている。埋土は 3 枚に分かれ、上層が炭化物や地山由来のぶい黄褐色シルト混粗砂ブロックを含む第 8 層系の黒褐色粗砂混シルト、中層が第 8 層系の黒色粗砂混シルト(粘性が高い)、下層が褐灰色シルト混粗砂である。明瞭な湧水は確認出来なかったが、土坑下部に行くほど粘性が高まり、水分が顕著になることから、井戸または水溜として使用されたものと推定される。出土遺物は少なく、細片となった弥生土器やサヌカイト製楔形石器片があるのみで、時期の特定には至らなかった。

3051 土坑 (図 76) 調査区中央部北東側、 $X = -136.297 \cdot Y = -42.177$ 付近に位置する。土坑北及び南側は攪乱によって切られ、平面形は不整楕円形を呈する。長軸で約 0.65 m、短軸で約 0.5 m を測る。断面形は不整な逆凸字状を呈し、検出面からの深さは約 0.55 m である。埋土は 4 枚に分かれ、上層が第 8 層系の黒褐色細砂混粘質シルト、中層が炭化物やぶい褐色シルトブロックを含む暗褐色粗砂混粘質シルト、下層が炭化物を多く含む第 8 層系の黒褐色細砂混粘質シルト、最下層がぶい黄褐色粗砂である。明瞭な湧水は確認出来なかったが、土坑下部に行くほど粘性が高まり、水分が顕著になって行く

ことから、井戸または水溜として使用されたものと推定される。

遺物は最下層から土師器甕(図 77-182・183)が出土した。182・183 ともに丸底の甕の体部下半以下で、外面に煤が付着する。182 の調整は外面が横位或いは斜位のハケメを、内面は縦位のヘラケズリを施す。183 の調整は外面が縦位のハケメを、内面は横・斜位のヘラケズリを施す。いずれも古墳時代前期(布留式併行期)の所産であろう。出土遺物が限定されることから、古墳時代前期の遺構と捉えられる。

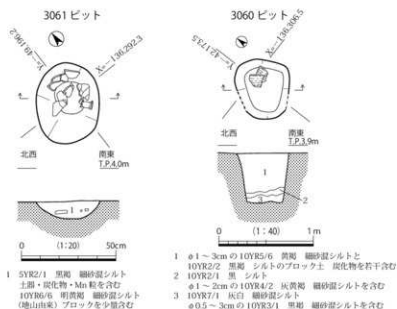


図 75 3061・3060 ビット 平・断面図

なお、先述した3226土坑の埋土は当土坑に類することから、同時期の遺構の可能性を持つ。

3052 土坑 (図 78~81・図版 22・39・44・51・52) 調査区中央部、 $X = -136.310$ ・ $Y = -42.175$ に位置する。土坑北側は攪乱によって切られる。平面形は不整形円形を呈し、直径は約 1.4 m を測る。断面形は縦長の逆台形を呈し、検出面からの深さは約 1.4 m である。埋土は大きく 3 枚に分かれ、上層が地山由来の灰白色シルトやにぶい黄橙色シルトブロックを含む第 8 層系の黒褐色シルト、中層が地山由来の灰白色シルトブロックを含む第 8 層系の黒色シルト、下層が水成堆積である褐色シルトの薄層を挟む黒色シルトである。中層には土器や木製品が、下層には木片等の有機物が多数含まれている。明確な湧水は確認出来なかったが、埋土の状況から水溜り又は井戸として使用されたものと推察される。

出土遺物には多くの弥生土器片や石器(楔形石器・サヌカイト製剥片・水晶製剥片)、石製品(砥石)、軽石(図版44-200)、木製品(農具・木錘・有頭棒・棒状品・丸太状品・板材・杭状品・自然木等)がある。柱材と推定される丸太材等の多くの木製品は火を受けたようで、炭化しているものも認められた。この他、埋土の下層を中心に水洗選別を行ったところ、サヌカイト製チップ 14 点・剥片 1 点、赤チャート製チップ 4 点、炭化米 1 点、ヒョウタンの仲間の果皮片 7 点、ヒョウタンの仲間の種子 5 点、マクワウ

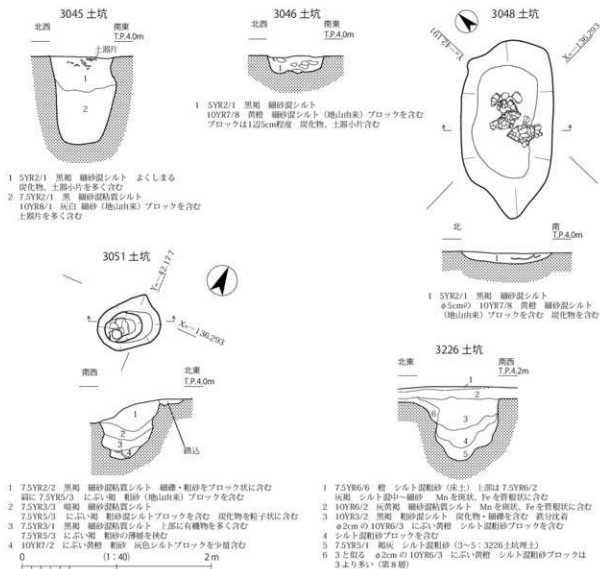


図 76 3区 土坑 平・断面図

りの仲間の種子29点、サンショウ種子1点、ノブドウ属種子2点、クログワイ属種子23点、オナモミ種子17点、サルノコシカケ科子実体1点、コガネムシ科上翅5点を検出した。出土遺物のうち弥生土器12点、石器・石製品4点、木製品6点を図化した。

184~187は壺である。184は広口壺或いは甕。口縁部は上方に肥厚させて、内傾する端面を持つ。口縁部端面には沈線状の凹線が巡る。体部外面に縦位のヘラミガキ、内面は肩部以下が横位のヘラケズリを施す。口縁部下端から頸部外面には煤が付着する。備前・備中地域からの搬入土器であろう。185は直口壺か。口縁部端からやや下がった位置に2条の沈線を巡らせる。生駒西麓産の胎土。186は長頸壺。口縁部を欠失する。扁球気味の胴部を有する。頸部下端には5条のヘラ描き沈線を巡らせる。187の体部外面には煤が付着。生駒西麓産の胎土である。188~190は甕である。188の体部外面には煤が付着する。189は大きく外反する口縁部を有し、口縁部端面には凹線が1条巡る。体部外面に縦位のハケメを施し、肩部(体部最大径より少し上位)にクシ状工具による刺突文が巡る。内面は頸部から体部上半が横位のハケメを、体部下半は縦位のヘラケズリを施している。外面及び頸部以下の内面に煤が付着。備前・備中地域からの搬入土器であろう。190は底部。191は鉢である。口縁部を内外面ともに肥厚させ、端部は平坦に仕上げる。体部上半外面に幅の狭い麁状文を3条以上巡らせる。二次焼成を被ったのか、表面に剥落がみられる。192~194は高坏。192は坏部。坏部上半はやや内傾しながら立ち上がる。口縁部は外側を肥厚させる。端面はやや内傾し、凹線状に窪む。外面には煤が付着。193は脚筒部。外面に縦位に11条の波状文を巡らせる。194は脚部。脚端部は内傾し、端部を上方に拡張させる。端面は凹線状に窪む。脚部外面上半には細い沈線を3条巡らせ、下半には貫通しない三角形の透かし孔が21箇所に入れられる。調整は外面が縦位のヘラミガキ、内面は横位のヘラケズリを施す。備前・備中地域か

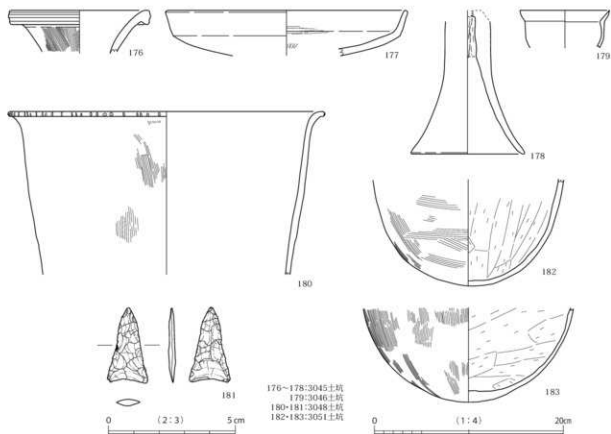


図77 3区 土坑 出土遺物

らの搬入土器であろう。195は器台脚部。器壁が非常に厚い。脚端部は上方に僅かに拡張させ、端面は凹線状に窪む。184・188・189・191・192は中期後葉、186・194・195が中期後葉～後期初頭頃の所産である。

196～199は石器・石製品である。196はサヌカイト製磨製石剣を転用した楔形石器。表裏面に鏝を作り出すように研ぎ分けされた研磨部分が僅かに確認出来る。但し、断面形は丸味を帯びており、鏝は明瞭ではない。研磨面は両側面から大半が剥離され、両側辺にツブシ痕を有することから楔形石器として使用された可能性が高い。両端は側辺からではなく、表裏面側からの打撃により折れている。残存長は4.8cm、幅は2.55cm、厚さは1.05cm、重量は12.44gである。197～199は砥石。197は黒色泥岩製の

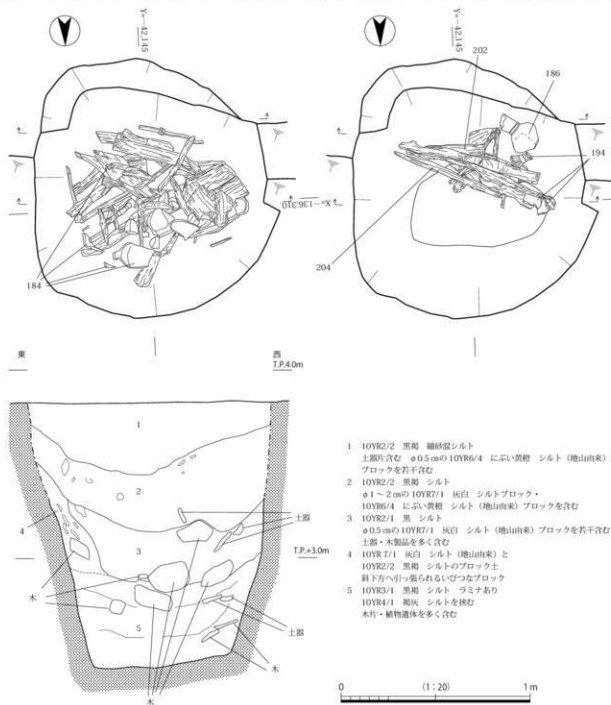


図 78 3052 土坑 平・断面図

小型の砥石である。5面に使用痕が認められる。肌理は細かく、使い減りが顕著である。一端は折れている。残存長は5.6cm、幅は2.5cm、厚さは2.2cm、重量は39.74gである。198は細粒優白質花崗岩製の砥石。表面左側に平滑な自然面を残し、2面に使用痕が認められる。裏面は大きな2枚の剥離面となっている。この剥離は表面にみられる2枚の剥離にそれぞれ対応することから同時割れを起こしたと考えられる。残存長は9.9cm、残存幅は11.8cm、残存厚は4.7cm、重量は520.23gである。199は斑礫岩製の大型砥石。両端を欠失する。4面を使用か。表面から左側面にかけて被熱痕跡がみられる。残存長は11.7cm、幅は11.5cm、厚さは10.9cm、重量は2,693gである。図版44-200は軽石。表面は褐灰色、内部は淡黄色を呈し、あまり大振りな気孔がなく、表面は密にみえる。長さは7.6cm、幅は6cm、厚さは4.6cm、重量は15.72gである。

201-206は木製品。201はアカガシ亜属製の直柄横鎌もしくは泥除の肩部か。肩部に一辺1.5cm前後の方形孔を穿つ。木目は横方向に走る。残存長は10.9cm、残存幅は6.2cm、厚さ2.2cmである。202はアカガシ亜属製の直柄平鎌の未成品か。上端面に接するようにA型隆起が作り出され、柄孔が穿孔されている。表面にはハツリ痕が残る。木目は横方向に走る。残存長は35.5cm、残存幅は9.6cm、厚さは4cmである。203はヤマガワ製の木錘。直径4cm前後の芯持材を輪切りにして作成。表面は軽く面取りを施しているようである。中央部に幅0.5cm前後の溝状の袂りが巡る。長さは7.2cm、幅は3.9cm、厚さは3.7cmである。204はクスギ製の有頭棒。頭部は長さ3.5cm、幅3.3cmで平面ホームベース型に作り出し、身

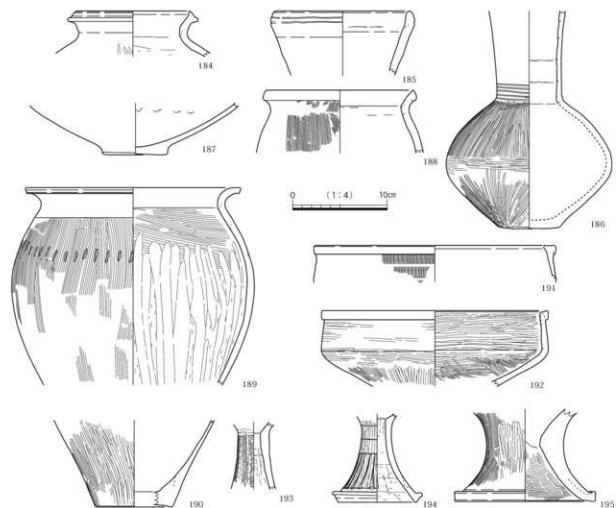


図79 3052土坑 出土遺物①

中央部には例り込みが長さ30cmに亘ってみられる。身の端部は刀身の切っ先のように成形する。側面形は一見すると煙管のような形状であるが、緩やかに弧を描く。長さは64.5cm、最大幅は3.4cm、最大厚は3.9cmである。織機や衣笠の部材等の性格が推察されるが、用途不明品である。205はサカキ製の加工木。直径2cm程度の芯持材を利用。上半部に樹皮を残し、先端に細かい面取りを施している。長さは13.5cm、幅2cm、厚さは1.5cmである。206の側面は一部に欠損がみられるが、大半は残存しており現状で平面不整形形を呈するアカガシ垂属製の板材。表面には細かな線状痕がみられる。長さは15.2cm、幅は12.3cm、厚さは3.8cmである。用途不明品。出土遺物の年代観から中期後葉～後期初頭の土坑と捉えておきたい。

3088 土坑 (図 82) 調査区中央部西寄り、 $X=-136.316 \cdot Y=-42.186$ 付近に位置する。平面円形を呈し、直径は0.45mである。土坑はほぼ直に掘削され、検出面からの深さは約0.2mである。埋土は第8層系の黒褐色細砂混シルトと地山由来の明黄褐色中～細砂・黄褐色細砂混シルトのブロック土である。出土遺物には弥生土器片や土師器片がある。布留式甕片がみられたことから、古墳時代前期頃の土坑と考えられる。

3089 土坑 (図 82) 調査区中央部、建物3005の北西辺を構成する3136ピットに東接する。平面形は円形を呈し、直径は約0.5mである。土坑はほぼ直に掘削されたようであるが、土坑中程の壁面は崩れており袋状を呈する。検出面からの深さは約0.95mである。埋土は地山由来の灰白色～明緑灰シルト

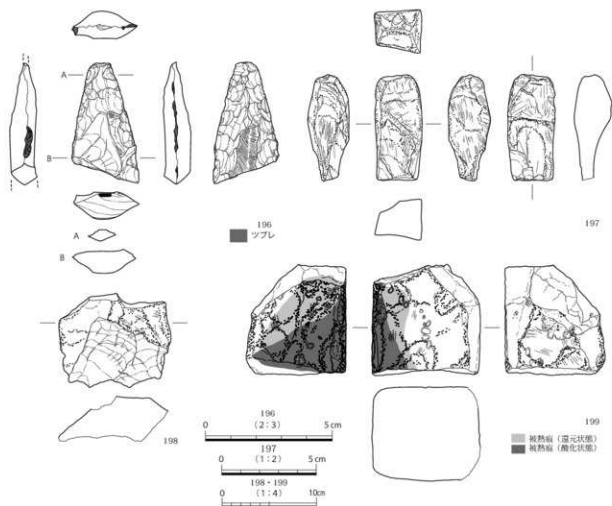


図 80 3052 土坑 出土遺物②

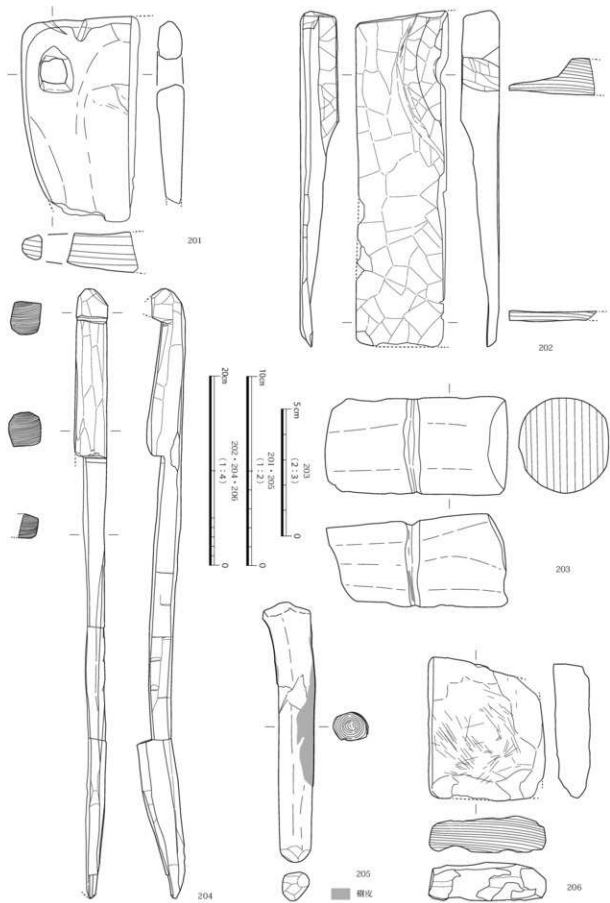


图 81 3052 土坑 出土遺物③

ブロックを含む第8層系の黒色シルト～細砂混シルトで、地山由来シルトブロックの包含の様相で3層に分かれる。下層に炭化物や木片が含まれる。明瞭な湧水は確認出来なかったが、土坑下部に行くほど粘性が高まり、水分が顕著になって行くことから、井戸または水溜として使用されたものと推定される。出土遺物には細片となった弥生土器や土師器がみられたが、時期の特定には至らなかった。なお、埋土の下層を主体に水洗選別を行ったところ、サヌカイト製チップ24点以上、赤チャート製チップ23点以上、先端加工を施した棒状木製品(杭か)、オニグルミ核(半身)3点を検出した。こうした石材が廃棄されていることを勘案すると弥生時代所産の土坑であろうか。

3090 土坑 (図 82) 調査区中央部、建物3005の北東辺を構成する3139ピットの北西約1mに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸が約0.5m、短軸が約0.45mを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは約0.2mである。土坑北側上部から弥生土器片が出土した。このうち2点(207・208)を図化した。207は平底の小型の壺である。体部外面には直径約0.3cm前後の円形刺突文或いはクシ状工具による列点文を巡らせる。208は高環である。脚端部は欠損後、底面側から連続的に打ち欠いており、裾部は短くなっている。坏部と脚部の接合は円盤充填か。中期の所産である。

3036 土坑 (図 82・図版 23) 調査区中央部東側、 $X=-136.313$ ・ $Y=-42.173$ 付近に位置する。平面形は不整隅丸方形を呈し、長軸が約0.75m、短軸が約0.7mを測る。断面形は縦長の逆台形状を呈し、検出面からの深さは約0.65mである。埋土は大きく2層に分かれ、上層が地山由来の灰白～にぶい黄橙色シルトの大型ブロックを含む第8層系の細砂混黒褐色シルト、下層が地山由来のにぶい黄橙色シルトの小型ブロックを含む第8層系の黒褐色シルトである。出土遺物は細片となった弥生土器(前期末～中期初頭:多条沈線の土器等)や土師器、粘板岩製の石包丁片が出土している。このうち土師器裏(209)を図化した。209は口縁端部を内側に肥厚させ、やや内傾する端面を持つ。口縁部外面に煤が付着する。古墳時代前期(布留式併行期)の所産。

3062 土坑 (図 82) 調査区中央部の南東側、 $X=-136.321$ ・ $Y=-42.183$ に位置する。平面形は直径約0.65mの円形を呈し、断面形はボウル状を呈する。検出面からの深さは約0.3mを測る。埋土は3層に分かれ、上層が第8層系の黒褐色シルト、中層が地山由来の明黄褐色シルトブロックを少量含む第8層系の黒色細砂混粘質シルト、下層が地山由来の明黄褐色シルトや中層の黒色細砂混粘質シルトブロックを含む褐色細砂混粘質シルトである。土坑底面の西壁際に長さが約0.25m、幅が約0.2m、厚さが約0.15mの垂角礫が1点置かれていた。出土遺物には細片となった弥生土器や土師器、サヌカイト製刺片2点、モモ核1点がみられた。土師器の中には非常に薄い体部片があることから古墳時代前期(布留式併行期)の土坑である蓋然性が高い。

3041 土坑 (図 83～85・図版 23・40・44・48・51) 3062土坑の東側約0.8mに位置する。平面形は直径約1.5mの円形を呈する。断面形はボウル状を呈し、検出面からの深さは約0.9mである。埋土は大きく3層に分かれ、上層が第8層系の黒色シルト、中層が地山由来のにぶい黄褐～灰黄褐色シルトブロックを含む第8層系の黒褐色シルト、下層が水成堆積でラミナがみられる褐色シルトである。上層中に土器片が、下層に木製品が多量に含まれる。特に顕著であったのが木錘で35点出土した。木錘は土坑北西側で重なるように出土し、土坑中央部では散在的にみられた。明瞭な湧水は確認出来なかったが、土坑下部に行くほど粘性が高まり、水分が顕著になって行くことから、井戸または水溜として使用されたものと推定される。

出土遺物には弥生土器や土師器、石器(サヌカイト製楔形石器・石包丁・サヌカイト製刺片)、軽石、

木製品(木鍾・板材・角材・棒材・自然木等)がある。木製品の中には火を受けたものがあり、炭化しているものも認められた。また、埋土下層で出土した木製品取り上げ後の土坑最下部からサクラ属樹皮2点、モモ核27点以上、ウメ核1点、カナムグラ種子1点、コガネムシ科上翅2点が出土している。このうち土器8点、石器1点、木製品6点を図化した。

210・211は壺である。210は下層から木鍾と共に出土した広口壺。口縁端部を下方に拡張する。弥生後期後半の所産か。211は上層から出土した複合口縁壺。口縁部外面下端を円形浮文で飾る。破片の為、浮文の数等は不明。古墳時代初頭(庄内式併行期)の所産。212～214は甕である。212の口縁部は短く「く」の字に外反し、口縁端部は丸く収める。体部は球形気味である。213・214は口縁端部を内側に肥厚させ、213は平坦な端面を、214は内傾する端面を持つ。213は口縁部外面に、214は体部外面に煤

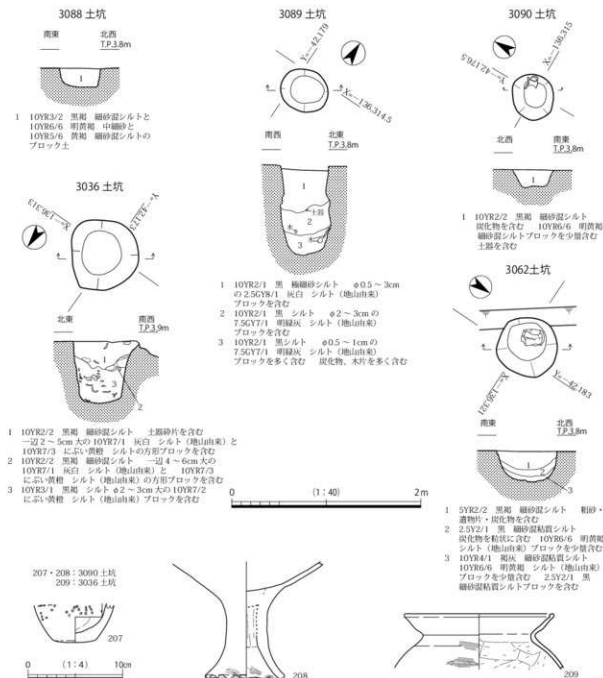


図82 3区 土坑 平・断面図 出土遺物

が付着する。213は下層から、214は上層からの出土。215は複合口縁状の段を持つ中或いは大型の鉢である。口縁端部を僅かに外側へ肥厚させ、口縁部外面下端は外側斜め下方に突出させる。上層から出土。216は小型器台である。受部は浅い皿状で、脚部は「ハ」の字に大きく開く。底径に比して脚部が低い。脚部中程より少し上に円形透かしが3方向に穿たれる。212～216は古墳時代前期(布部式併行期)の所産である。217はミニチュア土器の鉢。底部外面に2条の直線的な圧痕がみられる。内面は放射状にナデを施し、その後、口縁端部を摘まんで仕上げる。二次焼成を被ったのか、口縁部周辺の表面が半周ほど剥落する。218は粘板岩製の直線刃半月形の磨製石包丁である。両端を欠失し、刃部もほとんど残っていない。刃部側には著しい敲打痕がみられる。紐孔は現状で2孔残るが、右図左側辺に紐孔の痕跡が一部認められる。紐孔上部には紐擦れの痕跡がみられる。体部には斜位の研磨痕が残る。残存長は4.9cm、残存幅は3.55cm、厚さは0.55cm、重量は17.92g。

219～224は木鐺である。個別説明の前に木鐺に関して総体的な記述をしておく。先にも述べたように、木鐺は下層から35点出土している。芯持材を使用している為、放射状に亀裂が入って不安定な状態のものが多くみられる。出土資料のうち25点について計測や観察が可能であった。木鐺は側面に孔を穿つタイプと溝状の袢りを巡らせるタイプの2種がみられた。穿孔タイプは14点、袢りタイプは11点である。穿孔タイプの最大法量は長さ9.6cm、幅5.4cm、高さ7.1cm、最小法量は長さ7.9cm、幅4.6cm、高さ5.9cmで、平均法量は長さが8.75cm、幅が5.12cm、高さが5.92cmとなる。袢りタイプの最大法量は長さ16.1cm、幅6.6cm、高さ4.5cm、最小法量は長さ12.9cm、幅6.5cm、高さ5.9cmで、平均法量は長さが15.04cm、幅が6.92cm、高さが6.36cmとなる。穿孔タイプの方が小さい傾向が窺える。なお、計測等が出来なかった資料の中に、穿孔タイプと推定されるものが7点、袢りタイプと推定されるものが1点ある。219・220は穿孔タイプ。直径6cm前後の芯持材を輪切りにして作成。表面は軽く面取りを施しているようである。側面中央に芯から外して穿孔したもの。219は長さが8.4cm、幅が5.8cm、高さが5.9cmである。孔の幅は0.8cm、高さは1cmである。220は長さが9.6cm、幅が5.4cm、高さが5.9cmである。孔の幅は0.6cm、高さは1cmである。221～224が袢りタイプである。直径7～9cmの芯持材を輪切りにして作成。表面は軽く面取りを施しているようである。中央部に幅2cm前後で断面「U」の字状を呈する溝状の袢りが巡る。221は長さが15.7cm、幅は6.9cm、高さが6.6cm。222は長さが15.8cm、幅は7.4cm、高さが6cm。223は長さが15.4cm、幅は8.9cm、高さが7.3cm。224は長さが18.1cm、幅は8.2cm、高さが6.8cm。219～222・224はクヌギ、223はコナラ亜属製である。なお、木鐺とともに長さ40cm、幅3cm前後の棒・角材も数点出土したが、目盛がみられなかったことから編目盛板として扱わなかった。出土遺物の年代観から古墳時代前期の土坑と捉えられる。

3091 土坑 (図 86・図版 23) 調査区中央部南側、X=-136.319・Y=-42.175に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長辺が約0.7m、短辺が約0.55mを測る。断面形は縦長逆台形を呈し、検出面からの深さは約0.75mを測る。埋土は4層に分かれる。最上層は第8層系の黒色シルトブロックを含む褐灰色細砂混シルト。上層が第8層系の黒褐色シルト、中層が水成堆積と思われる黒褐色シルトで、褐灰色シルトのラミナがみられる。下層が地山由来の明緑灰色シルトブロックを含む黒色シルトである。明瞭な湧水は確認出来なかったが、土坑下部に行くほど粘性が高まり、水分が顕著になって行くことから、井戸または水溜として使用されたものと推定される。

出土遺物は細片となった弥生土器や土師器が出土しており、最上層で土師器喪体部がまとまって出土した。土坑は掘削の底で検出した為、本来は1個体あったものが削平されたと考えられる。このうち土

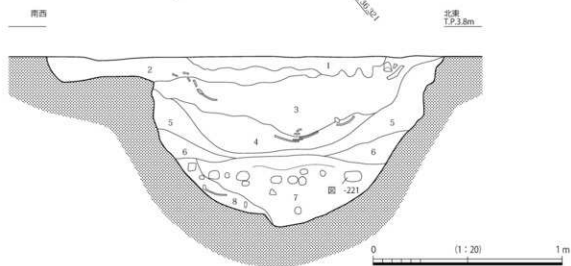
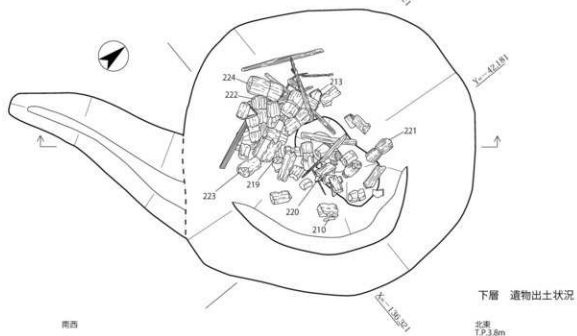
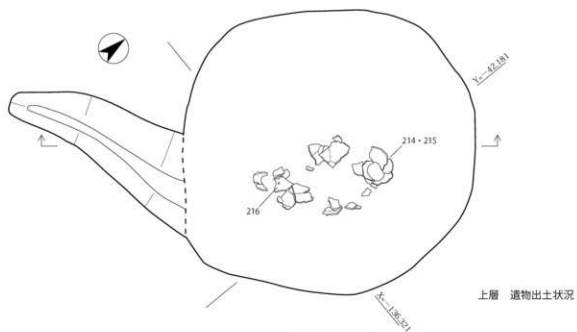


图 83 3041 土坑 平·断面图

3041 土坑土色

- 1 10YR3/2 黒陶 細砂混シルト φ2～3cmの10YR5/4 にぶい黄褐色 シルトブロックを含む 土層碎片を含む
 2 10YR2/2 黒陶 細砂混シルト 土層碎片を含む
 3 10YR2/1 黒 細砂混シルト 土層片を含む
 4 10YR2/1 黒 シルト 土層を多量に含む
 5 10YR2/2 黒陶 シルト φ1～3cmの10YR6/4 にぶい黄褐色 シルト(地山由来)ブロックを含む
 6 10YR2/2 黒陶 シルトと φ3～5cmの10YR6/2 灰黄褐色 シルト(地山由来)のブロック土
 7 10YR5/1 緑灰 シルト ツミナあり 木製品を多く含む
 8 10YR2/2 黒陶 シルト φ1～2cmの7.5GYR/1 明緑灰 シルト(地山由来)ブロックを含む

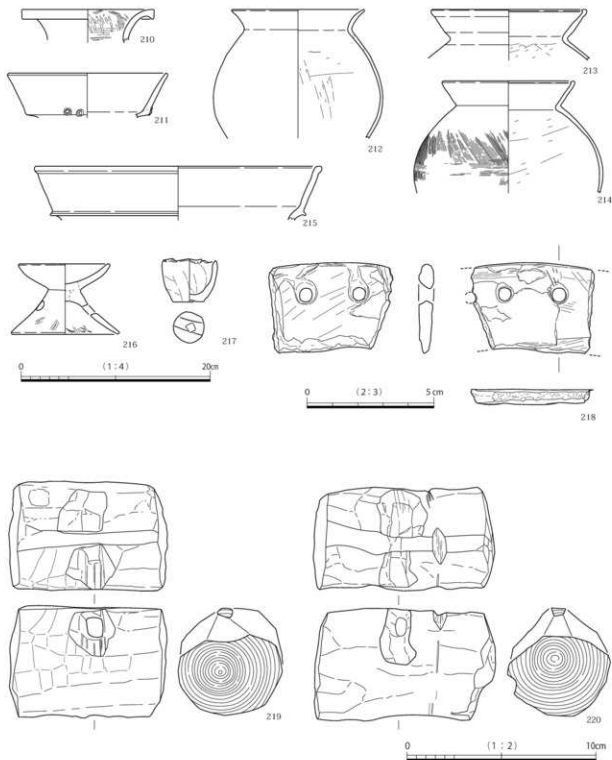


図84 3041 土坑 出土遺物①

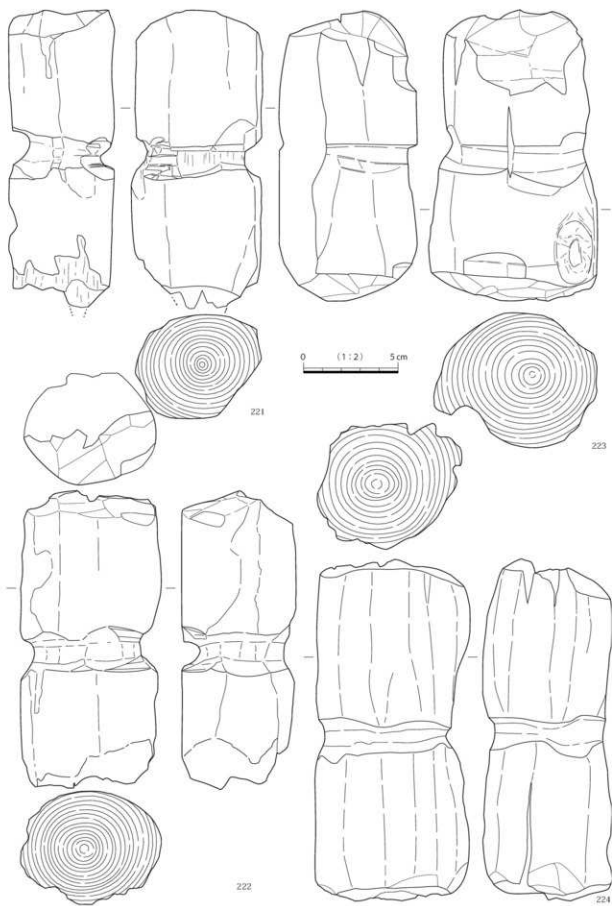


图 85 3041 土坑 出土遺物②

師器囊1点(図86-225)を図化した。225の口縁部はあまり立ち上がりなく大きく開き、外傾する端面を持つ。古墳時代前期(布留式併行期の所産)であろう。

3053 土坑 (図 86・図版 23・40・46) 3091土坑の南側約0.5mに位置する。平面隅丸方形を呈し、長辺が約1.15m、短辺が約1.05mを測る。土坑北側約3分の2は攪乱によって切られている。断面形は逆凸字状を呈し、検出面からの深さは約1.1mを測る。埋土は大きく3層に分かれ、上層が大きな地山由来の灰白色シルトブロックを含む黒褐色シルト、中層が小さな地山由来の灰白色シルトブロックを含む黒色シルト、下層はラミナがみられ、黒色シルトブロックを含む地山由来の灰白色シルトである。下層上面に土師器囊(228)が横倒しの状態で置かれていた。明瞭な湧水は確認出来なかったが、土坑下部に行くほど粘性が高まり、水分が顕著になって行くことから、井戸または水溜として使用されたものと推定される。

出土遺物には上述した土師器囊以外に細片となった弥生土器や土師器、石器(錐)、木製品(棒材、板材)、炭化米1粒がみられた。このうち弥生土器・土師器6点、土製品1点(226~232)、サヌカイト製鎌(233)を図化した。226は短頸壺か。口縁部は短く、緩やかに斜め上方に立ち上がり、端部は僅かに水平に折り返す。227・228は囊。227の口縁端部はほぼ直に立ち上がり、受口状の口縁を持つ。228は口縁端部を内側に肥厚させ、ほぼ平坦な端面を有する。底部は丸底。口縁部外面から体部外面上半にかけて吹きこぼれ痕が、底部内面や体部内面下半には散在的にコゲが付着している。229は鉢の底部か。外面に黒斑がみられる。230は鼓形器台の脚台部。底径は15cmを測る。内面は横位のヘラケズリを、外面はヨコナデを施す。山陰地域からの搬入土器であろう。231は体部片。弥生土器か。外面は縦位の細かいヘラミガキが施され、非常に細く浅い弧線が6条描かれる。弧線は横方向のものが先行し、縦方向が新しい。絵画であろうか。226・227・230は後期後半、228は古墳時代前期の所産であろう。232は円板状土製品。囊の底部を転用か。半身を欠損する。縁辺は内外面両側から打ち欠きを行い調整している。重量は31.97g。233はサヌカイト製鎌。両極技法で出来た角柱状の剥片素材を利用したものか。先端を欠損し、左側辺も縦割れを起こして欠失する。残存長は4.2cm、残存幅は1.3cm、厚さは1.1cm、重量は6.77g。出土遺物の年代観から古墳時代前期の土坑と捉えられる。

なお、3088~3091・3062・3041・3053土坑(但し、3053土坑は北側部分のみ)は同一の攪乱の底で検出した為、上部が周囲よりも0.1~0.2m程度削平されている。

3032 土坑 (図 87・図版 22・39) 調査区南側北辺沿い、 $X=-136.310$ ・ $Y=-42.161$ に位置する。土坑南側部分のみが調査地内で検出された為、北側を拡張して全体を検出した。平面形は隅丸方形を呈し、長辺が約0.8m、短辺が約0.7mを測る。断面形は縦長逆台形を呈し、検出面からの深さは約0.9mである。埋土は大きく3層に分かれ、上層が土器細片を多く含む第8層系のオリブ黒色細~粗砂混シルト、中層が大きな地山由来の灰オリブ色シルトブロックを含む第8層系のオリブ黒色シルト、下層が小さな地山由来の灰オリブ色シルト・灰白色シルト混中砂ブロックを含む黒色シルトである。土坑底面南壁際には高坏が逆位で置かれていた。

出土遺物には高坏以外に細片となった弥生土器(中期後半~後期頃)やサヌカイト製剥片、モモ核1点がある。このうち弥生土器2点(234・235)を図化した。234は囊。235は高坏である。坏部は斜め上方に開くように延び、口縁部は直に短く立ち上がる。口縁端部は丸く収め、端面は凹線状に微かに窪む。中空の長い脚筒部を持ち、脚裾部は短く「ハ」の字に開く。裾部中程には外面穿孔の直径約0.4cmの円形透かしが2孔一対で6方向に穿たれている。また、裾部外面末端には凹線を1条巡らせる。坏部外面上

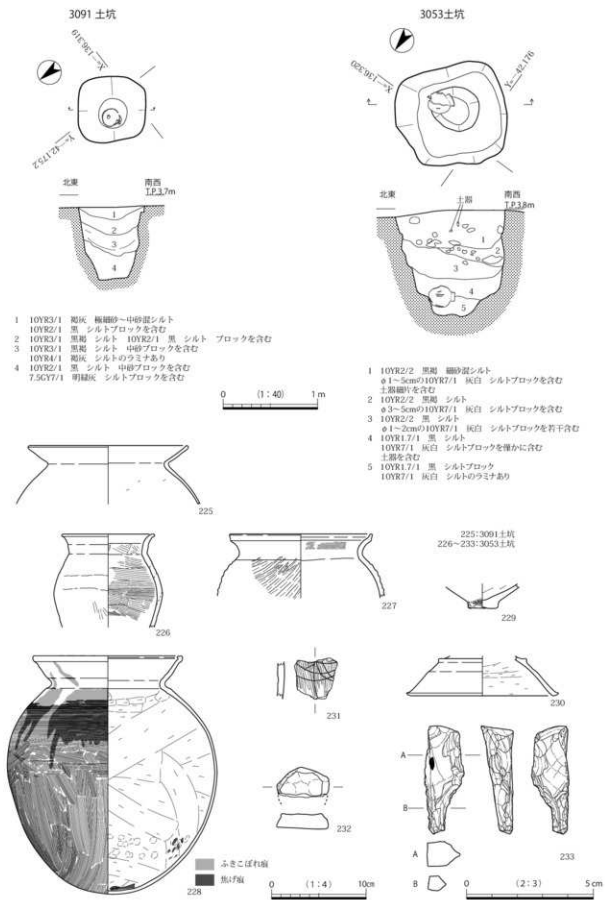
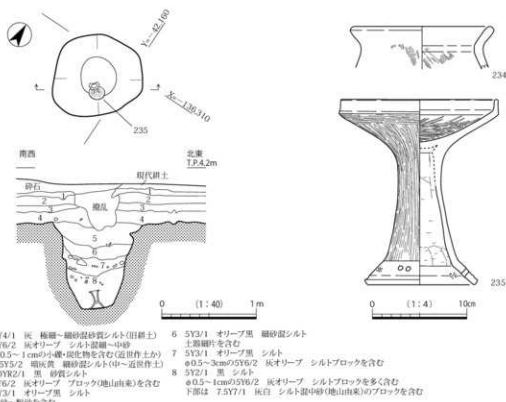


図 86 3091・3053 土坑 平・断面図 出土遺物

部は横位の細かなヘラミガキを、坯部外面下部及び脚筒部外面は細かな縦位のヘラミガキを、坯部内面は横・斜位の細かなヘラミガキを、脚筒部内面は横位のヘラケズリを施す。備前・備中地域からの搬入土器か。234は中期後葉～後期初頭頃、235は中期後葉の所産であろう。出土遺物の年代観から中期後葉の土坑であろう。

3006 落込み (図 88～94・図版 37・44～50) 調査区南側の北東部、 $X=-136,314 \cdot Y=-42,159$ 付近を始点として等高線と並行するように南西方向に帯状に広がる落込みである。落込みの検出長は東西約 24m、検出幅は南北約 3.5～11m を測り、落込み西側は調査区外へと延びるようである。落込みは浅い皿状の断面形を呈する第 8 層(黒褐色細～中砂混砂質シルト)の溜まりであった。3006 落込みを掘削し終えた下位の基盤層上面で後述する 3007～3012 土坑や 3094 落込みを検出した。落込みからは多量の弥生土器片や石器・石製品が出土しているが、これらは本来下位の遺構に伴う遺物が巻き上げられたものと推察される。また、須恵器や土師器片も僅かに出土しているが、これは上位層の遺物が踏み込み等により混入したものである。なお、自然遺物としてモモ核が 1 点出土している。

図化出来た遺物は須恵器・土師器が 2 点、弥生土器が 36 点(図 90・91-236～273)、土製品が 1 点(図 91-274)、石器・石製品が 24 点(図 91～94-275～298)である。これら以外に軽石 2 点(図版 44-299・300)を写真のみ掲載した。236 は須恵器坯身である。受部は短く、水平に伸びる。胎土には黒色粒が多くみられ、ヘラケズリによって墨流し状に滲む。6 世紀後半の所産であろう。237～251 は壺である。237 は加飾性垂下口縁壺。口縁端部を上下に拡張する。口縁端部は欠失。口縁部端而下端に竹管文を押した円形浮文を貼り付けている。古墳時代初頭(庄内式併行期)の所産。238～244 は広口壺である。238 は大きくラッパ状に開く口縁部を持つ。239 の口縁部は短く緩やかに外反し、口縁部端而下端に刻みを入れる。240 は口縁端部を僅かに上下に拡張する。口縁部端而下端に刻みを施し、鋸歯状に



- | | |
|------------------------------|-------------------------------------|
| 1 5Y4/1 灰 輪廊～細砂混砂質シルト(旧耕土) | 6 5Y3/1 オリーブ黒 細砂混シルト |
| 2 5Y6/2 灰オリーブ シルト混細～中砂 | 土器断片を含む |
| φ0.5～1cmの小礫・炭化物を含む(近世作土か) | 7 5Y3/1 オリーブ黒 シルト |
| 3 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂混シルト(中～近世作土) | φ0.5～3cmの5Y6/2 灰オリーブ シルトブロックを含む |
| 4 10YR2/1 黒 砂質シルト | 8 5Z2/1 黒 シルト |
| 5 5Y3/1 オリーブ黒 シルト | φ0.5～1cmの5Y6/2 灰オリーブ シルトブロックを多く含む |
| 中砂～粗砂を含む | 下部は 7.5Y7/1 灰白 シルト混中砂(地山由来)のブロックを含む |

図 87 3032 土坑 平・断面図 出土遺物

仕上げる。241は口縁部端面に1条のヘラ描き沈線を巡らせ、その上下に刻みを施す。242も口縁部端面に2条のヘラ描き沈線を巡らせ、その上下に綾杉状に刻みを施す。なお、上の沈線は刻みの後に、下の沈線は刻みの前に巡らせている。口縁部内面には平面矢羽状を呈する刻みを2列巡らせる。また、直径0.6cmの補修孔が1孔みられる。238～242は前期末～中期初頭の所産。243の口縁部は僅かに上下に拡張する。摩滅が著しく、器面が荒れており判然としないが口縁部内面にクシ描きの波状文が施されていたかも知れない。中期中頃の所産であろう。244の口縁部は下方に折り曲げ、垂下させる。摩滅が著しく器面が荒れており判然としないが、口縁部端面にクシ描きの波状文が施されていたかも知れない。生駒西麓産の胎土である。中期中半の所産。245～248は短頸壺か。248の頸部は短く直に立ち上がり、口縁部を僅かに内側に肥厚させる。245は中期中葉、246～248は中期後葉～後期初頭の所産であろう。249は頸部片。断面三角形形状を呈する3条以上の貼付け突帯を巡らせる。摩滅が著しく突帯上の刻みの有無は不明。前期末～中期初頭の所産。250は体部片。クシ状工具による押引文と波状文を巡らせる。中期の所産であろう。251は上げ底の底部。

252～265は甕である。253・254の口縁部は大きく開き、端面に刻みを入れる。また、254の頸部

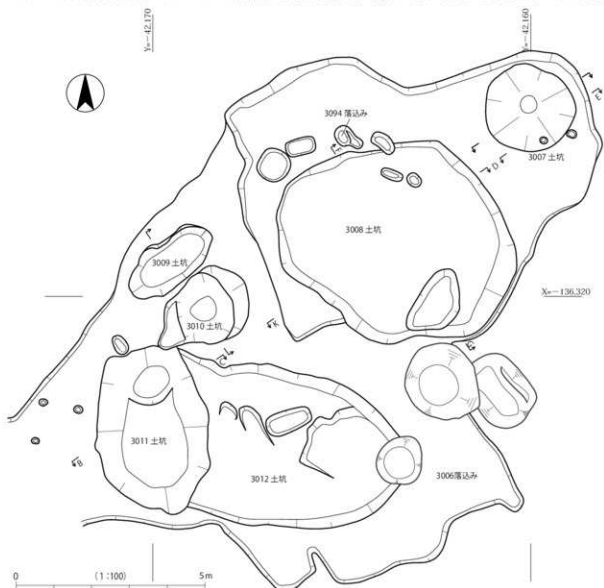


図 88 3006 落込み地 平面図

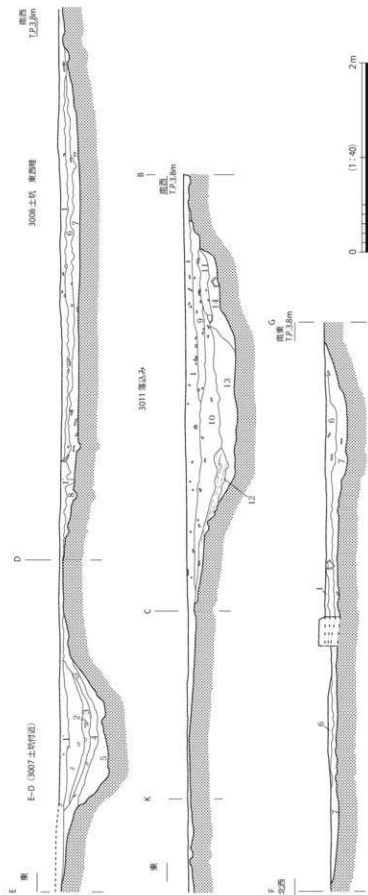


図 89 3006 落込み他 断面図

- 1 5YR2/1 黒 細～中砂質シルト
上層部、サメイカイト等の遺物を多く含む (3006落込み参照)
1* 7.0YR4/1 黒灰 細～中砂質シルト
上層部、サメイカイト等の遺物を多く含む
概ね下部から上層部にかけては色調明るく、砂質分が濃く感じられる (3006落込み参照)
- 2 10YR4.7/1 黒 中砂質シルト 上層部、灰化物を含む
3 2.5Y2/1 黒 シルト 上層部、灰化物を含む
4 10YR4.7/1 黒 中砂～細砂質シルト 上層部、灰化物を含む
5 10YR4.7/1 黒 中砂～細砂質シルト
0.5～2cmの7.5YR/1 灰白 シルト・プロッタを含む
上層部、灰化物を含む 下部が粘り強い
6 10YR2/1 黒 シルト 僅かに細砂を含む
10YR2/2 灰黄 シルト・プロッタ、灰化物を含む
10YR2/1 黒 シルト～中砂質シルト
上に比して遺物の含有率が極めて少なくなる
14 2.5Y5/1 黄灰 シルト 0.5～2cmの5YR/1 灰白 シルト (他山由来) プロッタ、
地山 7.5Y5/8/1 明黄灰～5YR/1 灰白 シルト～中砂質シルト
- 7 2.5Y2/1 黒 砂質シルト
5YR/1 灰白～2.5YR/2 灰白 シルト～砂質シルト (他山由来) プロッタを含む 上部少ない
8 7.5YR5/1 黒 細～中砂質シルト
2.5YR/1 灰白 砂質シルト (他山由来) プロッタを含む
9 7.5YR2/1 黒 細砂質シルト 上層部、細かな灰化物を含む
10 10YR2/1 黒 シルト 上層部や比較的上面りな上層部を含む
11 10YR3/1 黒 細 シルト 上層部～中砂 灰化物、上層部を含む
12 7.5YR2/1 黒 細～中砂質シルト
10YR/1 灰白 細砂質シルト
13 10YR2/1 黒 粘質シルト 灰化物、0.5cmの5YR/1 灰白 シルト (他山由来) プロッタを含む
上に比して遺物の含有率が極めて少なくなる
14 2.5Y5/1 黄灰 シルト 0.5～2cmの5YR/1 灰白 シルト (他山由来) プロッタ、
地山 7.5Y5/8/1 明黄灰～5YR/1 灰白 シルト～中砂質シルト

外面にはヘラ描き沈線を8条巡らせる。255は逆「L」字状口縁で、頸部外面に1条のヘラ描き沈線を巡らせる。256は頸部外面に断面三角形の貼付け突帯を1条巡らせ、突帯上に刻みを入れる。257も256と同様な襲。256に比して刻みが小さい。258は口縁部端面に刻みを入れる。頸部外面にはヘラ描き沈線を8条巡らせる。264・265は有孔の底部。共に両面穿孔である。252～258・263～265は前期末～中期初頭の所産である。259～262は中期後葉～後期初頭の所産か。266・267は鉢である。共に口縁部は短く外反し、端部を丸く収める。前期末～中期前半頃の所産であろう。268・269は高杯。268の口縁部は端部を内側に水平に折り返して肥厚させる。平坦な端面上には円形浮文を貼り付ける。混和材が少なく、精良な胎土である。中期末～後期初頭の所産か。269は脚部。大きく「ハ」の字に開く裾部で、裾部端面上には浅い沈線が1条巡る。生駒西麓産の胎土である。後期末～古墳時代初頭(庄内式併行期)の所産であろうか。

270～273はミニチュア土器。270は襲か。体部下半にはユビオサエが顕著にみられる。底径は2.8cm、残存高は2.1cmである。271～273は鉢か。いずれも底部は深い上げ底になっている。271の口径は3cm、底径は2.4cm、器高は3cm、272の口径は3.8cm、底径は2.8cm、器高は3.3cm、273の底径は3.4cm、残存高は3cmである。274は円板状土製品である。薄い土器の体部片を転用したもの。最大径は5.4cm、重量は17.43gである。

275はサマカイト製尖頭器の未成品であろう。裏面中央にみられるネガティブな剥離が主要剥離面か。剥片素材である可能性が高い。両側縁には両極技法によるツブレがみられる。表面右側の厚みを減じることが出来ずに廃棄したのであろうか。長さは5.9cm、幅は2.3cm、厚さは0.95cm、重量は13.06g。276～279はサマカイト製石鏃。276は凸基I式。先端を欠失する。残存長は3.2cm、幅は1.2cm、厚さは0.45cm、重量は1.52gである。277・278は平基式。277は裏面中央にみられる平坦な剥離が主要剥離面の剥片素材の可能性が高い。長さは3.5cm、幅は2.2cm、厚さは0.4cm、重量は2.36gである。278は先端を大きく折損する。剥片素材である可能性が高いが加工の進行により打面形態は不明。残存長は2.5cm、幅は1.3cm、厚さは0.4cm、重量は1.67gである。279は凹基式。平面五角形を呈する。裏面中央の平坦な剥離面が主要剥離面の剥片素材。長さは3.1cm、幅は1.9cm、厚さは0.3cm、重量は1.56gである。280～282はサマカイト製の鏃である。280・281は頭部と鏃部の境が明瞭なI類。280は鏃部先端を、281は表面の頭部右側を折損。281は鏃部先端が摩滅する。ともに鏃部は両側縁から丁寧に調整される。280の残存長は3.45cm、幅は2.1cm、厚さは0.55cm、重量は3.43g、281の長さは3.4cm、幅2cm、厚さは0.9cm、重量は3.85gである。282は前者ほど頭部と鏃部の境は明瞭でなく、棒状を呈するⅢ類である。表面の頭部に自然面を残す。鏃部先端を折損する。鏃部は両側縁から丁寧に調整され、使用による摩滅が著しい。残存長は5.9cm、幅は1.4cm、厚さは0.8cm、重量は7.31gである。283～285はサマカイト製の楔形石器である。283は剪断面を有する。上・下辺には密集したツブレが連続して認められる。長さは2.25cm、残存幅は2.1cm、厚さは0.9cm、重量は4.53gである。284は左右両端に自然面を残す鏃端片を利用。断面形は三角形を呈し、各稜線を使用する。稜線の中央付近を中心に密集した階段状剥離とツブレが連続して認められる。長さは5.55cm、幅は1.9cm、厚さは1.3cm、重量は14.34gである。285は左図左上端部及び右下端部に自然面を残す剥片素材。左図上半にみられる平坦な剥離が主要剥離面である。縁辺には密集した階段状剥離とツブレが連続して認められる。残存長は7.55cm、幅は4.25cm、厚さは1cm、重量は35.01gである。

286～289は磨製石包丁である。286・287は直線刃半月形。286は粘板岩製。両端を欠失。両刃で

ある。表面は肩部に斜位の研磨痕がみられるが、裏面は剥離が著しく肩部の調整は不明である。裏面刃部には粗い斜位の研磨痕が残る。両面穿孔の紐孔が1孔残る。残存長は5cm、幅は4.6cm、厚さは0.5cm、重量は21.64gである。287は緑色片岩製。両端を欠失。片刃で少し内湾する。両面穿孔の紐孔が1孔残る。裏面の紐孔の周辺には敲打痕が僅かに残る。残存長は8cm、幅は4.4cm、厚さは0.7cm、重量は39.83gである。288は粘板岩製。両端及び刃部を欠失する。表裏面とも剥落が著しい。表面に僅かに斜位の研磨痕がみられ、微かに片面穿孔と思われる紐孔が残る。残存長は5.75cm、残存幅は3.85cm、残存厚は0.35cm、重量は9.6gである。289は粘板岩製。大半を欠失するが、僅かに両刃の刃部が確認出来る。表面は剥落が著しいが肩部下端で斜位の、刃部で刃に平行の研磨痕がみられる。裏面では身・刃部とも刃に平行の研磨痕がみられる。刃部には使用による微細な剥離が連続して観察出来る。紐孔は残存しない。残存長は5.1cm、残存幅は4.3cm、厚さは0.6cm、重量は15.01gである。

290～292は太形蛤刃石斧である。290は細粒斑礫岩製。石斧未成品の折損品か。基部側のみ残存する。2側面には自然面を残し、それ以外には成形時の敲打痕が残る。裏面右側の敲打中に折損したのであろう。残存長は9.7cm、幅は7.3cm、厚さは6.5cm、重量は656gである。291は極細粒な閃緑岩もしくは完晶質な玢岩製。基部のみ残存する。表面及び右側面に断面「V」字状を呈する線状痕がみられることから、折損後、敲石として使用したものであろう。残存長は9.7cm、残存幅は6.4cm、厚さは4.5cm、重量は364.33gである。292は細粒砂岩製。表面右上に何らかの力が加わり基部側を折損。その後、敲石に転用している。両側辺を中心に断面「V」字状を呈する線状痕がみられる。特に右側辺で顕著である。刃部には石斧として使用時の衝撃剥離痕がみられる。残存長は12cm、幅は6.3cm、厚さは4.3cm、重量は524.52g。

293～295は敲石である。293は粗粒砂岩製。丸味を帯びた先端部に敲打によるツブレがみられる。他端は欠失する。残存長は5.5cm、最大幅は3cm、厚さは2cm、重量は37.28gである。294は細粒砂岩製。平坦な先端部に敲打によるツブレがみられる。他端は欠失する。残存長は7.5cm、最大幅は5.1cm、厚さは3.5cm、重量は186.6gである。295は粗粒砂岩製。表裏面及び両側面に敲打によるツブレと断面「V」字状を呈する線状痕がみられる。左側辺の下端で敲いた際に折損している。線状痕が多くみられることから、両極技法の際に使用する敲石と推察される。残存長は9.9cm、最大幅は5cm、厚さは3.4cm、重量は236.53gである。296・297は砥石である。296は細粒砂岩製。肌理は粗い。表裏面と左側面の3面を使用する。他は欠損の為不明である。表面下半は使用により線状に窪んでいる。残存長は4cm、残存幅は4.2cm、厚さは1.5cm、重量は33.13gである。297はホルンフェルス製。薄く層状に剥離し、裏面の剥離が著しい。上側辺と左側辺は自然面であり、表面が使用される。また、表面下半は焼成を被ったようで、細かな亀裂が多くみられ、小塊状に崩壊する。残存長は8.6cm、残存幅は9cm、残存厚は1.7cm、重量は167.37gである。298は各辺を面取りして丸く整形した立方体状を呈する石製品。各面の中央部には形は不揃いであるが、平面円～長楕円形を呈するサイコロの「1」に似た窪みを有する。また、不明瞭な部分も存在するが、各辺の中央付近を通り立方体を十字に巡る溝状の繰り込みがある。窪みや溝状の切り込みは敲打により穿たれている。長さ・幅・厚さ共に4.3cm、重量は146.47gである。石錘とも考えられるが、用途は不明。石材は細粒斑礫岩である。299・300は軽石。299の表面は灰白～褐色を呈し、あまり大振りな気孔はない。部分的に擦痕がみられる箇所や摩滅し表面の気孔が潰れて観察出来ない部位もあることから、砥石的な使い方がなされたのであろうか。長さは6.2cm、幅は5cm、厚さは3.9cm、重量は18.81gである。300の表面は褐色を、内面は明褐色を呈し、大振りな気孔が

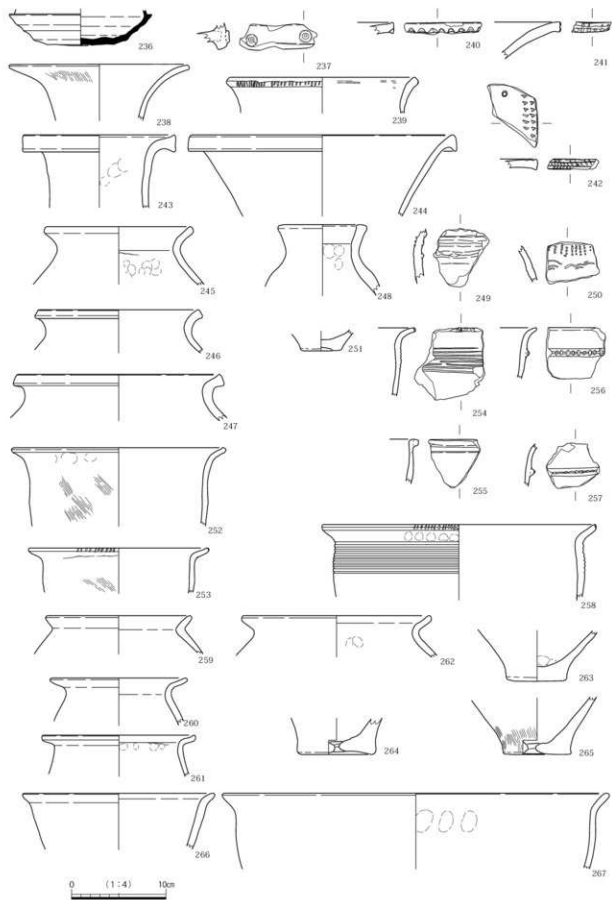


图 90 3006 落込み 出土遺物①

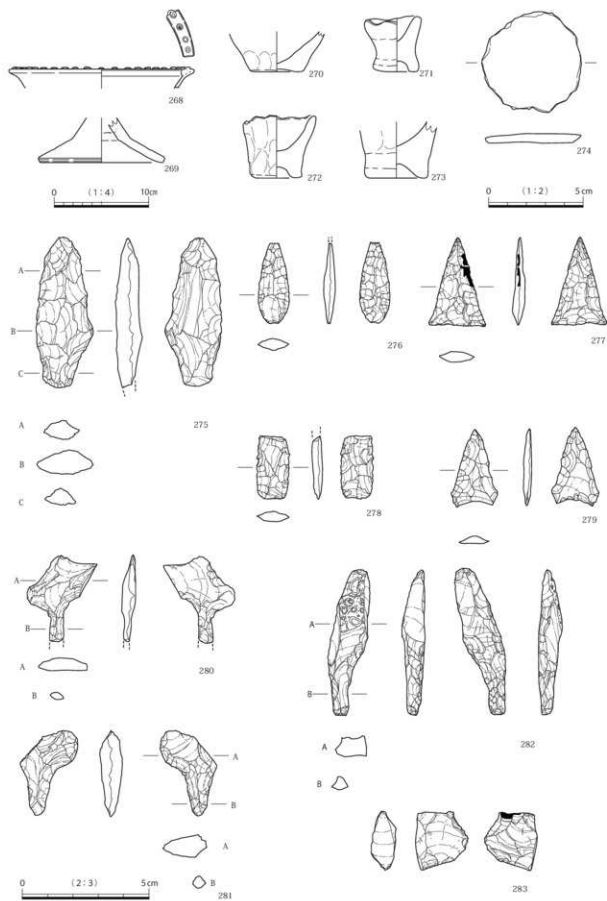


图91 3006 落込み 出土遺物②

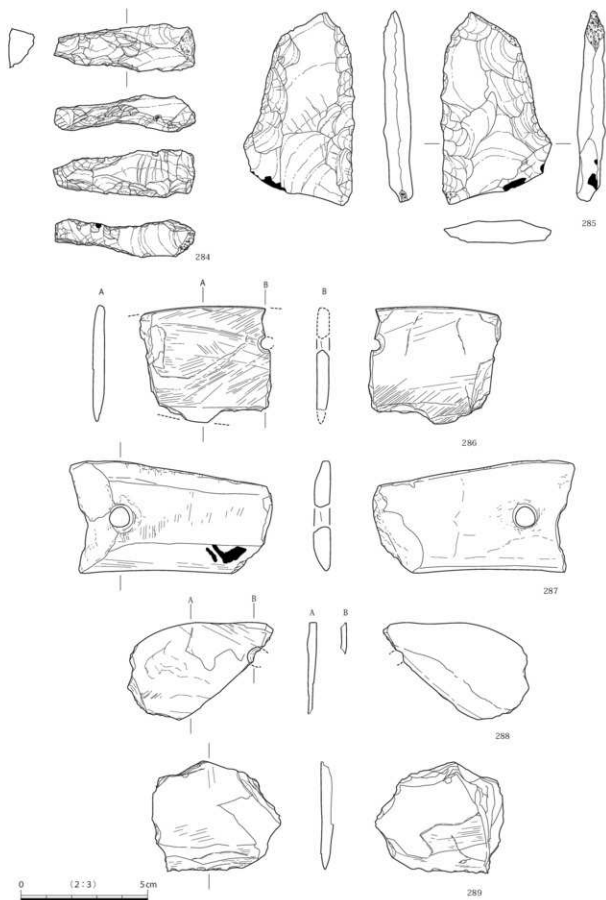


图 92 3006 落込み 出土遺物③

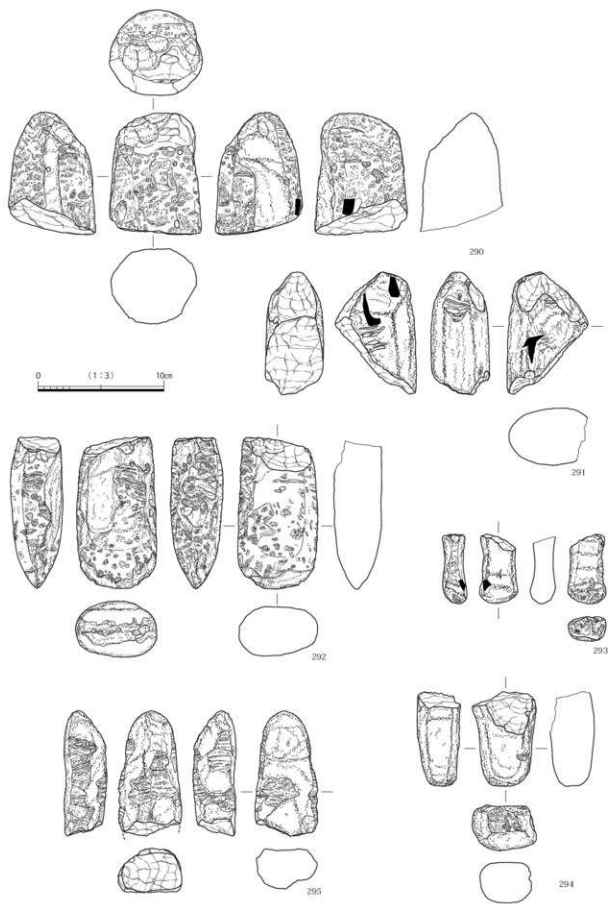


图93 3006 落込み 出土遺物④

みられず表面は密である。長さは5.4cm、幅は3.8cm、厚さは3.4cm、重量は19.34g。

3007土坑 (図88・95・96・図版22・36・51・52) 調査区南側の北東部、X=-136.315・Y=-42.160に位置し、3006落込みの下位で検出した。平面形は不整形円形を呈し、直径は約2.35mを測る。断面形は「U」の字状を呈し、検出面からの深さは1.4mである。埋土は大きく4層に分かれ、最上層が炭化物を含む第8層系の黒色シルト～細・中砂混シルトで、上層が炭化物や地山由来の砂質シルトブロック、植物遺体の薄層を挟む黒色シルトや黒色粘質シルト及び炭化物や植物遺体を含み褐色シルトの薄層を挟む褐色粘質シルト(自然堆積層か)、下層が地山由来の灰白～明緑灰色シルト～細・中砂混砂質シルトと黒～褐色シルトのブロック土(埋め戻し土か)、最下層はラミナがみられる黒～黒褐色・黄灰色シルト(機能時の水成堆積)である。下層上面に弥生土器壺(図96-302)が横倒しの状態で置かれていた。明瞭な湧水は確認出来なかったが、土坑下部に行くほど粘性が高まり、水分が顕著になって行くことから、井戸または水溜として使用されたものと推定される。

出土遺物には上述した弥生土器壺以外に細片となった弥生土器(古いものは前期末～中期初頭の多条沈線土器がある)、石器(サヌカイト製楔形石器・剥片)、木製品(梯子・板材・棒材)、サクラ属樹皮がみられた。このうち弥生土器10点(図96-301～310)、木製品2点(図96-311・312)を図化した。301・302は壺である。301は広口壺。頸部はやや内傾しながら立ち上がる。口縁部は大きく開き、外傾する端面を持つ。端面は凹線状に窪む。二次焼成を被ったように表裏面とも剥落が著しい。備前・備中地域からの搬入土器か。302は細頸壺。頸部以上を欠失する。肩部外面にクシ状工具による列点文を巡らせる。二次焼成を被ったように表面の約4分の1は剥落する。303は短頸壺か。下膨れの体部である。肩部には「U」の字状を呈する把手状の粘土紐を貼り付ける。304は甕である。肩部以上を欠失。底部は直接接合しないが同一個体である。体部外面上半は縦位のハケメを、中位は横位のヘラミガキを、下半は縦位のヘラミガキを施す。但し、底部付近は二次焼成の影響か、剥落が著しくヘラミガキの単位が不明瞭である。体部内面は上半が縦及び横位のハケメを、下半は縦位のヘラケズリを施す。内外面に煤が付着する。体部中位、最大径付近にクシ状工具により横向きの「ハ」の字状刺突文を施す。備前・備中地域からの搬入土器である。305～308は高坏。305は深い碗状の坏部。口縁部は僅かに外側に肥厚させ、内傾する端面を持つ。脚部は低く、中実である。中期の所産か。306は坏部上半を欠失する。脚

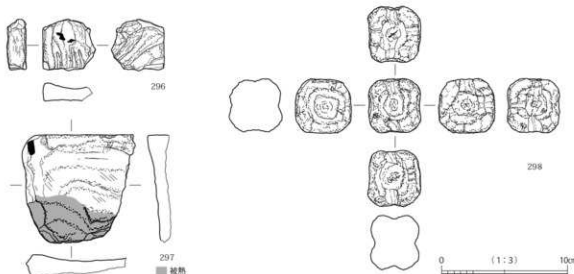


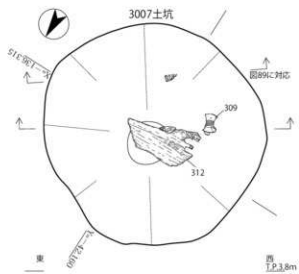
図94 3006落込み 出土遺物⑤

端部は僅かに上方へ拡張し、脚端面は凹線を巡らせる。二次焼成を被ったようである。307の口縁端部は内側に肥厚させ、微かに内傾する平坦な端面を持つ。口縁部端面から口縁部外面に煤が付着する。生駒西麓産の胎土である。308は脚部。筒部は長く、中空でエンタシス状を呈する。裾部は「ハ」の字状に開き、端部を上方に拡張する。裾端部に接して外側穿孔の2孔1対になる円形透かし孔が5方向に穿たれる。そのうち2組が貫通する孔、2組が未貫通の孔、1組が貫通孔と未貫通孔で構成される。生駒西麓産の胎土。307と308は直接接合しないが、同一個体と思われる。309は器台。受部は大きくラッパ状に開き、端部は下方に折り曲げられて外傾する端面となる。端面には円形浮文を貼り付ける。現状では3個が遺存するが、元来8方向にあったと思われる。筒部外面には螺旋状にヘラ描き沈線を10周巡らせ、更に2周分下方に追加している。裾部は「ハ」の字に開き、端部をやや内傾させる。裾部中位には直径0.9cmで両面穿孔の円孔1孔と未貫通の円孔1孔がみられる。310はミニチュア土器。器台であろうか。括れ部径は2.4cm、残存高は3.9cmである。301～304・306～309は中期後葉～末頃の所産であろう。

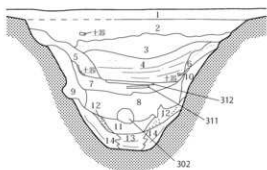
311はアカガシ亜属製の直柄平鎌の未成品。左側辺及び上端面は欠損している。右側辺は有肩状に整形する。裏面にはA型隆起が作り出されるが柄孔は未穿孔である。木目は横方向に走る。残存長は30.9cm、残存幅は17.8cm、厚さは3.4cmである。312はスギ材の梯子。残存長は67.1cm、残存幅24.6cm、残存厚は6.4cmを測る。現状で1段分のステップが残る。出土遺物の年代観から、中期後葉～末頃の土坑であろう。

3008 土坑 (図 88・89・97・図版 22・47・48) 3007土坑の南東約1mに位置し、3006落込みの下位で検出した。平面形は不整楕円形を呈し、長軸が約6.45m、短軸が約5.5mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは約0.15mである。埋土は第8層系の黒色シルトで、大きく2枚に分かれる。上層が黒色シルト、下層が地山由来の灰白色シルト～砂質シルトブロックを含む黒色砂質シルトである。出土遺物には細片となった弥生土器や石器・石製品(サヌカイト製削器・二次加工ある剥片・剥片、赤チャート製剥片、石包丁・大型石包丁、敲石・磨石、砥石等)、白雲母石英片岩板材が上層を中心にみられた。このうち弥生土器12点(図97-313～324)、石器・石製品5点(図98-325～329)を図化した。313は壺である。算盤玉型の体部にならうか。胎土には混和材を多く含む。314～319は甕である。314は口縁端部に刻みを入れる。317・318は逆「L」字状口縁甕。317の口縁部は内外面を肥厚させる。頸部外面には6条以上のヘラ描き沈線を巡らせる。318は平坦な口縁端面を持ち、端面上にヘラ描き沈線を3条巡らせ、口縁端部には刻みを入れる。319は底部。二次焼成を被ったのか、破断面の赤化が著しい。320～322は甕蓋である。320は摘み部。天井部外面は比較的深く窪む。胎土には混和材を多く含む。321は裾部。直接は接合しないが320と同一個体か。322の天井部外面は浅く窪む。生駒西麓産の胎土である。323・324は高環。323は中空の脚部。端部は少し屈曲を強めて外に開く。324は椀状の高環であろう。脚部は中実で短い。胎土には混和材を多く含む。323以外は前期末～中期初頃の所産である。323は中期中頃の所産と考えられ、混入品とみなしたい。

325・326は安山岩製の二次加工のある剥片。325は鋭い縁辺となる下辺に両面調整を施す。裏面右下の調整剝離を行った際に、縦割れを起こしている。表面右端の剝離面は風化が他の剝離面より進行しており、自然面の可能性を有する。長さは6.8cm、幅は3.9cm、厚さは1.55cm、重量は36.65gである。326は表面の中央にみられるネガティブな剝離面が主要剝離面の剥片素材。裏面側から調整剝離を行うが厚みを減じることが出来ずに廃棄されたのか。表面側下辺の左側は調整剝離が及ばずに自然面を残す。長さは5.9cm、幅は3.4cm、厚さは1.2cm、重量は32.23gである。327は粘板岩製の磨製石包丁。石包丁



- 3007土坑
- 7.5YR4/1 黒灰 細～中砂質シルト 土器破片・サヌカイト等の遺物を多く含む (3009基込み埋土)
 - 10YR2/1 黒 シルト 土器破片を多く含む 炭化物を含む
 - 10YR2/1 黒 シルト 土器破片・炭化物を含む 僅かに中砂ブロックあり
 - 10YR1.7/1 黒 粘質シルト 植物遺体の薄層をほさむ
 - 7.5YR2/1 黒 細～中砂質シルト 炭化物・植物遺体・
 - 5GY8/1 灰白 シルト～中砂質砂質シルト (地山由来) ブロックを含む
 - 10YR2/1 黒 シルト 炭化物を含む 上部に細～中砂の薄層をほさむ
 - 10YR4/1 黒灰 粘質シルト 炭化物・植物遺体・
 - 1cm前後の5GY8/1 灰白 シルト (地山由来) ブロックを含む
 - 2.5Y2/1 黒 シルト $\phi 0.5\sim 1\text{cm}$ の2.5Y7/1 灰白 シルトブロックと $\phi 1\sim 2\text{cm}$ の2.5Y3/1 黒期 シルトブロックを含む 土器・植物遺体を含む
 - A 10YR4/1 黒灰 シルトと
 - B 7.5GY8/1 明緑灰 シルト～細～中砂質砂質シルト (地山由来) のブロック土 A : B=1 : 1
 - A 10YR4/1 黒灰 シルトと
 - B 7.5GY8/1 明緑灰 シルト～細～中砂質砂質シルトのブロック土 A : B=8 : 2
 - 2.5Y5/1 シルトと2.5Y3/1 黒期 シルトの互層 ラミナあり
 - 2.5Y7/1 灰白 $\phi 0.5\sim 1\text{cm}$ の黒期 シルトと
 - 2.5Y6/1 黄灰 $\phi 0.5\sim 1\text{cm}$ のシルトのブロック土 各ブロックが土坑底面中央に向かってように堆積する
 - 2.5Y4/1 黄灰 シルト ラミナあり
 - 2.5Y3/1 黒期 シルト 2.5Y2/1 黒 細砂～中砂質シルトの互層 ラミナあり



3009土坑・3010土坑

- 10YR3/2 黒期 細砂質シルト 中砂～粗砂粒を含む 土器片を多く含む
 - 10YR3/1 黒期 細砂質シルト 中砂～粗砂粒を含む $\phi 1\sim 2\text{cm}$ の中砂ブロックを含む 多く含む 土器片を含む
 - 10YR3/1 黒期 細砂質シルト 10YR7/2 に近い黄褐色 $\phi 0.2\sim 0.5\text{cm}$ のシルトブロックを含む 土器片を含む
 - 10YR3/1 黒期 シルト 部分的にラミナあり 土器片を含む
 - 10YR7/2 に近い黄褐色 シルトブロックと 10YR3/2 黒期 シルトブロックのブロック土
 - 10YR3/2 黒期 シルト
 - 10YR3/1 黒期 シルトブロックと 10YR7/2 に近い黄褐色 シルトブロックと中砂ブロックと
 - A 2.5Y7/4 浅灰～2.5Y8/1・8/2灰白 砂質シルト (地山由来) と
 - B 10YR3/1～3/2 黒期 シルトのブロック土 A : B=0 : 1 地山が崩れたような感じ
 - 10YR3/1 黒期 シルト 中砂～粗砂を若干含む 土器片を含む
 - 10YR3/1 黒期 シルト
 - 10YR7/2 に近い黄褐色 シルトブロックと 7.5Y8/1 灰白 シルトブロックを多く含む 土器片を含む
 - 10YR3/1 黒期 細砂質シルト 10YR7/2 に近い黄褐色 $\phi 0.5\text{cm}$ のシルトブロックを僅かに含む
 - 10YR2/1 黒 シルト 部分的にラミナあり
 - 10YR3/1 黒期 シルトブロックと 10YR7/2 に近い黄褐色 シルトブロックと 7.5Y8/1 灰白 シルトブロックのブロック土
 - 10YR2/1 黒 シルト 7.5Y8/1 灰白 $\phi 0.5\sim 1\text{cm}$ のシルトブロックを若干含む 土器片を含む
- [2～7 : 3009土坑埋土・8～13 : 3010土坑埋土]

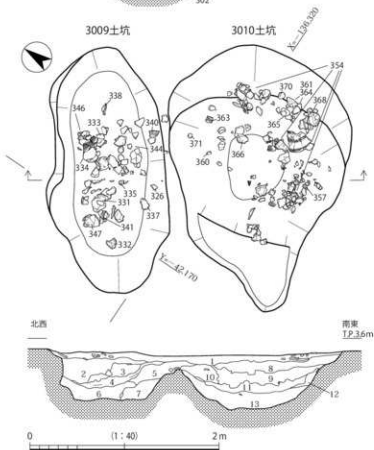


図95 3007・3009・3010土坑 平・断面図

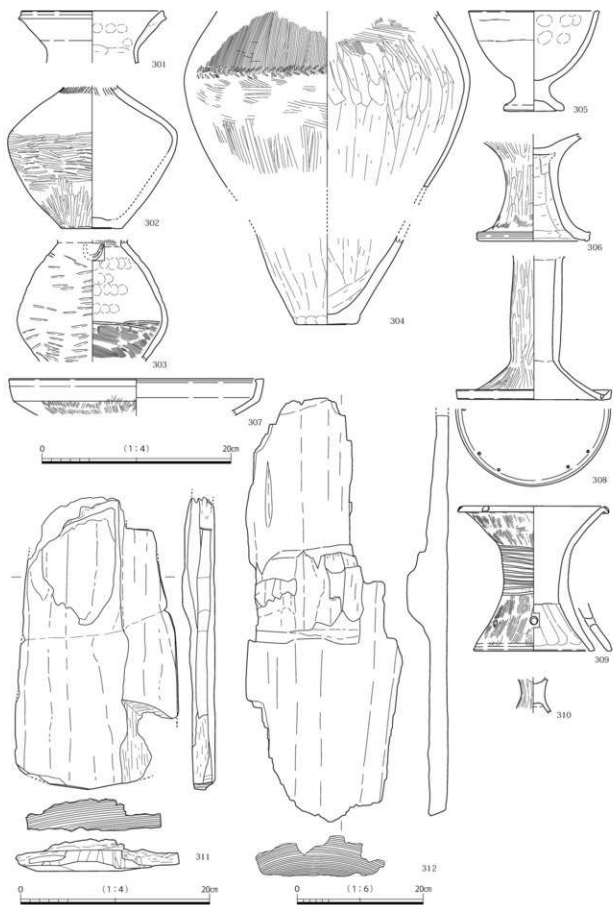


图 96 3007 土坑 出土遗物

の中央部分のみ遺存している。背部は確認出来るが、刃部は全く残っていない。折損後に転用を試みたものであろう。両面とも身部に研磨痕が残る。復元径が0.5cm前後の紐孔が2孔みられる。孔間の心々距離は約2.3cmで通例のものとして幅が狭い。残存長は3.2cm、残存幅は2.6cm、厚さは0.9cm、重量は8.85gである。328は粘板岩製の大型石包丁。大半を欠失しており、全形は判然としない。刃部は両刃の直刃である。層状剥離が著しいが、身部には表面で斜位の、裏面で横位の研磨痕がみられる。刃部に関しては表面が刃と並行の横位の、裏面が斜位の研磨痕が観察出来る。刃部には使用による微細な剥離が認められる。残存長は11.2cm、残存幅は12.6cm、厚さは0.75cm、重量は114.51gである。329は中粒砂岩製の敲石。断面隅丸三角形を呈する礫を使用。先端部及び3本の稜線部を用いて敲打を行う。先端部には密集したツブレが、稜線には密集したツブレと断面「V」字状を呈する線状痕がみられる。残存長は8.7cm、幅は4.3cm、厚さは3.2cm、重量は130.9gである。出土遺物の年代観から前期末～中期初頭の土坑である。

3094 落込み (図 88・99) 3008土坑の北側約0.2mに位置し、3006落込みの下位で検出した。平面形は瓢箪形を呈し、長軸が約0.8m、短軸が約0.5mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは0.1～0.15mである。埋土は地山由来の灰白色シルト～砂質シルトブロックを含む第8層系の黒色砂質シルトである。土坑底面付近から弥生土器壺片(図99-330)が出土している。330は広口壺。口縁端部を内外面共に肥厚させる。端面中央に4条のヘラ描き沈線を巡らせ、上・下端に刻みを入れる。なお、直接は接合しないが同一個体と考えられる頸部～肩部片、体部片がある。肩部外面にはヘラ描き沈線が5条以上巡る。胎土には混和材を多く含む。前期末～中期初頭の所産である。

3009 土坑 (図 88・95・99・100・図版 22・37・50) 3008土坑の西側約1.7mに位置し、3006落込みの下位で検出した。後述する3010土坑に接している。平面形は不整長楕円形を呈し、長軸が約2.6m、短軸が約1.25mを測る。短軸方向の断面形は不整逆台形を呈する。土坑北西側の法面は急角度で、南東側法面が緩やかに掘削されている。検出面からの深さは約0.55mである。埋土は大きく4層に分かれる。最上層は細砂混黒褐色シルトで3009・3010土坑を最終的に埋没させている。上層は地山由来のにぶい黄橙色シルトブロックを含む第8層系の黒～黒褐色細砂混シルト、中層は部分的にラミナがみられ自然堆積層と考えられる黒褐色シルト、下層は地山由来のにぶい黄橙・灰白・浅黄色シルト～砂質シルトと

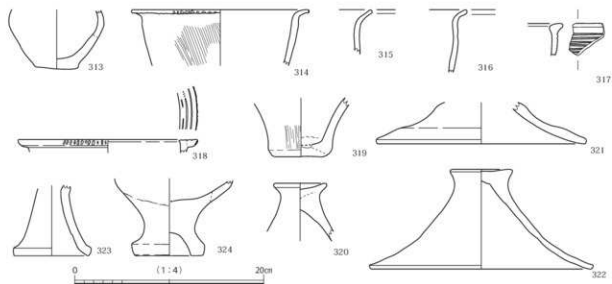


図97 3008土坑 出土遺物①

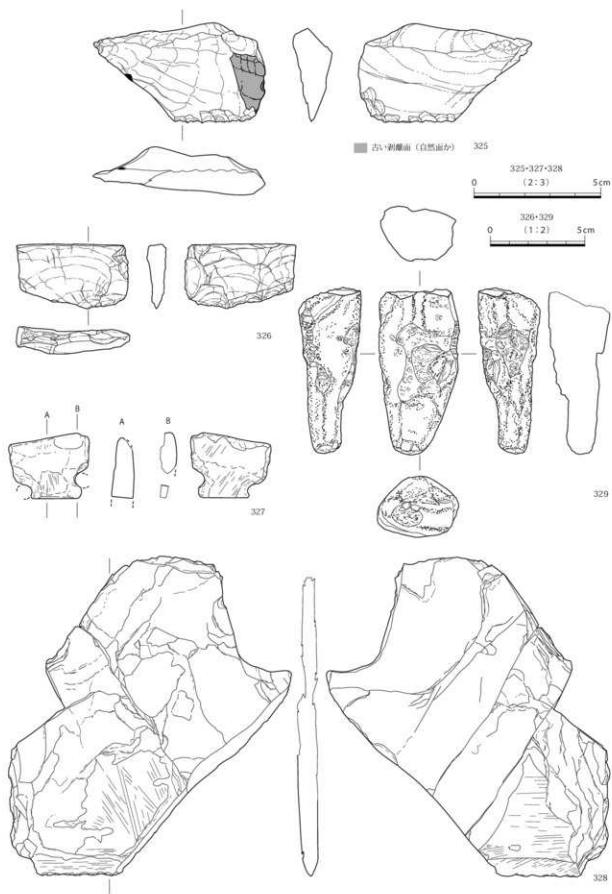


図 98 3008 土坑 出土遺物②

黒褐色シルトのブロック土を中心としたものである。断面観察からこれらは南東側から堆積したものとみられる。

遺物はいずれの層からも出土しているが、特に上層を中心に多数の弥生土器や石器(サヌカイト製剥片・敲石)がみられた。このうち弥生土器19点(図99・100-331~349)、土製品1点(図100-350)、石器1点(図100-351)を図化した。

331~334は壺である。331の体部は算盤玉状を呈する。二次焼成を被ったのか外面に赤化がみられる。胎土には混和材を多く含む。332は広口壺。口縁部は大きく外反し、端部は水平に折り返す。頸部にヘラ描き沈線を7条以上巡らせる。333は頸部から肩部片。頸部下端にヘラ描き沈線を4条巡らせる。334は肩部に9条のヘラ描き沈線を巡らせ、その上下に竹管文を2列ずつ施す。また上部の竹管文の上にもヘラ描き沈線を1条巡らせている。335~345は甕である。335の外面には黒斑がみられる。337・338は口縁端面に刻みを入れる。339は頸部に1条の、340は5条のヘラ描き沈線を巡らせる。341は胴部最大径が口縁部よりも大きい。11個1単位の刻みを口縁端面に入れる。頸部には5条のヘラ描き沈線を巡らせる。口縁部内面には煤が付着する。345は有孔の底部。外面穿孔であろう。346~348は鉢である。いずれも内湾しながら口縁部に向けて立ち上がる。347は口縁部直下に1条のヘラ描き沈線を巡らせる。底部は上げ底気味で、2孔1対の紐孔が2方向に穿たれる。349は甕蓋。350は土器転用の円盤状土製品。径は4.35~4.5cm、厚さは0.95cm、重量は18.12gである。

351は中粒砂岩製の敲石。断面隅丸三角形形状を呈する礫を使用。未使用部位には平滑な自然面が残ることから転石を利用したものと思われる。3本の稜線部と平坦な3面を用いて敲打を行う。両端は欠損。使用部位には密集したツブレと断面「V」字状を呈する線状痕がみられる。残存長は10cm、幅は6cm、厚さは5.1cm、重量は387.05gである。両極技法の際に使用する敲石と推察される。

若干古相の要素もみられるが、相対的な出土遺物年代観から前期末~中期初頭の土坑と捉えられる。**3010土坑(図88・95・101・102・図版22・38・48)** 上述した3009土坑の南東側に接するように掘削されている。土坑南西部分が突出しており、平面形は不整な涙滴形を呈する。長軸が約2.8m、短軸が約1.9mを測る。短軸方向の断面形はボウル状を呈し、検出面からの深さは約0.65mである。埋土は大きく4層に分かれる。最上層は細砂混黒褐色シルトで3009・3010土坑を最終的に埋没させている。上層は地山由来のにぶい黄褐色シルトブロックを含む第8層系の黒~黒褐色細砂混シルト、中層は部分的にラミナがみられ自然堆積層と考えられる黑色シルト、下層は地山由来の灰白シルトブロックを含む黑色シルトである。

遺物はいずれの層からも出土しているが、特に上層を中心に多数の弥生土器や石器(サヌカイト製楔形石器・剥片、石包丁、敲石)、木製品(加工板材等)がみられた。このうち弥生土器18点(図101-352~369)、土製品2点(図101-370・371)、石器3点(図102-372~374)を図化した。

352~355は壺である。352~354は広口壺である。353の口縁部は水平に開き、端部付近をやや肥厚させる。端面中央にヘラ描き沈線を1条巡らせ、その上下に刻みを入れる。354は土坑南半でバラバラに砕けた状態で検出したものである。口縁部は水平に開き、端部を上下に拡張する。端面は2条のヘラ描き沈線を巡らせた後、縦位の短沈線を連続して刻んで格子文を描く。拡張した口縁部端部下端に刻みを施し、鋸歯状に仕上げる。頸部外面には15条のヘラ描き沈線を巡らせた後、縦位に4条1単位のヘラ描き沈線を8方向に入れる。胴部はやや扁球気味で、中程に最大径が来る。最大径は口径よりもやや小さい。肩部と胴部中程より少し上位に口縁部端面と同じ施文原理で格子文を描く。当初に施すヘラ

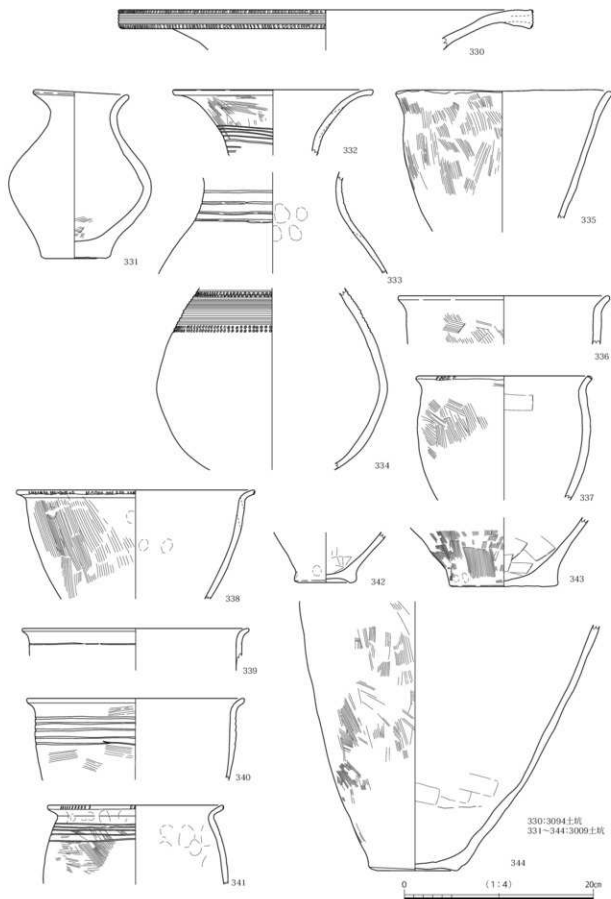


图99 3094落込み、3009土坑 出土遺物

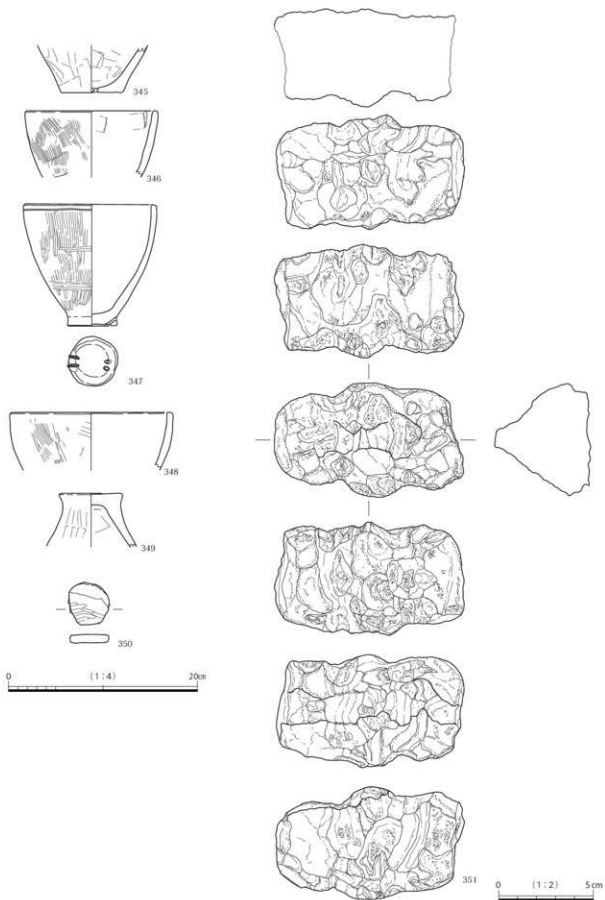


图 100 3009 土坑 出土遺物②

描き沈線は肩部に7条、胴部に12条である。なお、354は3006落込み出土片と接合する。355は貼付け突帯を有する胴部片。胴部中程より少し上位に割り付け用のヘラ描き沈線を2条巡らせ、その後、沈線上に粘土紐を貼り付けて2条の突帯を巡らせる。いずれも胎土には混和材を多く含む。

356～366は甕である。357は口縁端面に小振りな刻みを入れる。358は口縁端面に刻みを入れ、頸部外面には2条のヘラ描き沈線を巡らせる。体部外面に煤が付着。359は頸部に3条のヘラ描き沈線を巡らせる。360の口縁端面には大振りな刻みを、361～363には小振りな刻みを入れる。頸部外面には360が2条以上の、361は4条の、362が5条のヘラ描き沈線を巡らせる。363は頸部外面に4条のヘラ描き沈線を巡らせ、その下方に断面台形状の貼付け突帯1条を巡らせる。364は逆「L」字状口縁甕。頸部外面に4条のヘラ描き沈線を巡らせる。365・366は底部片。366の底部外面から体部外面下半には黒斑がみられる。いずれも胎土には長石・石英・チャート・赤色くさり礫といった混和材を多く含む。367は鉢である。口縁端部からやや下がった位置に長さ約3.5cm、厚さ約0.5cmで扁平な把手を2方向に取り付ける。二次焼成を被ったのか、体部外面下半は剥落が著しい。368は甕蓋である。胎土には混和材を多く含む。369は壺蓋。直径5cm、厚さ1.1cmの円板状。2孔1対の紐孔が2方向に穿たれる。なお、左側上部の紐孔は穿孔に失敗したのか、すぐ横に未貫通の孔が1孔ある。紐孔の直径は0.2～0.3cm。370は土器転用の円板状土製品。直径7.5cm、厚さは0.9cm、重量は49.24gである。371は土鍾であろう。直径5.2cmの不整な球形。重量は144.55gである。中央部に直径0.7cmの紐孔を穿つ。紐孔には紐ズレの痕跡がみられ、紐孔脇にモミ痕が1つ残る。生駒西麓産の胎土。

372はサヌカイト製の楔形石器。表面右上の平坦な剥離面が主要剥離面の剥片素材。裏面左側辺と下辺右側に自然面を残す。自然面以外の縁辺部には細かな密集したツブレや階段状剥離がみられる。石材の質があまり良好ではないので四国産のサヌカイトの可能性が高い。373は粘板岩製の磨製石包丁。直線刃半月形であろう。両端が欠失。片刃である。表裏面共に身部は横位の、表面刃部には刃と並行する横位の研磨痕がみられる。両面穿孔の紐孔が1孔残る。残存長は4.95cm、幅は5.2cm、厚さは0.6cm、重量は23.22gである。374は細粒砂岩製の砥石。使用が確認出来るのは表面1面のみで、使用によって平滑になり僅かに窪む。左側面は自然面で右側面は欠失し、裏面は剥落する。残存長は7.2cm、残存幅は5.3cm、厚さは2.1cm、重量は85.83gである。

若干古相の要素もみられるが、相対的な出土遺物年代観から前期末～中期初頭の土坑と捉えられる。

3011 土坑 (図 88・103・図版 38) 3010土坑の南西部分と接するように掘削された土坑。3006落込みの下位で検出した。平面裁頭楕円形を呈し、長軸は約4.5m、短軸が約3mを測る。土坑は2段に掘り込まれ、底部北側部分が直径約1mの範囲で0.2m程度深くなる。短軸方向の断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは約0.5mである。埋土は大きく3枚に分かれ、上層が第8層系の黒～黒褐色シルト～シルト混細・中砂で、中層が灰白色細砂の薄層を挟む黒色細～中砂混シルトや黒色粘質シルト、下層が地山由来の灰白色シルトブロックを含む黄灰色シルトである。炭化物や遺物はいずれの層からも出土しているが、特に上層を中心に多数の弥生土器や石器(サヌカイト製楔形石器・残核・剥片、敲石、赤チャート垂角礫)、木製品(加工板材等)がみられた。このうち弥生土器15点(図103-375～389)、石器1点(図103-390)を図化した。

375～383は壺である。375は突帯文土器壺。口縁部はほぼ直に立ち上がり、幅の狭い平坦な端面を持つ。口縁端部に接して、扁平な断面下向き三角形の突帯を貼り付ける。突帯上には刻みを入れない。376は長頸壺。口縁部は緩やかに反外しながら伸び、端部で僅かに内湾して短く立ち上がる。後期の所産。

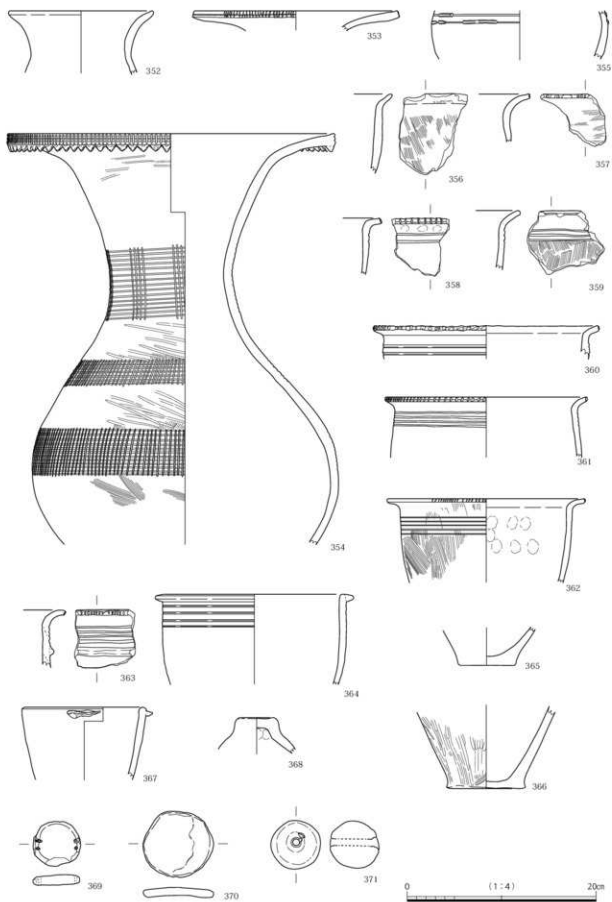


图 101 3010 土坑 出土遺物①

377～381は広口壺である。377は口縁端部を僅かに上方に拡張する。口縁端面は刻みを入れた後へラ描き沈線を1条巡らせる。前期末～中期初頭の所産であろう。378は口縁端部を折り返して下方に垂下させる。頸部外面に僅かに籠状文がみられる。胎土は生駒西麓産である。中期中葉～後葉の所産。379は口縁端部を僅かに上下に肥厚させる。中期前葉の所産であろう。380は口縁端部を僅かに上下に肥厚させる。口縁端面には9条のクシ描き沈線を巡らせ、拡張した下端に刻みを入れて鋸歯状に仕上げる。中期前半の所産である。381の口縁部は上下に肥厚させる。端面には連続する指頭圧痕を施して裝飾する。中期前葉～中葉の所産である。382は頸部片。4条以上の貼付け突帯を巡らせる。各突帯上に小振りな刻みを入れる。前期末～中期初頭の所産。383は土師器短頸壺。口縁部は短く斜め上方に直線的に立ち上がり、端部の外側を肥厚させる。胎土は混和材が極めて少なく精良である。古墳時代初頭(庄内式併行期)の所産で混入品と思われる。384～387は甕である。384・385は口縁端面に刻みを入れる。頸部には384が6条の、385は4条のへら描き沈線を巡らせる。384・385は前期末～中期初頭の所産。386は口縁部外面に扁平な粘土帯を貼り付け、端部を丸く収める。口縁端部には刻みを入れる。中期初頭の所産であろう。387は口縁部を「く」の字に折り曲げ、やや内傾する端面を持つ。頸部～体部上半には4条/cmの粗い斜位のハケメを、体部下半は斜位のタタキの後ハケメを施している。丹波・丹後地域からの搬入土器であろうか。中期後葉の所産。388は台付鉢か。体部上半を欠失する。低い脚台で底部は非常に厚い。胎土に混和材が少なく密である。前期末～中期初頭の所産であろう。389は小型鉢である。底部外面の平面形はドーナツ状を呈する。古墳時代初頭(庄内式併行期)の所産で混入品であろう。

390はサヌカイト製楔形石器。表面はほぼ原礫面である。原礫面には同心円状或いは爪形の打撃痕跡が多数みられることから転石を使用したとみられる。両極技法により、礫の一端から剥片を剥離した後、その剥離面を作業面にして縁辺部から器面中央に向けて数枚の剥片を剥離した残核。その後、楔形石器に転用している。裏面上及び下辺に細かな密集したツブレや階段状剥離がみられる。長さは9.1cm、幅

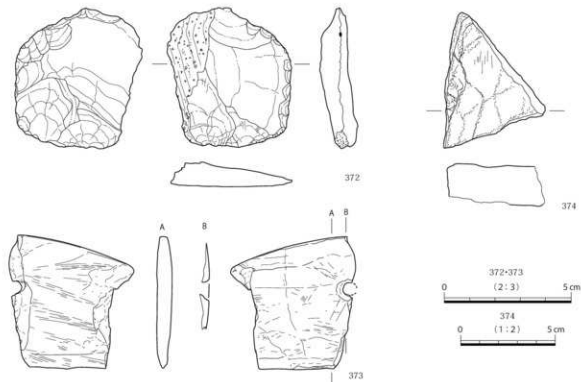


図102 3010土坑 出土遺物②

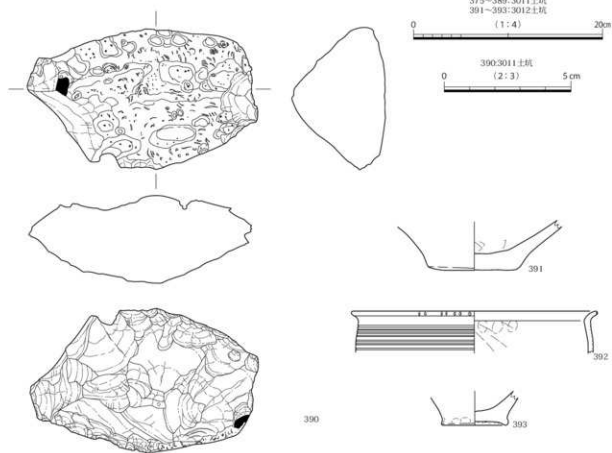
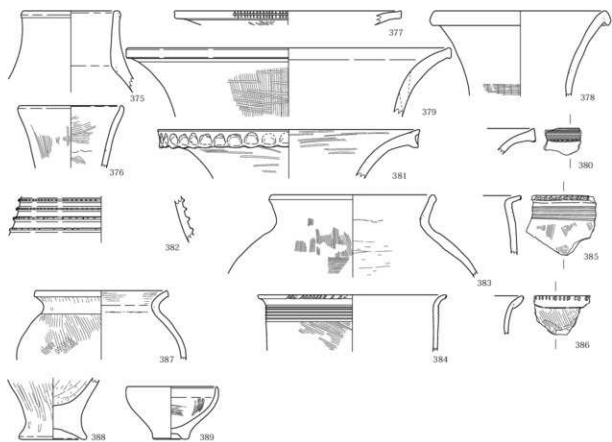


图 103 3011·3012 土坑 出土遗物

は5.6cm、厚さは3.7cm、重量は182.4gである。多時期に亘る遺物の出土がみられたが、中期～後期所産の土坑であろうか。

3012 土坑 (図 88・103) 3011土坑の東側に位置しており、同土坑に東側を切られている。また土坑西側は中世期の3014井戸に切られる。土坑は元来、平面楕円形を呈していたと推察され、残存長(長軸)は約4.5m、幅(短軸)は約4.3mである。短軸方向の断面形は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは約0.12mである。埋土は第8層系の黒色シルトである。出土遺物は周辺の土坑に比して少なかったが、弥生土器片や石斧片が出土している。このうち弥生土器3点(図103～391～393)を図化した。391は壺底部片。胎土は生駒西麓産である。392は甕。口縁端部に刻みを入れる。頸部にはへら描き沈線を7条以上巡らせる。393は上げ底状の甕底部。胎土には混和材を多く含んで粗い。いずれも前期末～中期初頭の所産であろう。図化出来なかった弥生土器には中～後期の破片も散見されたが、これらは3006落込みに帰属するものかも知れない。3011土坑に切られることや周辺土坑の年代観から前期末～中期初頭の土坑と捉えておきたい。

3024 土坑 (図 104・図版 39) 調査区の南東部、 $X=-136.324 \cdot Y=-42.149$ に位置し、建物3002

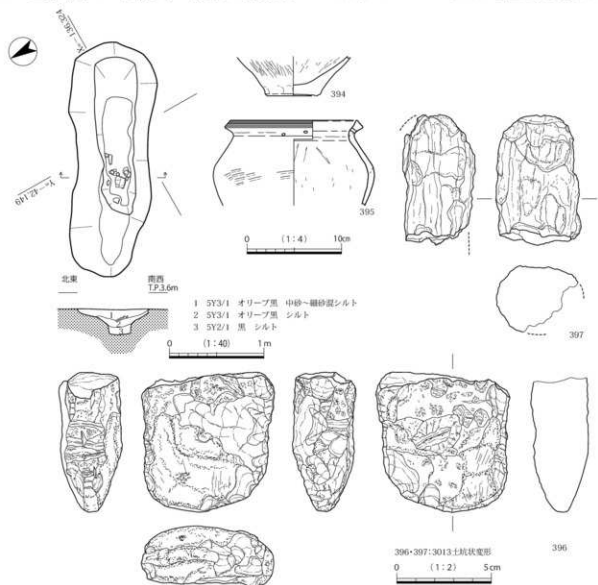


図 104 3024 土坑 平・断面図 出土遺物 3013 土坑状変形 出土遺物

の北辺にある。平面形は不整楕円形を呈し、長軸が約2.45m、短軸が約0.9mを測る。土坑は2段に掘り込まれており、底面の南側約3分の2が深くなっている。短軸方向の断面形は漏斗状を呈しており、検出面からの深さは約0.25mである。埋土は3枚に分かれ、上層がオリブ黒色中～粗砂混シルト、中層がオリブ黒色シルト、下層が黒色シルトである。いずれも第8層系の堆積物である。遺物として弥生土器が中層からまともに出て出土している。これらの中には生駒西麓産の胎土を持つものもみられた。図104-394は壺底部である。胎土は混和材が少なく精良である。395は台付鉢であろう。口縁部は「く」の字に折り曲げ、口縁端部を僅かに上下に肥厚させる。端面に3条の凹線を巡らせる。頸部には直径0.4cm前後の2孔1対の紐孔が穿たれる。胴部は大きく張っており、算盤玉状を呈するものとみられる。摩擦が進み調整は不明瞭だが、体部外面は横位のタタキを、体部内面下半はヘラケズリを、上半は板ナデを施している。備前・備中地域からの搬入土器であろう。中期末～後期初頭の所産。

3013 土坑状変形 (図104・図版49) 調査区南側の西壁沿い、 $X=-136.330 \cdot Y=-42.175$ に位置し、建物3012の北西約1mにある。土坑状変形の西側は調査区外へ広がる。平面形は不整ハート形を呈し、長軸約2.6m以上、短軸は約2.6mである。検出時は一見すると黒褐～黒色砂質シルトを埋土とする平面馬蹄形を描くようにみえた。これらは近年、土坑状変形と称され、地震動に起因する変形構造と指摘されており、溝状部分に挟まれた土坑状変形中心部は地震動により動いた基盤層と考えられる。他の遺構に比して出土遺物は僅少で細片となった弥生土器、石器(サヌカイト製使用痕のある剥片・剥片、石包丁片、石斧転用敲石、敲石、石棒片)がみられた。このうち、2点を図化した。図104-396は太形蛤刃石斧転用敲石である。極細粒な閃緑岩もしくは完晶質な玢岩製。表裏面には石斧機能時の縦位の研磨痕が部分的にみられるが、基本的に表裏面、側面、刃部が敲打に使用されている。使用部位には密集したツブレや剥離、断面「V」字状を呈する線状痕、線状痕が集中して形成される窪みが認められる。基部側が折損しているが、左側辺上部を使用して敲いた際に折れたものとみられる。残存長は7.4cm、残存幅は7cm、残存厚は3cm、重量は263.17gである。397は結晶片岩製の石棒片。頭部付近の残欠か。裏面は約3分の1が剥落しているが、元来、断面形は楕円形を呈していたと推察される。頭部は丸く収め、身部には窪みが複数みられる。製作時の作業痕跡であろうか。残存長は6.9cm、残存幅は4.3cm、残存厚は3.6cmで、重量は155.11gである。徳島産であろうか。

3013土坑状変形以外にも建物3009・3008・3005・3001付近でも土坑状変形を検出している。検出状況はいずれも同様で黒色系シルトや砂質シルト等を埋土にして馬蹄形を描くような溝状の平面形を呈していた。出土遺物は概して少なく、細片となった弥生土器が若干あるのみであった。

4.4区 (図105～117・図版24～29・32～33・41～44・50・52・53) これまで上述したように、4区は調査地の一番南側に位置し、平面逆「T」字状を呈する4-1区と逆「L」字状を呈する4-2区に分かれる。4-1区は3区南辺と接する北側、 $X=-136.345$ 付近の基盤層が高くT.P. 3.4mを測り、そこから南側方向に向けて緩やかに下降する地形となり、 $X=-136.380 \cdot Y=-42.125$ 付近が一番低くT.P. 3mである。また、東西方向に関しては $Y=-42.190$ 付近の基盤層がやや高くなっておりT.P. 3.3mを測り、北東方向の $X=-136.380 \cdot Y=-42.125$ 付近へ向けて緩やかに下降している。

4-2区は調査区西側、 $X=-136.385 \cdot Y=-42.199$ 付近の基盤層が最も高くT.P. 3.7mを測り、東及び南へと緩やかに下降する地形となっており、南東隅でT.P. 3.2mを測る。なお、4-2区に関しては重機による掘削段階で、基盤層を認識して削り過ぎてしまった部分が多い。図105に示した等高

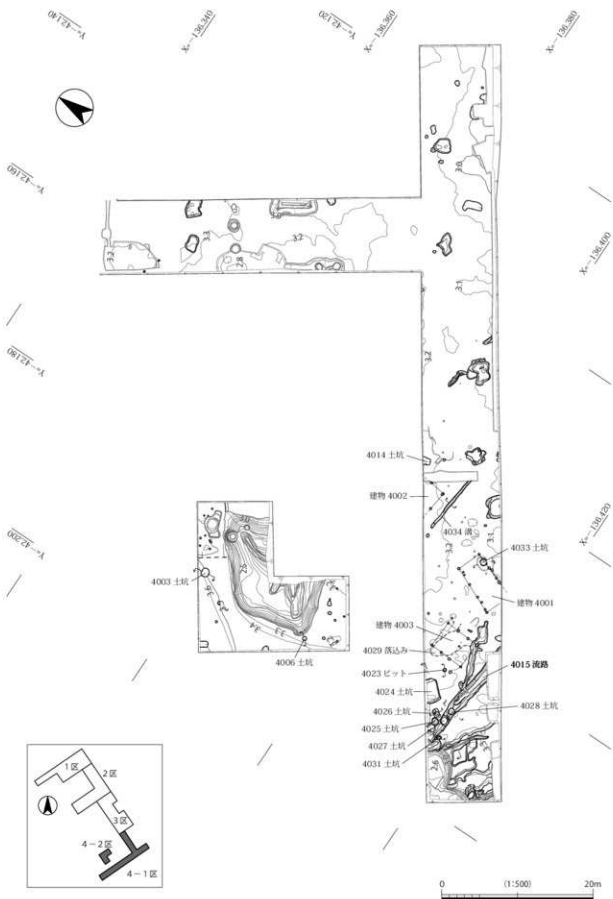


図 105 4区 古代以前 遺構平面図

線ライン(4001溜池内を除く)に関しては調査区壁面の基盤層の高さから復元したものである。従って、以下で記述する4-2区で検出した4003・4006土坑の上部に関しても削平してしまったことを申し添えておく。

4区はY=-42.165ライン以東の調査区東側部分はT.P. 3.2m以下になり、遺構が希薄で不定形な落込みが数基確認出来たにとどまった。この部分は3区同様、基盤層上面(地山面)は踏込や地震動による変形により上位堆積層と基盤層が混じり合ってマーブル模様状になり、遺構の検出作業は極めて困難な状況であった。一方、同ライン以西では2・3区に比すれば少ないもののピットや土坑等の遺構がまとまって検出出来た。なお、4-2区に関しては近世期の4001溜池が調査範囲の大部分を占める為、検出出来た遺構は僅少であった。ピットは直径0.2~0.4m・深さ0.2~0.5mを測るものが主体で、柱根を残すものや柱痕跡のみみられるものは極めて少なかった。柱痕跡や柱根を有するものを中心に検討した結果、3棟の掘立柱建物を復元することが出来た。

掘立柱建物 (図 106~108・図版 27・28・53) 建物はY=-42.165~185の間で確認出来た。検出出来た建物のうち2棟は一部が調査区外へと広がっている。建物の面積は1間×3間(3.3×6.5m)が最大となる。これら建物は棟持柱を有さない構造を特色としている。なお、建物の主軸方位に規則性は認められない。

掘立柱建物 4002 (図 106・図版 27・28) 4-1区中央部のX=-136.400・Y=-42.165付近に位置する。建物4002の南東隅部分、南北1間(2.1m)×東西1間(2.6m)分を検出した。建物の北及び西側部分は調査区外へと展開する為、詳細は判然としない。南北方向の建物の軸はN-8°-Eを指向する。建物の南側約1.3mには建物の東西軸とほぼ平行する4034溝があり関連性が窺える。

柱掘方の平面形は不整形円形或いは不整形楕円形を呈し、直径または長軸が約0.25~0.3m、深さは約0.35~0.6mである。建物を構成する全てのピットで直径0.1~0.13m、残存長0.2~0.6mの柱材が遺存していた。但し、4049ピットはDIC株式会社工場基礎の撤去の際に傷んでおり、遺存した柱材が横倒しの状況であった。各ピットからは遺物が出土しなかった為、時期の特定には至らなかった。

4034 溝 (図 106・図版 27・28) 建物4002の南側約1.3mに位置する。検出長は約8.2m、検出幅は中央部がやや広く約0.45m、それ以外が約0.3mを測る。溝の東側は掘乱によって切られており判然としないが、掘乱を越えた位置で延長部分が確認出来なかったことから、掘乱内で収束するものと推察される。また西側は約0.8m離れた位置に平面楕円形で長軸約0.5mの土坑がみられるがこれも溝の一部であった可能性がある。溝の断面形は逆「凸」字状を呈し、深さは0.15mである。埋土は大きく2枚に分かれ、上層が炭化物や地山由来の灰白色砂質シルトブロックを含む第8層系の黒褐色極細~細砂混粘質シルト、下層が黒褐色シルトと褐色色細~中砂の互層で水成堆積である。出土遺物には細片となった弥生土器や被熱痕跡を有する円礫があったが時期の特定には至らなかった。溝の軸はN-84°-Wを指向し、先述したように建物4002と直交する位置関係にある。建物、溝の双方共に遺物の出土がみられなかった為、時期的な一致を見いだせないが、その位置関係から有機的な関連性を想定したい。

掘立柱建物 4001 (図 107・図版 27・28・53) 4-1区中央部やや西寄り、X=-136.410・Y=-42.170付近に位置し、建物4002の南西約9mにある。南東隅の柱穴は調査区外へ展開する。建物4001は梁行1間(3.3m)×桁行3間(6.5m)である。桁行の柱間は心々距離で西辺が1.9~2.6mで、北側1間分がやや広くなっている。東辺は心々距離で2.3mを測る。桁行はN-22°-Eを指向する。柱掘方の平面形は不整形円形或いは不整形楕円形を呈し、直径または長軸が約0.25~0.35m、深さは約0.35

4047

- 1 10YR2/1 黒 シルト 柱形残存
- 2 A 10YR2/1 黒 シルトと
B 2.5Y7/2 灰黄 中～粗砂質シルト (地山由来) のブロック土 AB-6.4

4048

- 1 10YR2/1 黒 シルト 僅かに 2.5Y7/2 灰黄 中～粗砂質シルト (地山由来) ブロックを含む 柱形残存 (4050 ビットに切られる)
- 2 A 10YR7/1 灰白 シルト 凝縮～中砂 (地山由来) と
B 10YR5/1 黄灰 シルトのブロック土 AB-8.2

4050

- 3 A 10YR4/1 黄灰 シルトと
B 10YR2/1 黒 シルトと
C 2.5Y8/2 灰白 砂質シルト (地山由来) のブロック土 ABC-2.4.4

4049

- 1 A 2.5Y8/3 淡黄 凝～中砂質シルト (地山由来) と
B 10YR3/1 黒褐 砂質シルトのブロック土 AB-9.1
柱はあるがビット裏側が傾乱溝により、かなり傾んでいるため
横倒しになっており原位置を留めず
ビット自体も傾んでいるものと考えられる

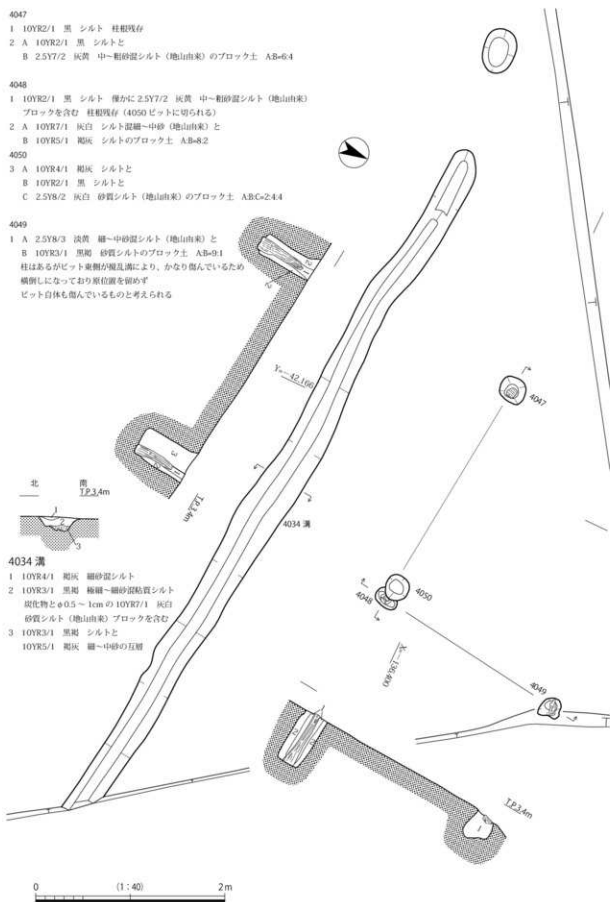


図 106 掘立柱建物 4002 平・断面図

～0.6mである。建物を構成するピットのうち、4055ピットを除く全てのもので直径0.08～0.13m、残存長0.34～0.62mの柱材が遺存していた。このうち、比較的遺存状況の良かった4053ピット出土の柱材(図版53-398: AMS 分析試料7)について放射性炭素同位体による年代測定を実施した。詳細は第4章に譲るが、紀元前2世紀前半～紀元後1世紀中頃の年代を示し、弥生中期後葉の柱材との結果を得た。この柱材の樹種はクスギである。建物4001に関する遺物は4054ピットで細片となった弥生土器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。遺物からは建物の時期を押さえられなかったが、AMS分析の結果から弥生時代中期後葉の所産と捉えておきたい。

掘立柱建物 4003 (図 108・図版 27・28) 4-1区中央部やや西寄り、 $X=-136.413$ ・ $Y=-42.180$ 付近に位置し、建物4001の西側約5mにある。建物4003は梁行1間(3.6m)×桁行3間(4.8m)である。桁行の柱間は心々距離で西辺が1.4～1.9mで、東辺は1.5～1.7mを測る。桁行は $N-4^{\circ}-E$ を指向する。柱掘方の平面形は不整形円形或いは不整形楕円形を呈し、直径または長軸が約0.25～0.3m、深さは約0.3～0.4mである。ピットはブロック土で埋め戻されおり、断面で柱痕跡のみみられなかったことから、柱材を完全に抜き取って建物を放棄している。建物4003に関する遺物は4036～4038・4064・4067ピットで細片となった弥生土器が出土しているが、時期の特定には至らなかった。また、4037ピットの北側直ぐの東西約1.1m、南北約1.5mの範囲に長軸・長辺が2～6cm×短軸・短辺が2～5cm程度の円～垂角礫が20数個あった。基盤層にはこの大きさの礫を含有していないので、人為的に持ち込まれたものと推察されるが性格は不明である。

4023ピット (図 109・110・図版 43・49) 建物4003の西側約1.5mに位置する。平面形は不整形円形を呈し、長軸が約0.45m、短軸が約0.4mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は2枚に分かれ、上層が第8層系の黒色砂質シルトで、下層が褐灰色細砂混シルトである。いずれも地山由来の灰白色シルトブロックを含む。ピット上面で土師器片(甕・鉢)がまとまって出土した。その他、風化の進んだサヌカイト剥片の出土があった。このうち1点(図110-399)を図化した。399は楕円形の鉢である。底部から口縁部に向けて緩やかに内湾しながら立ち上がり、端部をやや先尖気味に収める。底部は丸底である。摩滅が進み調整は不明瞭であるが、体部外面下半～底部外面はヘラケズリを施し、上半にはユビオサエの痕跡が残る。体部内面はハケメを施す。口径は12.7cm、器高は4.2cmを測る。東四国(阿波・讃岐)地域からの搬入土器であろう。古墳時代初頭～前期(庄内式～布留式併行期)の所産である。なお、甕は布留式甕とみられることから、古墳時代前期のピットと言えよう。

土坑 (図 107・109～115・図版 29・23) 土坑は4-1調査区の南西部や4-2区で10基前後が検出されている。性格は判然としなないものが多いが、木製品の出土が顕著なものもみられた。4-1区の $X=-136.415$ を軸とし、 $Y=-42.185$ ～190間でみられる数基の土坑はブロック土が埋積していることから、粘土採掘孔である可能性が窺える。

4003土坑 (図 109・110・図版 29・41・52) 4-2区の北西辺沿い、 $X=-136.380$ ・ $Y=-42.190$ に位置する。平面不整形楕円形を呈し、長軸が約1.15m、短軸が約1mを測る。断面形は袋状を呈し、検出面からの深さは約0.5mである。埋土は黒色粘質シルトや黒色砂質シルトとブロック土(地山由来の灰白色シルト混粗砂・礫、にぶい黄褐色中～粗砂等と黒褐～黒色シルトの)が互層状に埋積している。最下層の黒色粘質シルトには植物遺体や木製品が多く含まれていた。出土遺物には土師器(甕、鉢、高坏)、弥生土器片、木製品(柄状品、棒材、杭状品、加工材、炭化材等)、モモ核6点以上がある。このうち土師器2点(図110-400・401)、木製品1点(図110-402)を図化した。400は有段口縁鉢である。

体部下半を欠失するが、丸底の体部になるものであろう。401は高環。脚筒部下端に直径1.1cmの円形透かし孔を3方向に穿つ。400・401共に古墳時代前期(布留式併行期)の所産。402は平面形がグラウンドホッケーのスティック状を呈する木製品。扁平な板材を用い、一端を湾曲させるように加工し、その先端部に細かな加工を加えてヘラ状に仕上げる。両端は扁平であるが、身部中央付近はやや厚く丸みを有する。残存長は70.1cm、幅は5cm、厚さは2.1cmである。クリ材製である。用途は判然としないが鎌等を装着する柄であろうか。

出土遺物の年代観から古墳時代前期の土坑と捉えられる。

4006 土坑 (図 109・110・図版 29・41・52) 4-2 区の南西辺沿い、 $X=-136.396$ ・ $Y=-42.190$ に位置する。平面不整形円形を呈し、長軸が約0.6m、短軸が約0.5mを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは約0.2mである。埋土は第8層系の黒色シルトで、上部がやや砂質、下部がやや粘性を帯びる。土坑上部で土師器壺が1点横倒しの状態で出土したが、先述したように重機による掘削の際、削り過ぎた為、体部が一部欠損した。出土遺物には土師器、モモ核1点以上がある。このうち土師器2点(図110-403・404)を図化した。403は広口短頸壺。体部は球形をなし、丸底である。404は甕口縁部。口縁端部を内側に肥厚させ、平坦な端面を有する。口縁部外面には煤が付着。どちらも古墳時代前期(布留式併行期)の所産である。

4014 土坑 (図 110・図版 44) 4-1 区中央部、建物4002北東側の $X=-136.396$ ・ $Y=-42.162$ に位置する。土坑北側部分は調査区外へ広がり、現状で平面不整形形状を呈する。南北長は約0.9m以上、東西幅は約1mを測る。東西軸の断面形は浅い皿状を呈し、深さは約0.2mである。埋土は地山由来の灰白色砂質シルトブロックを含む第8層系の黒色砂質シルトである。土坑は基盤層上で検出したが、断面観察の結果、第7或いは第8層(黒褐色細～中砂混砂質シルト)から切り込まれていることが明らかとなった(図10-20)。出土遺物には細片となった弥生土器や土師器、石製品があったが時期の特定には至らなかった。図化出来た遺物に石製品(図110-405)がある。405は風化した凝灰質砂岩製の砥石である。表面1面の使用が確認出来る。裏・側面は破面となっている。左右側面に黒灰色の変色部位が認められることから焼成を被った可能性が高いと考えられる。肌理が細かな石材である。残存長は14.6cm、残存幅は8.7cm、残存厚は6.5cm、重量は960gである。

4033 土坑 (図 107・図版 29) 4-1 区中央部、 $X=-136.410$ ・ $Y=-42.169$ に位置し、建物4001の東辺上に乗る。平面形は不整形円形を呈し、直径は0.95～1mである。土坑はほぼ直に掘削されているが、土坑下部の基盤層が中～粗砂である為、側方浸食を受けてやや袋状を呈する部分がみられる。検出面からの深さは約0.75mを測る。埋土は大きく3枚に分かれる。上層は自然堆積と推察される第8層系の黒色シルト～細・中砂混粘質シルト、中層は地山由来の灰白～淡黄色シルトブロックを多く含む黒色細～中砂混粘質シルトで埋め戻し土と思われる。下層は水成堆積で黄灰～黒色粘質シルトである。土坑下部からは明確な湧水がみられなかったが、埋土の状況から井戸或いは水溜り遺構と思われる。出土遺物には細片となった突帯土器や弥生土器(中期前葉の広口壺等)があるが時期の特定には至らなかった。

4024 土坑 (図 111・112・図版 29・41) 4-1 区南西側の北壁沿い、 $X=-136.415$ ・ $Y=-42.186$ に位置する。土坑北側部分は調査区外へと広がり、全形は詳らかではない。土坑は後述する4015流路から溢れた砂を除去して検出された。平面検出段階では土坑同士の明瞭な切り合いを捉えることが出来なかった為、平面方形を呈する。しかし、断面観察や掘削後の底面の凹凸が顕著であった様子から、平

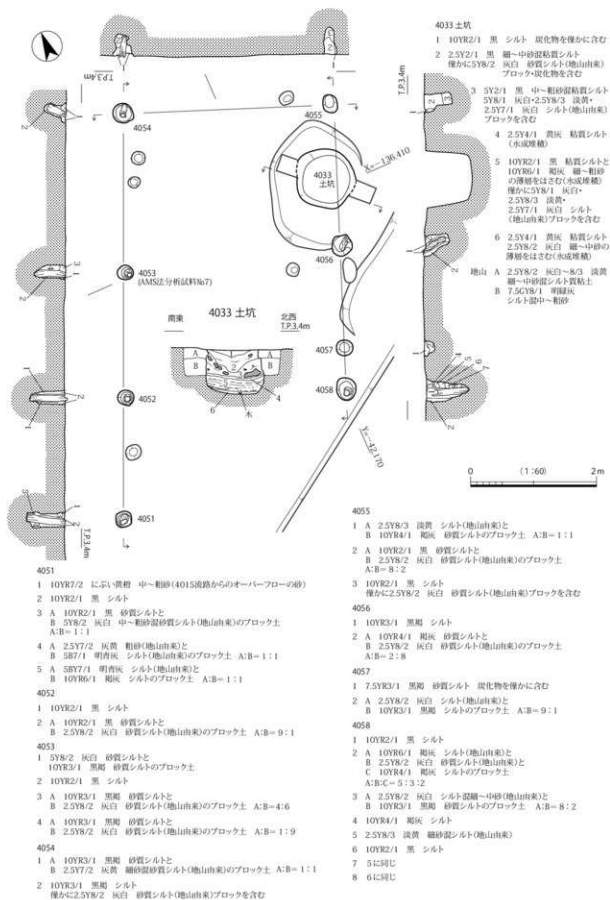
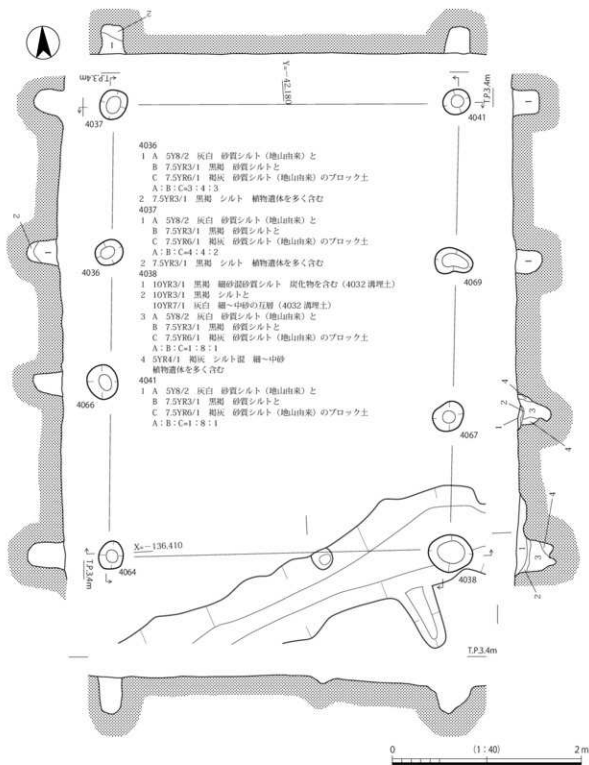


図 107 掘立柱建物 4001、4033 土坑 平・断面図



- 4064
 A 7.5YR3/1 黒 中砂混砂質シルトと
 B 5YR8/2 灰白 砂質シルト(地山由来)のブロック土
 A : B = 7 : 3
 4066
 A 10YR2/1 黒 シルトと
 B 7.5YR/1 ~ 8/2 灰白 シルト~砂質シルト(地山由来)のブロック土
 A : B = 2 炭化物を含む
 4067
 1 10YR3/1 黒 シルトと
 10YR7/1 灰白 細~中砂の互層(炭化土)
 2 10YR8/1 灰白 細~中砂の互層(炭化土)
 3 A 5YR/2 灰白 砂質シルト(地山由来)と
 B 7.5YR3/1 黒 砂質シルトと
 C 7.5YR6/1 褐灰 砂質シルト(地山由来)のブロック土
 A : B : C = 1 : 8 : 1
 4 5YR4/1 褐灰 シルト混 細~中砂
 炭化物を多く含む

- 3 10YR2/1 黒 シルト
 $\phi 0.5 \sim 1$ cmの 10YR6/1 褐灰 シルトブロックを含む
 4 A 10YR3/1 黒 シルトと
 B 5YR8/2 灰白 砂質シルト(地山由来)のブロック土
 A : B = 1 : 1
 4069
 1 A 7.5YR4/2 灰 シルトと
 B 7.5YR2/1 黒 砂質シルトと
 C 5YR/2 灰白 砂質シルト(地山由来)のブロック土
 A : B : C = 3 : 3 : 4

図 108 掘立柱建物 4003 平・断面図

而方形を基調とする複数の土坑が重複して掘削された結果形成されたものであることが明らかとなった。検出長(北西-南東)は約1.9m、検出幅(北東-南西)は3.15mを測る。北東-南西方向の断面形は袋状を呈し、底面も平坦に掘削されておらず凹凸が著しい。検出面からの深さは約0.3~0.55mである。

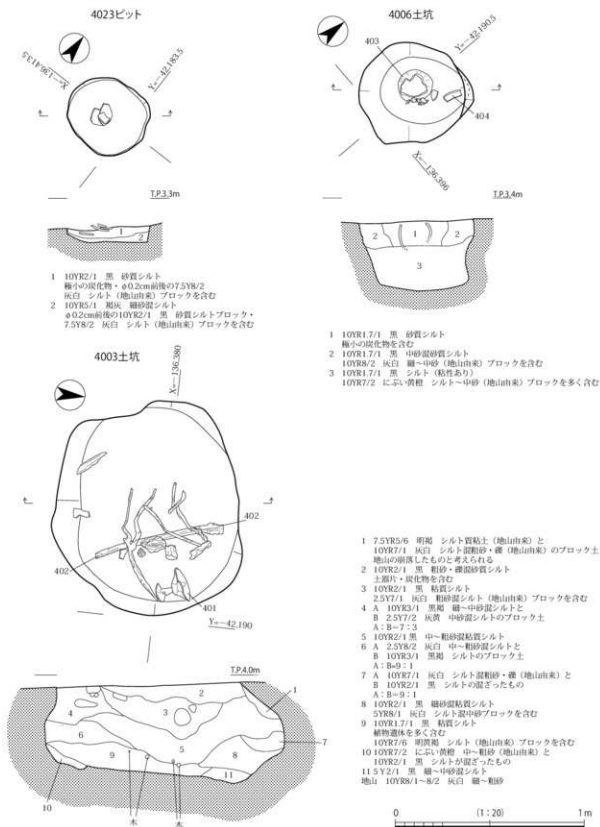


図109 4023ピット 4006・4003土坑 平・断面図

土坑は基盤層の砂質分が強くなったところで掘削を停止している。土坑は地山由来の灰白～黄灰・明青灰色砂質シルトや第8層由来と想定される黒褐色～黒色系シルト～砂質シルト等のブロック土が充填されていた。出土遺物は下層のブロック土から破片となった弥生土器や土師器が多く出土している。また、土坑底面中央部に削り残された地山付近を中心に底面からやや浮いた状態で完形に近い土師器(小型丸底土器)、木製品(板状・枝状・炭化材等)がみられた(図111・A-B断面7・8から出土)。このうち、弥生土器・土師器16点(図112-406～421)、木製品3点(図112-422～424)を図化した。

406・407は壺。406は二重口緑壺である。口縁端部は下方に拡張し、上端部は欠失する。口縁端面は凹線状に窪み、下端に刻みを入れる。407は広口壺である。口縁端面は凹線状に窪む。408～411は甕。408の体部外面は横またはやや右上がりのタタキ後細かなハケメを施す。外面には煤が付着する。409

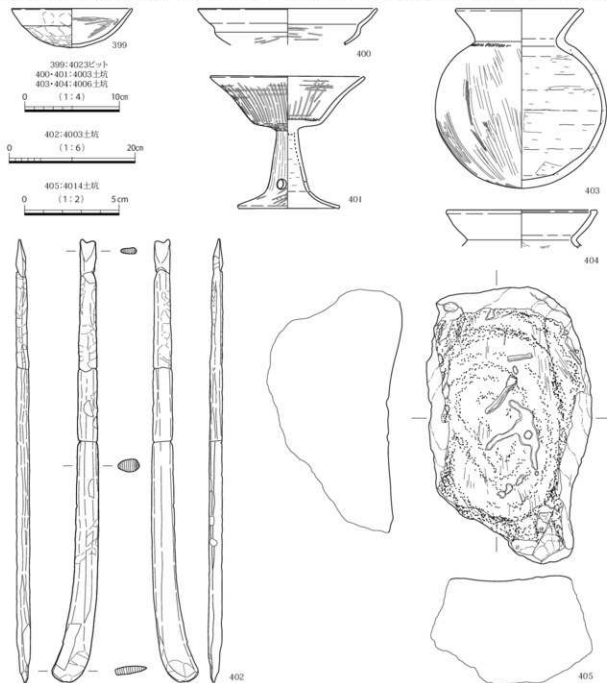


図110 4区 ビット・土坑 出土遺物

の口縁端面はヨコナデにより凹線状に窪み、下端が下方に僅かに拡張される。体部外面は右上がりのタタキを施す。外面は口縁部から体部、内面は体部下半に煤が付着する。410の口縁端面は僅かに内側へ肥厚させる。411は底部片。底部外面にはタタキ目がみられる。タタキ板の上で成形したと推察される。外面には煤が、内面には帯状にコゲが付着する。412は台付鉢か。鉢部分は欠損。413は鉢。口縁端面は僅かに下方に拡張する。414は椀形高環。口縁部を僅かに外反させ、端部は先尖気味に収める。415は器種不明である。脚裾部かと考え図化した。内外面とも横位のヘラミガキを施し、脚端面には半葎竹管によるC字状文を巡らせる。

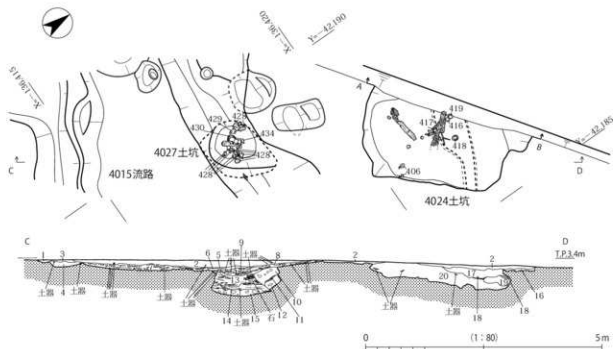
416～421は小型丸底土器である。416～418は壺。416の頸部の括れは小さく、扁球形の体部を持つ。417の頸部の括れは416に比して大きく、扁球形の体部を持つ。418は複合口縁壺。口縁部の一部を打ち欠く。体部中程より少し上に直径0.3cm程度の穿孔がみられる。419～421は鉢。419の頸部の括れは小さく、扁球形の体部を有する。420の頸部の括れは419に比して大きく、扁球形の体部を有する。421は有段口縁鉢である。体部下半を欠失するが、扁球形で丸底の体部になるものであろう。

406は弥生後期後半。407・408・413は古墳時代初頭(庄内式併行期)、414・416・418・420は古墳時代初頭～前期(庄内式～布留式併行期)、409～411・417・419・421は古墳時代前期(布留式併行期)の所産であろう。

422は列り込みのある板材。図下端側は欠失する。右側辺中央部に長さ約6cm、幅約1cmの列り込みを有する。残存長は20.8cm、幅は3.5cm、厚さは1.1cmである。クスノキ製品。423・424はホゾ穴を有する板材。423は欠失部分が多く、原形は判然としない。現状で逆「L」字状を呈するが、内側コーナー部分に辛うじてホゾ穴の一部が確認出来る。残存長は13.8cm、残存幅は7.1cm、厚さは1.3cmである。アカガシ垂属製品。424は欠失部分が多く、原形は判然としない。ホゾ穴周辺部に加工痕が残る。上端裏面は斜めにカットしている。残存長は29.3cm、残存幅は7.8cm、厚さは1cmである。クスノキ製品。いずれも何らかの部材であろう。出土遺物の年代観から古墳時代前期の土坑であろう。

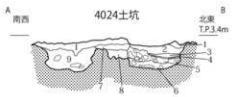
4026 土坑 (図 113) 4024土坑の南西約0.8mに位置し、後述する4015流路から溢れた砂を除去して検出された。平面不整形長方形を呈し、長辺が約1.1m、短辺が約0.6mを測る。土坑は長軸方向に2段に掘削されており、土坑南側が北側に比して約0.1m深くなる。長軸方向の断面を検討してはいないが、4024土坑同様、2基の土坑が切り合っていたのかも知れない。検出面からの深さは0.2～0.3mである。土坑は基盤層の砂質分が強くなったところで掘削を停止している。横断面形は袋状を呈し、埋土は地山由来の灰白色砂質シルト・中砂混シルト質粘土や第8層由来と想定される黒褐色～黒色系細・中砂混シルトのブロック土である。出土遺物は細片となった弥生土器片が僅かにみられた。その中には後期後半頃の囊体部片がある。

4025 土坑 (図 113・図版 43) 4026土坑の直ぐ西側に位置し、後述する4015流路に土坑の南西部分を切られる。平面不整形円形を呈し、直径は約1mである。土坑は南北方向に2段に掘削されており、土坑南側が北側に比して約0.15m深くなる。南北方向の断面を検討してはいないが、4024土坑同様、2基の土坑が切り合っていたのかも知れない。検出面からの深さは0.35～0.5mである。土坑は基盤層の砂質分が強くなったところで掘削を停止している。横断面形は土坑下部がやや袋状に掘削される。埋土は2枚に分かれ、下層が地山由来の灰白色砂質シルト・中砂混シルト質粘土や第8層由来と想定される黒褐色細～中砂混シルトのブロック土、上層が自然堆積層とみられる黒褐色シルトと灰白色細～中砂の互層である。遺物は上層から細片となった弥生土器やモモ核1点の出土があった。このうち弥生土器3



- 1 10YR4/1 黒灰 シルト混礫砂
炭化物を含むシルトのつミナあり
- 2 10YR2/1 黒 細～中砂シルト
炭化物を含む土層片を多く含む
- 3 10YR5/2 灰黄黒 シルト混中～粗砂
- 4 10YR3/1 黒黒 砂質シルト
10YR7/1～8/1 灰白 細～中砂ブロック
炭化物・土層片を含む
- 5 10YR2/1 黒 シルト～極細砂
- 6 10YR3/1 黒黒～2/1 黒 細砂混シルト
土層片・炭化物を含む
- 7 2.5YR2～8/1 灰白 細～粗砂
土方層化
- 8 2.5YR/1 灰白 細～中砂
10YR2/1 黒 シルトの薄層を挟む
- 9 10YR2/1 黒 細～中砂混シルト
11～8 4015周埋土 1・3・4・4015-1 2・5～8: 4015-2
- 10 A 5B/G/1 明青灰 砂質シルト(地山由来)ブロックを含む
B 10YR2/1 黒 細～中砂混シルトと
C 10YR7/1 灰白～6/1 黒灰 シルト(地山由来)のブロック土
A:B:C=4:3:3
- 11 10YR7/1 灰白 シルト～細砂
細砂が主体
- 12 A 5B/G/1 明青灰 砂質シルト(地山由来)と
B 10YR2/1 黒 細～中砂混シルトと
C 10YR7/1 灰白～6/1 黒灰 シルト(地山由来)のブロック土
A:B:C=7:1:2

- 13 10YR2/1 黒 シルト～3/1 黒黒 シルトの互層
- 14 10YR4/1～8/2 灰白 極細～細砂の薄層を挟む
- 15 A 5G/B/1 明青灰 砂質シルト(地山由来)と
B 10YR2/1 黒 細～中砂混シルトと
C 10YR7/1 灰白 6/1 黒灰 シルト(地山由来)のブロック土
A:B:C=3.4:3
[9～15: 4027土坑埋土]
- 16 A 2.5Y6/1 黄灰 砂質シルト(地山由来)と
B 5B/G/1 明青灰 砂質シルト(地山由来)と
C 10YR8/1 灰白 6/1 細灰 シルト混中砂のブロック土
A:B:C=8:1:1
- 17 A 10YR3/1 黒黒 中～粗砂混砂質シルト
B 2.5Y6/1 黄灰 細～中砂混砂質シルト(地山由来)のブロック土
A:B=1:1
- 18 2.5YR/1 灰白 細砂～5Y6/1 灰 シルト
- 19 A 2.5Y6/1 黄灰 細～中砂混砂質シルトと
B 7.5Y/2 灰白 細～中砂混シルトのブロック土
A:B=1:1
- 20 A 10YR2/1 黒 シルトと
B 5B/G/1 明青灰 砂質シルト(地山由来)と
C 2.5Y6/1 黄灰 砂質シルト(地山由来)のブロック土
炭化物・土層片を含む
A:B:C=8:1:1
[17～20: 4024土坑埋土]
地山 5B/G/1 明青灰 砂質シルト～細～中砂混砂質シルト



- 1 10YR2/1 黒 極細～細砂混砂質シルト
10YR7/1 灰白 砂質シルト(地山由来)のブロックを含む
- 2 A 7.5YR/1 黒 シルトと
B 2.5Y7/1 灰白 シルト(地山由来)のブロック土
A:B=6:4
- 3 2.5Y7/2 灰黄 中～粗砂
5G/Y/1 灰白 砂質シルト(地山由来)ブロックを含む
- 4 5Y6/1 灰 シルト
- 5 A 10YR2/1 黒 シルトと
B 2.5Y7/1 灰白 シルト(地山由来)と
C 5G/Y/1 灰白 砂質シルト(地山由来)のブロック土
A:B:C=7:2:1

- 6 A 10YR2/1 黒 シルトと
B 2.5Y7/1 灰白 シルト(地山由来)と
C 5G/Y/1 灰白 砂質シルト(地山由来)のブロック土
A:B:C=1:1:8
- 7 10YR2/1 黒 砂質シルト
10YR7/1 灰白 砂質シルト(地山由来)ブロックを含む
土層片を多く含む
- 8 7.5Y/2 灰 砂質シルト
炭化物・植物遺体を含む
- 9 A 10YR2/1 黒 シルトと
B 2.5Y7/1 灰白 シルト(地山由来)と
C 5G/Y/1 灰白 砂質シルト(地山由来)のブロック土
A:B:C=4:1:2

図 111 4015 流路 4024・4027 土坑 平・断面図

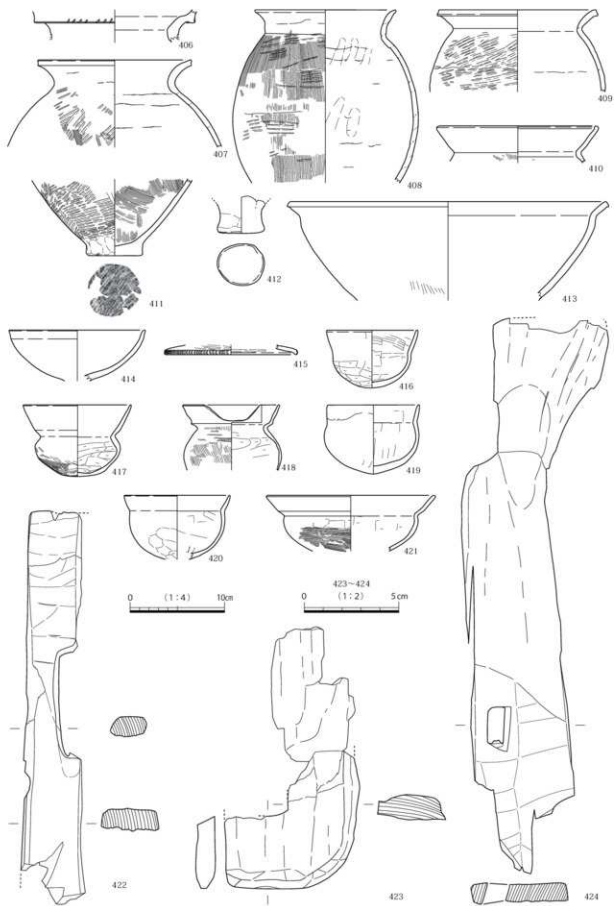


图 112 4024 土坑 出土遗物

点(うち1点は写真のみ:図版43-427)を図化した。425~427は甕である。426・427は受口状口縁甕である。426は内傾する口縁端面を持ち、口縁部外面に原体5条のクシ状工具による押引文を巡らせる。頸部には細い沈線が2条以上巡る。427は体部片である。上下にクシ状工具による押引文を巡らせ、押引文の下位にはクシ状工具による沈線を巡らせる。下段の押引文は原体が6条のクシ状工具である。426・427は近江地域からの搬入土器である。いずれも後期中葉~後葉頃の所産であろう。

4027 土坑 (図 111・114・図版 29・42) 4025土坑の南東約0.2mに位置し、後述する4015流路を掘削し終えた底で検出した。平面形は不整隅丸方形を呈し、東西約1.3m、南北約1.15mを測る。断面形は袋状を呈し、流路に上部を削られるが、検出面からの深さは約0.5mである。断面観察によれば、土坑は埋没後北側を再掘削された可能性が窺え、2基の土坑が切り合っていたのかも知れない。埋土は旧土坑が大きく3層に分かれ、下層が地山由来の明青灰~褐灰色シルト~砂質シルトと第8層系の黑色細~中砂混シルトのブロック土、中層が自然堆積の灰白色極細~細砂の薄層を挟む黒~黒褐色シルトや黒~黒褐色シルトの薄層を挟む褐灰色細~中砂、上層が新旧両土坑を覆う地山由来の灰白色砂質シルトを含む第8層系の黑色細~中砂混シルトである。新土坑の埋土は4層に分かれ、下層が地山由来の明青灰~褐灰色シルト~砂質シルトと第8層系の黑色細~中砂混シルトのブロック土、中層が自然堆積の灰白色シルト~細砂、上層が地山由来の明青灰~褐灰色シルト~砂質シルトと第8層系の黑色細~中砂混シルトのブロック土、最上層が旧土坑の上層と同じものである。出土遺物は中層から弥生土器や土師器、木製品(有頭棒、杭状品、柱材等)モモ核1点がまとめて出土している。このうち弥生土器・土師器を7点(図114-428~434:うち1点は写真のみ:図版43-431)、木製品1点(図114-435)を図化した。428・429は壺である。428は広口壺。頸部はほぼ直に短く立ち上がり、口縁部は短く開く。口縁端部は僅かに上方へ拡張する。体部は卵形で胴部がやや張っている。底部は平底。阿波地域からの搬入土器であろう。429は口縁部を「く」の字に屈曲させる。口縁端部は僅かに上下に拡張し、断面隅丸三角形に

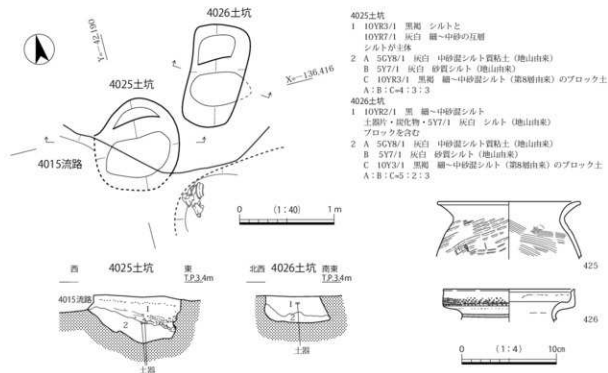


図 113 4025・4026 土坑 平・断面図 4025 土坑 出土遺物

仕上げる。端面は幅広の凹線状に窪む。口縁部に黒斑がみられる。器壁が非常に厚い。東部瀬戸内系の土器であろうか。430・431は甕である。430は口縁部を「く」の字に屈曲させ、口縁端部を僅かに上方へ肥厚させる。体部は球形である。431は体部片である。クシ状工具による押引文を巡らせ、押引文の上下にはクシ状工具による沈線を巡らせる。押引文は原体が6条のクシ状工具である。431は近江地域からの搬入土器である。432・433は鉢である。432の口縁部外面の直下に断面「V」字の凹線が1条巡る。433は剥落しているが体部には2方向に平面逆「U」字形を呈する把手が貼り付けられたものと思われる。胎土は混和剤が少なく精良である。434は注口土器。非常に器壁が厚い。口縁部は内傾し、端部は丸く収める。口縁端部から少し下がった位置にラッパ状に開く注口が付く。搬入土器と思われるが産地は不明。428・430～433は後期～古墳時代初頭(庄内式併行期)の所産。435は有頭棒状品。頭部は一部欠損。直径約4cmの棒材の一端に頭部を削り出し、他端を斜めに切り落として杭状にする。頭部には細かな面取りが施される。アカガシ亜属製。残存長は18.2cm、頭部幅は4.5cm、厚さは4.3cmである。出土遺物の年代観から古墳時代初頭頃の土坑であろう。

4028 土坑 (図 115・図版 29・42・44) 4027土坑の東側約0.5mに位置し、後述する4015流路を掘削し終えた底で検出した。平面形は不整形を呈し、東西約0.8m、南北約0.9mを測る。断面形は僅かに袋状を呈し、流路に上部を削られるが、検出面からの深さは約0.4mである。埋土は2枚に分かれ、下層が地山由来の明緑灰シルト質粘土及び灰色シルトと黒色シルトのブロック土、上層が自然堆積の黒色粘質シルトである。出土遺物には弥生土器や石製品、木製品(加工材)がみられた。このうち弥生土器2点と石製品1点を図化した。436・437は高坏か。共に口縁部内面の端部より少し下がった位置に段を巡らせる。436は内外面共に黒～黒褐色を呈する。436が後期、437が後期から古墳時代初頭(庄内式併行期)の所産か。438は砥石である。表裏面と左側面を使用。両端と右側辺は欠損する。肌理はやや粗い。細粒砂岩製。残存長は10cm、残存幅は7.6cm、厚さは3.2cm、重量は358.88gである。出土遺物の年代観から古墳時代初頭頃の土坑か。

4031 土坑 (図 115) 4027土坑の西南西約1.5mに位置し、後述する4015流路を掘削し終えた底で検出した。平面形は不定形で、東西約0.55m、南北約0.6mを測る。土坑底は凹凸が著しく、断面形も不定形である。検出面からの深さは約0.15mである。埋土は黒褐色細～中砂混シルトである。土坑として記載したが、4015流路が開削したものかも知れない。出土遺物には細片となった弥生土器がある。このうち器形を窺える2点を図化した。439は広口壺である。口縁端部を上下に拡張する。後期の所産である。440は甕。口縁部は受口状になり、端部を丸く収める。中期後半～後期の所産か。

限定された場所で複数の土坑が重複して掘削されることや集中して掘削されていた(4024～28土坑)のは、重要な目的があつてのことと推察される。ブロック土で埋め戻されることや重複して土坑が掘削されること、砂質分が強くなったところでの掘削停止といった状況は、遺構の営まれた年代が異なるものの、本遺跡の近傍に位置する吹田操車場遺跡や西の庄東遺跡、高城B遺跡で検出され、粘土採掘坑と性格付けられた群集土坑に類似する。本土坑群も粘土採掘坑である蓋然性が高い。

4015流路 (図 111・116・図版 43・44) 4-1区西側、X=-136.417ライン付近に位置する。流路はN-83°-Wを軸に西から東へと流れ、流路両側は調査区外へ延びる。検出長は約11mで、幅は西側がやや狭く約1.5m、東側が約1.9mである。上述したように、流路は西側で多くの土坑上部を開削するように流れている。流路南西側はこの流路が溢れたことにより削られた平坦部が幅約2～4.5mの範囲でみられる。また、調査区南西隅にも同方向にはしる浅い流路や溝状の落込みが4条みられる。埋土

は概ね黒色シルトと灰白色細～中砂の互層で、特に上部に堆積した黒色シルトに多くの土器が含まれていた。深さは検出面から約0.35～0.4mで東側が深くなる。出土遺物には須恵器や土師器、弥生土器、石器(サヌカイト製楔形石器・剥片、石包丁)、軽石、木製品がみられた。このうち、土師器・弥生土器28点(図116～441～468)、木製品1点(図117～470)を図化し、これら以外に軽石1点(図版44～469)を写真のみ掲載した。

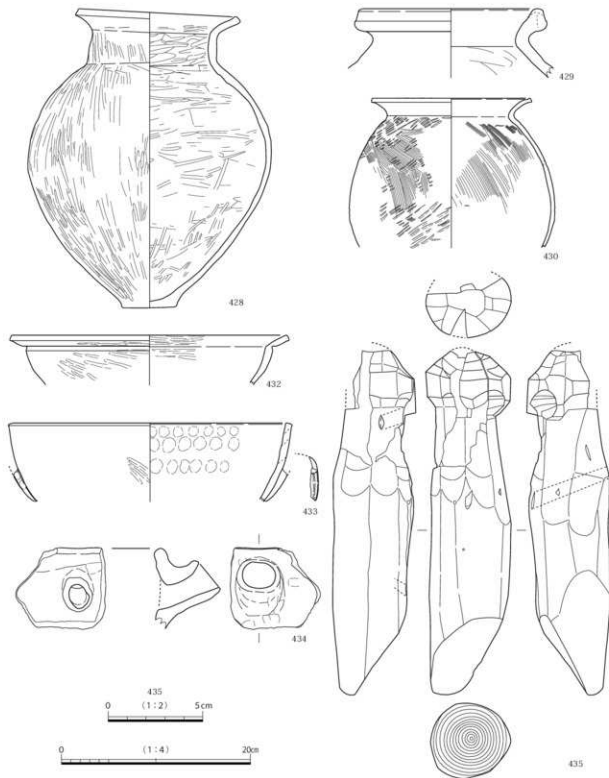


図 114 4027 土坑 出土遺物

441～449は壺である。441～445が広口壺。441はほぼ1個体が潰れた状態で出土。口縁部を欠失する。生駒西麓産の胎土。442の口縁端部下端は外傾気味に垂下する。443の口縁端面には沈線が2条巡る。444は口縁端部を僅かに上方へ拡張する。445は「く」の字に口縁部を折り曲げ、端部を僅かに上方へ拡張する。混和材が少なく精良な胎土。446は長頸壺。口縁部は受口状を呈し、端面には沈線を1条巡らせる。頸部には縦位のへら描きによる短沈線文を巡らせる。447は細頸壺。448・449は短頸壺。448の口縁端部は内側に肥厚させる。口縁部外面には端部直下に凹線を1条巡らせる。449の口縁部は外側を段状に肥厚させる。口縁端部直下には円形透かしが1孔みられる。450は小型丸底土器の壺。口縁部は大きく開き、体部は扁球気味である。451～458は甕である。451は逆「L」字状口縁痕。口縁端部内側を僅かに肥厚させる。生駒西麓産の胎土。452は二次焼成を被ったのか表面の剥離及び赤化が

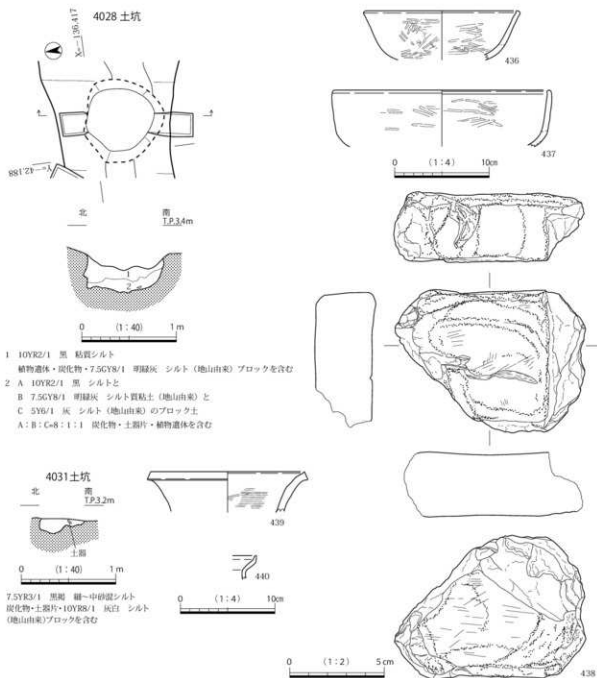


図 115 4028・4031 土坑 平・断面図 4028 土坑 出土遺物

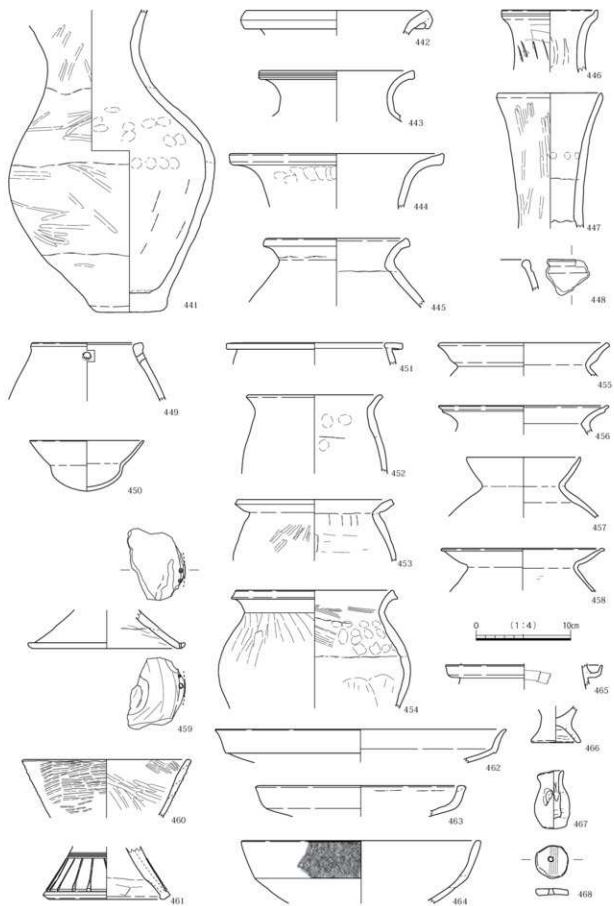


图 116 4015 流路 出土遺物

著しい。453・454は「く」の字に口縁部を折り曲げ、端面は凹線状に窪む。453は混和材が少なく精良な胎土。454は球形の体部。体部外面は二次焼成を被ったのか剥離が著しく、煤が付着する。456は受口状の口縁端部を持つ。458は大きく開く口縁部を持ち、端部を水平に折り曲げる。459は甕蓋。摘み部を欠失する。裾端部を水平に折り曲げる。端部屈曲点には直径0.2~0.3cmの紐孔が2孔穿たれるが、うち1孔は未貫通である。460は鉢。混和材が少なく精良な胎土である。461は台付鉢であろう。「ハ」の字に開く脚部で、脚端部は内側を肥厚させる。外面中位には3条の、端部のやや上方には1条の沈線が巡る。なお、沈線間には未貫通のヘラ状工具による長い三角形の透かしが放射状に施される。備前・備中地域からの搬入土器である。462~464は高環で、環上部のみの破片。462の口縁端部は僅かに外へ折り返し、丸く収める。463の口縁端部は内外を僅かに肥厚させ、丸く収める。口縁端部に煤が付着。混和材が少なく精良な胎土である。464の環部は内湾しながら斜め上方に伸び、口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がり、端部は平坦に仕上げる。口縁部外面を縄文で飾る。南関東地域からの搬入土器であろう。465は手焙形土器の受部。内面は板ナデカ。胎土は混和材が少なく精良である。466は小型の脚台。摩滅が著しく調整は判然としない。二次焼成を被っているようで、全体的に赤化がみられる。脚台式の製塩土器か。467はミニチュア土器の壺。468は土器転用の円板状土製品。直径約0.5cmの円孔を外面から1孔穿つ。直径3.5cm、厚さ0.7cm、重量は9.97gである。

469は軽石である。表面は褐灰色を呈し、気孔がみられず表面は密で、石英質の小礫を含んでいる。長さは7.8cm、幅は5.2cm、厚さは3.6cm、重量は51.53gである。470は平面三角形を呈する板材。先端部を尖らせるように両側面に細かなハツリを加える。これは4015流路右岸に1枚のみ打ち込まれていたものである。何らかの部材の転用品か。スギ材製。441・443・451は中期前葉、444は中期中葉~後葉、448・449は中期後葉、442・447・461は中期後葉~後期前半、452~455・462~464は後期、446・456・465は後期後半、445は後期後葉~古墳時代初頭(庄内式併行期)、457・460は古墳時代初頭(庄内式併行期)、450・458は古墳時代前期(布留式併行期)の所産であろう。出土遺物から古墳時代以降の流路か。

4029落込み(図117・図版43・44) 4015流路の北東側、建物4003周辺に位置する。南北約6m、東西約6mの範囲が深さ0.05m前後の浅い皿状に窪んでおり、そこに4015流路から溢れた黑色シルトや灰

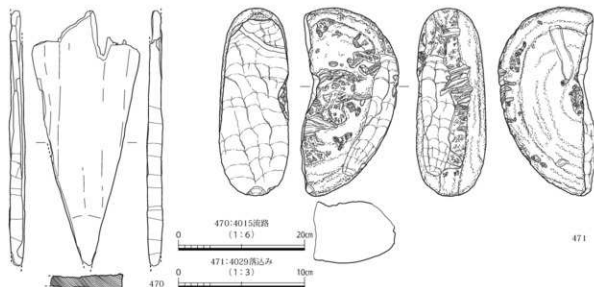


図117 4015流路・4029落込み 出土遺物

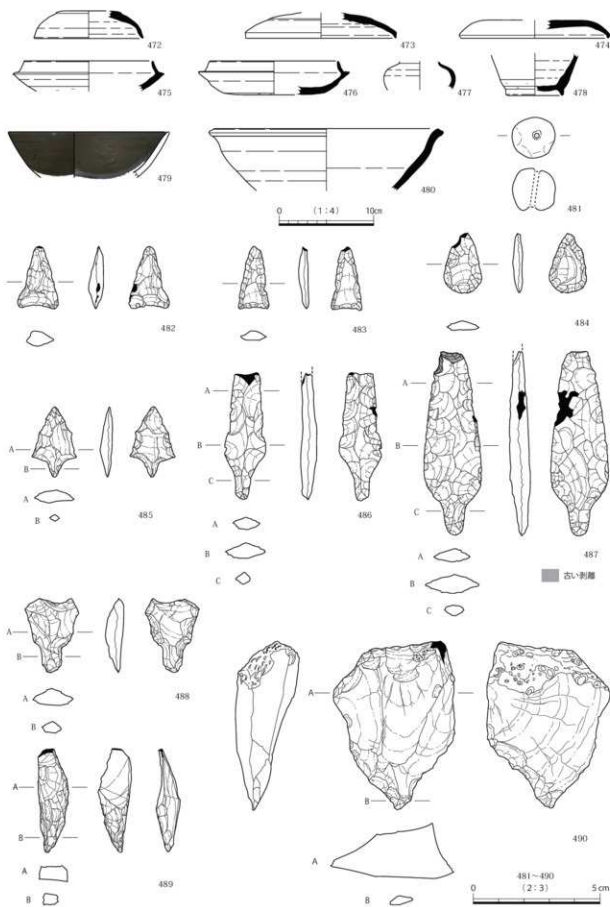


图 118 包含層 出土遺物①

白色細～中砂が堆積したものである。出土遺物には細片となった須恵器や土師器、弥生土器、礫石器がある。このうち礫石器を図化した。471は細粒砂岩製の台石・敲石。扁平な円礫の表裏面及び側面に敲打によるツブレと断面「V」字状を呈する線状痕がみられる。左側辺の下端で敲いた際に折損しており、右側辺も下端側を使用した際に帯状に剥落している。両極技法の際に用いた敲石・台石であろう。長さは14.9cm、残存幅は7.7cm、厚さは5.4cm、重量は847gである。

小結 遺構密度の濃淡はあるものの、ほぼ調査地全域で弥生～古墳時代の遺構が検出出来た。特に、2区南側から3区にかけての緩斜面地での検出が顕著であった。一方、2区中央部付近は平坦な地形であったものの遺構密度は希薄である。これは後世の土地改変により削平を被った可能性が窺える。同様に調査地南東側も希薄であったが、これは基盤層の標高が低く低湿な地形で居住に適さなかったためであろう。検出出来た遺構は弥生前期末～中期初頭、中期後葉～後期初頭、古墳時代前期の3時期が主体であった。掘立柱建物を31棟検出したが、大半のものは棟持柱を持たない構造で、建物の主軸に斉一性はみられない。3区南側検出のものを中心に複数棟で柱材が遺存していた為、建物6棟と欄列1条に関してAMS分析による年代測定を行った。その結果、上述した3時期に分かれるのではなく、中期後葉～後期初頭頃に限定されることとなった。古墳時代中期以降古代に関しては、遺構が殆ど確認されなかった。しかし、流路から墨書土器が出土していることや後世の作土層から少数ながら遺物が出土していることから、中世以降の土地改変により遺構が削平されたものと考えられる。

5. 包含層出土の遺物 (図118・119・図版45・46・48・53) 各調査区で第8層(弥生～古墳時代包含層)以降に堆積した後世の耕作土等からも少量ながら多様な遺物が出土した。これまで触れることが出来なかった時期の遺物と石器に関して簡単にふれておく。472～478は須恵器である。472は坏Hの蓋。473・474は坏Bの蓋。473の内面全面には厚さ0.1cmの黒色付着物がみられる。472は7世紀前半代、473・474は8世紀前半代の所産。475・476は坏身。いずれも受部は短く水平に伸び、口縁部は内傾しながら立ち上がる。476は体部外面に自然釉が掛かる。いずれも6世紀後半代の所産。477・478は壺。477はAか。口縁部を欠失。肩の張りは緩やかで、外面に自然釉が掛かる。7世紀末～8世紀初頭頃の所産であろう。478は壺Eか。断面台形の高台を貼り付ける。内面には自然釉が掛かる。8世紀前半頃

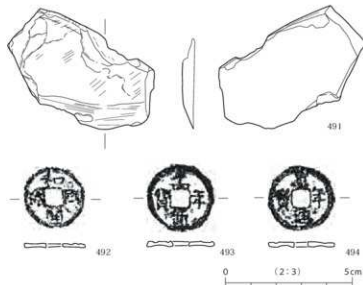


図119 包含層 出土遺物②

の所産。479は龍泉窯系青磁碗である。二又片刃により体部内面を5分割して飛雲文を入れる。12世紀中～後半の所産。480は東播系須恵器鉢。体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は緩やかに外反しながら斜め上方に立ち上がる。外傾する口縁端面を持ち、端部を外側に僅かに肥厚させることにより突帯状を呈する。口縁端部外面から体部内面まで自然軸が掛かる。11世紀中～後半の所産であろう。481は土鍾。直径約1.7cmの球形を呈する。中央に直径0.15cmの紐孔を1孔穿つ。重量は4.4g。

482～488はサヌカイト製石鐮である。482・483は凹基式。482は先端を欠損。裏面中央にみられるネガティブな剥離面が主要剥離面か。表面中央下部が剥離しきれずに厚く残る。失敗品であろうか。残存長は2.45cm、幅は1.6cm、厚みは0.6cm、重量は1.61gである。483は先端を欠損。裏面中央にみられる平坦な剥離面が主要剥離面である。残存長は2.5cm、幅は1.2cm、厚さは0.4cm、重量は1.06gである。484は凸基式。先端を欠損。裏面中央にみられる平坦な剥離面が主要剥離面である。残存長は2.3cm、幅は1.5cm、厚さは0.35cm、重量は1.4gである。485～487は有茎式。485は裏面にみられる平坦な大きな剥離面が主要剥離面。両側辺中程に逆刺が作り出され、平面多角形状を呈する。長さは2.75cm、幅は1.8cm、厚さは0.45cm、重量は1.41gである。486は大型の石鐮で先端部を大きく欠損。裏面中央に見られる平坦な剥離面が主要剥離面であろう。両側面から大振りな調整剥離を連続して行う。残存長は4.95cm、幅は1.6cm、厚さは1.65cm、重量は4.72gである。487は大型の石鐮で先端部を大きく欠損。欠損部は新欠ではなく、弱い風化がみられることから、後世に折れたのであろう。石材の質は良くない。残存長は7.25cm、幅は2.25cm、厚さは0.75cm、重量は12.47gである。488～490はサヌカイト製鎌である。488は頭部と錐部の境が明瞭なⅠ類。裏面中央にみられるネガティブな剥離面が主要剥離面の剥片を素材とする。錐部側辺には大振りな調整剥離を行う。先端は使用による摩滅が著しい。長さは2.95cm、幅は2.1cm、厚さは0.65cm、重量は3.4gである。489は頭部と錐部の境が明瞭ではないⅢ類。頭部端を欠損。身部中程から錐先端まで側辺を中心に摩滅が認められるが、特に先端の摩滅は顕著である。残存長は4.1cm、幅は1.2cm、厚さは0.9cm、重量は4.03gである。490は全体が分厚い多角形状をなし、その尖った先端に錐部を作ったⅡ類である。裏面の大きな剥離面が主要剥離面で、裏面には原礫面を残す。錐部には細かな調整加工を施す。先端部を中心に摩滅やツブレが顕著にみられる。長さは6.7cm、幅は4.85cm、厚みは2.15cm、重量は61.61gである。491は粘板岩製磨製石包丁。大きく欠損し、僅かに刃部がみとめられる。裏面が剥落する為、両刃或いは片刃なのかは不明。身部には斜位の、刃部には刃と並行の研磨痕がみられる。残存長は5.8cm、残存幅は4cm、残存厚は0.6cm、重量は17.16gである。492～494は銭貨である。492は和同開珎。土圧の為か「和」の字の下で僅かに折れ曲がる。「和」と「同」・「同」と「開」の間に2～3mm程度の楕円状の孔がみられる。これは鑄込む際に湯が回らずに出来たものであろう。直径は2.55cm、厚さは0.15cm、孔1辺は0.6cm、重量は2.21gである。493・494は萬年通寶。493の直径は2.7cm、厚さは0.2cm、孔1辺は0.55cm、重量は4.11gである。494は493に比して錆化が進み、文字が判読し難い。直径は2.6cm、厚さは0.2cm、孔1辺は0.55cm、重量は3.05gである。479・480が1区第4層、479が1区第5層、478が1区第6～7層、473・474・484・487・488・490～492が1区第7層、472・477・481・486・493・494は2区第7層出土、475・476・482・483・485・489が3区第8層出土である。

第4章 自然科学分析

第1節 分析の目的と概要

現地調査では、弥生時代から近世にかけての多数の遺構・遺物を検出した。中でも、弥生時代から古墳時代前期にかけての遺構・遺物に恵まれ、30棟に及ぶ掘立柱建物や柵列が姿をみせた。土坑等の多くの遺構からは遺物の出土が顕著であった一方、掘立柱建物や柵列を構成するピットからは時期を明確に出来るような遺物に恵まれず、各建物や柵列が如何なる時期に営まれたものなのか判然としなかった。そこで、複数の建物や柵列のピット内に遺存していた柱材に着目し、遺存状態が良好な7点を抽出して放射性炭素年代測定を実施する運びとなった。不明であった建物・柵列の絶対年代を明らかにすることにより、調査地の集落構造や変遷及び景観復元の手掛かりとし、他遺跡との関連を検討することが可能となる。

第2節 放射性炭素年代測定

1. はじめに

中ノ坪遺跡は1980年代に周知されるようになった遺跡であるが、発掘調査が活発に行われてこなかったこともあり、遺跡の様相はあまり判然としていない。今回、大規模な民間開発が計画されて広範に亘る発掘調査が実施された。その結果、30棟近い掘立柱建物が検出された。しかしながら、柱穴からの出土遺物に恵まれず、建物の時期を特定するに至らなかった。そこで、建物の建築時期を明らかにするため、多くの建物に遺存していた柱材を用いて加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、2区の建物2007の2075ピットの柱(試料No. 1: PLD-31744)と建物2006の2277ピットの柱(試料No. 2: PLD-31745)、3区の建物3003-2の3223ピットの柱(試料No. 3: PLD-31746)、建物3003の3123ピットの柱(試料No. 4: PLD-31747)、建物3002の3112ピットの柱(試料No. 5: PLD-31748)、柵列3006の3213ピットの柱(試料No. 6: PLD-31749)、4-1区の建物4001の4053ピットの柱(試料No. 7: PLD-31750)の、計7点である(図47・48・68・66・70・61・107)。試料No. 2は最終形成年輪が残っており、他の試料に関しては最終形成年輪が残っていなかったが辺材部が残っていた。遺構の時期は、発掘調査所見によれば弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代中期末～後期初頭、古墳時代前期のいずれかの時期であると考えられている。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}C$)、同位体分別効果の補正を行って暦年代校正に用いた年代値と校正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-31744	試料 No. 1 遺物 No.589 調査区：2区 グリッド：2M_9g 遺構：建物 2007 2075 ピット	種類：生材 試料の性状：辺材部 芯種：柱 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-31745	試料 No. 2 遺物 No.594 調査区：2区 グリッド：3M_11 遺構：建物 3006 3277 ピット	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪 芯種：柱 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-31746	試料 No. 3 遺物 No.1591 調査区：3区 グリッド：2N_7d 遺構：建物 3003_2 3223 ピット	種類：生材 試料の性状：辺材部 芯種：柱 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-31747	試料 No. 4 遺物 No.1606 調査区：3区 グリッド：2N_7d 遺構：建物 3003 3123 ピット	種類：生材 試料の性状：辺材部 芯種：柱 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-31748	試料 No. 5 遺物 No.1592 調査区：3区 グリッド：2N_5c 遺構：建物 3002 3112 ピット	種類：生材 試料の性状：辺材部 芯種：柱 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-31749	試料 No. 6 遺物 No.1599 調査区：3区 グリッド：2N_9a 遺構：横列 3006 3213 ピット	種類：生材 試料の性状：辺材部 芯種：柱 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-31750	試料 No. 7 遺物 No.1172 調査区：4-1区 グリッド：2O_8a+b 遺構：建物 4001 4053 ピット	種類：生材 試料の性状：辺材部 芯種：柱 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

14C年代を、図120に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代(yrBP)の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差(±1σ)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

以下、2σ暦年代範囲(確率95.4%)に着目して結果を整理する。なお、弥生時代の暦年代については、小林(2009)を参照した。

2区の建物2007の2075ピットの試料No. 1 (PLD-31744)は、162-131 cal BC(10.9%)、118-19 cal BC (80.6%)、12-1 cal BC (3.9%)で、紀元前2世紀前半～紀元前1世紀末の暦年代を示した。これは、弥生時代中期後葉に相当する。建物2006の2277ピットの試料No. 2 (PLD-31745)は、161-132 cal

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP \pm 1 σ)	14C年代 (yrBP \pm 1 σ)	14C年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-31744 試料 No. 1・遺物 No.589 2区・建物 2007・2075 ビット	-28.77 \pm 0.17	2058 \pm 20	2060 \pm 20	105-41 cal BC (68.2%)	162-131 cal BC (10.9%) 118-19 cal BC (80.6%) 12-1 cal BC (3.9%)
PLD-31745 試料 No. 2・遺物 No.594 2区・建物 2006・2277 ビット	-28.44 \pm 0.16	2055 \pm 20	2055 \pm 20	101-40 cal BC (68.2%)	161-132 cal BC (9.0%) 117 cal BC-2 cal AD (86.4%)
PLD-31746 試料 No. 3・遺物 No.1591 3区・建物 3003-2・3223 ビット	-28.82 \pm 0.18	2065 \pm 19	2065 \pm 20	107-45 cal BC (68.2%)	166-38 cal BC (94.2%) 9-3 cal BC (1.2%)
PLD-31747 試料 No. 4・遺物 No.1606 3区・建物 3003・3123 ビット	-28.19 \pm 0.17	2070 \pm 19	2070 \pm 20	111-46 cal BC (68.2%)	166-41 cal BC (95.4%)
PLD-31748 試料 No. 5・遺物 No.1592 3区・建物 3002・3112 ビット	-28.21 \pm 0.19	2072 \pm 19	2070 \pm 20	111-48 cal BC (68.2%)	166-42 cal BC (95.4%)
PLD-31749 試料 No. 6・遺物 No.1599 3区・柵列 3006・3213 ビット	-28.21 \pm 0.21	1990 \pm 19	1990 \pm 20	21-11 cal BC (10.1%) 2 cal BC-30 cal AD (42.7%) 38-51 cal AD (15.4%)	41 cal BC-57 cal AD (95.4%)
PLD-31750 試料 No. 7・遺物 No.1172 4-1区・建物 4001・4053 ビット	-27.33 \pm 0.17	2099 \pm 19	2100 \pm 20	167-94 cal BC (68.2%)	179-52 cal BC (95.4%)

BC (9.0%)および 117 cal BC-2 cal AD (86.4%)で、紀元前2世紀前半～紀元後1世紀前半の暦年年代を示した。これは、弥生時代中期後葉～後期初頭に相当する。試料 No. 2 は最終形成年輪が、試料 No. 1 は辺材部が残っていた。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。試料 No. 1 は古木効果の影響を僅かに受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも僅かに新しい年代であると考えられる。

3区 の建物 3003-2 の 3223 ビットの試料 No. 3 (PLD-31746)は、166-38 cal BC (94.2%)および 9-3 cal BC (1.2%)で、紀元前2世紀前半～紀元前1世紀末の暦年年代を示した。建物 3003 の 3123 ビットの試料 No. 4 (PLD-31747)は 166-41 cal BC (95.4%)、建物3002 の 3112 ビットの試料 No. 5 (PLD-31748)は166-42 cal BC (95.4%)で、いずれも紀元前2世紀前半～紀元前1世紀中頃の暦年年代を示した。これらは弥生時代中期後葉に相当する。柵列3006 の 3213 ビットの試料 No. 6 (PLD-31749)は、41 cal BC-57 cal AD (95.4%)で、紀元前1世紀中頃～紀元後1世紀中頃の暦年年代を示した。これは、弥生時代中期後葉～後期前半に相当する。試料 No. 3～6 は辺材部を測定しており、測定結果は僅かに古木効果の影響を受けていると考えられる。

4-1区 の建物4001の4053ビットの試料 No. 7 (PLD-31750)は、179-52 cal BC (95.4%)で、紀元前2世紀前半～紀元前1世紀中頃の暦年年代を示した。これは、弥生時代中期後葉に相当する。試料 No. 7 は辺材部を測定しており、測定結果は僅かに古木効果の影響を受けていると考えられる。

今回の測定試料は、発掘調査所見では弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代中期末～後期初頭、古墳時代前期のいずれかであると考えられているが、測定の結果、弥生時代中期後葉か、中期後葉～後期初頭および前半に相当する暦年年代を示したため、いずれも弥生時代中期末～後期初頭の試料と考えられる。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.

小林謙一 (2009) 近畿地方以外の地域への拡散。西本野弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 55-82, 藤山園。

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の14C年代編纂委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会。

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hsu, S.W.,

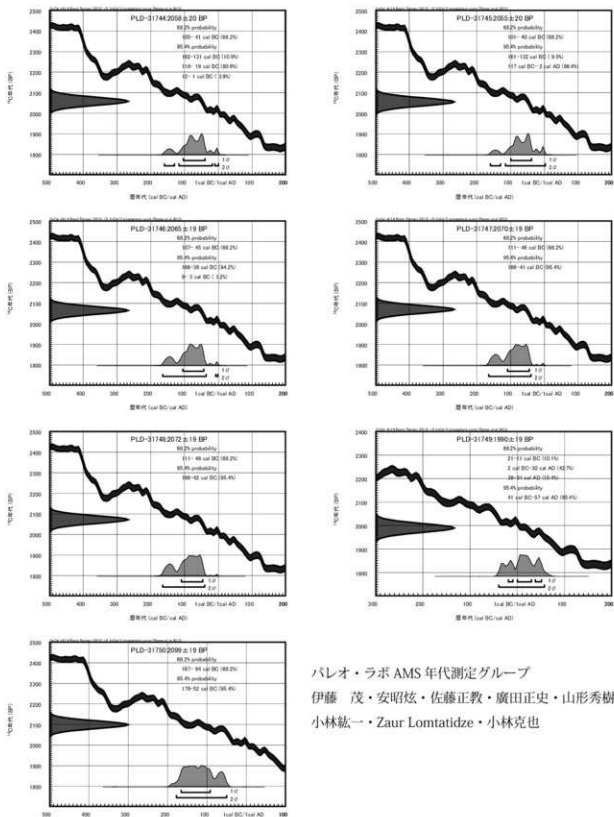


図 120 測定結果の暦年較正結果

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
 伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
 小林紘一・Zaur Lomtadze・小林克也

第5章 総括

第1節 遺構

今回の調査において検出した遺構の大半は、基盤層(地山)上面において検出したものである。本来ならばより上位の遺構面に帰属するはずの近世期の遺構から弥生時代の遺構までを同一面で検出した為、錯綜した状態になった。これらの遺構を各遺構出土の遺物や遺構埋土を手掛かりとして区分した結果、本調査地における主体的な遺構の時期は弥生時代から古墳時代前期にあることが明らかとなった。以下に調査地周辺における状況も踏まえて調査成果を簡単にまとめる。

中世以降の状況：今回の調査では、中世期の状況は判然としなかったものの、基盤層上面において近世期を主体とする耕作に関わる遺構を少数ではあるが確認することが出来た。これらの多くは井戸・水溜状遺構、溜池である。ほとんどの遺構が近世末期(19世紀代)には埋没しているようであるが、底まで完掘出来た遺構が少なく、出土遺物も僅少であった為、掘削年代や使用年代を推定することが困難であった。そのような状況において調査地南側で3015土坑(近世初期)や4011土坑(中世後半か)のように比較的古相の遺構が検出出来たことは、今後、中・近世における耕地開発や耕地経営を考える上で重要な手掛かりとなるものと考えられる。近世期において溜池が掘削され、利用される状況は遺跡北側に展開する吹田操車場遺跡でも確認されている。遺跡周辺では千里丘陵に源を発し、安威川や神崎川に注ぐ河川が存在するが、いずれも短流で水量が豊富でなかったこともあり、広大な耕地経営に伴う水源確保に苦慮していたものと推察される。

また、耕作地に関わるものとして断面観察ではあるが、2条の坪境ラインを復元することが出来た。これらを嶋下南部条里の区画復元に照らし合わせると、1区西側突出部南壁で確認したものが「16条7里22坪」と「同23坪」を隔てるもの(Aラインと仮称)、4-1区東壁及び4-2区西壁で確認したものが「同26坪」と「同35坪」を隔てるもの(Bラインと仮称)に推定出来る。これら以外に検出した遺構で坪境に該当するものを検討すれば2028・2029溝が注目される。両溝はBラインの北側約107mに位置することから「同23坪」と「同26坪」を隔てるもの(Cラインと仮称)と言えよう(図122)。坪内の耕地区画等の復元までは至らなかったが、Aラインを南へと延長させ、B・Cラインとの交点をみた場合、Bラインとの交点には4001溜池が、Cラインとの交点には2304溜池が築かれていることは注目しておきたい。各遺構が機能していた時系列の整理が出来ていないが、水利に関わるものとして溜池と井戸や水溜状土坑との関係が如何なるものであるのか、今後の検討課題である。

耕作に関する遺構以外に古代以降の粘土探掘坑と推察される1026土坑群がある。埋土がブロック土であること、複数の土坑が重複して掘削される等、調査地近傍に所在する吹田操車場遺跡(古墳時代後期～飛鳥時代)や高城B遺跡・西の庄東遺跡(14世紀前半以前)で確認された群集土坑に類するものである。吹田操車場遺跡例のように広範に、且つ大規模に掘削作業が行われていないことから、在地での消費を断る土器類や瓦生産の為、小規模な生産体制下で掘削されたものと捉えておきたい。高城B遺跡・西の庄東遺跡例は掘削された個々の土坑が比較的大きく(3×4m程度)、今回検出した土坑群は吹田操車場遺跡例に近い大きさである。一概には言えないが、1026土坑群は14世紀前半よりも古い時期の所産である蓋然性が高い。

中世以前の状況：古墳時代中期～古代に関しては、遺構が殆ど確認されなかった。しかし、1005流路から墨書土器や合わせ口状になった須恵器が出土したことや後世の作土層から少量ながら遺物の出土をみたことから、何らかの活動が行われていたのは疑いないが、その具体的な様相を復元するには至らなかった。調査地の東側約50mの地点で実施された第3次調査では、条里に関わる遺構として捉えられた平安時代かそれ以降の2条のピット列が検出されており、調査地周辺でも耕地が展開していた可能性を窺わせる。また、吹田操車場遺跡では、JR岸辺駅周辺の地区で古墳時代後期から飛鳥時代の粘土採掘坑と推定される群集土坑や7～10世紀頃の建物群がみつかっており、出土土器からは難波宮との深い関連も指摘される等、古代において重要な位置を占める遺跡となっている。遺憾ながら今調査地は中世以降の土地改変により当該期の遺構は既に削平されたものと考えられるが、墨書土器や和同開珎・萬年通寶等の特殊な遺物が調査地北側を中心に出土していることを勘案すれば、当遺跡の北方部分、すなわち吹田操車場遺跡との間が古代における中ノ坪遺跡の中心部分であった可能性が窺える。今後、周辺での調査により明らかとなることを期待したい。

遺構密度の濃淡はあるものの、ほぼ調査地全域で弥生～古墳時代の遺構が検出出来た。特に、2区南側から3区にかけての緩斜面地(T.P.3.4～4.1m)での検出が顕著であった。しかし、この中に位置する2区中央部付近は、平坦な地形であったものの遺構密度は希薄である。この部分は近現代の整地・盛土層直下が基盤層上層となる箇所が存在しており、後世の土地改変により削平を被って当該遺構が失われた蓋然性が高い。同様に、T.P.3.4m以下となる調査地南東側も遺構の存在が希薄であったが、これは基盤層の標高が低く低湿な地形で居住に適さなかった為であろう。こうした状況は調査地東側約120mで実施された第1次調査(古墳時代前期集落と湿地状地形)や第2次調査(湿地状地形)、調査地南西約0.6kmに位置する目依遺跡(弥生時代後期～古墳時代前期集落と湿地状落込み)でも確認されている。

今次の調査で検出出来た当該遺構には、掘立柱建物、土坑、ピット、溝等がある。これら遺構の帰属時期は、弥生時代前期末～中期初頭・中期後葉～後期初頭・古墳時代前期の3時期が主体であった。

掘立柱建物は31棟を検出した。大半のものは棟持柱を持たない構造で、建物の軸に斉一性がみられず、地形に即して建てられたものとみられる。また、2基の土坑(2064・3007土坑)から木製梯子(161・312)が各1点ずつ出土しており、建物の中には高床式建築物が存在していたことが確実である。今次の調査で検出出来た建物は掘立柱建物に限られている。先述したように、後世の土地改変で基盤層が削平された部分が存在することや調査地には未調査部分が広範に広がることから、元々は竪穴建物も存在していた或いは未調査部分に存在する可能性を残すが、調査地においては掘立柱建物が集落の建物構成の主体をなしていたものと捉えられる。このように掘立柱建物を主構成とする弥生時代の集落には、旧河川沿いの低湿地に面して営まれた岡山県百間川今谷大地遺跡や福岡県湯納遺跡、静岡県原川遺跡等が知られる。こうした状況は上述した第1次調査や目依遺跡でも同様であり、他遺跡の例から遺跡立地条件と大きく関連しているものと捉え、中ノ坪遺跡や目依遺跡では竪穴建物は営まれなかったか、もしくは主体ではなかったものと言えよう。

建物を構成する殆どの柱穴からは時期が特定可能な遺物の出土がみられず、個々の建物の帰属時期については判然としにくい。その中であって、2・3区南側で検出したものを中心に複数棟で柱材が遺存していた為、建物6棟(建物2006・2007・3002・3003・3003-2・4001)と柵列1条(柵列3006)に関してAMS分析による放射性炭素年代測定を行った。その結果、上述した3時期に分かれるのではなく、分析対象とした建物や柵列の帰属時期は中期後葉～後期初頭頃に限定されることとなった。他の2

時期の建物に関しては明確に出来ず、今後の検討課題である。その中において、建物3005は柱穴から古墳時代前期の直口壺が出土し、建物を構成する柱穴が他の建物に比して規模がやや大きいこと、建物周辺に古墳時代前期所産の土坑が複数存在することから、古墳時代前期の帰属として捉えたい。第1次調査においても古墳時代前期の掘立柱建物と推定されるものが2棟、柵列が1条検出されており、遺跡南寄りの部分に当該集落が展開するものと推察される。

2064・3007・3052土坑から炭化した木製品や炭化米、被熱痕跡を有する土器等が多数出土した。これらは弥生時代中期後半～後期初頭の所産の遺構であり、当該期の集落で火災が起こった可能性を示唆するものであろう。検出遺構からはその痕跡を窺えなかったが、留意しておきたい資料である。

人為的な遺構からの出土は確認できなかったが、流路(1009溝)から弥生時代前期中頃の土器がまとまって出土した。当溝からは碧玉製の管玉も1点出土している。土器や管玉には顕著な摩滅がみられなかったことから、遠方から流れされて来た遺物とは考えられない。未調査部分も含めた調査地近傍に当該集落が形成されていたものと推察される。遺物の出土位置から類推すれば、溝南側に広がる未調査部分・1区南西側X＝－136,280・Y＝－42,280付近が気になることである。今後の弥生時代前期集落域の解明に期待がもたれる。

また、古墳時代前期の遺構では調査地南西側で検出した4024～4028土坑が注目される。これらの土坑は埋土がブロック土で、4024土坑のように複数の土坑が重複して掘削されているものもあった。これら土坑は吹田操車場遺跡で検出されている群集土坑(古墳時代後期以降)に個別土坑の規模や埋土の点で類することから粘土探掘坑と推定される。但し、同遺跡のように大規模に掘削が展開されていないことから、在地での消費を賄う土器類生産の為、小規模な生産体制下で掘削されたものと言えよう。周辺では当該期の粘土探掘坑は他に管見に触れなかった。類例の増加を待ちたい。なお、4024土坑には小型丸底土器が複数個体置かれていた。土坑を埋め戻す際に何らかの祭祀が行われたものと推察される。

第2節 遺物

出土遺物は、旧石器時代に遡る可能性があるかなり風化の進んだサヌカイト剥片から近世陶磁器や漆器等まで多種多様なものがみられた。出土点数等の具体的な数字は提示出来ないものの、圧倒的に主体を占めたのが弥生土器であった。中でも弥生時代中期後半～後期初頭頃の資料が中心を占める。

古くは縄文時代晩期後半の突帯文土器(壺・甕)が数点1区北側を流れる弥生流路から出土している。やや摩滅が進んでいる状況であるので、流されて来た可能性があるものの、吹田操車場遺跡でも突帯文土器が確認されていることから、近傍に当該集落が存在するものと考えられる。次に続く弥生時代前期前葉の土器はみられないが、中葉頃の遺物は1009溝の中からまとまって出土している。吹田地域の弥生時代前期資料の中では古相になるものと考えられ、注目すべき一群である。突帯文土器との伴同関係は捉えられないが、両者は比較的近くから出土していることもあり、近接して集落が営まれていた可能性があらう。また、前期土器と共に碧玉製管玉が1点出土している。1009溝からは前期末～中期初頭、中期前葉頃の土器も出土していることから、管玉の時期を明確には出来ないが概ね前期～中期の所産と言える。近畿出土の弥生時代の管玉の中でも古相に位置し、墓域からの出土が大半を占める弥生時代の玉類にあって集落域から出土したこと併せて特異な資料と言えよう。また、産地同定の分析を実施出来なかったが、碧玉はやや青味を帯びた緑灰色を呈しており産地未定C群と称されるものに類すると思

われ、入手先が注目される。この他、当該期(縄文時代晩期～弥生時代前期)の資料として注目すべきものに、徳島県産とみられる結晶片岩製石棒が挙げられる。これまで石棒は北摂地域では茨木市・豊中市(各1点ずつ)で確認されていたが、近年、吹田操車場遺跡においても出土が確認されており、近接した遺跡で集中して存在することが明らかとなった。当該集落が何処に形成されたかは不明であるが、吹田操車場遺と本遺跡は指呼の距離にあることから、両遺跡とも行動領域内に位置したものと考えられ、関連性が高いものと推察される。未だ詳らかではない吹田地域の縄文時代晩期～弥生時代前期であるが、今後の資料の蓄積を得てさらに解明されるものと期待する。

先述したように多量の弥生土器が出土したが、これらの中には他地域から搬入された、或いは影響を受けたとみられる外来系土器が少なからず存在した。完全に全てのものを抽出出来た訳ではないが、ある程度の傾向は把握出来ると考えられる。一番多くみられたのは河内地域(生駒西麓産の胎土)で21点(この中には縄文時代晩期の突帯文壺2点(101・375)・深鉢5点(62・65・66・79・102)を含む)が確認されている。小片となったものの中にも生駒西麓産胎土を有するものが散見されるので、実態はこれ以上である。突帯文土器以外では弥生時代前期末～中期初頭の壺(391)・甕蓋(322)・土鍾(371)、中期の把手付鉢(52)、中期前葉の広口壺(441)・逆L字口縁鉢(451)、中期中葉～後葉の広口壺(244・378)・中期後葉～末の直口壺(185)・長頸壺(187)・高環(307・308)：両者は同一個体、後期末～古墳時代初頭(庄内式併行期)の高環(269)、古墳時代前期(布留式併行期)の直口壺(167)があり、中期中葉以降の資料が多くみられる。河内地域に次いで顕著であったのが、備前・備中地域からのもので9点みられた。資料は中期後半～後期初頭頃のものに限られ、中期後半の広口壺または甕(184)・甕(189)・高環(235)、中期後葉～末の広口壺(301)・甕(304)、中期後葉～後期初頭の高環(194)、中期後葉～後期前葉の台付鉢(461)、中期末～後期初頭の台付鉢(395)、後期初頭の高環(31)があり、高環がやや多い。次いで山城・近江地域のもの4点みられる。中期後半～後期前半の広口壺(144)、後期中葉～後葉の受口状口縁甕(426・427)、後期後葉～古墳時代初頭(庄内式併行期)の受口状口縁甕(431)がある。受口状口縁甕は4-1区で検出した粘土採掘坑と推定した土坑(4025・4027土坑)からの出土で限定的な出土状態である。また、次に述べる東四国系の土器も4-1区の4027土坑・4023ピットからの出土に限られた。東四国(阿波・讃岐)地域の土器は3点みられ、後期後葉～古墳時代初頭の広口壺(428)・壺(429)・古墳時代初頭(庄内式併行期)～前期(布留式併行期)の鉢(399)がある。山陰地域の土器も3点あり、古墳時代初頭(庄内式併行期)～前期(布留式併行期)の小型二重口縁壺(418)、古墳時代前期(布留式併行期)の中または大型鉢(215)・鼓形器台(230)がみられた。但し、中または大型鉢(215)は古墳時代初頭～前期の畿内では普遍的にみられる器種であることから、山陰系土器の影響を受け在地で製作されたものかも知れない。この他、各1点ずつの出土であるが、播磨地域かと思われる弥生時代後期頃の水差(44)、紀伊地域かと思われる中期前半の甕(131)、丹波・丹後地域の中期後葉の甕(387)、南関東地域の久が原式(後期)かと思われる高環(464)、後期～古墳時代初頭(庄内式併行期)と考えられる産地不明の注口土器(434)がある。以上、9地域(不明は除く)からの外来系土器を44点確認した。

これまでも第1次調査や本遺跡周辺に位置する垂水遺跡・垂水南遺跡・吹田操車場遺跡・目依遺跡等で外来系土器が多数確認されている。今調査では、その故地に関して新たな知見を付け加えることはなかった。また、弥生時代中期後葉以降に出土量や交流範囲が拡大するといった状況も同様であった。周辺の遺跡も含めた調査地一帯が淀川水系を利用した物流拠点の一角を占めていたものと推察されよう。

この他に、絵画土器と思われる資料が2点あった。1点は1005流路出土の弥生土器ミニチュア長頸

壺(29)である。体部外面上半部に竹管文で横長の三日月状文様を描く。船を描いたのであろうか。29が出土した1005流路の下位には弥生流路がある。本来はそれに帰属するものと考えられる。もう1点は3053土坑出土の弥生土器体部片(231)。外面に非常に細く浅い弧線が6条描かれる。弧線は横方向のものが先行し、縦方向のものが新しい。破片の為、何が描かれたのか詳らかではないが記号化された龍であろうか。共に水に関連する遺構からの出土であることを勘案すれば、水に関わる祭祀で使用されたのかも知れない。

弥生時代の石器類はごく普遍的にみられる組成であった。ただ磨製石斧に関して言えば、太形蛤刃石斧は破損品・転用品も含めてみれば一定の出土量がみられたが、小型の方柱状片刃石斧・扁平片刃石斧は各1点ずつしか確認出来ず、少ないと言わざるを得ない。打製石器は石鏃以外に、錐や楔形石器が顕著にみられた。

古墳時代初頭では35点の木鐺が3041土坑からまとめて出土したのが特筆される。木鐺には穿孔タイプと挟りタイプの2種類みられる。類推も含むが穿孔タイプは21点、挟りタイプが12点確認され、2点が不明であった。唐古・鏡遺跡の弥生時代資料であるが12個1セットの出土例がある。これを敷衍させれば、3041土坑出土資料は1点足りないものの、穿孔タイプ2セット・挟りタイプ1セットの計3セット分となる。

これまでも述べてきたように、古代の遺物は極めて少ない。その中であって、包含層出土資料であるが和同開珎(708年初鑄)1点、萬年通寶(760年初鑄)2点の皇朝十二銭の出土は注目される。使用状態は判然としないが、例えば坪境に埋納する等の耕作に関わる祭祀に使われたのであろうか。なお、奈良文化財研究所の和同開珎出土遺跡データベースによれば吹田市域での出土例は垂水南遺跡1点、榎坂遺跡2点、五反倉遺跡1点に次ぐ5点目となる。

1005流路から出土した土師器杯には「大寶」との墨書があった。土器は8世紀前～中葉頃の所産とみられる。出土状況から祭祀に関わるものと推察されるが、如何なる祭祀であったのかは判然としない。「大寶」と書かれた例は管見に触れず、その意味を明確には出来ていない。701～704年の元号「大寶」とする見解もあったが、元号であるならば年号も記載するのではないかの指摘もあることから、現状では吉祥句として書かれたものと捉えておきたい。大きな、或いは大いなる寶とは何を示すのか興味深いが、知り得る手立てがない。今後の類例の増加を待ちたい。

広範な遺跡範囲の割に調査が僅少で、遺跡の具体像が詳らかに出来ないが、最後に調査地周辺の状況を簡単にまとめる。南側の低湿な地形を望む緩斜面地(T.P.3.4～4.1m)に弥生時代から古墳時代前期にかけて集落が形成される。この緩斜面地は遺跡西側約0.6kmに位置する目伏遺跡が形成されるものと同一と思われる、居住域がかなり広範に広がっている可能性がある。今回検出した集落の北側は自然流路によって画されるようである。なお、流路の北側にも微高地が展開することから集落域が拡大する可能性は十分にある。また、調査地北東側には弥生時代中期後半の方形周溝墓と推定される区画(第3次調査)があることから、墓域が形成されていた可能性を有する。出土遺物の中に炭化米や磨製石包丁、平鏃がみられることから近傍で水田経営がなされていたことは想像に難くない。その際、耕作域の候補となるのが集落南側に広がる低湿な地形であろう。第2次調査の際は水田が確認されなかったが、今後の調査に期待される部分である。また、少量ではあるが土鐺が2点出土していることをみれば、近傍の河川で漁撈が行われたことも推察される。古墳時代初頭には木鐺の出土をみたことで席などを編んでいたことが明らかとなった。また、自家消費の土器を焼くためなのか粘土採掘も行われていたようである。弥生

時代中期後半以降は特に、各地からの外来系土器が相当量みられることから、淀川水系を利用する物流拠点としての側面を有する集落であったものと推察される。

今回は約8000㎡を調査し、これまでに明らかとなっていた古墳時代前期の集落以外に、新たに弥生時代の集落も展開することを明らかにした。特に遺構が集中する2・3区の東西に隣接する未調査地(DIC株式会社工場基礎で大幅に攪乱を被っているが故に調査区外となった部分、新設建物による損壊を受けない為に調査区外となった部分)にも多くの遺構・遺物が存在している、または存在していたであろうことは想像に難くない。吹田市を代表する弥生～古墳時代集落の垂水遺跡や垂水南遺跡に比肩する遺跡が眠っている可能性があり、今後の中ノ坪遺跡の実態解明が強く望まれるものである。

本書を作成するにあたっては、以下の文献・公開データベースを引用及び参照した。

- 市村慎太郎 2016 「河内・和泉・紀伊の小型丸底土器」『東生』第5号 東日本古墳確立期土器検討会
- 大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006 『年代のものさし—陶器の須恵器—』大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40
- 大阪府立弥生文化博物館 2006 『弥生画帖—弥生人が描いた世界—』大阪府立弥生文化博物館図録 33
- 大阪府立弥生文化博物館 2009 『優人がみた龍—龍の絵とかたち—』大阪府立弥生文化博物館図録 40
- 大手前大学史学研究所編 2007 『弥生土器集成と編年—播磨編—』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター 研究報告第5号
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』考古学ライブラリー 55 ニュー・サイエンス社
- 大平 茂 1992 「第4章 まとめ 近世丹波焼播鉢の形式分類とその編年」『下相野宮址 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XVII—近世丹波焼の調査—』兵庫県教育委員会
- (仮称) 摂津の庄内式併行をないがしろにしない会編 1996 『庄内式土器研究—庄内式併行期の土器生産とその動き—』『摂津地域』XII 庄内式土器研究会
- 九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』
- 公益財団法人大阪府文化財センター 2011 『吹田操車場遺跡Ⅶ』
- 公益財団法人大阪府文化財センター 2012 『明和池遺跡1 吹田操車場遺跡8 西の庄東遺跡』
- 公益財団法人大阪府文化財センター 2015 『吹田操車場遺跡11』
- 公益財団法人大阪府文化財センター 2016 『吹田操車場遺跡12』
- 合田幸美 2000 「第6章 考察 第2節 溝崎遺跡出土の外来系土器について」『溝崎遺跡(その1・2)』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 古代の土器研究会編 1992 『古代の土器1 都城の土器集成I』
- 古代の土器研究会編 1996 『古代の土器4 煮炊具(近畿編)』
- 工藤裕司編 1998 『大特集 和同開珎とその時代 季刊 方泉處』第21号 (株)ハドソン 東洋考古学研究所
- 小林青樹編 2001 『縄文・弥生移行期の石製呪術具2』考古学資料集 17
- 小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年の研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀—』真岡社
- 財団法人大阪府文化財センター 2006 『古式土師器の年代学』
- 白神典之 1989 「堺遺跡考」『東洋陶磁』第19号 東洋陶磁学会
- 吹田市教育委員会 1999 『目依遺跡』
- 吹田市教育委員会 2001 『平成12年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報 中ノ坪遺跡』
- 吹田市教育委員会 2007 『平成18(2006)年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報 中ノ坪遺跡』

- 吹田市教育委員会 2010 『平成 21 (2009) 年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報 中ノ坪遺跡』
- 吹田市教育委員会 2011 『平成 22 (2010) 年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報 中ノ坪遺跡』
- 吹田市教育委員会 2012 『中ノ坪遺跡発掘調査報告書 1』
- 吹田市教育委員会 2015 『平成 26 (2014) 年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報 中ノ坪遺跡』
- 菅原康夫・梅本謙一編 2000 『弥生土器の様式と編年 四国編』 木耳社
- 植山 洋 1999 『大坂の土師質土器—主要器種を中心に—』『関西近世考古学研究』Ⅶ 関西近世考古学研究会
- 摂津地域・播磨地域担当編 1999 『庄内式土器研究—庄内式併行期の土器交流拠点—「摂津・播磨地域」XXI 庄内式土器研究会
- 第 29 回研究会実行委員会事務局編 1991 『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会
- 太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』
- 高橋 真希 2010 「古代の開発と条里」『災害から地域遺産をみなおす—吉志部神社の復興—』吹田市立博物館
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真鳥社
- 中世土器研究会編 2015 『中近世土器の基礎研究 東播系須恵器—編年と分布から考える—』26
- 寺沢 薫・森岡秀人編 1989 『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社
- 寺沢 薫・森岡秀人編 1990 『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社
- 中村 豊編 2001 『縄文・弥生移行期の石製呪術具 3』考古学資料集 18
- 奈良国立文化財研究所編 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊
- 乗岡 実 2002 「第 3 節 近世備前焼播鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡—表町一丁目地区市街地開発ビル建設に伴う発掘調査—』岡山市教育委員会
- 長谷川眞 2006 「近世丹波焼の諸相」『江戸時代のやきもの—生産と流通—』シンポジウム資料集 財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
- 廣瀬時習 1999 『弥生時代の碧玉流通に関する基礎データ集成』『研究調査報告』第 2 集 (財) 大阪府文化財調査研究センター
- 平井 勝 1991 『弥生時代の石器』考古学ライブラリー 64 ニュー・サイエンス社
- 埋蔵文化財研究会 1991 『弥生時代の掘立柱建物』
- 正岡隆夫・松本岩雄編 1992 『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社
- 森村健一 1995 『福健省漳州窯系青花・五彩・瑠璃地の編年』『大阪府埋蔵文化財協会 研究紀要』3 財団法人大阪府文化財協会
- 山田隆一 2006 『大阪府出土の讃岐・阿波・播磨系土器』『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』
- ふたかみ邪馬台国シンポジウム 6 資料集 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
- 山本 亮 2016 『山城・摂津・播磨の小型丸底壺』『東生』第 5 号 東日本古墳確立期土器検討会
- 独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 『墨書土器画像データベース (墨書土器字典)』、『和同開珎出土遺跡データベース』
- 明治大学 古代学研究所 『墨書・刻書土器データベース』

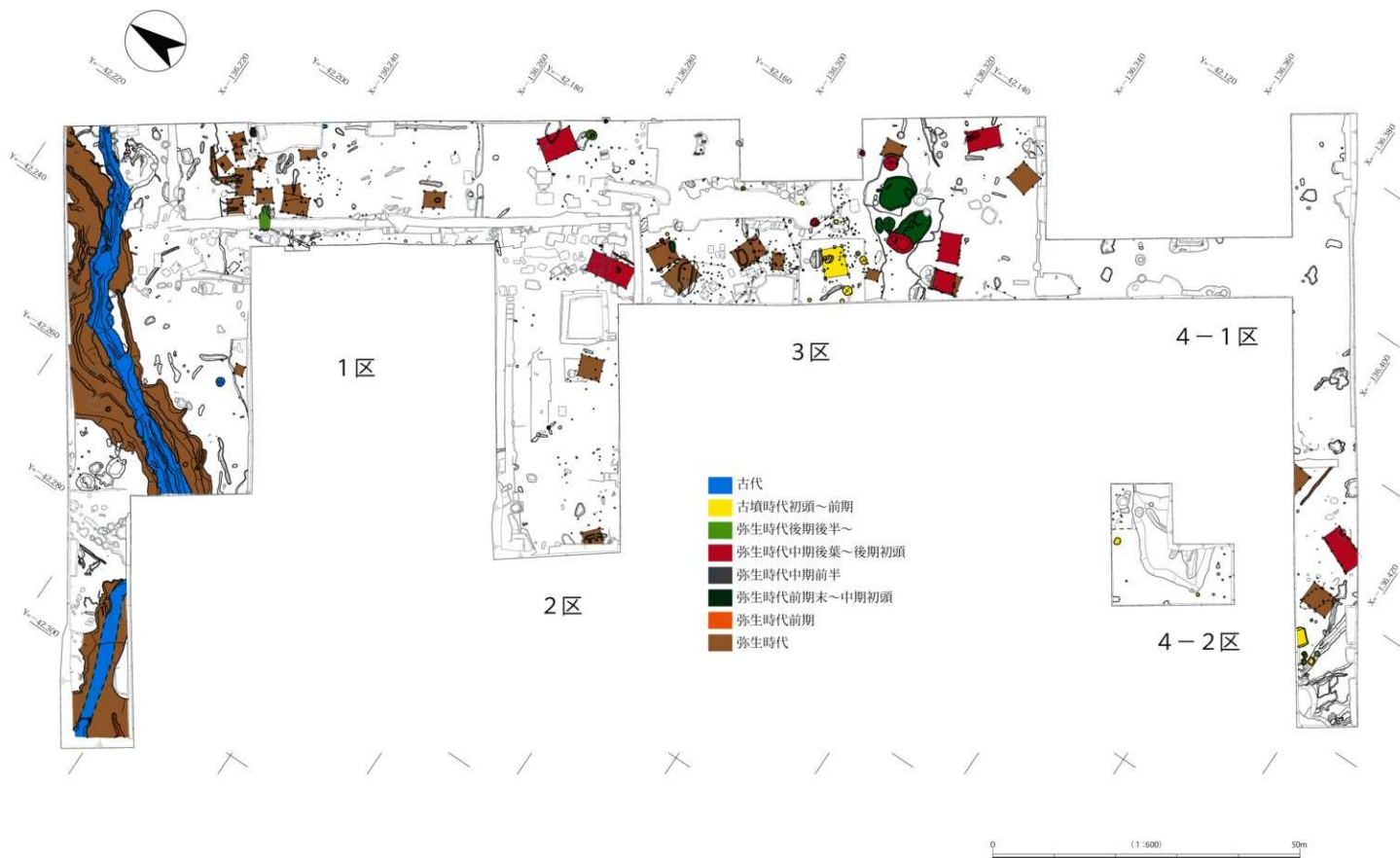


图 121 中世以前の時期別全体平面図

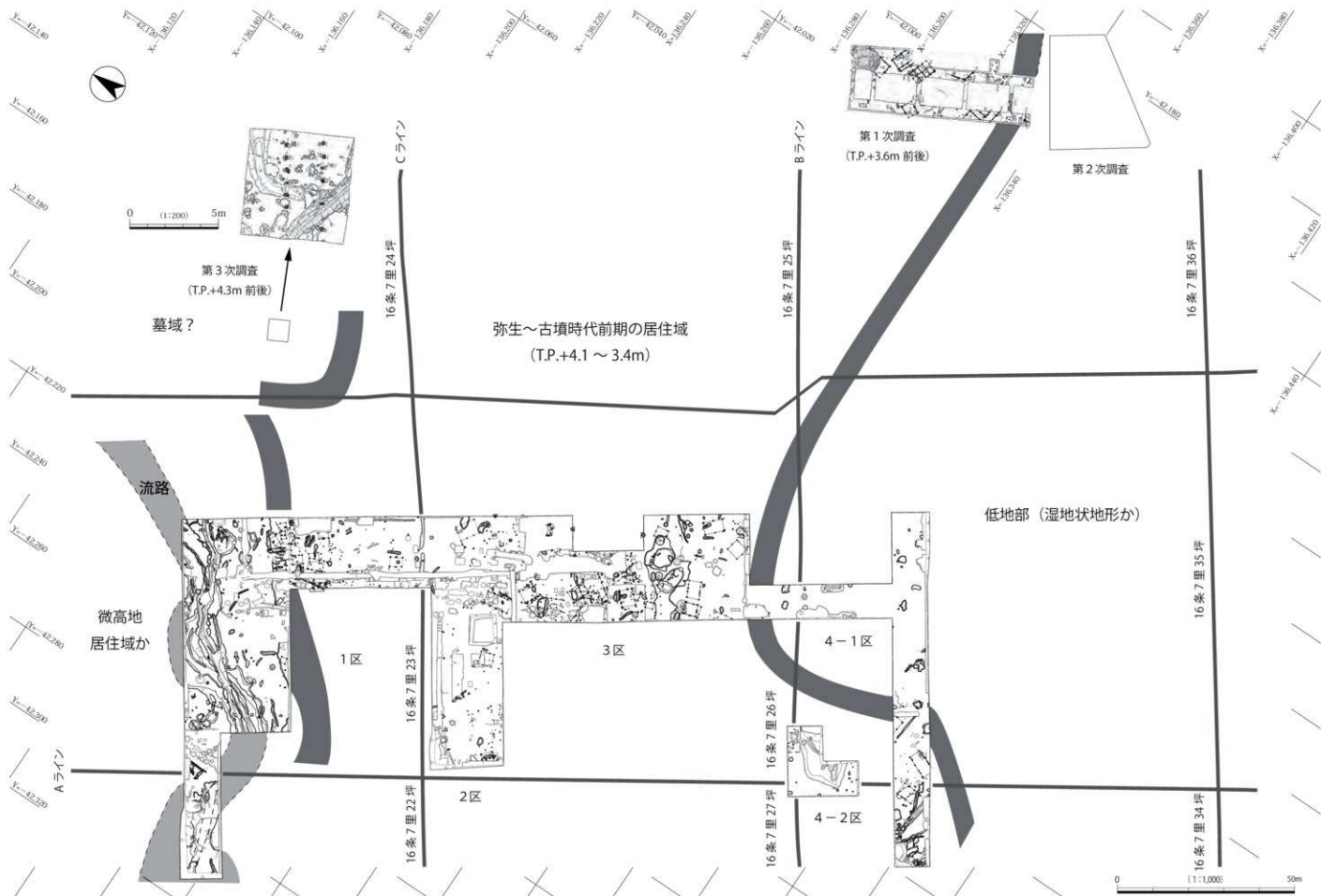


図122 調査地と既往調査全体図

写 真 图 版

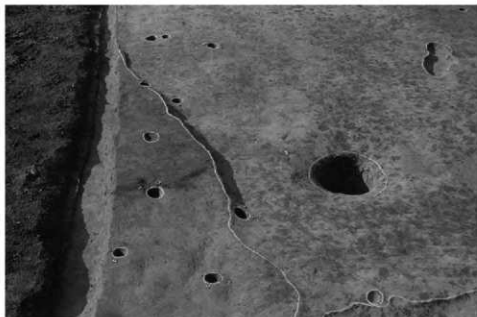


1.1区 地山面 全景 (北東から)



2.1区 地山面 南東部遺構群 (南西から)

図版2



1.1区 地山面 南西部
遺構群（北東から）



2.1区 地山面 西側
突出部（北東から）



3.1区 1011井戸 断面
（南西から）



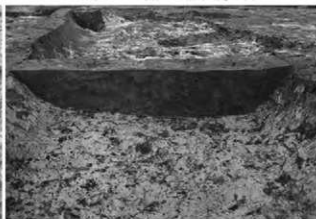
1. 1区 1019井戸 断面(北から)



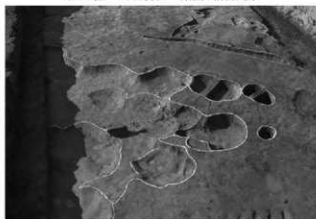
2. 1区 1020井戸 断面(南から)



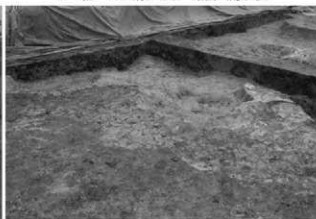
3. 1区 1008井戸 断面(東から)



4. 1区 1024溝アゼ2 断面(南から)



5. 1区 1026土坑群(東から)



6. 1区 1026土坑群 断面(北から)



7. 1区 1098土坑 断面(西から)



8. 1区 1015土坑状変形 断面(東から)

図版4



1. 1区 1005流路・弥生流路 全景 (西から)



2. 1区 1005流路・弥生流路 断面 (北東から)



3. 1005流路 断面 (西から)



4. 1区 弥生流路(1010落込み) 断面 (東から)



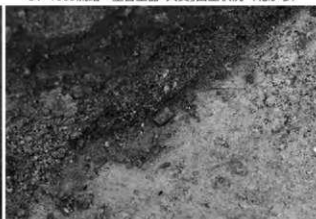
5. 1005流路 須恵器杯出土状況 (南から)



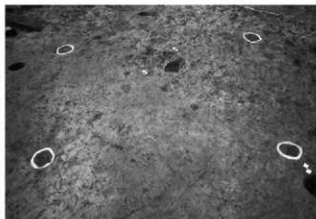
6. 1005流路 墨書土器「大貫」出土状況 (北から)



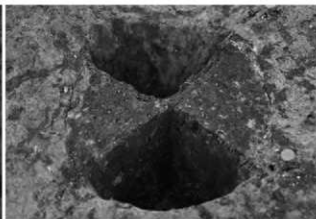
7. 弥生流路(1010落込み) 石棒出土状況 (南から)



8. 1009溝 碧玉製管玉出土状況 (北東から)



1. 掘立柱建物1001 検出状況（北から）



2. 建物1001・1081ピット 断面（北西から）



3. 建物1001・1084ピット 断面（東から）



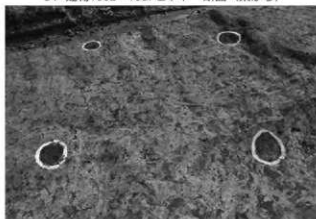
4. 掘立柱建物1002 検出状況（北東から）



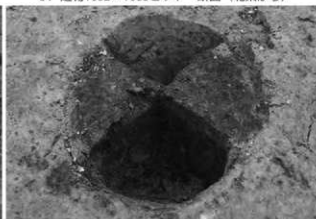
5. 建物1002・1087ピット 断面（東から）



6. 建物1002・1088ピット 断面（北東から）



7. 掘立柱建物1003 検出状況（北から）



8. 建物1003・1069ピット 断面（南西から）

図版6



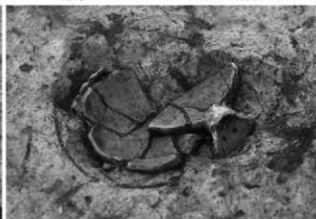
1. 掘立柱建物1004 完掘状況 (西から)



2. 建物1004・1057ピット 断面 (北西から)



3. 1050ピット 断面 (南東から)



4. 1050ピット 遺物出土状況 (南東から)



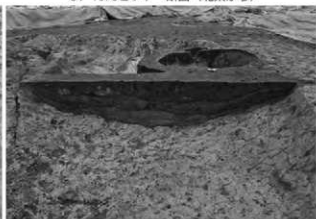
5. 1035土坑 断面 (北から)



6. 1076ピット 断面 (北東から)



7. 1029溝 アゼ1 断面 (西から)



8. 1003落込み 断面 (南西から)

1. 2区 地山面 北半部
全景 (南東から)



2. 2区 地山面 南半部
全景 (北東から)



3. 2区 地山面 北端部
遺構群 (東から)



図版8



1. 2区 地山面 南端部
遺構群 (西から)



2. 2区 地山面 西端部
遺構群 (南東から)



3. 掘立柱建物 2001
完掘状況 (北西から)

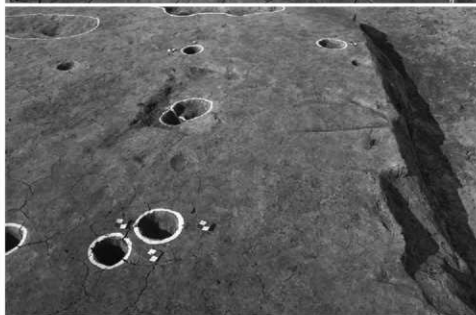
1. 掘立柱建物2002
完掘状況（南から）

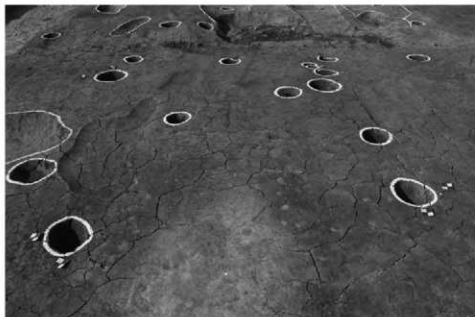


2. 掘立柱建物2003
完掘状況（南東から）



3. 掘立柱建物2004
完掘状況（南東から）





1. 掘立柱建物2005
完掘状況（南東から）



2. 掘立柱建物2006
完掘状況（北から）



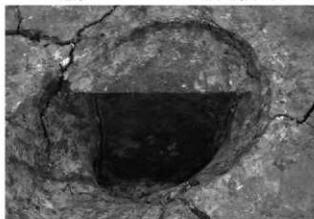
3. 掘立柱建物2007
完掘状況（南東から）



1. 建物2001・2021ピット 断面 (南西から)



2. 建物2001・2024ピット 断面 (北東から)



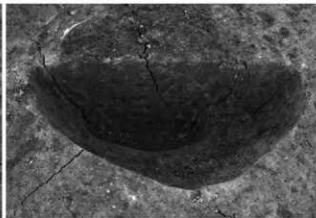
3. 建物2002・2189ピット 断面 (南東から)



4. 建物2002・2190ピット 断面 (南東から)



5. 建物2003・2084ピット 断面 (西から)



6. 建物2004・2151ピット 断面 (北西から)



7. 建物2006・2275ピット 断面 (西から)



8. 建物2006・2275ピット 柱材検出状況 (西から)



1. 建物2006・2276ピット 断面（西から）



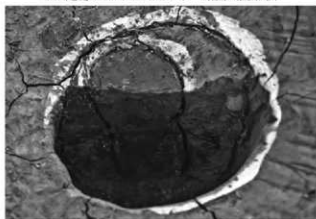
2. 建物2006・2276ピット 柱材検出状況（西から）



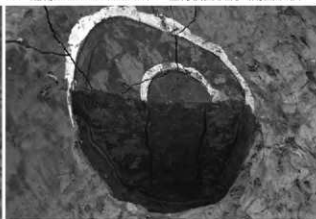
3. 建物2007・2052ピット 断面（西から）



4. 建物2007・2052ピット 柱材検出状況（南西から）



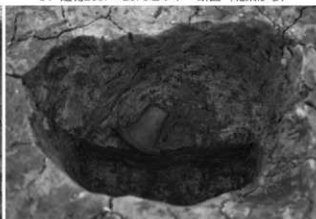
5. 建物2007・2075ピット 断面（北東から）



6. 建物2007・2076ピット 断面（北東から）



7. 2071ピット 断面（南西から）



8. 2043ピット 遺物出土状況（南東から）

1. 2064土坑 断面
(南西から)



2. 2064土坑
遺物出土状況 (上部)
(南西から)



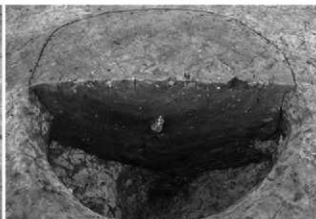
3. 2064土坑
遺物出土状況 (下部)
(南西から)



図版 14



1. 2038井戸 断面 (北東から)



2. 2054土坑 断面 (南から)



3. 2070土坑 断面 (南西から)



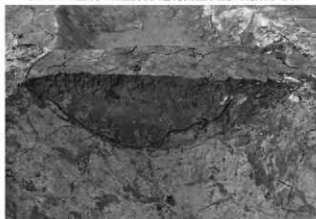
4. 2072土坑 断面 (南東から)



5. 2298土坑 断面及び遺物出土状況 (北東から)



6. 2227溝 断面及び遺物出土状況 (南から)



7. 2010溝 断面 (南東から)



8. 2029溝 断面 (南西から)

1. 3区 地山面 全景
(北から)



2. 3区 地山面 北端部
遺構群 (北東から)

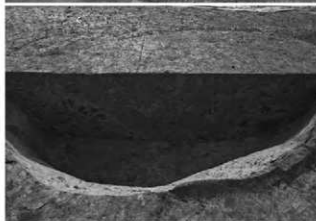


3. 3区 地山面
中央部遺構群 (北から)





1. 3区 地山面
南端部遺構群(北から)



2. 3015土坑 断面(北西から)



3. 3014井戸 断面(南西から)



4. 3018井戸 断面(南西から)

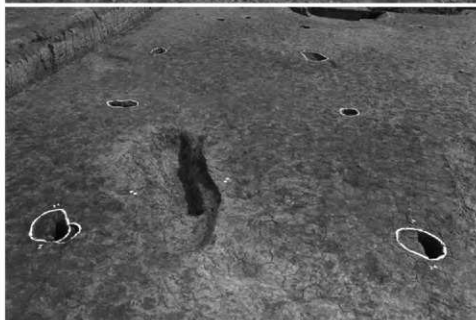


5. 3035土坑 断面(南東から)

1. 掘立柱建物3001
検出状況（北西から）



2. 掘立柱建物3002
検出状況（北西から）

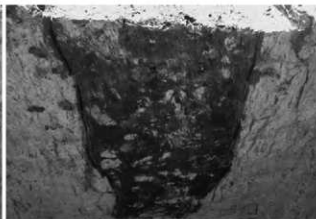


3. 掘立柱建物3003
検出状況（南西から）





1. 建物3001・3103ビット 断面 (北西から)



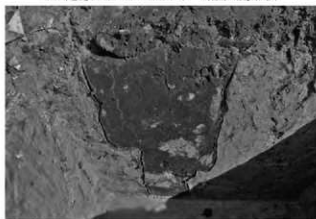
2. 建物3001・3100ビット 断面 (北西から)



3. 建物3002・3112ビット 断面 (南から)



4. 建物3002・3232ビット 断面 (西から)



5. 建物3002・3114ビット 断面 (西から)



6. 建物3003・3124ビット 断面 (南から)

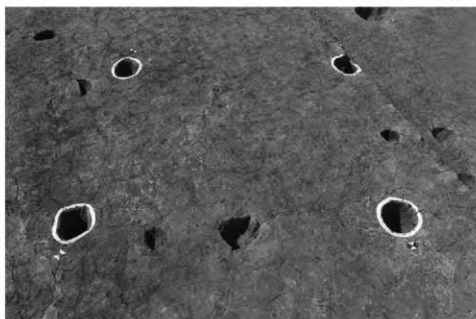


7. 建物3003・3123ビット 断面 (南から)



8. 建物3003・3225ビット 断面 (南西から)

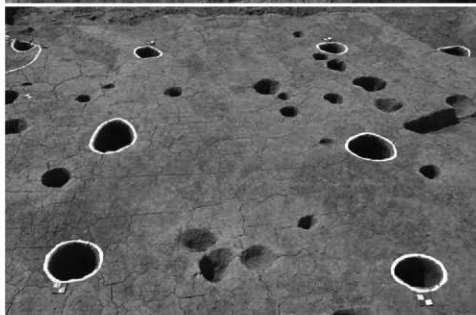
1. 掘立柱建物3004
完掘状況 (南東から)



2. 掘立柱建物3005
検出状況 (南西から)

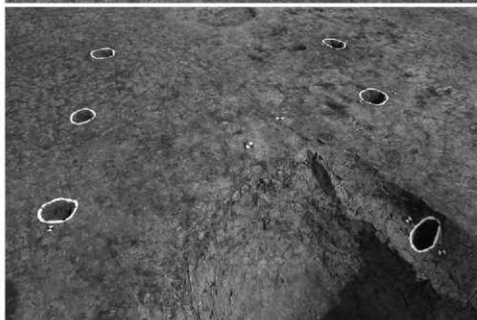


3. 掘立柱建物3007
完掘状況 (東から)





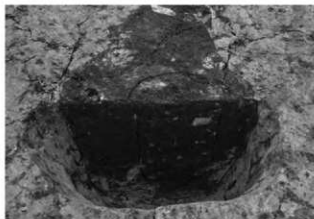
1. 掘立柱建物3008
完掘状況（北西から）



2. 掘立柱建物3011
完掘状況（西から）



3. 掘立柱建物3012
検出状況（南から）



1. 建物3005・3140ビット 断面 (南東から)



2. 建物3008・3117ビット 断面 (南から)



3. 建物3010・3189ビット 断面 (南西から)



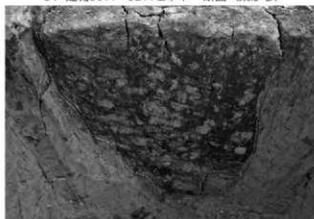
4. 建物3010・3190ビット 断面 (西から)



5. 建物3011・3211ビット 断面 (東から)



6. 建物3012・3228ビット 断面 (南から)



7. 建物3012・3241ビット 断面 (北東から)



8. 建物3012・3254ビット 断面 (東から)



1. 3007・3008土坑 検出状況（北西から）



2. 3009・3010土坑 検出状況（北東から）



3. 3007土坑 断面（北から）



4. 3007土坑 遺物出土状況（北から）



5. 3009(右)・3010(左)土坑 断面（北東から）



6. 3032土坑 遺物出土状況（南東から）



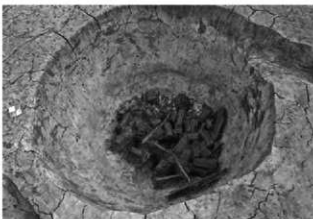
7. 3052土坑 断面（北から）



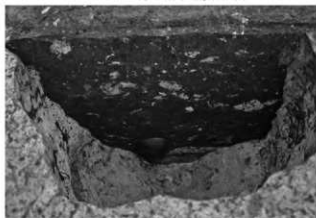
8. 3052土坑 遺物出土状況（北から）



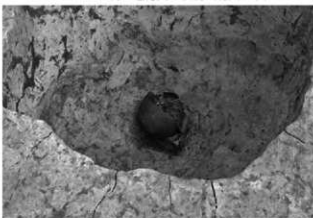
1. 3041土坑 断面 (南東から)



2. 3041土坑 遺物出土状況 (北西から)



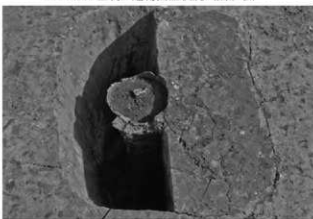
3. 3053土坑 断面 (北西から)



4. 3053土坑 遺物出土状況 (西から)



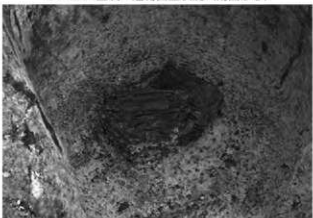
5. 3091土坑 断面 (北西から)



6. 3091土坑 遺物出土状況 (南西から)



7. 3036土坑 断面 (北西から)



8. 3060ピット 礎板検出状況 (南西から)



1.4-1区 地山面 全景（南西から）



2.4-1区 地山面 中央部遺構群（北から）

1. 4-1区 地山面
西端部遺構群
(南西から)



2. 4-1区 地山面
北端部遺構群(南から)



3. 4-2区 地山面
全景(西から)





1. 4001灌池 断面（北西から）



2. 4004井戸 断面（北東から）



3. 4009井戸 断面（北西から）



4. 4022土坑 断面（南東から）



5. 4011土坑 断面（南から）

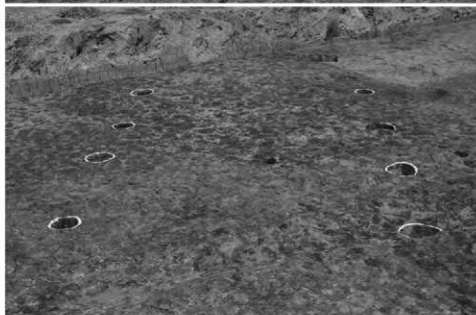
1. 掘立柱建物4001
完掘状況（南西から）



2. 掘立柱建物4002
完掘状況（北西から）



3. 掘立柱建物4003
完掘状況（南から）





1. 建物4001・4053ビット 断面（北西から）



2. 建物4001・4053ビット 柱材検出状況（北西から）



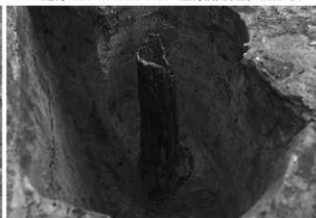
3. 建物4001・4058ビット 断面（東から）



4. 建物4001・4058ビット 柱材検出状況（東から）



5. 建物4002・4047ビット 断面（西から）



6. 建物4002・4047ビット 柱材検出状況（西から）



7. 建物4003・4041ビット 柱材検出状況（東から）



8. 4034溝 断面（西から）



1. 4024土坑 断面 (東から)



2. 4024土坑 遺物出土状況 (南西から)



3. 4027土坑 断面 (北西から)



4. 4033土坑 断面 (北東から)



5. 4003土坑 断面 (東から)



6. 4003土坑 遺物出土状況 (西から)



7. 4006土坑 断面 (南東から)



8. 4006土坑 遺物出土状況 (南から)



1. 1区 西側南壁
(北から)



2. 1区 西側南壁
(北から)



3. 1区 西壁 噴砂
(東から)

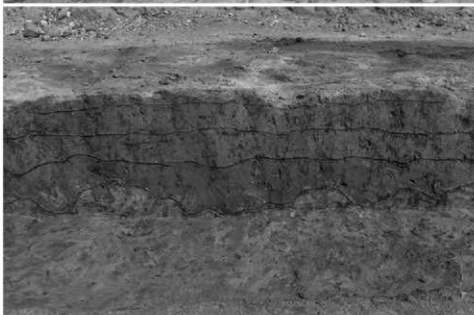
1. 1区 北壁中央
(南東から)



2. 1区 東壁北端
(南西から)



3. 2区 東壁 (西から)





1. 3区 東壁北側
(南西から)



2. 3区 東壁中央
(西から)



3. 4-1区 東壁中央
(西から)

1. 4-1区 北壁東側
(南東から)



2. 4-1区 北壁西側
(南東から)



3. 4-2区 西壁
(南東から)



图版 34 1区 1005流路出土遺物





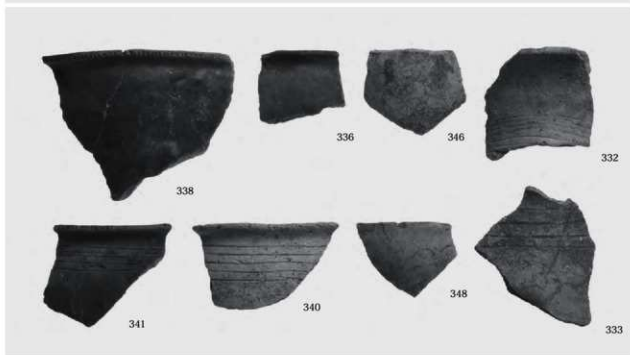
144 口縁拡大



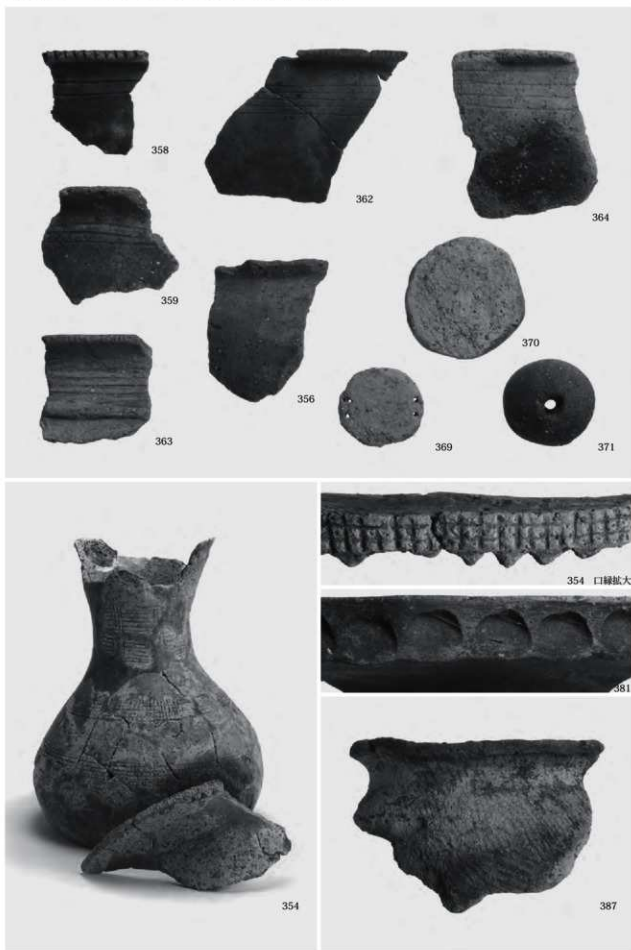
图版 36 1·2区 出土遺物·3区 3007土坑出土遺物



図版 37 3区 3006落込み・3009土坑出土遺物



图版 38 3区 3010·3011土坑出土遺物





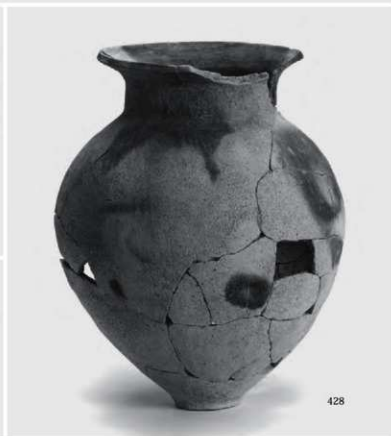
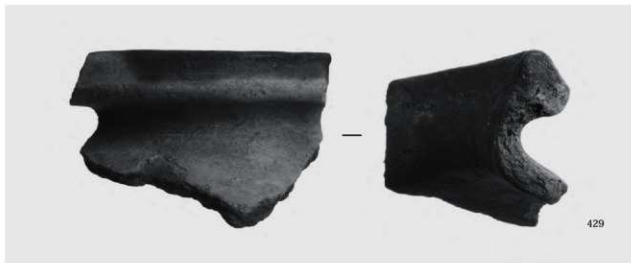
图版 40 3区 3041·3053土坑出土遗物



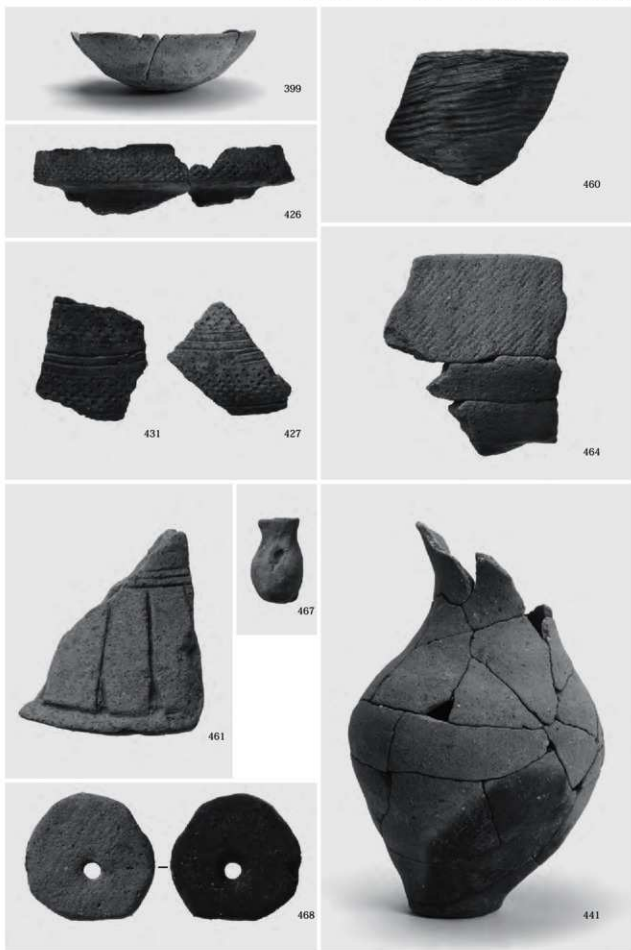
图版 41 4-1区 4024土坑·4-2区 4003·4006土坑出土遗物



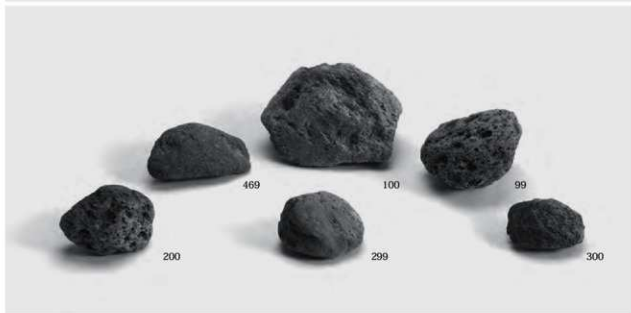
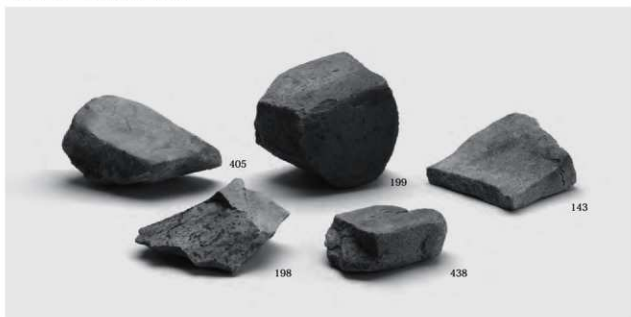
图版 42 4-1区 4027土坑出土遗物

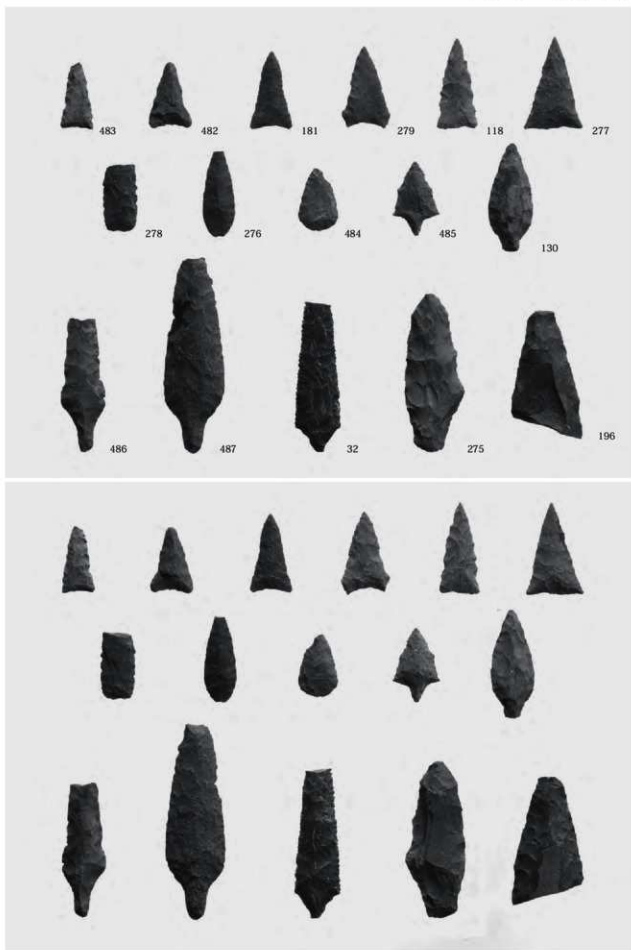


图版 43 4-1区 4015流路他出土遺物

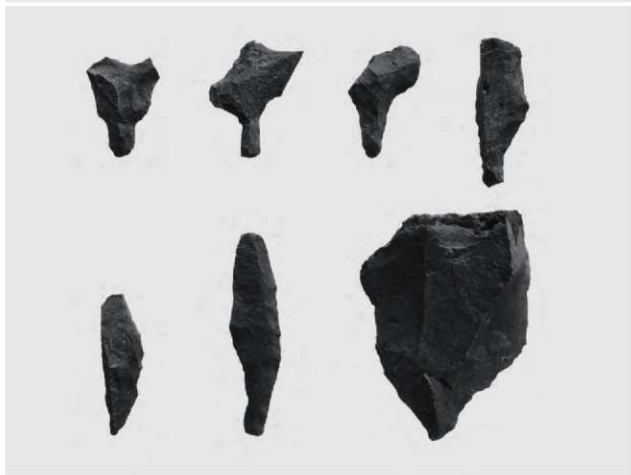
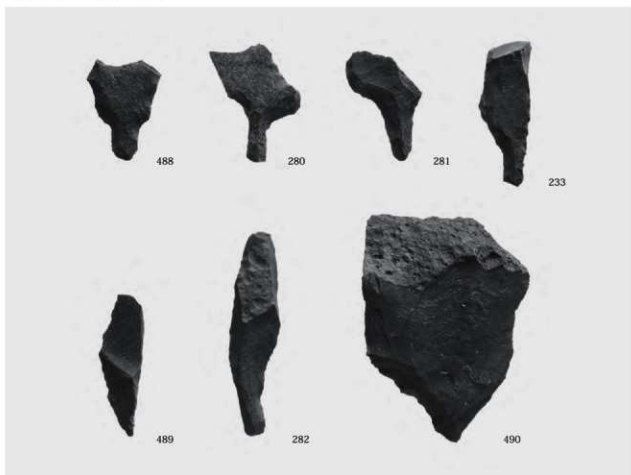


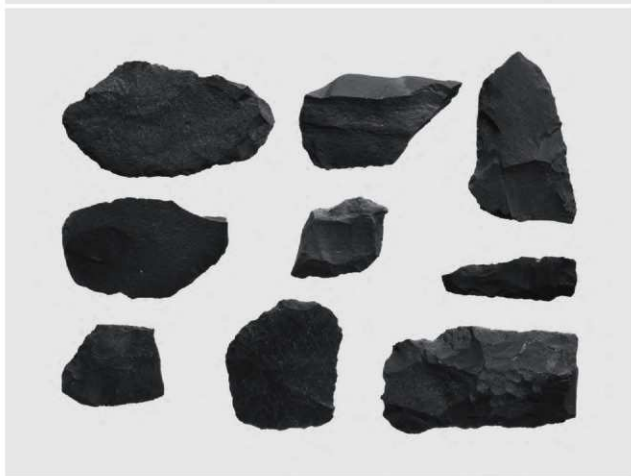
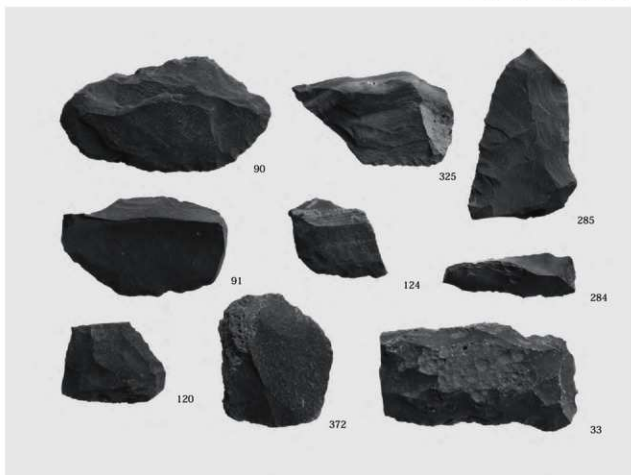
図版 44 石製品・軽石



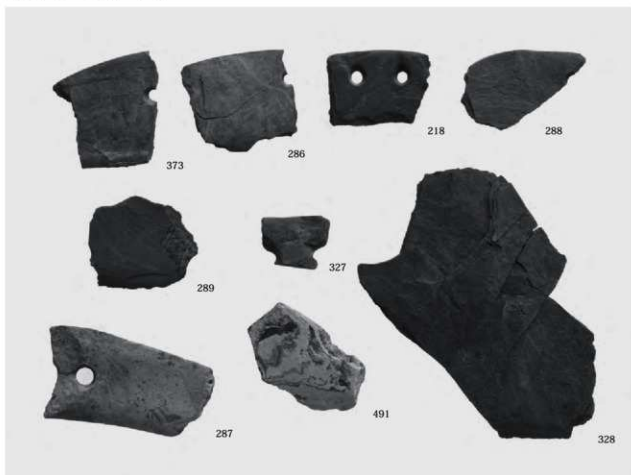


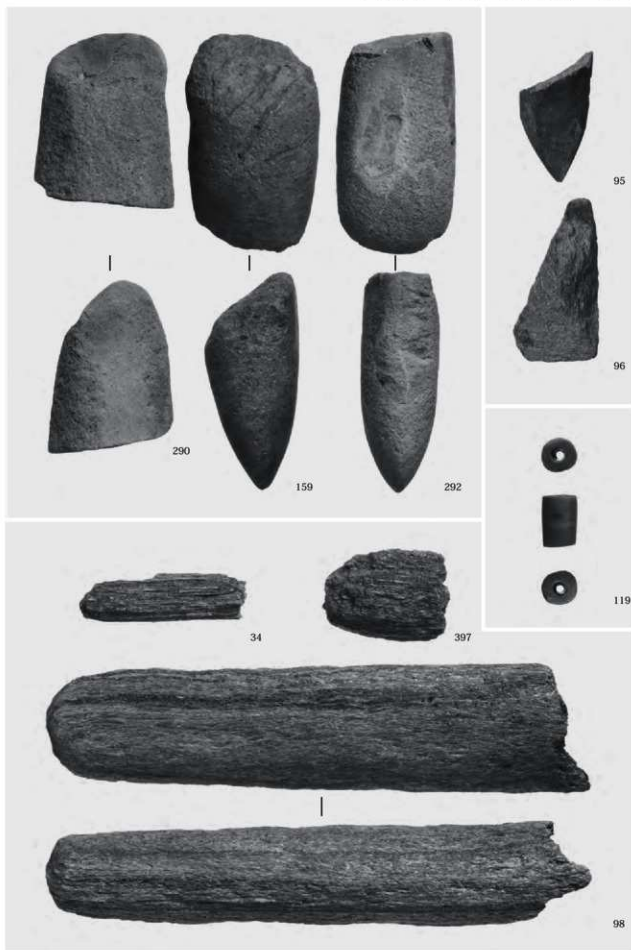
图版 46 石器 (2)



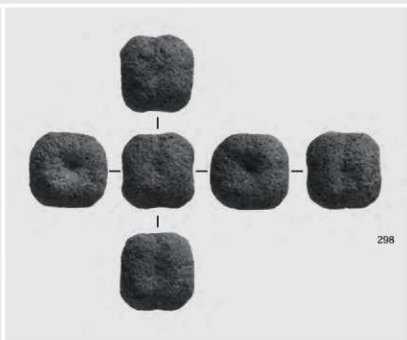
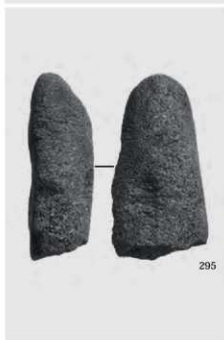
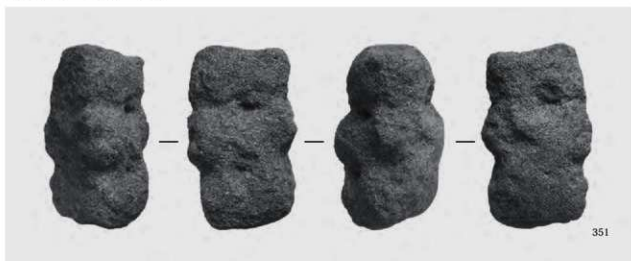


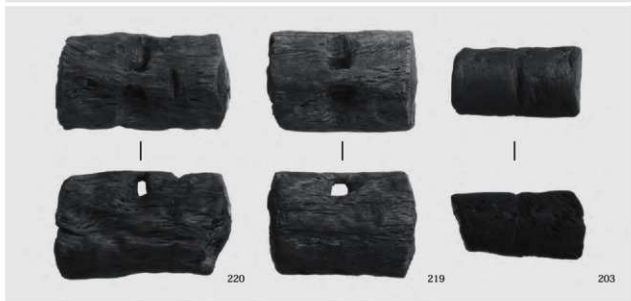
图版 48 石器 (4)



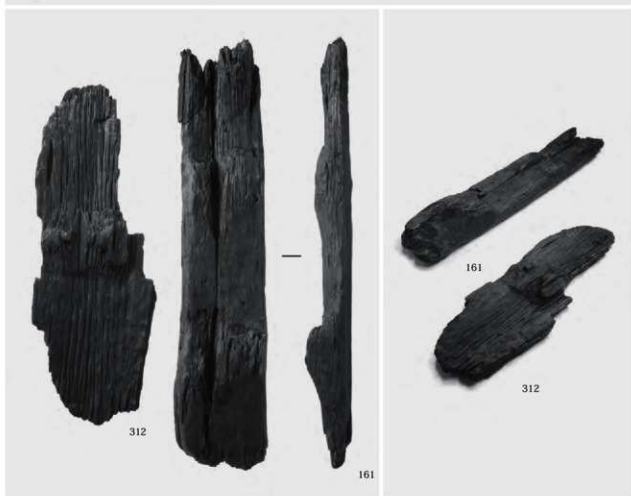
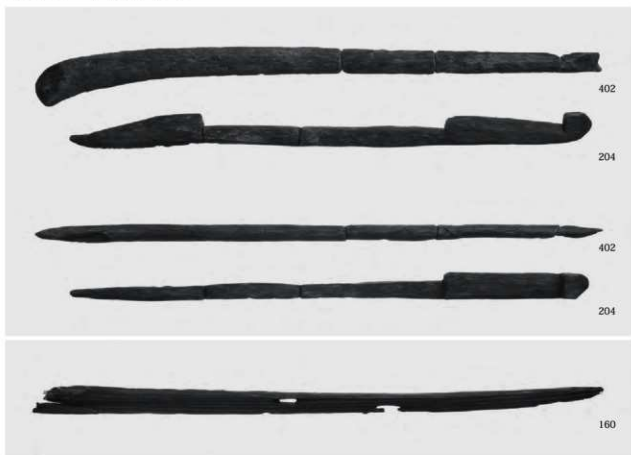


图版 50 石器 (6)

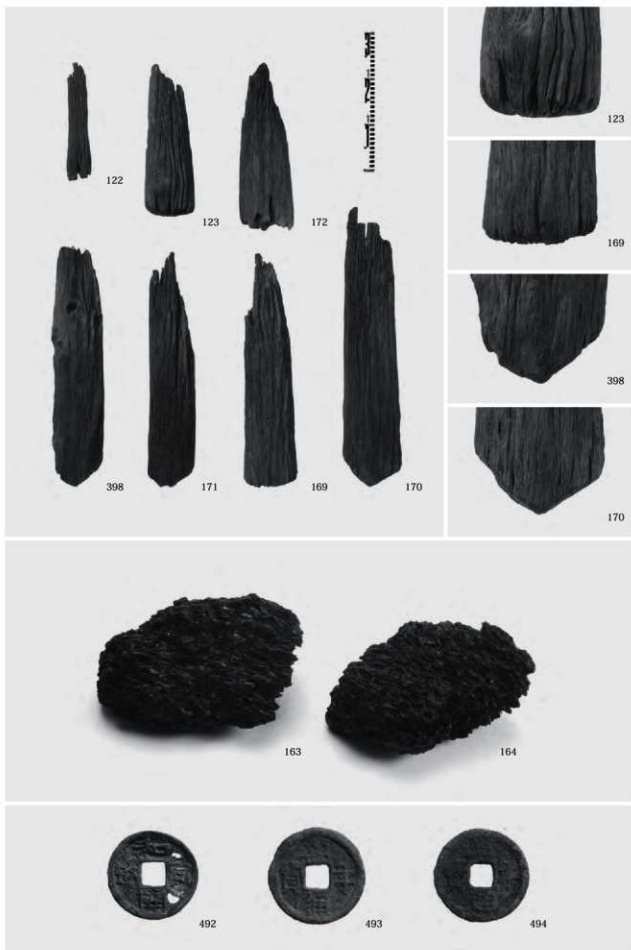




图版 52 木製品 (2)



图版 53 柱材·炭化米·钱貨



報告書抄録

ふりがな	なかのつばいせき							
書名	中ノ坪遺跡							
副書名	(仮称) GLP 吹田 物流施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次数								
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第277集							
編著者名	新海正博							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 Ⅱ072-299-8791							
発行年月日	2017年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
		市町村	遺跡 番号					
なかのつばいせき 中ノ坪遺跡	おおさかふすいたし 大阪府吹田市 ましろのみ 岸部南	27205	97	北緯 34° 46' 12" 東経 135° 32' 20"	平成27年12月1日 ～ 平成28年3月29日	7,992㎡	(仮称) GLP 吹田 物流施設 建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
中ノ坪遺跡	集落	縄文時代			突帯文土器・結晶片岩製 石棒			
		弥生時代	掘立柱建物・溝・土坑・落 込み・流路			弥生土器・石器(石鏃・ 磨製石包丁・大型 船刃石斧・柱状片刃石斧・ 扁平片刃石斧等)・石製品 (砥石・巖石・台石)・木 製品(梯子・平鍬等)・炭 化米・碧玉製管玉	中期後半～後期初頭頃を 中心とする掘立柱建物が 多数検出された。出土土 器の中には他地域からも たらされた外来系土器 もみられた。流路から碧玉 製管玉が1点出土。	
		古墳時代	掘立柱建物・土坑・粘土採 掘坑か			土師器・須恵器・木製品 (木鏟・有頭棒等)	出土土器の中には他地域 からもたらされた外来系 土器もみられる。	
		奈良時代	土坑・流路			土師器・須恵器・銭貨 (和同開珎・万年通寶)	流路から「大寶」と書か れた墨書土器が出土	
		中・近世	井戸・土坑・粘土採掘坑・ 溜池・溝・坪境			国産陶磁器・輸入磁器 (青磁)・瓦器・土師器・ 木製品・漆器		
要 約	<p>大型物流施設建設に伴う発掘調査で、弥生時代から古墳時代にかけての集落域を検出し、掘立柱建物を31棟、櫓列、土坑や溝等を確認した。出土遺物から、概ね弥生時代前期末～中期初頭、中期後半～後期前半、古墳時代前期の3時期が主体となる。建物は掘立柱建物しか確認出来なかった。周辺で行われた第1次調査や近接する他の同時期の日儀遺跡でも竪穴建物が検出されておらず、集落の立地条件により掘立柱建物が主体となる可能性がある。検出した掘立柱建物の複数棟に柱材が遺存していたことから、放射性炭素年代測定を実施した。その結果、上述した3時期に分かれるのではなく、中期後半～後期初頭頃に限定されるものであった。また弥生中期後半～古墳時代前期の出土土器の中には広範囲地域からもたらされた外来系土器が複数存在していることから、淀川水系を利用した物流拠点の一角を占める集落と推察される。</p> <p>古墳時代中期以降に関しては明確な遺構が検出されず、遺物も僅少であることから中世以降の土地変更に伴って失われてしまったものと推定される。しかしながら、調査区北端で古代の流路が検出でき、その流路から「大寶」と書かれた墨書土器が出土したことは注目される。また、包含層出土ではあるが、和同開珎や万年通寶があり、古代においても何らかの活動が行われていたことは疑いない。</p> <p>近世期においては耕作に関わる井戸や水溜り遺構、溜池等を検出した。また、断面観察ではあるが、嶋下郡南部条里の坪境と推定されるものを3条確認した。</p>							

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第277集

中ノ坪遺跡

(仮称) GLP吹田 物流施設建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2017年3月31日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号

